沖縄県文化財調査報告書　第98集

西　表　島

上村遺跡

UE MURA

―重要遺跡確認調査報告―

1991年　3月

沖縄県教育委員会

3. 6. 12

「西表島 上村遺跡」 正誤表

ページ	行など	誤　り	訂　正
	目　次	表目字	表目次
4	上；16	島の周縁部	島の周縁部
8	下；5	竪4.	註4.
17	図中の説明	第Ⅰ層c淡灰色層	第Ⅰ層c淡灰色土層
28	上；8	3遺跡	4遺跡
37	上；2	Ⅳは	Ⅳ類は
44	上；7	直樹氏は拋・・	直樹氏に拋・・
56	図版説明	皿類；42	Ⅲ類；42
61	第9表中	低部	底部
77	下；6	同図72には	同図72は
83	上；13	初め頃から登場	初め頃に登場
86	下；15	検出させ	検出され
98	下；5	（詑2）	（註2）
109	下；2	平担	平坦
116	上；1	掘削りさ	堀り込まれ
117	図版説明	Ⅴ類；5，Ⅴ類d；4	削除
148	表の注文	実形	完形
154	Table. 4表中	フエフキダイサバ科	フエフキダイ科・サバ科
157	上；7	魚政	魚類
171	上；4・9	口碑日伝説　・　大竹祖納同	口碑伝説　・　大竹祖納堂
173	上；4	15世紀終末から17～18	15世紀終末から17・18
180	下；10	排出鍛冶滓	排出鍛冶滓
181	上；8	（小鍛冶）	（小鍛冶）
184	表中D—851	鍛練鍛冶滓	鍛練鍛冶滓
198	上；1	祖納堂野子孫	祖納堂の子孫
199	下；6	内眼	肉眼
200	上；10	ことがほわかる	ことがわかる
202	上；1	綿芳氏	錦芳氏

注；箆削りの箆が文章中で，一部は篦と記されていますので訂正をお願いします。

巻首図版１　西表島上村遺跡の空中写真（1977年５月撮影）　１：10,000

巻首図版２　上：祖納半島と上村遺跡遠景

下：発掘調査風景

巻首図版3　上：染付（左：杯，中：碁笥皿，右：碗）
下：外耳土器（中森式土器）とパナリ焼

序

「原生林の島」西表島は、悠久の時間の中に脈々と大自然を守り続けてきた大島の一つである。この大自然を背景に人間の居住の始まりも古く、島の諸処に遺跡を残しているところであります。1980年の調査で41箇所の遺跡が確認されていますがその後、新発見の遺跡が増加しています。その遺跡の一つに上村遺跡があります。祖納半島の全域を占める広大な集落遺跡であります。口碑伝説の中では村建ての中心となった大竹祖納堂儀佐と慶来慶田城用緒が生活の舞台を展開したところとして知られています。

西表島の中でも古見と並び古い集落形態を残したところでもあります。集落の中には多くの拝所や石垣がそのままの形で今に息づいているところであります。このような古来からそのままの形態で保存されている遺跡は少なく貴重な遺跡の一つであると言えます。ところがこのような遺跡の周辺においても確実に開発の動きがでており、特にリゾート施設の建設地としては最適な候補地の場所として話がでるなど遺跡の保存と開発との調整が将来において予想されるところでもあります。このような遺跡を取り巻く状況を鑑みて、早急な遺跡保存の対策が望まれているところでもありました。

今回、開発に先立ち遺跡の規模や性格を確認する目的から文化庁の補助を受けて重要遺跡確認調査を入れることになりました。調査は1988年から1990年までの３ヶ年にわたり継続事業として実施しました。その結果は、出土した多くの遺物から古くは14世紀まで辿ることができるとともに、これまでおぼろげだった上村遺跡が形成された時期に一つの目安をつけることができました。さらには鍛冶場の跡など生産遺跡としても重要な位置を占めていたことが確認されるなど西表島の歴史を解明する上で大きな成果を得ることができました。この度、それらの調査成果をまとめて報告書として刊行することになりました。

本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く多くの一般の方々にも活用されれば幸いに存じます。調査及び報告書作成にあたり、ご指導・助言をいただいた文化庁をはじめ、竹富町教育委員会、現地の方々や関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成３年３月

沖縄県教育委員会
教育長　高　良　清　敏

目　　次

序
例　言
第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査体制 …… 2
第Ⅱ章　西表島の地理的・自然的環境 …… 4
第Ⅲ章　西表島における考古学研究小史 …… 8
第Ⅳ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 9
第Ⅴ章　調査の概要 …… 12
　1．調査区の設定 …… 12
　2．調査の方法 …… 12
第Ⅵ章　遺構と出土遺物 …… 16
　1．第Ⅰ地区 …… 16
　(1)　層　序 …… 16
　(2)　遺　構 …… 16
　(3)　出土遺物 …… 18
　イ．青　磁 …… 18
　ロ．青白磁 …… 28
　ハ．白　磁 …… 31
　ニ．褐釉陶器 …… 36
　ホ．染　付 …… 47
　ヘ．土　器 …… 60
　ト．パナリ焼 …… 83
　チ．天目茶碗 …… 87
　リ．タイ陶器 …… 88
　ヌ．瑠璃釉 …… 89
　ル．赤　絵 …… 89
　ヲ．沖縄製陶器及び瓦 …… 91
　ウ．伊万里 …… 98
　ノ．煙管・陶製の錘 …… 100
　オ．勾　玉 …… 101
　ク．貝製品 …… 102

ヤ. 石　器 …… 104
マ. 羽　口 …… 106
ケ. 鉄製品 …… 106
2.　第Ⅱ地区 …… 113
(1)　層　序 …… 113
(2)　遺　構 …… 113
(3)　出土遺物 …… 116
イ. 青　磁 …… 116
ロ. 褐釉陶器 …… 118
ハ. 染　付 …… 121
ニ. 土　器 …… 122
ホ. パナリ焼 …… 135
ヘ. 玉 …… 135
ト. 貝製品 …… 135
チ. 羽　口 …… 137
リ. 炉　壁 …… 139
ヌ　鉄製品 …… 140
ル. Ⅰ・Ⅱ地区出土の鉄滓 …… 142
4. 自然遺物 …… 145
(1)　貝　類 …… 145
(2)　上村遺跡出土の脊椎動物遺体 …… 150
第Ⅶ章　西表島採集の羽口 …… 170
第Ⅷ章　調査の成果と今後の課題 …… 171
付　編
西表・上村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …… 174
文献からみた祖納の歴史－上村遺跡を中心として－ …… 196

挿　図　目　次

第１図　西表島の位置図 …… 5
第２図　西表島の遺跡分布図 …… 6
第３図　上村遺跡位置図 …… 10
第４図　古地図 …… 11
第５図　上村遺跡地形図及び
　　グリット設定図 …… 13
第６図　第Ⅰ地区　層序 …… 17
第７図　遺構および炉跡 …… 18
第８図　青磁 …… 21
第９図　青磁 …… 24
第10図　青磁・青白磁 …… 26
第11図　白磁 …… 32
第12図　褐釉陶器 …… 38
第13図　褐釉陶器 …… 40
第14図　褐釉陶器 …… 42
第15図　染付 …… 50
第16図　染付 …… 52
第17図　染付 …… 54
第18図　染付 …… 56
第19図　口縁の傾斜角度の測定方法 …… 60
第20図　土器 …… 66
第21図　土器 …… 68
第22図　土器 …… 70
第23図　土器 …… 72
第24図　土器 …… 73
第25図　土器 …… 76
第26図　土器 …… 78
第27図　土器 …… 80
第28図　土器 …… 81
第29図　パナリ焼 …… 84
第30図　天目茶碗・タイ陶器 …… 87
第31図　瑠璃釉 …… 89
第32図　赤絵 …… 89
第33図　沖縄製陶器 …… 92
第34図　沖縄製陶器 …… 95
第35図　伊万里 …… 99
第36図　煙管・陶器製の錘 …… 101
第37図　勾玉 …… 101
第38図　貝製品 …… 103
第39図　石器 …… 105
第40図　羽口 …… 107
第41図　鉄製品 …… 108
第42図　鉄製品 …… 110
第43図　第Ⅱ地区　層序 …… 112
第44図　第Ⅱ地区　層序 …… 114
第45図　遺構図 …… 115
第46図　青磁 …… 117
第47図　褐釉陶器 …… 119
第48図　染付 …… 121
第49図　土器 …… 123
第50図　土器 …… 125
第51図　土器・パナリ焼 …… 127
第52図　耳（把手）の形状分類概念図 …… 131
第53図　外耳土器の耳の形状分類概念図 …… 133
第54図　玉 …… 135
第55図　貝製品 …… 135
第56図　羽口 …… 136
第57図　西表島採集の羽口 …… 138
第58図　炉壁 …… 139
第59図　鉄製品 …… 140
第60図　鉄製品 …… 141
第61図　上村遺跡と祖納の歴史地図 …… 197

表　　目

字

（人口遺物）

第１表　青磁および青白磁出土状況 …… 29
第２表　白磁・赤絵・瑠璃釉・タイ陶器出土状況 …… 30
第３表　伊万里出土状況 …… 30
第４表　近代陶器（明治〜昭和）出土状況 …… 30
第５表　褐釉陶器・茶入れ壺・天目茶碗出土状況 …… 45
第６表　染付出土状況 …… 46
第７表　土器分類別出土状況 …… 59
第８表　分類別の口縁角度分布 …… 61
第９表　パナリ焼出土状況 …… 61
第10表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅰ）第Ⅰ地区 …… 62
第11表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅱ）第Ⅰ地区 …… 63
第12表　沖縄製陶器出土状況 …… 90
第13表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅲ）第Ⅱ地区 …… 129
第14表　各タイプの箆削り開始箇所 …… 129
第15表　各タイプの耳（把手）の張り付け箇所 …… 129
第16表　外耳（把手）の比率 …… 130
第17表　口縁・器高・底径の比率 …… 130
第18表　土器分類と外耳（把手）の相関関係 …… 131
第19表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅰ地区）…… 132
第20表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅱ地区）…… 132
第21表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅱ地区　拝所内）…… 132
第22表　遺跡別外耳土器の耳の形状分類一覧 …… 133
第23表　鉄滓出土状況（第Ⅰ地区）…… 143
第24表　鉄滓出土状況（第Ⅱ地区）…… 144
第25表　鉄滓出土状況（第Ⅱ地区拝所内）…… 144

（自然遺物）

第26表　貝類遺存体出土状況 …… 146
Table. 1　ノコギリガザミ出土状況 …… 151
Table. 2　リクガメ出土状況 …… 153
Table. 3　トリ出土状況 …… 153
Table. 4　魚骨出土状況 …… 154
Table. 5　ウミガメ出土状況 …… 154
Table. 6　イヌ出土状況 …… 155
Table. 7　ネコ出土状況 …… 155
Table. 8　ネズミ出土状況 …… 155
Table. 9　ジュゴン出土状況 …… 155
Table.10　ヤギ出土状況 …… 155
Table.11　ウシ・ウマ出土状況 …… 155
Table.12　種不明 …… 155
Table.13　イノシシの歯骨咬耗度分布 …… 156
Table.14　イノシシ歯牙出土状況 …… 158
Table.15　イノシシ出土状況 …… 162

（鉄関係遺物）

Table. 1　供試材の履歴と調査項目 …… 175
Table. 2　木炭の組成 …… 178
Table. 3　鍛造剥片、鉄滓の科学組織 …… 182
Table. 4　鉄滓、砂鉄、鉱石の科学組成（沖縄・種子島を中心に）…… 184

例　　言

1．本報告書は、1987年から1990年までの３ヶ年の継続事業として文化庁の補助金で調査した重要遺跡確認成果記録である。

2．発掘調査にあたっては、『西表をほりおこす会』（石垣金星会長）を中心として、地元の方々の協力のもとに、多大な成果を得ることが出来た。記して謝意を述べたい。

3．１／5,000の国土基本図や航空写真は国土地理院発行（COK－77－５　C5A－２）の成果資料によった。

4．１／10,000の地形図は竹富町役場製作の成果資料によった。

5．周辺遺跡の分布図は『竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－』（沖縄県教育委員会1980年）発行の成果によった。

6．琉球並諸島図及び西表村全図として掲載した古地図は社団法人温故学会が所蔵している資料によったものである。記して謝意を現したい。

7．各資料の同定並びに分析については下記の方々によりました。記して謝意を述べます。

陶 磁 器……手塚直樹（鎌倉考古学研究所々長）

獣・魚骨……金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）

鉄製品・鉄滓……大澤正己（新日鉄八幡技術研究所研究員）

新日鉄八幡　ＴＡＣ技術試験センター

貝類……黒住耐二（千葉県立中央博物館動物課技師）

なお、獣・魚骨及び鉄製品・鉄滓の同定・分析の結果については諸先生より玉稿を賜った。記して御礼申しあげます。

8．調査指導・助言については文化庁記念物課の須田勉調査官の協力を得ました。記して謝意を申しあげます。

9．出土した資料及び本書作成の記録類の全ては沖縄県教育委員会文化課において保管してある。

10．本書の執筆・編集は下記のとおりである。

大　城　　慧……序、例言、第Ⅰ章～第Ⅵ章の第Ⅰ地区(1)、(2)、(3)ヤ、マ、ケ

第Ⅱ地区(1)、(2)、(3)チ、ヌ、ヲ、第Ⅶ章・第Ⅷ章

金　城　亀　信……第Ⅳ章の第Ⅰ地区(3)イ～ク

第Ⅱ地区(3)イ～ト・リ、４(1)

第Ⅷ章

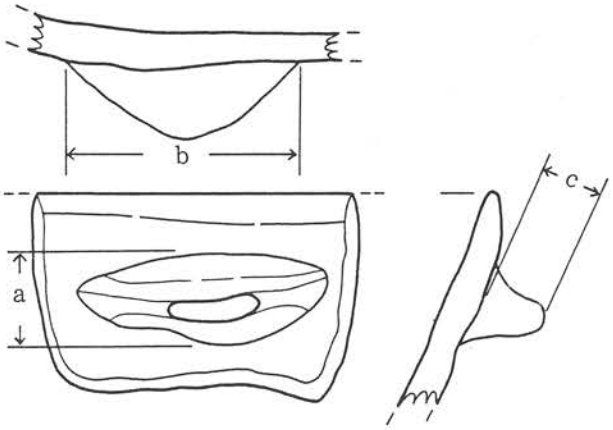
11．付編として２編の玉稿をいただいた。記して謝意を申しあげます。

大澤正己「西表・上村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」

石垣金星「文献からみた祖内の歴史－上村遺跡を中心として－」

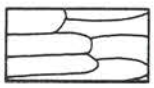
12. 遺跡の分類概念は第Ⅰ地区の中で述べてある。また各遺物のまとめは、遺物単位に行なって、全体的な総括は第Ⅷ章で記述した。

13. 耳（把手）の計測部位。

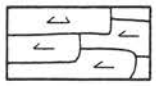


14. 土器実測図の表現記号凡例。

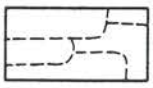
ナデ

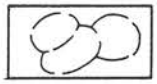

篦ナデ

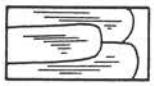
篦


篦削り（矢印は方向）

篦


篦削りがナデ消されたもの


指圧痕


刷毛目

第Ⅰ章　調査に至る経緯

1．調査に至る経緯

上村遺跡は現祖納集落の西側後背の小高い丘陵地に位置する。1985年に大浜永亘氏（現八重山商工高等学校教諭）によって発見された遺跡である。その後、沖縄県教育委員会が1979年から1980年にかけて実施した竹富町・与那国町の遺跡分布調査によって再確認されたものである。その成果は竹富町・与那国町の遺跡として登録されている。(「竹富町・与那国町の遺跡－詳細分布調査報告書－」沖縄県教育委員会1980年３月)。遺跡は祖納半島のほぼ中央部に形成された広大な集落遺跡である。半島全体が遺跡であり、いく度かの歴史が展開された地域である。西表島の歴史のなかにおいても大きなウエイトがおかれた所でもある。

特に鉄関係の遺跡として高く評価されていることから、重要遺跡としての基礎資料の保存と活用を図る等とされ、鉄をめぐる動向が島内外の関係者の間で注目されてきた。西表島における地元の歴史研究グループである「西表をほりおこす会」が古文書や遺跡踏査を含めた勢力的な調査から重要な遺跡の一つであることが指摘されていた。特に遺跡そのものが祖納半島の中にスポイルされた形で旧来からのまま保存されていることが重要遺跡としての価値を含んだものとして評価されてきた。遺跡とそれを取り巻く自然環境というトータルな部分が残されている数少ない場所の一つでもあった。と同時に半島内へのリゾート開発が懸念され、虫食い状態の開発が進行していく可能性も予想されることから何とかして半島そのもの、ひいては上村遺跡全体が保護できないものか、研究会の中からも度々話し合いが出されていた。

その後も予備調査を含め何度かの調査が重ねられるにつれて、上村遺跡がきわめて保存状態が良好であるとともに、かなり重要な遺跡の一つであることが確認された。特に無秩序な開発からの遺跡の保護という観点から何とかして歯止めがかけられないものか強い要望が出されていた。地元祖納の方々からの調査への要望を受けて1987年に重要遺跡確認調査ということで４年に亙って調査を実施することになった。これまでの口碑伝承の世界にとどまっていた上村遺跡に初めて考古学的な調査を実施することになった。可能な限り半島全域を網羅する方法で遺跡の性格と規模、集落が形成された開始期の問題などをテーマとして実施した。

文化庁の補助を受けて1987年から1989年までの発掘調査の中で『慶来慶田城由来記』等の文献に記載される西表島祖納の中・近世の社会と文化の拠点となった遺跡の範囲と性格を明らかにすることになった。1990年には、報告書の刊行と３年間の継続事業として実施した。調査は「西表をほりおこす会」を中心にして、沖縄県教育委員会文化課が事業主体者となった。この成果をもとに、将来において史跡指定の文化財にもっていく声も大きい。

現在、遺跡地内は狭小な畑地が残る他は原野が広がっている状況である。その大半は旧陸軍省としての国有地とが大部分を占めている。

2．調査体制

発掘調査は地元の『西表をほりおこす会』（石垣金星会長）を中心に沖縄県教育委員会文化課があたった。関係者は次のとおりである。

調査主体 …… 沖縄県教育委員会

教　育　長 …… 池　田　光　男（昭和63年度）
〃　…… 高　良　清　敏（平成元年度～平成２年度）
文化課課長 …… 宜　保　栄治郎（昭和63年度～平成２年度）
〃　課長補佐 …… 平　田　興　進（昭和63年度～平成元年度）
〃　…… 上江洲　　均（平成２年度）

調査事業事務 … 文化振興係長 …… 仲　里　哲　雄（昭和63年度～平成２年度）
主事 …… 波　平　　淳（昭和63年度～平成元年度）
〃　…… 仲　里　富　代（昭和63年度～平成２年度）
〃　…… 上　原　節　子（昭和63年度～平成元年度）
〃　…… 新　垣　昌　頼（昭和63年度～平成２年度）

調査担当 … 主幹兼史跡・埋蔵文化係長 … 安　里　嗣　淳（昭和63年度～平成２年度）
主任専門員 …… 大　城　　慧（昭和63年度～平成２年度）
専門員 …… 金　城　亀　信（平成元年度～平成２年度）
〃　…… 豊見山　　禎（平成元年度）
〃　…… 金　城　　透（昭和63年度）
〃　…… 島　袋　　洋（平成２年度）
〃　…… 長　嶺　　均（平成２年度）
沖縄県立博物館主任専門員 … 調査委嘱 … 金　武　正　紀（平成元年度）
（現那覇市文化課主幹）

調査協力 …… 西表をほりおこす会・竹富町教育委員会

第１次調査 … 西表をほりおこす会々長　石　垣　金　星（西表祖納公民館副館長）
会　員　里　井　洋　一（現琉球大学）
〃　里　井　宏　美（現識名小学校教諭）
〃　城　間　良　昭（現大里北小学校教諭）
〃　城　間　明　美（現平敷屋小学校教諭）
〃　前　大　用　裕（八重山毎日新聞社通信員）

第2・3次調査 …… 石　垣　金　星（西表祖納公民館副館長）
第2次調査 …… 戸　井　由宇子（早稲田大学第二文学部西洋文化卒業生）

賛助協力 …… 沖縄歴史研究会、祖納青年会、祖納婦人会、祖納公民館、
西表上原小学校、大竹八重雄

調査指導 …… 文化庁記念物課　文化財調査官　須　田　　勉

発掘調査作業員

第1次調査（1988年度）……那良伊　孫　一、　宮　良　用　奉、　宮　良　用　範、
那良伊　知　子、　古　見　代志人、　森　山　用　應、
宮　良　用　信、　西　表　全　俊

第2次調査（1989年度）……那良伊　知　子、　宮　良　用　奉、　前　津　克　子、
那良伊　　孝、　加　藤　広一郎、　那良伊　孫　一

第3次調査（1990年度）……那良伊　知　子、　前　津　克　子、　本　原　愛　子、
星　　良　枝、　宮　崎　義　久、　前　大　用　裕

資料整理作業員および協力者

（1988年度）……我那覇　悠　子、　黒　住　耐　二、　平　田　幸　子、
与　儀　恵　子、　石　橋　朝　子、　仲　元　知　枝

（1989年度）……崎　浜　美智子、　玉　城　弘　子、　石　嶺　初　枝、
大　城　ますみ、　石　橋　朝　子、　新　垣　千恵子、
城　間　光　子

（1990年度）……石　嶺　真由美、　金　城　礼　子、　備　瀬　枝美子、
源　河　秀　子、　比　嘉　優　子、　大　城　勝　江、
外　間　　瞳、　仲宗根　三枝子、　上　原　園　子、
照　屋　利　子、　高　良　三千代、　金　武　雅　子、
小　嶺　禮　子、　平　良　貞　枝、　手　嶋　永　子、
玉　寄　智恵子、　安次富　智　子、　池　原　直　美、
瑞慶覧　尚　美、　大　城　聖　子、　上　原　博　美、
津　波　政　子

第Ⅱ章　西表島の地理的・自然的環境

西表島は竹富町（竹富・小浜・黒島・新城・波照間・西表・鳩間）の行政区域に入り、八重山諸島中最大の島である。「琉球列島の西南端北緯24°15′から、東経123°40′から55′の地点に位置し、島の周囲は129.99km、面積292.5km²で、東西30km、南北20kmほぼ平行四辺形の島である」[註1]とされている。石垣島の西方25.5km（東部　大原）に位置し、沖縄県下でも第２の規模を誇る。島の気温も地域によって異なっており年間の平均気温値は「大原23.9度、古見24.2度、祖納23.6度、網取24.2度」[註2]となっている。年間降水量は「大原2403.0mm、古見2696.3mm、祖納2363.8mm、網取1864.6mm」[註3]となっている。一つの島でありながら局地的に降雨量がことなっており、梅雨の時期や台風の当り時期によっても年間の降雨量が左右される地域でもある。

島の呼び名も「イリムテイ」と音訛し、さらに古くは（所乃島）、（古見島）と称されていた。18世紀になって初めて西表島と記録されてくる。

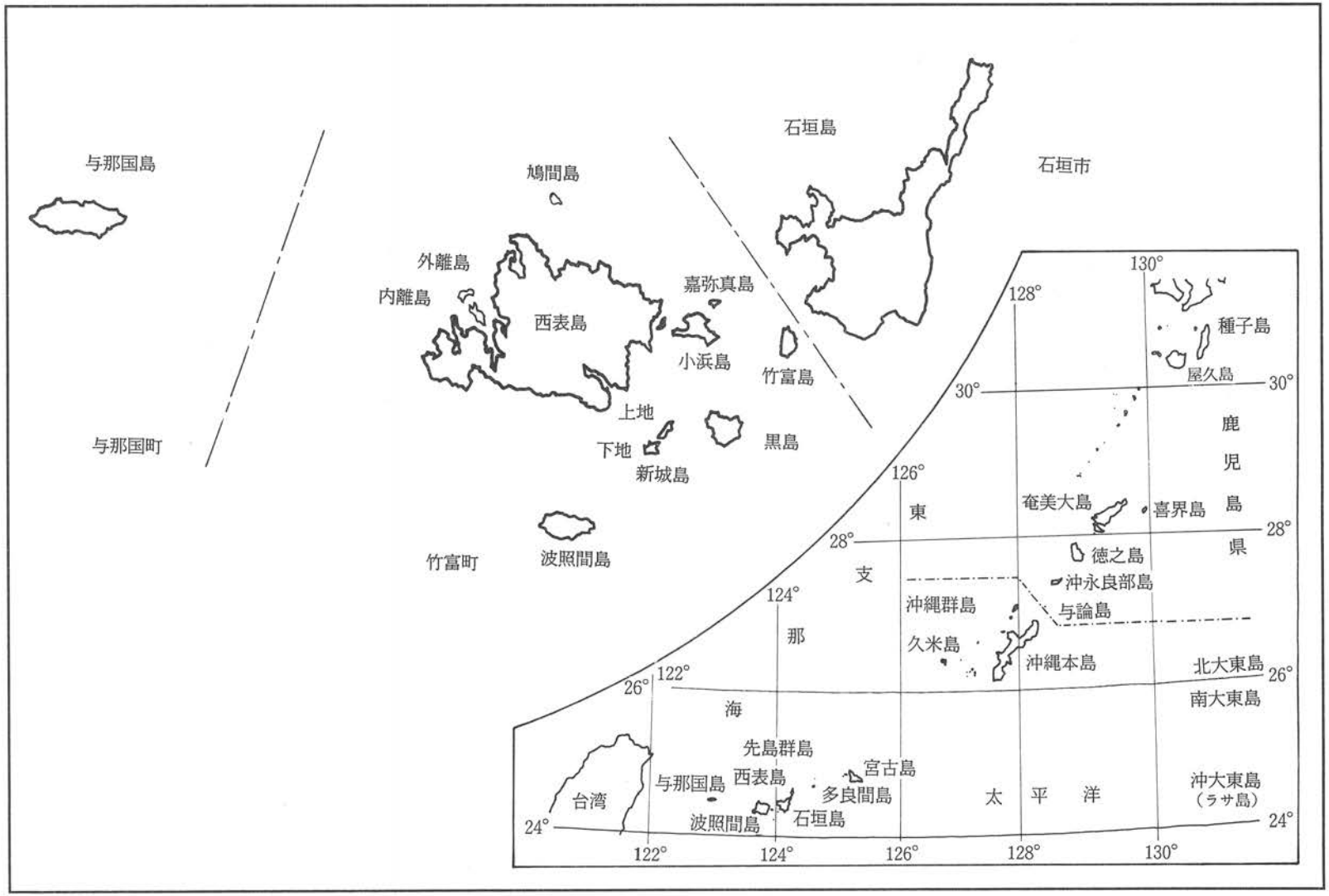
島全体が西表国立公園になっており、90％が国有地となっている。南風見岳（425ｍ）、御座岳（421ｍ）、波照間森（447ｍ）、古見岳（470ｍ）、テドウ山（442ｍ）の山なみが連なり、浦内川（11km）、仲間川（10km）の水系をもつ奥深い原生林の島である。東部、西部として地区割りし、現集落が海岸線に近接する微高地から低地にかけて営まれている。「総面積292.5km²で、低地部や段丘面の発達が狭小で、全体的に起伏の多い山地性の島である。」[註4]分水嶺が島の周緑部に分布している。全島が起伏の多い山塊と深い谷によって地形が特徴づけられる。これらの中に集落の立地とするところは、最下位平坦面の他に、海抜100～140ｍ、200～240ｍ、300～320ｍ、420～440ｍの段階地形や山頂の定高性が認められる。90％が山林で占められる。海岸線では、北側から西側にかけては入り江と岬が発達し特に伊武田崎から宇奈利崎、サバ崎は複雑な地形を形成している。東側から南側にかけては珊瑚礁が発達している。「海岸段丘の発達は石灰岩を基盤にしたカルスト台地におおく、大富、大原、豊原の付近で広がっており、さらには上原から中野にいたる台地とされている。」[註5]また、地質面では、島のほぼ全域が礫岩、砂岩、シルト岩から形成されており、複雑に富んだ地質構造となっている。「八重山層群は陸上や海底の部分にもかなり広範囲に分布しており、そのなかの特徴として、石炭層を含んでいることで、西表島の西部地域に見られる」[註6]としている。大正年間から戦前まで石炭の採掘が行われたことがあるが、炭層が薄く採算がとれなかったことから廃坑の浮き目に合う。

植物では、イタジイ、マングローブなど亜熱帯照葉樹林で占められている。さらにイリオモテヤマネコ（国指定の天然記念物）が生息する地であることから、原始性の高い動植物の宝庫とされている。

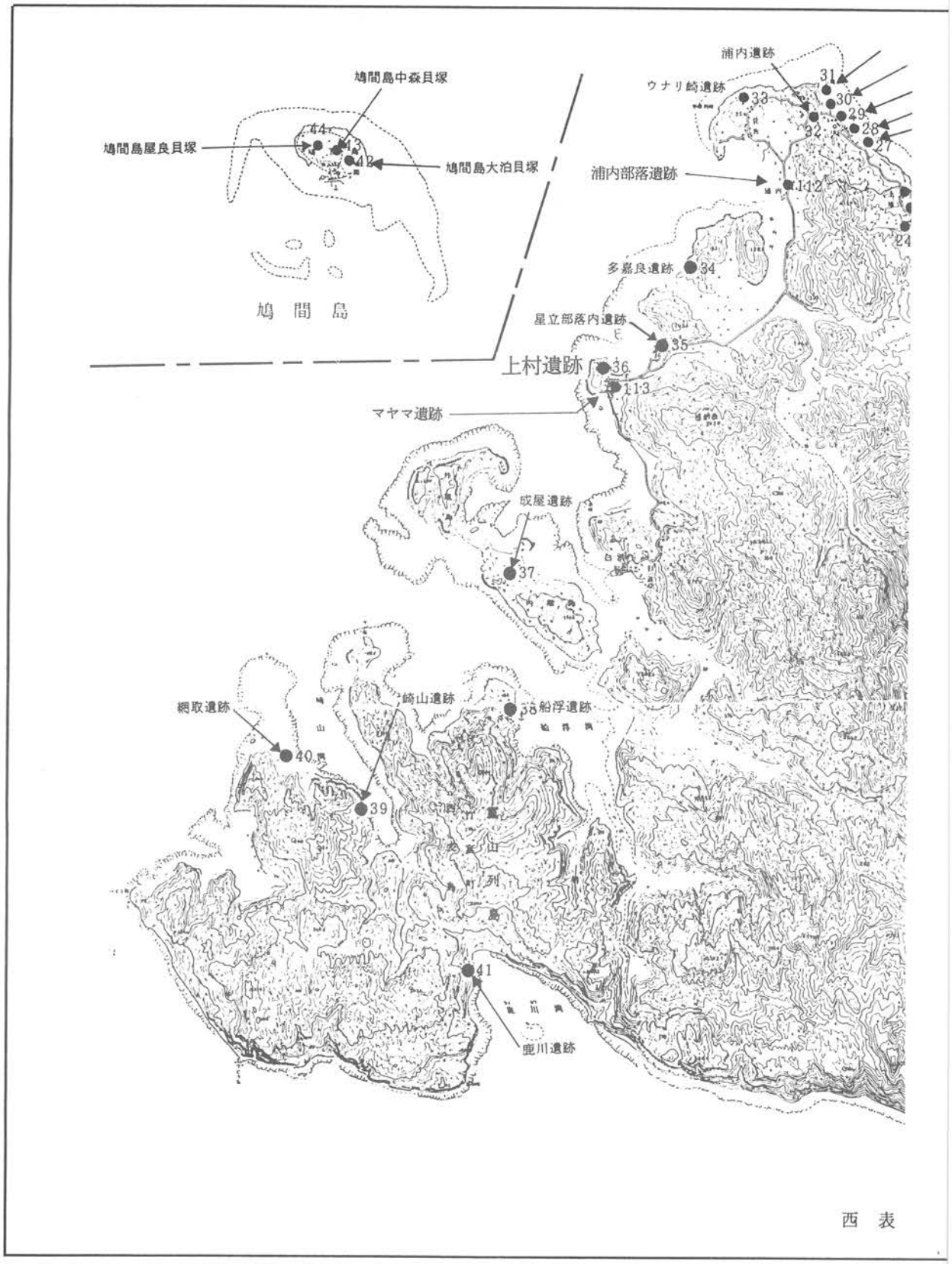
註の引用

註１～註５．新納義馬「西表島の自然環境Ⅰ」『西表島天然記念物緊急調査報告Ⅰ』
沖縄県教育委員会　1983年３月

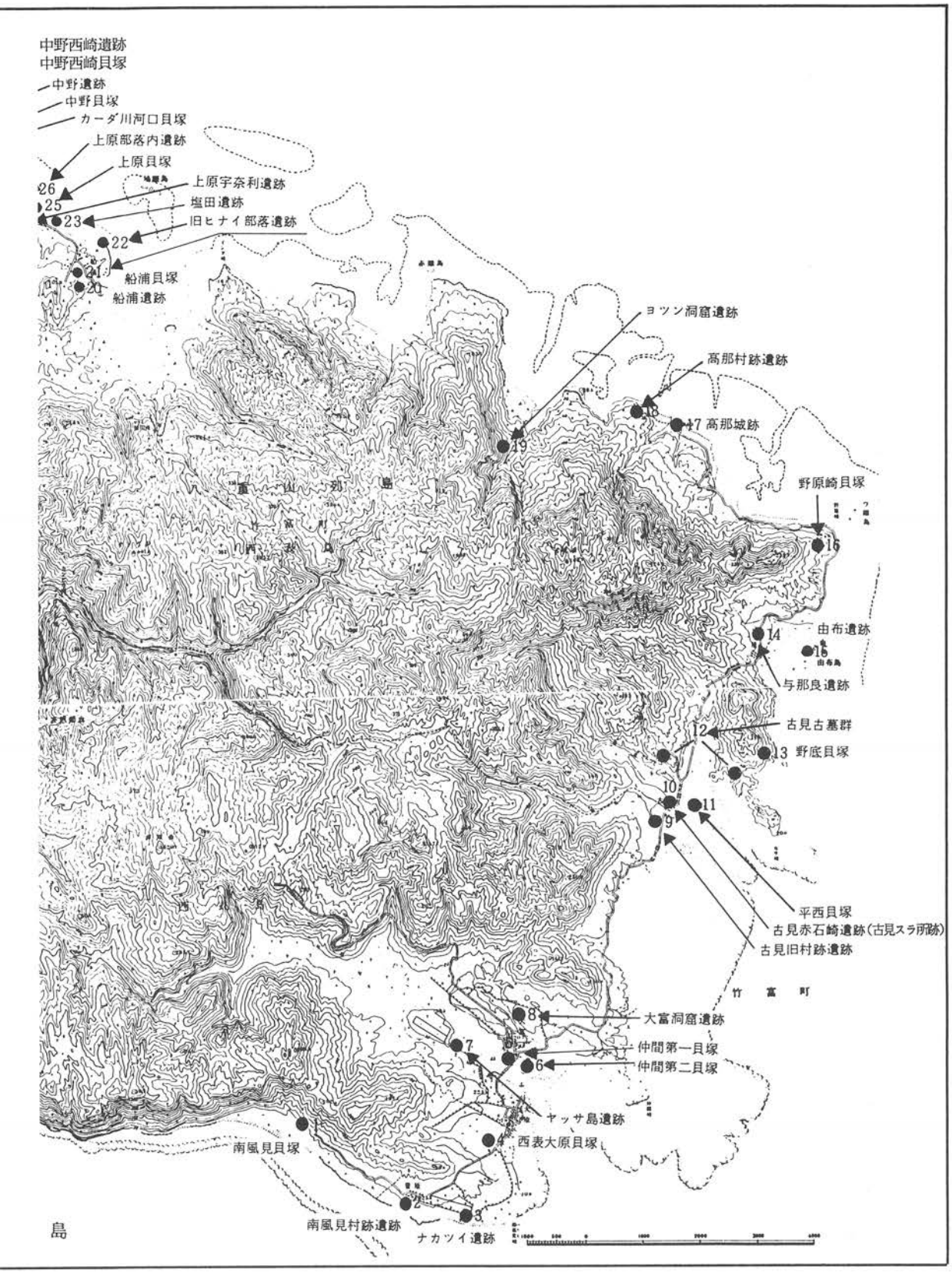
註６．　神谷厚昭『琉球列島の生いたち』新星図書　1984年


与那国島
与那国町
鳩間島
外離島
内離島
西表島
嘉弥真島
小浜島
竹富島
石垣島
石垣市
上地
下地
新城島
黒島
竹富町
波照間島
130°
128°
126°
124°
122°
30°
28°
26°
24°
種子島
屋久島
鹿
児
島
県
奄美大島
喜界島
徳之島
沖永良部島
与論島
沖縄群島
久米島
沖縄本島
北大東島
南大東島
沖大東島
（ラサ島）
東
支
那
海
先島群島
宮古島
与那国島
西表島
多良間島
石垣島
波照間島
台湾
太
平
洋

第１図　西表島の位置図



第2図　西表島の遺跡分布図（『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県教育委員会　1980年に加筆）


中野西崎遺跡
中野西崎貝塚
中野遺跡
中野貝塚
カーダ川河口貝塚
上原部落内遺跡
上原貝塚
上原宇奈利遺跡
塩田遺跡
旧ヒナイ部落遺跡
船浦貝塚
船浦遺跡
ヨツン洞窟遺跡
高那村跡遺跡
高那城跡
野原崎貝塚
由布遺跡
与那良遺跡
古見古墓群
野底貝塚
平西貝塚
古見赤石崎遺跡(古見スラ所跡)
古見旧村跡遺跡
竹富町
大富洞窟遺跡
仲間第一貝塚
仲間第二貝塚
ヤッサ島遺跡
西表大原貝塚
南風見貝塚
南風見村跡遺跡
ナカツイ遺跡
島

第Ⅲ章　西表島における考古学研究小史

西表島における考古学研究は比較的早い時期から踏査が行われた足跡がある。その嚆矢とするところは1889年（明治22年）から長期的な調査を実施した田代安定氏の報告[註1]がある。古見部落採集の曲玉、古茶碗、壺等の表採品を「琉球西表島古見村ノ土器」として（『東京人類学雑誌』第40号1889年）に発表している。その後、1955～1958年にかけては分布調査を中心として、西表島を含めた八重山地域での勢力的な調査が行われている。

その成果は、多和田真淳氏によって「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（『琉球文化財要覧』1956年）報告[註2]されている。掲載された遺跡名は仲間第一貝塚（山城浩、細原徹、1955年、仲間第二貝塚（多和田真淳1955年）、西表島大原貝塚（多和田真淳1955年）、平西貝塚（多和田真淳1955年）、西表野底貝塚（細原一夫1955年）、西表島古見赤石遺跡（新城徳裕・山城浩・西大正英1957年）、西表島大富洞穴遺跡（黒島寛松・多和田真淳1958年）となっている。

この時期発見された遺跡の大半が、西表島の東部地区に集中している。これらの遺跡の中には、現在、県指定の史跡になっているものもある。（仲間第一貝塚）

その後、長い空白期間をおいて、1980年代に入ると竹富町・与那国町の全域を含めた詳細分布調査が実施されている。ほぼ２町における遺跡の分布状況を把握することができ 113ヶ所の埋蔵文化財が確認された。また、発掘調査においても早い時期から行われている。初期の頃は、大学機関を中心とした勢力的な調査が行われてきた。早稲田大学が調査[註3]した平西貝塚、仲間第一貝塚、仲間第二貝塚（滝口宏1960年）や青山学院大学が調査した与那良遺跡[註4]（1982年）、成屋遺跡[註5]（1987年）や琉球大学による船浦貝塚[註6]（1972年）などがある。特に1959年～1960年の早稲田大学の調査は石垣島、西表島、波照間島、黒島と広域に及び、その成果は八重山地域における考古学的編年という形で早稲田編年[註7]が発表されている。仲間第一貝塚や仲間第二貝塚の資料からは、土器の器型や石斧についての比較論を出している。

註

註１．田代安定「琉球西表島古見村ノ土器」『東京人類学雑誌』第40号　1889年。

註２．多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概要」『琉球政府文化財要覧』1956年。

註３．早稲田大学調査団『沖縄八重山』校倉書房　1960年。

註４．与那良遺跡調査団『沖縄・西表島与那良遺跡発掘調査概報』1982年。

註５．青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学　第９号　1987年。

註６．R. J. PEASON, S. ASTO et al「Excavations on kume and Iriomote, Ryukyu Islands」Asian Perspecfives, XXI(I), 1978年。

註７．註３に同じ。

第Ⅳ章　遺跡の立地と歴史的環境

西表島の西部地区、祖納半島の中に形成された上村遺跡は集落遺跡として広大な範囲に及ぶ。古見と並び古い集落形態を残しているところである。祖納半島そのものが遺跡として捉えられる環境である。海抜15mの丘陵上に形成されており、祖納礫層と呼ばれる砂岩性の地層を形成している。西表島全域において確認されている遺跡は41ヶ所に及んでいる（『竹富町・与那国町の遺跡』1980年３月）が、その大半は海岸線に近接した丘陵台地に形成されているところが多い。上村遺跡もその中の一つにある。祖納半島の南側には、現在の集落が位置し、さらにその後背には、祖納岳（293.9m）がひかえる。

遺跡の周辺は、旧陸軍省の国有地で占められ、わずかにその間瞭をぬって狭小な畑地が散在している。遺跡の西側は天然の良好な入り江をなし自然港としても古くから利用された形跡がある。この地が、西表島の歴史の流れの中に深く関与してくる時期は、口碑伝説の中でも不明確な部分が多く、古文献の欠如とも合わせて、その実態は長く深いベールに包まれた状況にある。あまりにも空白が大きすぎ、いつの時期に最初の集落が営まれるようになったのかも明確ではない。

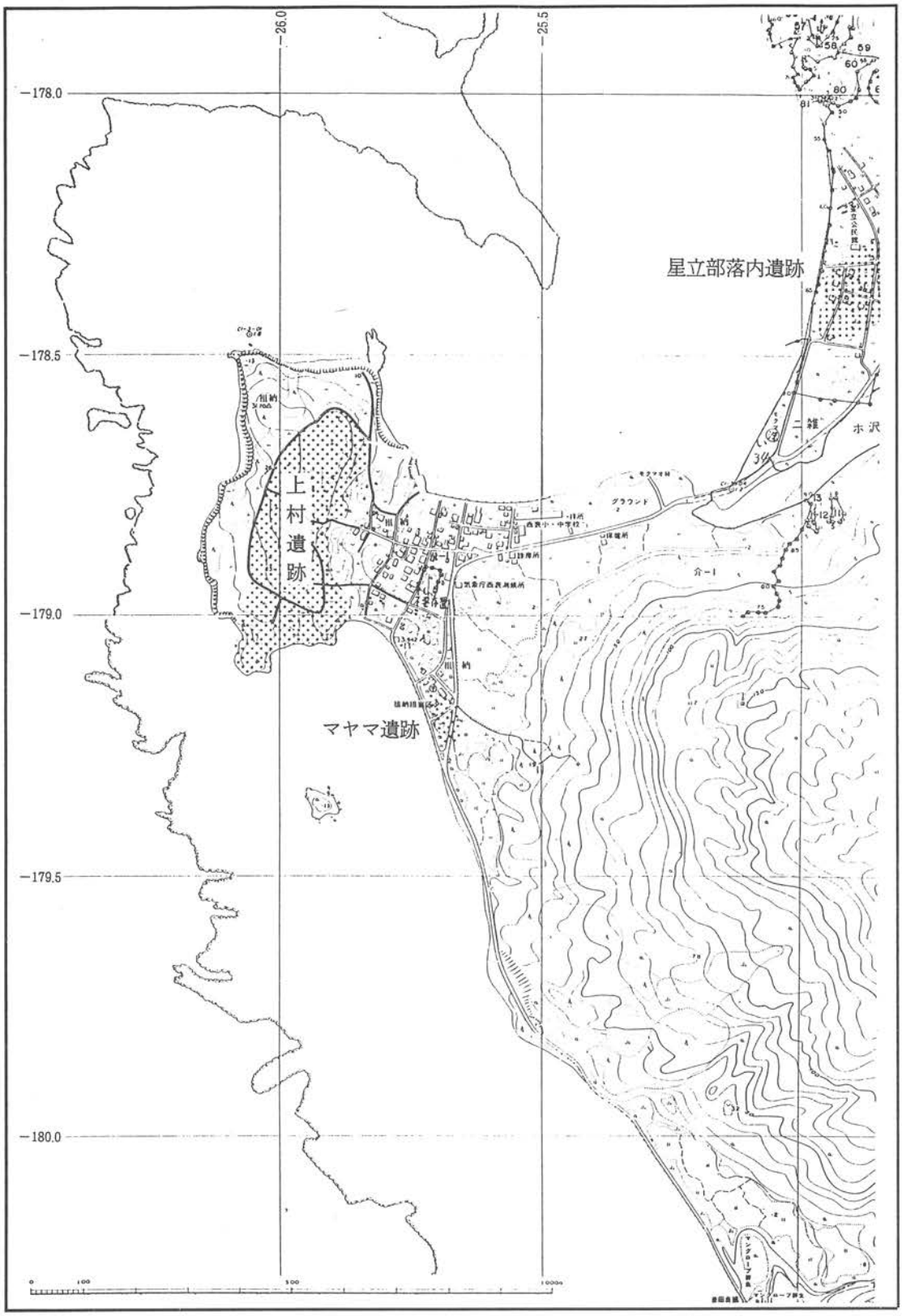
このような中で、口碑伝説の中に登場してくる人物が２人いる。そのうちの１人は村建ての中心となった大竹祖納堂儀佐という人物であり、あと１人が慶来慶田城用緒である。

大竹祖納堂儀佐がいつの頃の時代に生きた人物であったのか、それを詳細に検討した記事は皆無に近い。西表島に関する古い記録は15世紀後半に書かれた「李朝実録」で、その中に記載された朝鮮人漂流記とされている。それ以後の記録をとどめるのはなく近世の時期をむかえる間、口碑伝説の時代とされている。

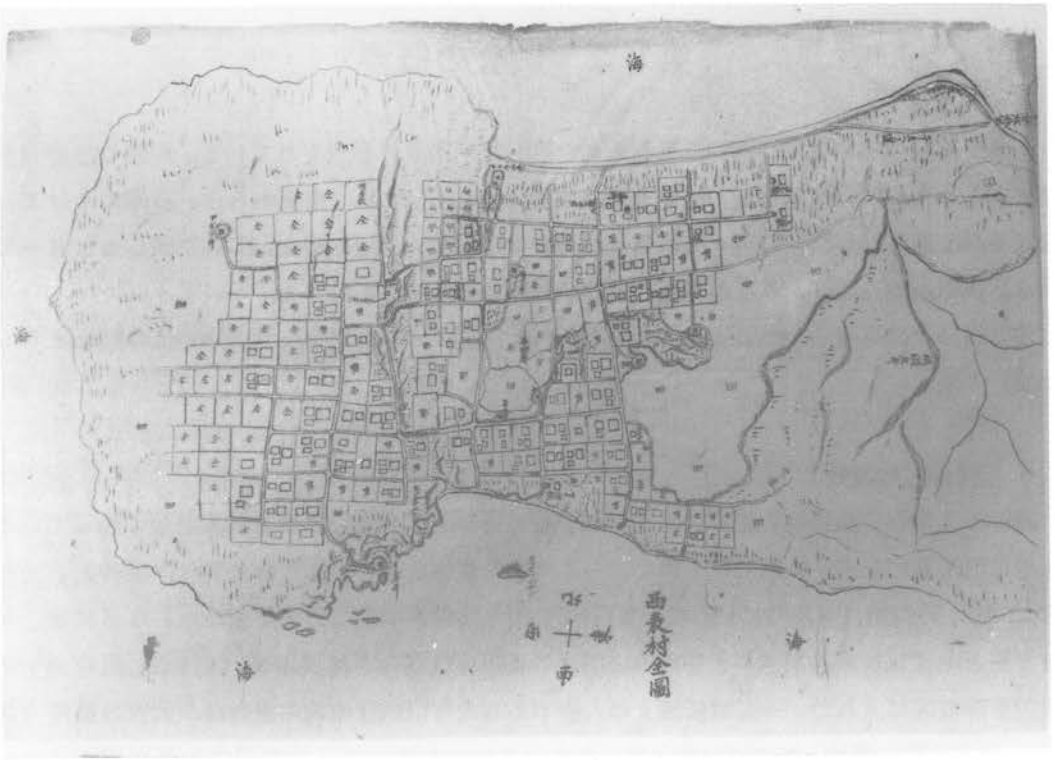
その後、18世紀に入ると薩摩在番の駐在地になり、南の異国船監視の拠点の１つとして防備が固められる。参遣状の記録の中に、その記事がいくつか見える。さらには、在地の役人と外国人との争乱など、幾多の歴史の舞台となって展開されてきた地でもある。

明治期に入ると炭坑の地として活況を呈したが、マラリアや過酷な労働環境のもとに近代沖縄の労働史上においても他に類を見ない時代を経た地でもある。一方、上村遺跡を取り巻く周辺の遺跡を見ると、その大半が陶磁器が出土する時期で、八重山考古学編年上第Ⅲ期～第Ⅳ期（早稲田編年）に相当するものが多い。

いずれも海岸丘陵台地や低砂丘地に位置し、集落遺跡として形成された可能性が強い。したがって広範囲にわたって遺物が散布していることが少なくない。具体的な集落の規模・性格等の研究はこれからのところが大きいが、その中でも上村遺跡の場合は比較的集落の範囲が良好に残されているところの一つと言える。少なくとも、出土した遺物からすると14世紀まで辿ることができ長期にわたって集落が連綿と形成されていたことが確認出来た。



第3図　上村遺跡の位置図



第4図　古地図　上段：西表島川之実測見取図(3)
下段：西表村全図

第Ⅴ章　調査の概要

上村遺跡は現祖納集落の西側丘陵台地に位置し祖納半島に形成されている。周囲の地形は集落に向かって南側に傾斜地面が広がり集落の後背になる。また、東側から北、西側にかけては崖状をなし海岸線が眼下に迫っている。標高では東、北、西側で10m、南側では５ｍとなっている。西側には良好な入り江があり、天然の港ができている。

重要遺跡確認調査ということで、調査を入れた。調査は東西70ｍ、南北100ｍの範囲となった。

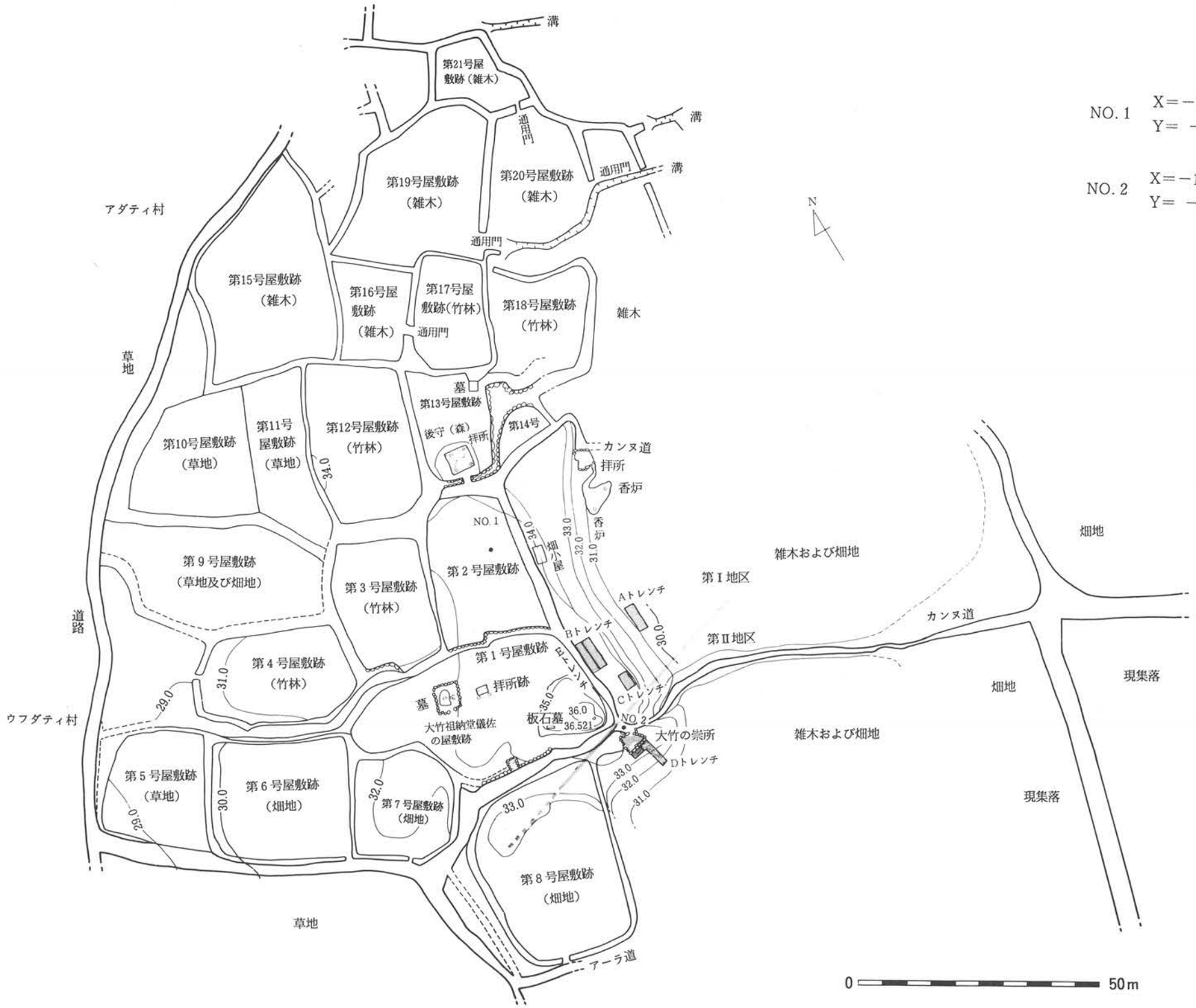
１．調査区の設定

遺跡の大半が旧陸軍省の国有地となっていることから、それ以外の私有地として残っている土地に限定して発掘を入れた。その中の一人大竹八重雄氏所有の大竹保久利（拝所492)、大竹木（512)、西表村（拝所511)、那根石主（493）の各地番を中心に調査を進めた。さらには、インガーと呼ばれる半島南側の古井戸への旧道の周辺の伐採など宮良用廣（畑355）所有の土地周辺を調査区に入れた。一帯は伝説上の人物である大竹祖納堂儀佐の屋敷跡や大竹の根所（拝所)、遠見台跡、墓地、鍛冶場跡等が残されている所であり、さらに周辺には拝所が作られている一角であった。発掘の面積は最小限度にとどめて小範囲の試掘をした。試掘は地形とそれぞれの施設が残されていたであろうと思われる場所に東南側から西側にかけてＡトレンチ、Ｂトレンチ、Ｃトレンチ、Ｄトレンチ、Ｅトレンチとして調査区を設定した。（第５図）そのうちＡ、Ｂ、Ｃ、Ｅの各トレンチを第Ⅰ地区とし、Ｄトレンチ及び拝所を第Ⅱ地区とした。

２．調査の方法

調査は発掘を第一義としてそれぞれのトレンチを地形に照合させる形で南北ラインにいれた。２×２ｍを１グリッドとして約500㎡の面積を掘った。発掘調査の方法は、周辺地を可能な限り伐採した後、調査区を設定していった。基本的にはグリッドによる地点確認調査と、さらに、その結果に基づいて拡張していくトレンチ掘を通して遺構、遺物の確認に務めた。グリッドは２ｍ四方とし、地山面までの確認調査を行った。

また、トレンチは第Ⅰ地区Ｃ、Ｅ地点で２ｍ×10ｍ、第Ⅱ地区のＤ地点では、大竹根所のフラット面の前面発掘約４㎡と斜面地に２ｍ×４ｍの８㎡の縦断トレンチを入れて遺物の堆積状況を確認していった。遺跡地は、すでに表土面からおびただしい遺物が採集されることから表土面から作業員による手掘に終始した。特に、南西側斜面地には、多量の鉄滓が黒色土中に厚く堆積しており全ての資料を取り上げた。遺物と遺構は各グリッドのなかで層序ごとに取り上げた。特に第Ⅱ地区の大竹根所はフラット部分を全面発掘した。鍛冶の工房跡と考えられるところで50センチのメッシュを組み遺物とともに土も採取し、洗浄して細かいスケールを取り出



第5図　上村遺跡地形図及びグリット設定図

す方法を試みた。出土した遺物の中で特に鉄滓については出来るかぎり採取するとともに新日鉄八幡のＴＡＣ試験技術センターに化学分析依頼した。

また遺跡全体の概況を把握するため500分の１の現況測量図を作成し図面上の集落の規模、構造の配置図を復元していった。一方これまで文献からの調査資料や聞き取り調査をも含めて祖納半島や上村遺跡に関する歴史的事象の記述も考慮した。

出土した資料は各地区のそれぞれのトレンチごとにまとめた。発掘終了後は、全て埋め戻し現況に復元した。

第Ⅵ章　遺構と出土遺物

1．第Ⅰ地区

(1) 層　序

Ⅰ地区ではA、B、C、Eと４本のトレンチを入れたが、そのうち遺構が検出されたB、Eの２本のトレンチからの層序は次のような状況であった。

第１層は淡茶褐色土層で、後生の時期の焼物などが混在していた。第２層は黒褐色土層で遺物包含層であった。木炭や断片的な石炭が混在するさらっとした土質であった。遺物の大半が、この層の中から出土したものであるが、中でも鉄滓はかなりの量が含まれていた。

第３層は淡黒色土層、第４層は茶灰色土層で灰土を含む層であった。細かい砂質性の土で砂岩の風化した堆積土に似ていた。以下、地山層へと続いていた。地山層は黄色味を帯びた砂質性であり、砂岩に推積している。この地区における層序はEトレンチを境に、東南側へ漸次傾斜していく状態にあり、斜面地への廃土の溜りとなっている。したがって層序は平行状態にあるのではなく、サンドイッチ状に互層する形で複雑に堆積していた。

以下、各セクションごとの状況を記述しておく。

Eトレンチ

（E－３グリッド）東壁面の層序

第Ⅰ層・・・・・淡灰色土層
第Ⅱ層・・・・・黒褐色土層
第Ⅲ層・・・・・茶褐色土層
第Ⅳ層・・・・・淡黄・淡茶褐色土層
第Ⅴ層・・・・・褐色土層
第Ⅵ層・・・・・淡褐色土層
第Ⅶ層・・・・・淡灰色土層
以下、硬質砂岩の岩盤へ続く。

（E－６～E－９グリッド）西壁面の層序

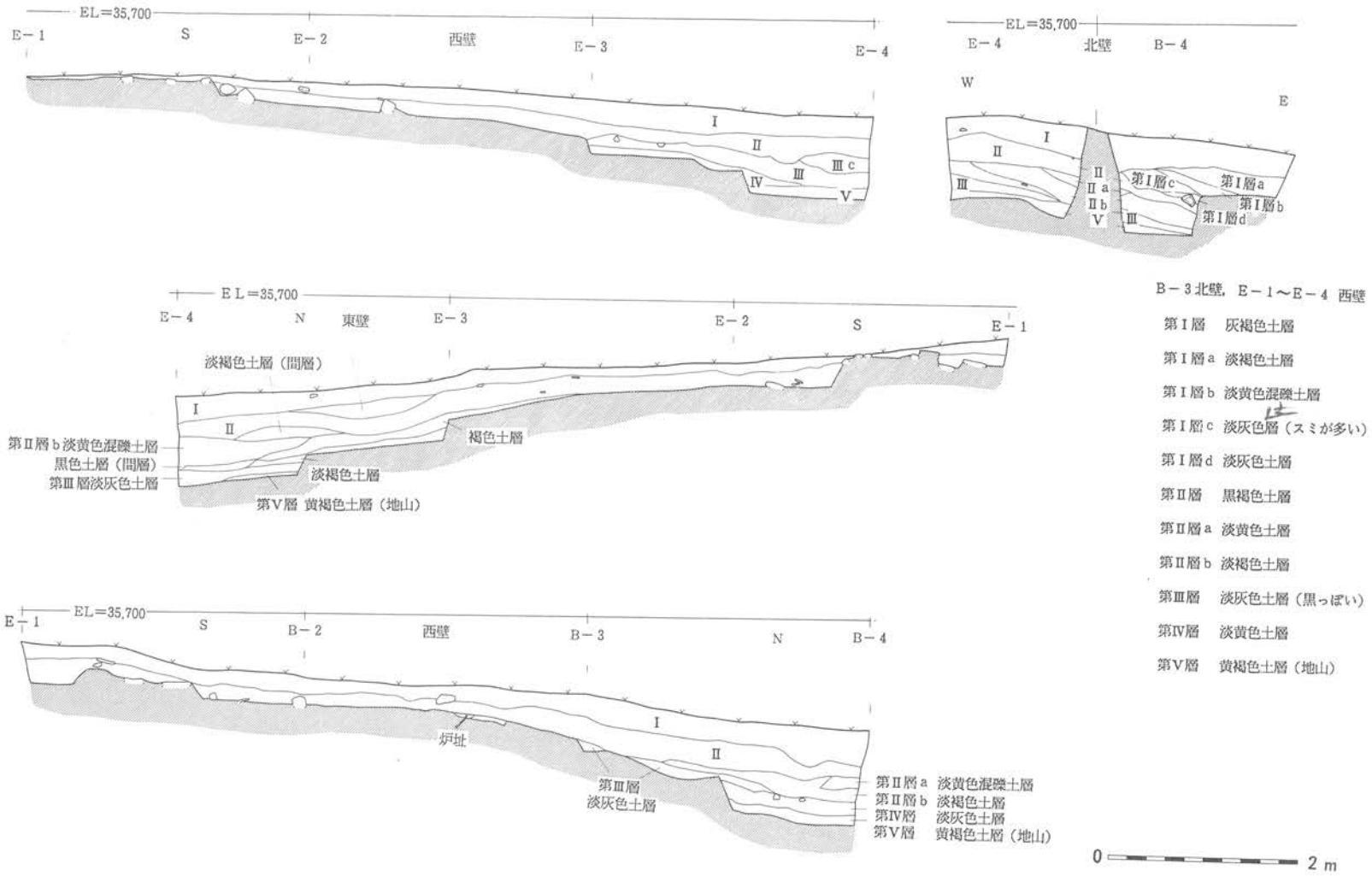
第Ⅰ層・・・・・灰褐色土層
第Ⅱ層・・・・・黒褐色土層
第Ⅱｃ層・・・・褐色土層
第Ⅲ層・・・・・淡灰色土層
第Ⅳ層・・・・・淡黄色土層
第Ⅴ層・・・・・黄色土層（地山、ニービ）
以下、地山へ続く。

(2) 遺　構

サンゴ集積遺構

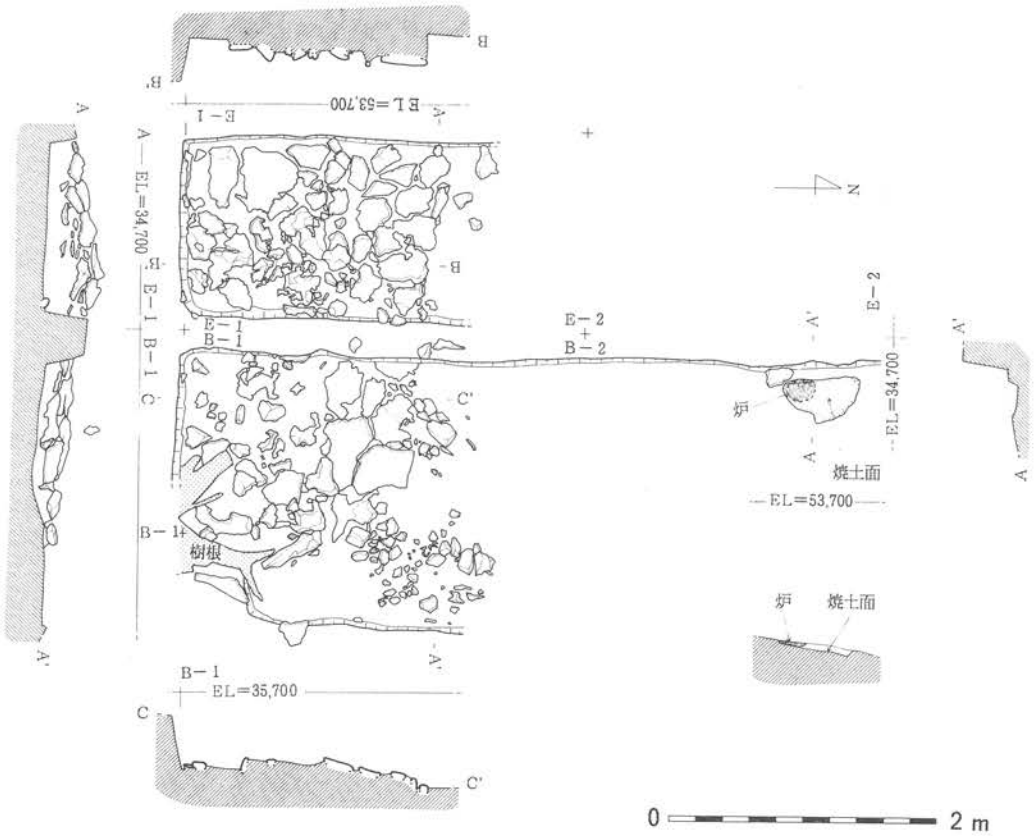
第Ⅰ地区では遺構として明確に断定できる資料はサンゴ集積と炉跡の二ケ所だけであった。BトレンチとEトレンチにかけて、サンゴ礫を密に集積したものが確認された。東西方向によく残っている。B－１、E－１だけに集中していた。北側にはまったく残っていなかった。

遺構上面までは黒色土の堆積があり鉄滓、土器、陶磁器、獣魚骨、貝殻等の遺物がぎっしり詰まっていた。当初、掘り込んだトレンチの制限もあり、全体のプランを把握するまでには至



第6図　第I地区　層序（B－1～3西壁、E－1～3東壁と西壁、B－4・E－4北壁）

らなかった。検出した範囲からの規模は、東西方向に3.10mとなっている。南北方向に1.70mとなっている。性格は判然としないあるいは現状に残る屋敷の石積みの下部の部分であったとも考えられる。また、この集積から北側70cmのところに20cmから25cmの楕円状の焼土が検出された。周辺からは、かなりの量の鉄滓が出土してくることから、鍛冶炉の炉底部分が残ったものと想定した。撮影後、中を断ち割って見たが炉の形態をとどめるものではなかった。焼土のまわりは砂質の土壌が広がっていた。



第７図　遺構および炉跡（テーブルサンゴ集積遺構　Ｂ－１、Ｅ－１、炉跡　Ｂ－２）

(3)　出土遺物

第Ⅰ地区

イ．青　磁

本遺跡で出土した青磁は、14世紀中頃から16世紀後半に位置付けられるものである。

地区別にみると第Ⅰ地区が、15世紀終末から16世紀代のものが多い。第Ⅱ地区は14世紀中頃から15世紀中頃の資料が目立っている。第Ⅱ地区では第Ⅰ地区よりも安定した層が確認できた。

器種は碗・盤・皿・香炉の４器種が確認された。中でも第Ⅱ地区は碗のみが出土している。

分類に関しては器種ごとに分類し、必要に応じて細分した。底部資料については施袖・高台の成形手法等を考慮して分類を試みた。個々の記述は地区ごとに行なった。出土量については第1表に呈示した。

i）碗

碗はⅠ類からⅤ類までに大別し、必要に応じて細分した。

Ⅰ類

Ⅰ類は無鎬蓮弁文碗で、弁先を尖らすものと尖らないものがある。口縁形態や文様等でa～cの3種に細分した。

Ⅰ類a：口縁は直口気味で、口唇が尖るタイプの碗である。片切り彫りで弁先を尖らせて、蓮弁を丁寧に描く、蓮弁の中を箆彫りで削り出し、稜を造る。一例のみ出土。

Ⅰ類b：口縁は内彎気味に成形され、僅かに外反する。片切り彫りで弁先を尖らせて、雑に描く。底部資料が2点得られた。

Ⅰ類c：口縁は直口もしくは内彎するタイプの碗である。弁先は尖らず、弁先と蓮弁の線は一致しない。片切り彫りや箆描きで蓮弁を描く。

Ⅱ類

Ⅱ類は線刻の蓮弁文碗で二例のみ得られた。

Ⅱ類：口縁は内彎するタイプの碗である。弁先はなく、箆描きで蓮弁を施す。

Ⅲ類

Ⅲ類は線刻細蓮弁文の碗である。弁先の状況等からa・bの2種類に細分した。

Ⅲ類a：内彎タイプの碗で、弁先は鋸歯状に雑に描き尖らす。蓮弁は弁先よりも太い箆で描く。

Ⅲ類b：Ⅲ類aと同様に内彎タイプの碗である。弁先や蓮弁の間隔はⅢ類aよりも狭くなり、弁先や蓮弁の線も雑になる。見込みに「顧氏」の銘が入るものも含まれる。

Ⅳ類

Ⅳ類はいわゆる雷文帯碗である。

Ⅳ類：口縁に箆描きのその雷文帯を描く。内彎気味の碗である。

Ⅴ類

Ⅴ類は無文の碗で、口縁形態等からa～dの4種類に分類した。

Ⅴ類a：内彎タイプの碗である。

Ⅴ類b：直口タイプの碗で肥厚はない。

Ⅴ類c：玉縁状に肥厚するタイプの碗である。

Ⅴ類d：外反タイプの碗で肥厚はない。

ii）盤

盤は1点のみ得られた。鍔端をつまみ上げる盤である。内面に幅4～5㎜の蓮弁が箆で描かれている。

ⅲ）皿

皿は稜花皿と無文外反皿があり、前者が多い。後者は１例のみ得られた。

稜花皿

口唇部はラマ式蓮弁の弁先形に稜花を刻む腰折皿である。文様は内面にはラマ式蓮弁の弁先に合わせて、２～３本の櫛目文を描き、その直下に刻花文を描いている。

無文外反皿

口縁がきつく外反する無文の皿である。１点のみ出土した。

ⅳ）香炉

香炉も一例のみ得られた。口唇部が凹む寄口口縁で、外面に圏線と凸帯文を施す。

ⅴ）青磁碗底部

底部は施釉範囲で下記のように無文の碗の底部を分類した。有文碗底部は前記した、分類の中に含めてある。

ａ種：全面施釉のもの。

ｂ種：高台内面まで施釉するもの。

ｃ種：高台内面途中まで施釉するもの。

ｄ種：高台外面まで施釉するもの。

第Ⅰ地区　青磁

第Ⅰ地区から出土した青磁は、碗・盤・皿・香炉の４器種であった。以下、各種類ごとに記述を行なう。

ａ）碗

Ⅰ類ｂ

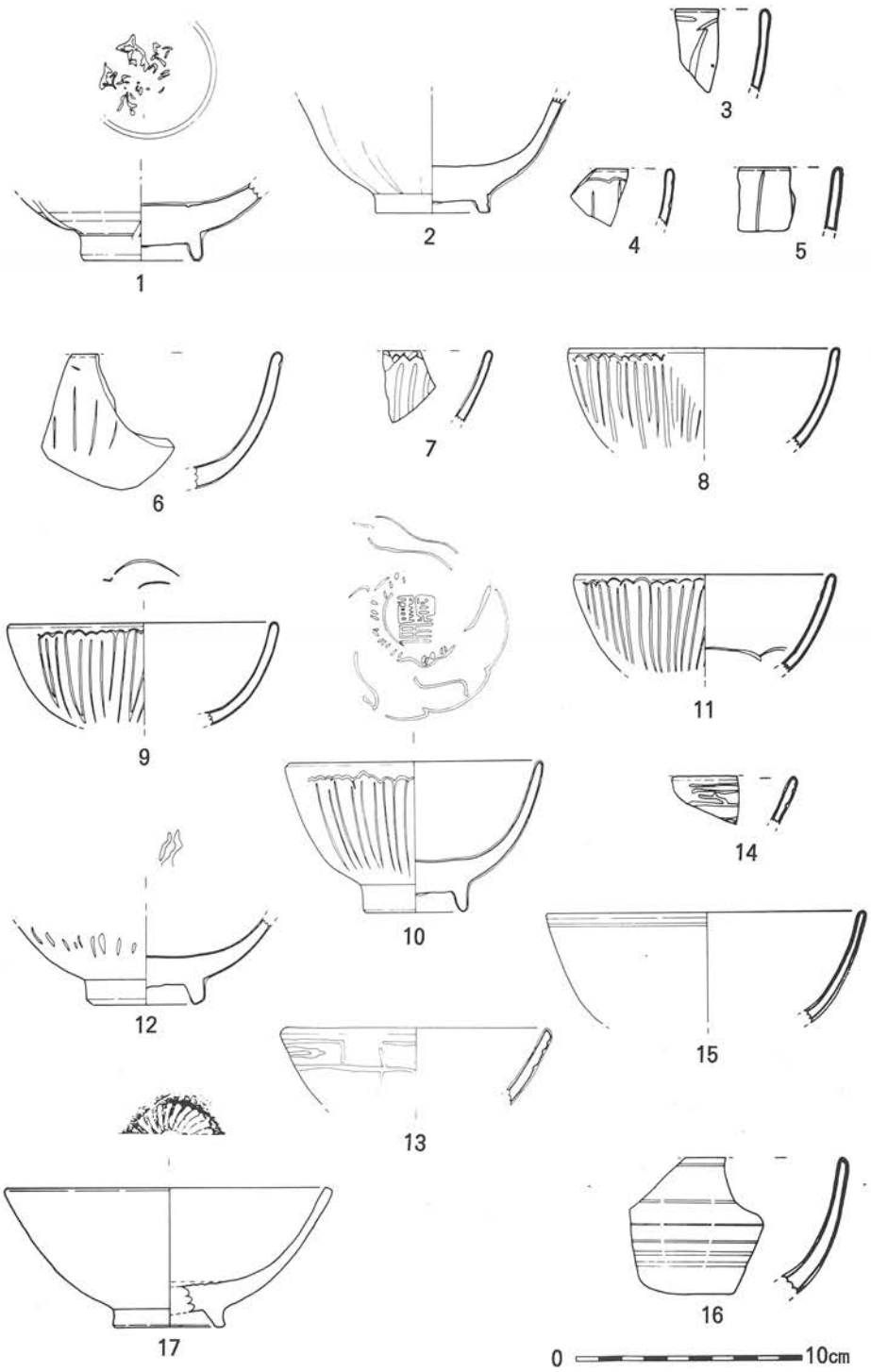
第８図１は高台径5.4cmを測る。外面の高台脇まで片切り彫りで、幅広の蓮弁を描く。内底に圏線と印花花文を施す。釉色は明緑色。全釉後に外底釉を輪状に掻き取る。畳付は研磨され素地が露胎する。素地は灰白色の細粒子。貫入はない。Ｅ－３第２層出土。

同図２は推算された高台径が5.2cmを測る。外面の高台脇まで片切り彫りで、幅の狭い蓮弁を描くが、釉が厚く、失透釉である為、文様がはっきりしない。釉色は淡緑色である。施釉の手法等は同図１と同じである。素地は灰白色の微粒子。貫入はない。Ｅ－３第２層出土。

Ⅰ類ｃ

同図３は外面に片切り彫りによる蓮弁を描く。弁先と蓮弁の間はズレが生じている。釉色は淡黄白色である。素地は淡燈色で、微粒子である。両面に細かい貫入が観られる。Ｃトレンチ第Ⅰ層出土。

同図４は外面に簡描きの蓮弁を描く。弁先は連続的に描かれ、蓮弁とは一致しない。釉色は明緑色。素地は灰白色の微粒子。両面に細かい貫入が観られる。表採資料。



第8図（PL. 12）青磁　碗（Ⅰ類b：1・2、Ⅰ類c：3・4、Ⅱ類：5・6、Ⅲ類a：7、Ⅲ類b：8～12）、Ⅳ類：13・14、Ⅴ類a：15・16

Ⅱ類

同図５は箆描きで、蓮弁のみを描いている。釉色は淡緑色である。素地は灰褐色の細粒子。両面に細かい貫入が観られる。E－３第２層出土。

同図６も箆描きで蓮弁を描く。釉色は淡灰緑色で、失透釉である。素地は淡灰色の微粒子。貫入はない。E－３第２層出土。

Ⅲ類ａ

同図７は箆描きの碗で、弁先を鋸歯状に細く描く。蓮弁は太く描かれるが、弁先とは一致しない。釉色は明緑色である。素地は灰白色の微粒子である。貫入はない。E－３第１層出土。

Ⅲ類ｂ

同図８は推算口径12.2cmを測る。弁先は箆で連続して描く、弁先と蓮弁は一致しない。蓮弁も雑である。釉は明黄緑色である。素地は淡灰白色の微粒子。貫入は荒く、両面に観られる。表採資料。

同図９は口径の推算が12.0cmを求めた資料である。外面の文様は同図８と同じ手法で描かれている。内面胴下部に捻じ花を箆描きする。釉は淡黄緑色。素地は灰白色の微粒子である。貫入はない。B－２表採。

同図10は推算口径11.6cm、器高6.7cm、高台径4.8cmを測る。外面には箆描きの弁先と蓮弁を描く蓮弁は高台際まで描かれている。内底には捻じ花と「顧氏」銘のスタンプを施す。釉は淡緑色で全釉した後、外底釉を輪状に掻き取る。畳付は研磨され、露胎する。素地は灰白色の微粒子。貫入はない。B－３第４層出土。

同図11は推算された口径が11.8cmである。外面には箆描きで弁先と蓮弁を描くが、両者は一致しない。内面の胴下部に捻じ花を描く。素地は灰白色の微粒子。荒い貫入が両面に観られる。B－３第４層出土。

同図12は高台径5.6cmを測った。外面には箆描きの蓮弁が高台際まで施されている。内底に印花文を施す。釉色は明緑色である。釉は畳付まで施す。素地は淡燈色の細粒子である。両面に細かい貫入が観られる。B－２第２層出土。

Ⅳ類

同図13は推算口径12.2cmを求めた。外面に箆描きの雷文を描き、その直下に蓮弁を描いている。釉は淡青緑色である。素地は灰白色の微粒子。貫入はない。E－３第２層出土。

同図14も箆描きの雷文帯碗である釉色は淡緑色。素地は白色の微粒子でもある。貫入はない。E－３第１層出土。

Ⅴ類ａ

同図15は口径の推算が14.3cmを測った。外面の口縁に圏線を一条施す。釉は淡緑色を帯びている。素地は白色の微粒子である。両面に細かい貫入が観られる。E－３第２層出土。

同図16も同図17と同様に口縁に圏線を一条施す。外面は轆轤痕が顕著にみられる。釉色は淡

緑色を帯びる。素地は白色の微粒子。荒い貫入が両面に観られる。E－３第２層。

Ｖ類ｂ

同図17の碗は推算されたサイズが口径14.5㎝、器高6.2㎝、高台径5.0㎝であった。釉は灰緑色の失透釉で高台外面まで施す。内底は釉を掻き取り、花文を印刻する。素地は淡茶色の微粒子。貫入はない。B－３表採。

Ｖ類ｃ

第９図18は口縁が玉縁状に肥厚する碗である。釉色は淡黄緑色を帯びる。素地は淡灰色の粗粒子である。両面に細かい貫入がみられる。E－３第４層出土。

Ｖ類ｄ

同図19は外反タイプの碗の口縁破片で、釉は明緑色を帯びている。素地は淡灰色の細粒子である。両面に荒い貫入がみられる。E－２第２層出土。

ｂ）青磁碗底部

ｂ種

同図20は高台径5.8㎝を測る。内底には不鮮明な印花花文を施す。釉は明緑色で、全釉した後に外底釉を掻き取っている。畳付は研磨されている。素地は灰色の粗粒子。細かい貫入が両面に認められる。E－３第３層出土。

同図21は高台径が5.8㎝と推算された資料で、内底に圏線と印花文を施している。釉は明緑色で、全釉後に外底面を掻き取っている。素地は白色の微粒子である。両面に荒い貫入がみられる。E－３第２層出土。

ｄ種

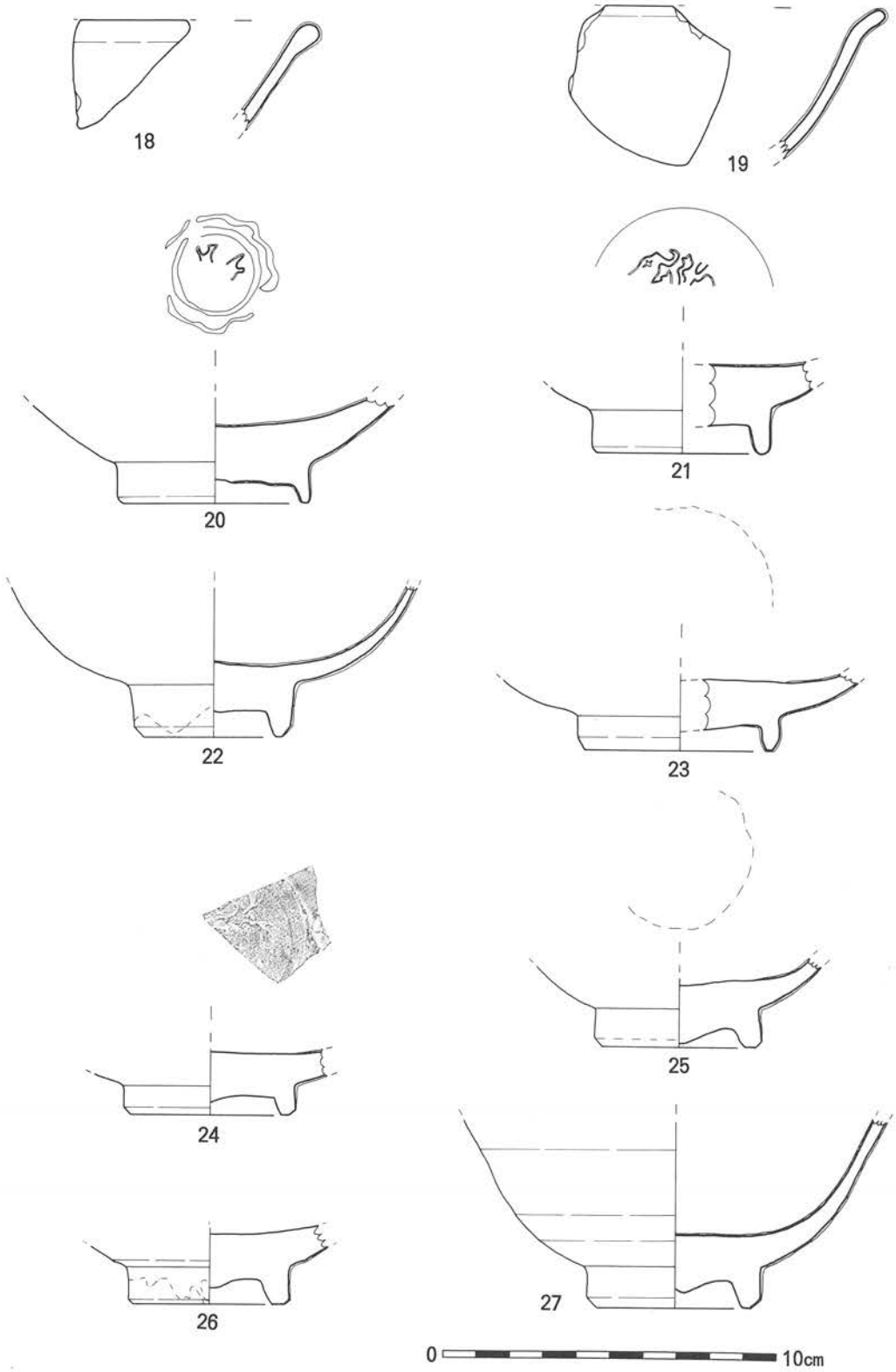
同図22は高台の直径が4.8㎝を測った。釉は淡灰緑色で、高台外面まで施釉する。素地は灰色の粗粒子である。畳付は研磨されている。貫入はない。B－３第３層出土。

同図23は高台の推算径が6.2㎝を測った。大振りの碗の底部である。釉は淡黄緑色を帯びている。内底釉は円形状に掻き取りされる。外面の釉は高台外面で止まっているが部分的に外底まで釉垂れがみられる。畳付は研磨される。素地は白色の微粒子である。細かい貫入が両面にみられる。E－３第４層出土。

同図24は高台径が5.1㎝と推算された。釉は明黄緑色である。外面の釉は高台外側まで施されている。内底釉は掻き取りがなされ、印花文の刻印が施されている。畳付は研磨されている。素地は白色の微粒子である。貫入はない。B－３第４層出土。

同図25は高台径が5.0㎝と求められた。釉は透明なガラス質で淡緑色を帯びている。内底釉を掻き取っている。畳付は研磨されている。素地は淡灰白色の微粒子である。細かい貫入が両面にみられる。B－１第１層出土。

同図26は高台径4.8㎝を測った。釉色は明黄緑色を帯びる。素地は灰色の粗粒子である。貫入はない。E－３第２層出土。



第9図（PL. 13）青磁　碗（V類c:18、V類d:19、b種：20•21、d種:22〜27）

同図27は高台径が5.2cmと求められた。外面には明瞭な轆轤痕がみられる。釉色は淡緑色を帯びている。釉の一部は高台内面まで垂れている。高台の成形は雑である。畳付の一部に研磨が認められる。素地は灰色の細粒子である。両面に細かい貫入がみられる。Cトレンチ第1層。

c）盤

第10図28は盤の口縁破片で、鍔端部をつまみ上げる。内面の口•胴部の屈曲部には明瞭な稜がみられる。蓮弁は幅4～5mmの箆で描かれているが単位は判らない。釉は淡緑色を帯びている。素地は灰白色の微粒子である。貫入はない。E－3第4層出土。

d）皿

稜花皿

同図29は口径の推算が17.7cmを測った皿である。口唇部はラマ式蓮弁の弁先形に稜花を刻む。内面には2本単位の櫛目文と刻花文を描いている。釉は淡灰緑色を帯びている。素地は灰白色の細粒子である。両面に細かい貫入がみられる。E－3第3層出土。

同図30も29と同様に口唇部を成形する。推算口径は15.6cmを測る。内面には3本単位の櫛目文を描き、その直下に刻花文を描いている。釉は淡灰緑色である。素地が灰色の細粒子。細かい貫入が両面にみられる。B－3第1層出土。

同図31は復元出来た資料で、口径11.5cm、器高2.5cm、高台径4.3cmと推定された。両面には文様はなく、口唇部のみに稜花を刻んでいる。釉色は透明な淡青色で、高台外面まで施す。内底釉は円形状に掻き取っている。素地は灰白色の細粒子である。貫入はない。E－3第2層。

同図32も31と同様に口唇部のみに稜花を刻んでいる。31よりも腰部の屈曲はきつい。釉は淡灰色である。素地は灰色の細粒子である。貫入はない。E－3第2層出土。

同図33も口唇部に稜花を刻む。釉は淡青緑色を帯びている。素地は灰色の細粒子である。荒い貫入が両面に認められる。E－3第1層出土。

同図34は稜花皿の底部で、高台径が4.8cmを測った。釉は明青色で、高台外面まで施している。素地は灰色の細粒子である。貫入はない。E－3第2層出土。

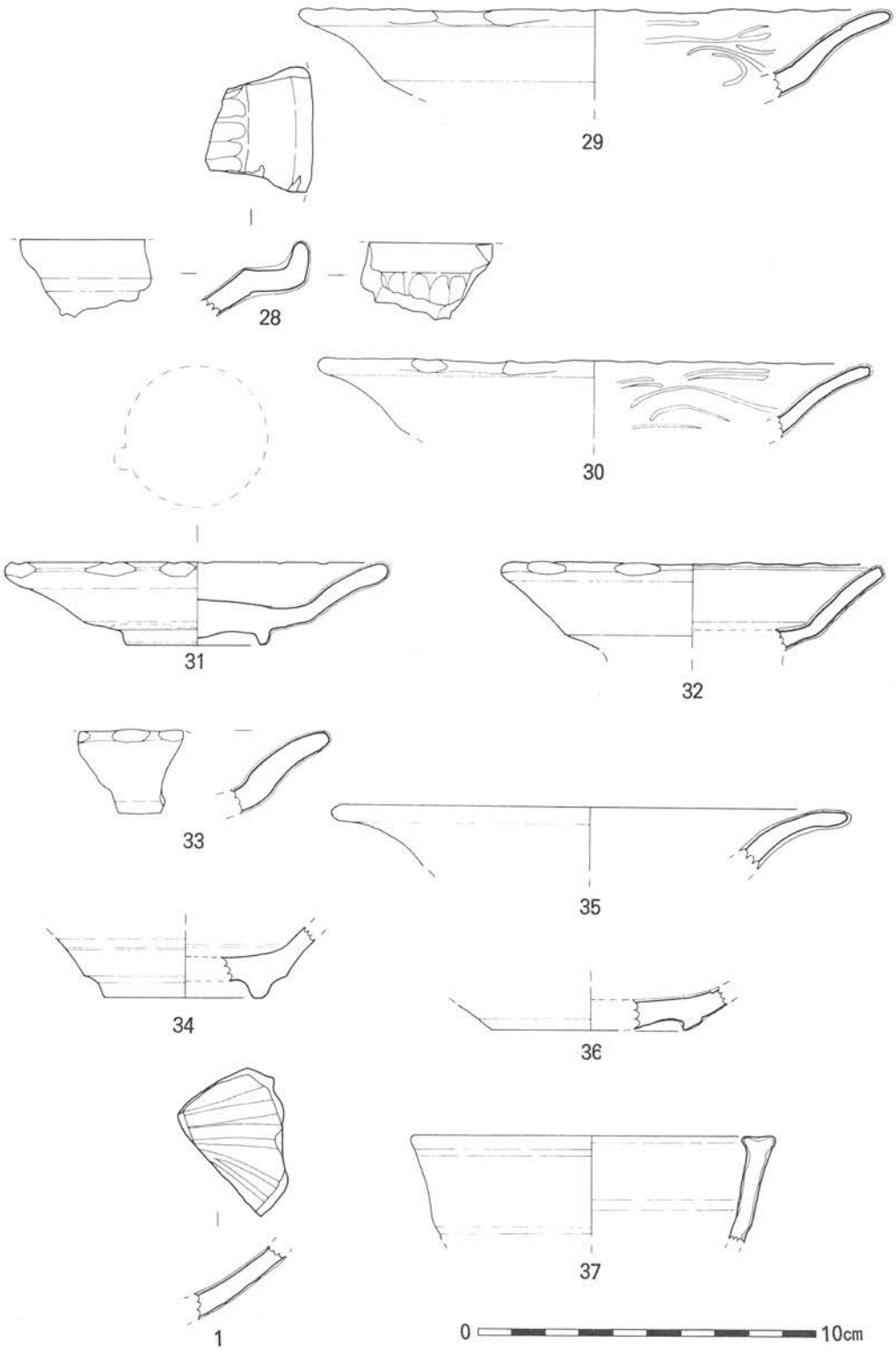
無文外反皿

同図35は外反のきつい無文皿で、口径が15.9cmを測った。釉は明緑色である。素地は白色の細粒子である。荒い貫入が両面にみられる。E－3第3層出土。

同図36は皿の底部破片である。推算された高台径は5.4cmであった。高台の造りは碁笥底状に成形されるが、高台外面を僅かに造り出している為、高台の状況から盤の底部の成形と共通している。内面には箆による蓮弁とみられる文様があるが判然としない。盤の底部になる可能性もある。釉色は透明な淡黄緑色で、外底の一部まで釉が及んでいる。素地は白色の細粒子である。貫入は内面のみ荒い貫入がみられる。E－3第4層。

e）香炉

同図37は口径が10.9cmと求められた香炉の口縁破片である。口唇部は僅かに凹む寄口口縁で



第10図（PL. 14）青磁・青白磁　盤:28、皿（稜花皿:29・30・32～34、無文外反皿35、底部:36）・香炉：37、青白磁　鉢か皿: 1

ある。外面の口縁に圏線、胴部に凸帯文を施す。釉は透明な淡青色で内面の胴中央まで施している。素地は白色の微粒子である。

小　結

第Ⅰ地区の青磁はBトレンチの第4層（最下層）で、碗のⅢ類bが得られている。このタイプの中には「顧氏」銘入りのものが得られている。この種の「顧氏」銘入りの碗は沖縄大学学生文化協会[註1]による調査で、本遺跡から採集されている。他に与那原遺跡[註2]や西表ピニシ海岸[註3]、石垣市クード[註4]などで得られている。この「顧氏」銘を持つ碗については、亀井明徳氏[註5]は15世紀後半をさかのぼらないことを指摘している。従って、本地区は15世紀後半を遡ることは可能性としてはない。他のⅠ類b・Ⅰ類c・Ⅳ類等は伝世品である可能性が高い。

盤および稜花皿の出土例はカンドウ原遺跡[註6]・慶田崎遺跡[註7]・成屋遺跡[註8]などがある。香炉の寄口口縁タイプの類例は与那原遺跡[註9]で得られている。

青磁碗底部のd類中には佐敷タイプ[註10]と仮称される資料が含まれている（第9図23・24）。残念ながら口縁は確認出来なかった。佐敷タイプの碗の出土例は、与那原遺跡[註11]で報告されている。

註

註1　沖縄学生文化協会『郷土』第8号　座間味島・西表島調査報告　沖縄大学　1970年。

註2　金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会　1988年。

註3　知念勇ほか『沖縄出土の中国陶磁（上）』先島編　沖縄県立博物館　1982年。

註4　註3と同じ。

註5　亀井明徳　「日本出土の明代青磁碗の変遷」鏡山先生古稀記念古文化論攷　1980年。

註6　大城慧ほか『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註7　金武正紀・大田宏好『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会　1986年。

註8　青山学院大学成屋遺跡調査団『西表・成屋遺跡発掘調査概報』青山史学第9号　1987年。

註9　註2と同じ。

註10　当真嗣一ほか『佐敷グスク』佐敷町教育委員会　1980年。

註11　註2と同じ。

ロ．青白磁

青白磁の鉢もしくは皿の資料が１点得られた。第10図１に図化した胴部である。釉色は薄い水色である。内面には箆描きによる蓮弁が描かれている。素地は白色の微粒子である。貫入はない。B－１第２層の出土（第１表）。

青白磁の出土例は宮古・八重山地域では、宮古城辺町野城遺跡[註1]・高腰城跡[註2]について三例目である。特に八重山地域では初めての発見であり貴重である。野城遺跡の青白磁は合子の蓋であり、所属時期については13～14世紀[註3]に比定されている。青白磁の出土例は県内では少なく、玻名城古島遺跡[註4]・阿波根古島遺跡[註5]などの３遺跡でしか報告されていない。

本遺跡の青白磁の所属時期は、特定しがたい要素が多い為、類似資料の増加等をもって決定すべきであろうと考える。出土地点の状況から伝世された可能性も高いようである。

註

註１　盛本勲『大牧遺跡・野城遺跡』城辺町教育委員会　1987年。

註２　盛本勲・手塚直樹『高腰城跡』城辺町教育委員会　1989年。

註３　金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」沖縄県立博物館紀要　第15号
沖縄県立博物館　1989年。

註４　金城亀信ほか『具志頭村の遺跡』具志頭村教育委員会　1986年。

註５　金城亀信・長嶺均ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会　1990年。

第1表　青磁および青白磁出土状況

地区	層序	器種	碗											盤	皿		香炉	無文碗				皿		碗		壺胴部	青白磁	合計
			I			II	III		IV	V					稜花	外反		底部				口縁	底部	胴部	底部			
			a	b	c		a	b		a	b	c	d					a	b	c	d							
第I地区	表採				1			2			1		4						1	1				11				21
	第I層				2		1	3	1				1	1	4			1		1	2			9	1			27
	II層			2		3		7	1	2		1	1	1	10			3	1	2	3			10	2		1	50
	III層							4							3	1	1	2			1	1		6		1		20
	IV層							5		1		1	1	1	2		1	3			2		1	4				22
	不明																											0
小計			0	2	3	3	1	21	2	3	1	2	7	3	19	1	2	9	2	4	8	1	1	40	3	1	1	140
合計			5				22			13					20			23				2		43				
第II地区	表採																											0
	第I層							1		1		1	1											1				5
	II層		1												1													2
	III層																											0
	IV層																											0
	不明																											0
小計			1	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	7
合計			1				1			3					1			0				0		1				
拝所内	表採			1																1								2
	第I層					1					1							1										3
	II層																		1	1	1			1				4
	III層																											0
小計			0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	1	1	2	1	0	0	1	0	0	0	9
合計			1				0			1					0			5				0		1				
合計			1	3	3	4	1	22	2	4	2	3	8	3	20	1	2	10	3	6	9	1	1	42	3	1	1	156
			7				23			17					21			28				2		45				

第2表　白磁・赤絵・瑠璃釉・タイ陶器出土状況

地区・層序＼器種		碗					皿					壺	器種不明	碗		赤絵	瑠璃釉	タイ陶器	合計
		Ⅰ	Ⅱ		底部		抉入	燈明	稜花	底部				口縁	胴部				
			a	b	a	b				イ	ロ								
第Ⅰ地区	表採				1										1				2
	Ⅰ層					1				1	1		1		1	1	1		7
	Ⅱ層		1	1			2	1	1			1	1		2			1	11
	Ⅲ層																		0
	Ⅳ層	1											1	1					3
	不明		1																1
小計		1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	3	1	4	1	1	1	24
合計			3		2		4			2									

第3表　伊万里焼出土状況

層序＼種類		染付		合計
		碗	瓶	
第Ⅰ地区	表採	3		2
	Ⅰ		2	2
	Ⅱ		4	4
合計		3	6	9

第4表　近代陶器（明治～昭和）出土状況

層序＼種類		碗	小杯	皿	蓋	計
第Ⅰ地区	表採	4		3		7
	Ⅰ	10	1		3	14
	Ⅱ	1	3			4
合計		15	4	3	3	25

ハ．白磁

白磁はⅠ地区のみでしか出土していない（第２表）。器種は碗・皿・壺の３器種であった。以下、分類概念と記述を行なう。

ａ）碗

碗は口縁の形態等からⅠ・Ⅱ類までに分類し必要に応じて細分した。

Ⅰ類

Ⅰ類は外反する無文碗で、外面の轆轤痕が特徴として把握できる。一例のみ出土した。

Ⅱ類

Ⅱ類は外傾し、直口する器形が考えられる。口縁形態等からａ・ｂの二種類に細分した。

Ⅱ類ａ：口縁内面に明瞭な稜を残し、口唇外端が尖る。

Ⅱ類ｂ：口唇は丸味を帯び、全体的には逆「ハ」の字状に直口する。外面は轆轤痕が顕著にみられる。

ｂ）碗底部

底部は２点得られた。便宜的にａ・ｂの２種類に分けた。

ａ種：蛇ノ目状の高台で、胴下部にカンナ目が認められる。釉は胴下部まで施す。

ｂ種：高台の畳付の幅は狭く、高台が高く、外底の削り出しも深い。畳付を除き施釉される。

ｃ）皿

皿には抉入高台皿・燈明皿・稜花皿がある。

抉入高台皿：直口口縁タイプの浅皿で、高台を４箇所抉り取っている。

燈明皿：平底の皿で内彎タイプの浅皿。内面のみ釉を施す。口唇は口禿げである。

稜花皿：口唇部は弁先形に稜花を刻む。内底釉を輪状に掻き取る。

ｄ）皿底部

皿底部は施釉の状況や成形等からイ、ロの２種類に分けた。

イ種：釉は外面の高台脇まで施す。

ロ種：釉は畳付を除き、全釉する。外反するタイプの皿が予想される。

ｅ）壺

壺は二例のみ出土した内１点は胴部破片である。口縁の内外端を面取りして成形する。

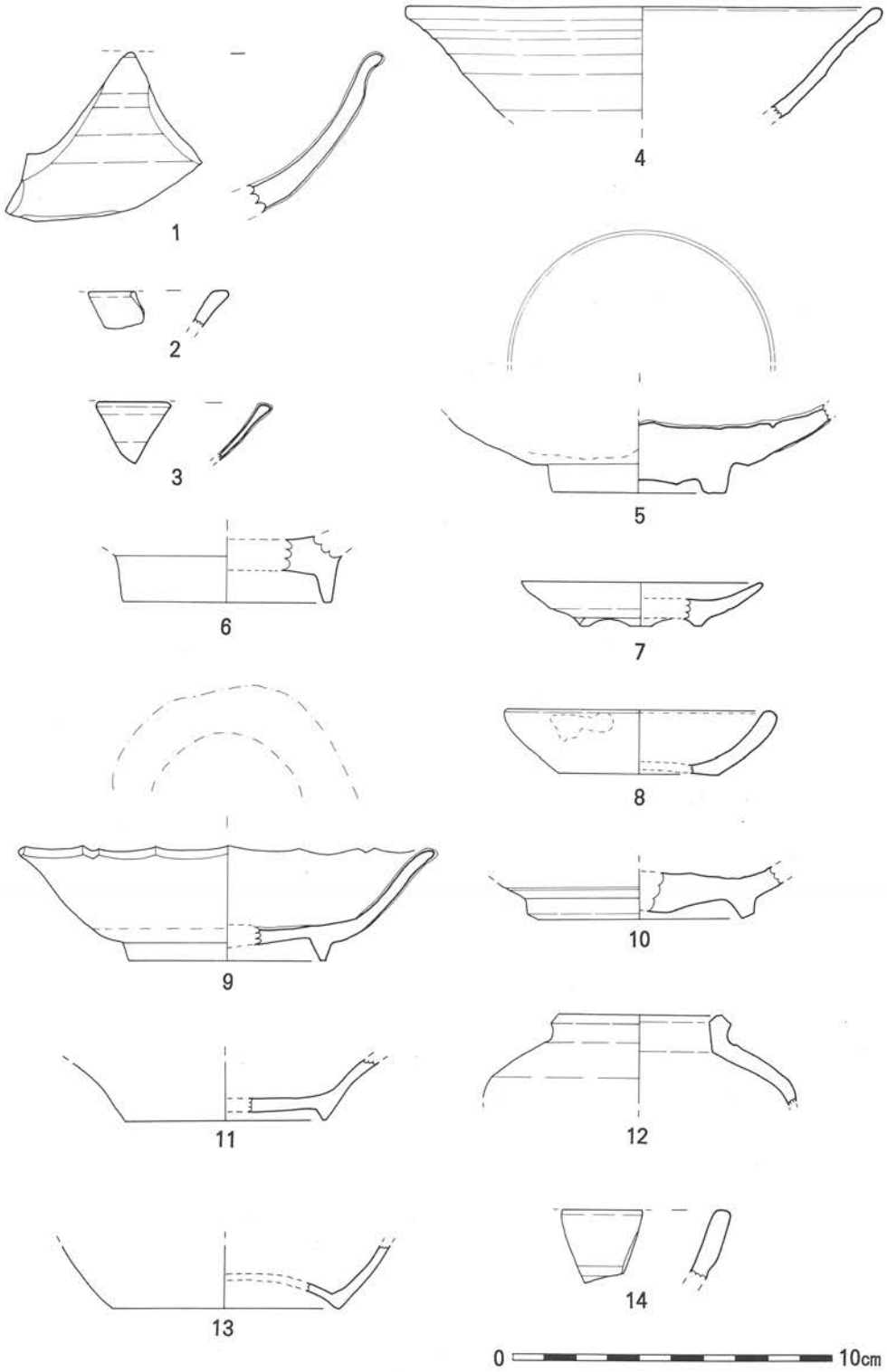
ｆ）器種不明

器種不明として取り扱ったのは、器形が特定出来ない資料である。底部と口縁資料が各１点づつ得られた。底部は壺としても考えられる。口縁は香炉の可能性もあるが、類例資料がない為、資料の増加をもって判断できるであろう。

ｇ）碗

Ⅰ類

第11図１は外反するタイプの碗である。外面には轆轤痕が顕著にみられる。釉は淡灰白色で



第11図（PL. 15）白磁　碗（Ⅰ類: 1、Ⅱ類a: 2・3、Ⅱ類b: 4、底部a種: 5、底部b種: 6）・皿（抉入高台皿7、燈明皿8、稜花皿9、底部イ類:10、底部ロ類:①）・壺12、器種不明13・14

胴下部まで施す。素地は白色の微粒子である。貫入はない。E－3第4層出土。

Ⅱ類a

同図2・3は口縁内面に明瞭な稜を残し、口唇外端が尖り、突出する。釉色は2が淡黄白色で、3は淡灰色を帯びている。素地は2が白色の微粒子。3は灰色の微粒子である。両者とも内外面に細かい貫入がみられる。2はE－3第2層の出土。3はE－3表採。

Ⅱ類b

同図4は推算口径が15cmを測る。口縁及び胴部の状況から逆「ハ」の字状に外側に開く器形が考えられる。外面には轆轤痕がみられる。釉は淡灰白色である。素地は白色の微粒子である。細かい貫入が両面にみられる。E－3第2層出土。

h）碗底部

a種

同図5は高台径が5.3cmを測る。内底に圏線を廻らす。白色の釉を胴下部まで施す。高台は幅広の蛇ノ目状高台である。外底の削り出しが浅い。胴下部にカンナ目がみられる。素地は淡燈色の微粒子である。両面に細かい貫入がみられる。表採資料。

b種

同図6は高台径が6.7cmと推算された。釉は白色で、畳付を除き施されている。畳付は研磨されている。高台は高く、外底は平坦である。素地は白色の微粒子。貫入はない。Cトレンチ第1層出土。

i）皿

抉入高台皿

同図7の復元されたサイズは、口径7.6cm、器高1.4cm、高台径4.0cmである。釉は畳付を除き白色の釉が施されている。内底に重ね焼きの目痕が観察される。素地は白色の微粒子である。貫入はない。E－3第2層出土。

燈明皿

同図8は平底の皿である。推算されたサイズは口径8.4cm、器高2cm、底径5cmである。淡灰色の釉を内面のみ施す。口唇および外面は露胎する。素地は灰白色の微粒子である。内面に細かい貫入が認められる。E－3第2層出土。

稜花皿

同図9は口唇部を弁先形に成形する外反気味の稜花皿である。復元されたサイズは、口径が13.2cm、器高3.6cm、高台径6.2cmである。淡青白色の釉を用いている。外面は高台際まで施す。内底は蛇ノ目状に掻き取っている。畳付は若干、研磨される。素地は白色の微粒子である。貫入はない。E－2第2層出土。

j）皿底部

イ類

第11図10の推算された高台径は7.2㎝であった。釉は淡黄白色で、高台際まで施されている。内底は全て掻き取られ露胎する。素地は淡黄白色の微粒子である。貫入はない。E－3第1層出土。

ロ類

同図11は外反する皿の底部とみられる。推算高台径は6.3㎝であった。釉は白色で畳付を除き施されている。素地は白色の微粒子である。貫入はない。B－1第1層出土。

k）壺

同図12は口縁の内外端を面取りする。口径は5.6㎝が求められた。口縁は「く」の字状に肥厚する。内面には成形の際に生じた陶土の削り粕が付着する。釉は淡灰白色で両面に施されている。素地は灰白色の微粒子である。貫入はない。E－3第2層出土。

ℓ）器種不明

同図13は底径が7㎝と求めることができた。薄手の資料で、底面は揚げ底状となる。白色の釉を底部近くまで施す。内面は全釉される。素地は白色の微粒子。貫入はない。E－3第1層出土。

同図14は肥厚口縁である。釉色は淡灰白色で、両面に施されている。素地は淡黄白色の微粒子である。両面に細かい貫入が観察できる。B－3第4層出土。

小　結

白磁の出土は第Ⅰ地区に限定されている。白磁碗のⅠ類とした外反する碗と底部のa種は、カンドウ原遺跡[註1]・慶田崎遺跡[註2]などで出土している。Ⅰ類の種類については金武正紀氏は慶田崎遺跡の報告で次のように述べている。「Ⅲa　やや厚手碗で、ビロースクタイプが外反タイプへ変化したものと考えられる。…中略…今帰仁城跡では白磁碗の中で、このタイプの碗が最も多く検出されている[註3]」。本遺跡のⅠ類・慶田崎遺跡[註4]のⅢa・今帰仁城跡Ⅲ類[註5]は、森田勉氏のC群[註6]中に分類されたものであり、一応15世紀前後として位置付けられている。今帰仁城跡のⅢ類は、調査者の金武正紀氏によると次のような時期を設定している「山北（今帰仁）王が中国交易を行った1383～1415年を中心に将来されたと考えられる。」今帰仁城跡のⅢ類（森田氏のC群中の一部分）は時期が細かく設定されたものとして考えたいところである。

抉入高台皿の類似として、名蔵海岸[註8]・慶田崎遺跡[註9]・成屋遺跡[註10]などで出土している。15～16世紀として考えられている[註11]。

燈明皿は、宮古・八重山地域では報告例が今日までなかった資料である。沖縄本島の類例として今帰仁城跡[註12]がある。本資料は小破片で媒の付着はなかったが、器形などの諸特徴から一応燈明皿として取り扱った。金武氏の編年[註13]では15～16世紀に位置付けられている。

皿の口縁には、森田勉[註14]氏編年のD類が含まれ、16世紀に位置付けられる資料もある。

註

註1　大城慧・金城亀信・比嘉春美『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註2　金武正紀・大田宏好『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会　1986年。

註3　註2に同じ。

註4　註2に同じ。

註5　金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註6　森田勉「14〜16世紀の白磁の分類と編年」貿易陶磁研究　NO.2　日本貿易陶磁研究会　1982年。

註7　金武正紀「沖縄の中国陶磁器」考古学ジャーナル6月号　NO.320　ニュー・サイエンス社　1990年。

註8　知念勇ほか　『沖縄出土の中国陶磁（上)』先島編　沖縄県立博物館　1982年。

註9　註2に同じ。

註10　青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学第9号　1987年。

註11　註7に同じ。

註12　註5に同じ。

註13　註7に同じ。

註14　註6に同じ。

ニ．褐釉陶器

褐釉陶器は、瓶・水注・壺・洗の４器種が確認された。特に壺が圧倒的に多く出土している。

分類に関しては口縁形態等を基にして実施した。個々の記述は、地区ごとに行った。ここでは分類の概念のみを記述する。

１）瓶

瓶の底部とみられる資料が一例のみ得られた。外面に圏線と蓮弁文を線刻する。高台を有する。

２）水注

水注の口縁として考えられる資料が一点出土している。口縁は玉縁状に肥厚し、首部はほぼ垂直に近い状態となっている。

３）壺

壺は口径や口縁形態等が豊富であり、Ⅰ～Ⅷ類までに分類し必要に応じて細分した。

Ⅰ類

Ⅰ類は口縁形態などからａ・ｂの２種に細分した。

Ⅰ類ａ：口縁を玉縁状に肥厚させる。口・頸部の状況から「怒り肩」の肩部が予想できる。

Ⅰ類ｂ：口縁を玉縁状に肥厚させ、肩部は「ナデ肩」のタイプである。

Ⅱ類

Ⅱ類も玉縁状に口縁を肥厚させるが、頸部がハの字気味に内側に若干、締る。肩部は「怒り肩」のものが推定される。

Ⅲ類

Ⅲ類はナデ肩のタイプが推定され、口縁の肥厚形態からａ・ｂの二種に分けた。

Ⅲ類ａ：口縁の縦断面が隅丸方形状を呈すものである。

Ⅲ類ｂ：口縁の縦断面が梯形状を呈し、内側に内傾する。縦耳を貼り付ける。

Ⅳ類

Ⅳ類はⅢ類と同様にナデ肩タイプで、口縁形態からａ・ｂの２種に分類した。

Ⅳ類ａ：口縁を三角形状に肥厚させ、口唇を尖らす。

Ⅳ類ｂ：口縁はⅣ類ａよりも肥厚部を強く、突出させる。内傾気味の壺である。

Ⅴ類

Ⅴ類は怒り肩のタイプで、口縁形態からａ・ｂの２種に細分した。

Ⅴ類ａ：口唇は幅広で、口縁はフの字状になり肥厚する。また、口縁内面が肥厚する。

Ⅴ類ｂ：口唇は丸味を帯び、三角形状に口縁が肥厚し、口縁内面が突出するものとそうでないものがある。

Ⅵ類

Ⅵは三角形状に肥厚させて、肥厚部に稜をつくる。口縁内面も僅かに肥厚させる。

Ⅶ類

Ⅶ類は外反のきつい壺で、口唇の両端をつまみ出して突出させる。

Ⅷ類

Ⅷ類は肥厚しない外反口縁の壺で、縦耳を貼付ける。

4）茶入れ壺

茶入れ壺の口縁・胴部・底部が各一点づつ出土している。

5）壺胴部

壺胴部は耳が貼付けられたものや大型の胴部片を図化した。耳には縦耳と横耳があり、便宜上、前者をイ類、後者をロ類とした。

6）壺底部

底部は立ち上がりの形状からⅠ～Ⅲに分類した。必要に応じて細分した。

Ⅰ類

Ⅰ類は底面からほぼ直線的に立ち上がり胴部へ移行する。

Ⅱ類

Ⅱ類は底面からの立ち上がりで僅かにくびれるものと外反するものがある。前者をⅡ類ａとし、後者をⅡ類ｂとした。

Ⅲ類

Ⅲ類は底部近くの破片であるが、釉や素地が他のもの異質である為、独立させた。

7）洗底部

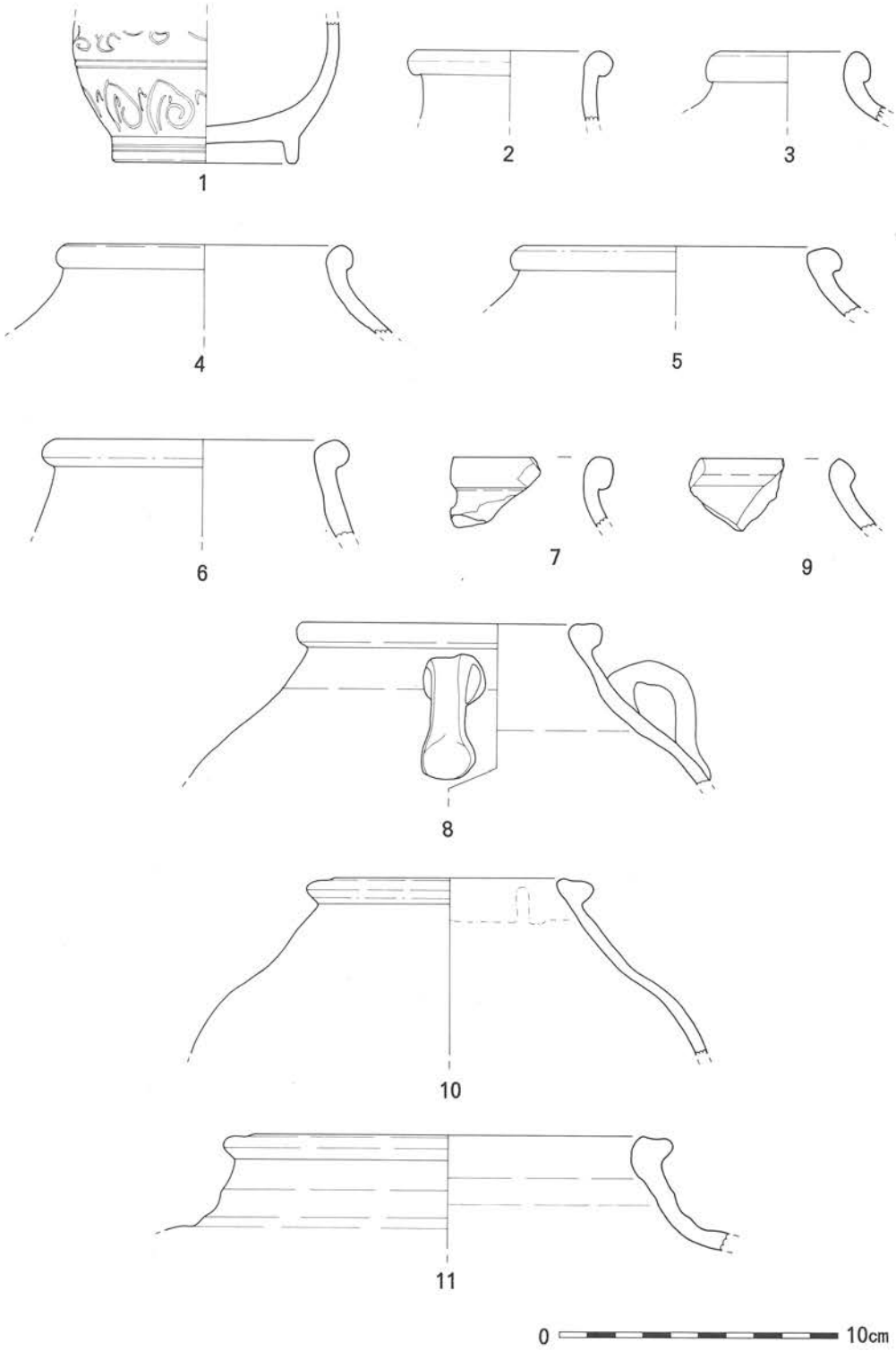
洗の底部が１点のみ得られた。内面に釉を施している。

第Ⅰ地区　褐釉陶器

第Ⅰ地区からは、瓶・水注・壺・洗が出土した（第５表）。特に壺が圧倒的に多い。以下、分類に従って記述する。

1）瓶

第12図１は高台経6.8cmを測る。外面の文様は全て、線刻で描かれ高台外面に圏線を施し、その直上に蓮弁文を描く、蓮弁の上には圏線と唐草文を描いている。釉は２色用いている。胴部から高台外面までは透明な茶褐色を施し、外底面には透明な明緑色の釉を掛けている。内面は露胎する。素地は淡燈色の細粒子で、硬質である。貫入はない。B－３第３層出土。16世紀代。



第12図（PL. 16）褐釉陶器　瓶: 1、水注: 2、壺（Ⅰ類ａ: 3、Ⅰ類ｂ: 4・5、Ⅱ類: 6、Ⅲ類ａ: 7・8、Ⅳ類ａ: 9、Ⅳ類ｂ:10、Ⅴ類ａ:11）

2）水注

同図2は口径の推算が7.4cmを求めた。釉は茶黒色でも両面に施されている。素地は灰褐色の細粒子で、白色鉱物を少量混入させる。貫入はない。Bトレンチ第1層。

3）壺

Ⅰ類a

同図3は推算口径5.9cmを測った。釉は濃褐色で外面から口縁内面まで施す。貫入はない。素地は淡茶色で白色鉱物を混入させる。貫入はない。Cトレンチ第1層出土。

Ⅰ類b

同図4は推算口径が10cmを測った。釉は茶褐色で、口唇の外端から下に施釉する。素地は淡灰色の細粒子で、白色鉱物や有色の鉱物を混入させる。外面に非常に細かい貫入がみられる。E－3第2層出土。

同図5は推算口径が11cmを求めた。釉は濃茶色で、口唇外端から下に施す。素地は淡燈色の細粒子である。素地に白色鉱物を混入させる。貫入はない。Cトレンチ第1層出土。

Ⅱ類a

同図6は口径の推算が10.8cmと求められた。透明な黄茶色の釉を肥厚帯中央から下に施している。素地は淡黄白色の細粒子で、白色の鉱物を混入させる。外面に非常に細かい貫入がみられる。E－3第2層出土。

Ⅲ類a

同図7は口縁の小破片である。釉は濃茶色で両面に施す。素地は淡燈色の細粒子で、白色の鉱物を混入させる。貫入はない。E－2第2層出土。16世紀代。

Ⅲ類b

第12図8は口径の推算が10.8cmを測る資料である。縦耳を貼付けるが個数は不明である。口唇と胴上部に重ね焼きの目痕が観察される。釉は茶褐色で口唇と口・胴部に施されている。素地は橙白色の細粒子で、白色鉱物を少量混入させている。貫入はない。E－1第2層出土。15世紀代。

Ⅳ類a

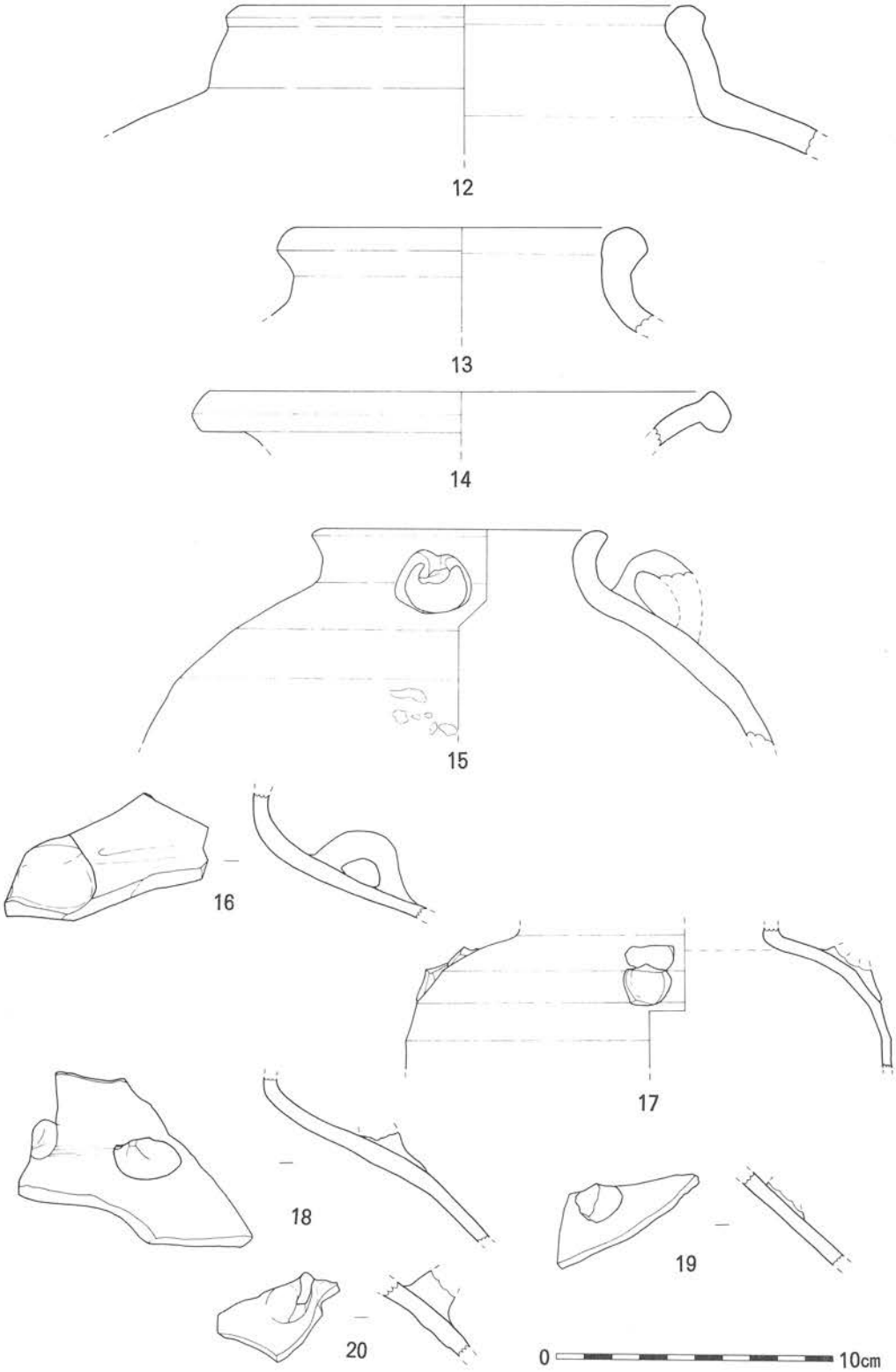
同図9は口縁の小破片である。釉は淡茶色で肥厚帯中央から下に施す。素地は淡橙色の微粒子で白色鉱物を少量混入させる。貫入はない。E－3第4層出土。

Ⅳ類b

同図10は推算口径が10.8cmを測った。口唇に目痕がみられる。釉は淡黒色で口唇と口縁内面を除いて施釉されている。素地は灰色の微粒子である。貫入はない。E－3第2層出土。

Ⅴ類a

同図11は口径が16.2cmと推算できた資料である。釉は口唇を除いて黄茶色の釉が施されている。素地は灰白色の細粒子で、白色鉱物を少量混入させる。貫入はない。E－1第1層。16世



第13図（PL. 17）褐釉陶器　壺（Ⅴ類ｂ:12、Ⅵ類:13、Ⅶ類:14、Ⅷ類:15）・
壺把手イ類:16•17、ロ類、18〜20

紀代。

Ｖ類ｂ

第13図12は口径の推算が17.4cmを求めた。釉は濃茶色で口縁内面から外面まで施す。素地は灰色の細粒子で白色鉱物を多量に混入させる。貫入はない。Ｂ－２第１層出土。15世紀代。

Ⅵ類

同図13は口径推算で13.4cmを測った。釉は淡黄緑色で口唇から外面に施している。素地は灰色の粗粒子で多量の白色および黒色の鉱物を混入させる。貫入はない。Ｅ－２第２層出土。

Ⅶ類

同図14は推算口径が19.7cmを測る。釉は二度掛けする。下地には鉄釉を全釉した後に黄緑色の釉を口縁内面に施している。素地は濃紫色の微粒子で、鉱物の混入はない。Ｅ－３第３層出土。

Ⅷ類

同図15は縦耳を貼付けた外反壺で、口径は10.8cmが求められた。頸下部は平行叩きを施した後に透明な黄茶褐色の釉を両面に施している。素地は淡黄白色の粗粒子である。多量の白色鉱物を混入させている。内面胴部に当て具の痕跡があるが形状などが判らない。胴中央に重ね焼きの目痕が認められる。貫入はない。Ｂ－３第３層出土。15世紀代。

４）胴部資料（有耳壺）

イ類

同図16は縦耳を貼付た資料である。釉は外面が乳白色、内面は鉄釉の上に乳白色の釉が垂れている。乳白色の釉は白磁の釉と類似したものを 使用している。素地は淡茶色の細粒子で、白色鉱物を混入させている。貫入はない。Ｅ－３第２層出土。

同図17は胴の最大径が17.7cmと推算された。これも縦耳で、外面には轆轤痕が顕著に観察できる。釉は濃茶色で外面にのみ施されている。素地は淡黄白色の細粒子で、白色鉱物が少量含まれている。貫入はない。Ｅ－２第２層出土。15世紀代。

ロ類

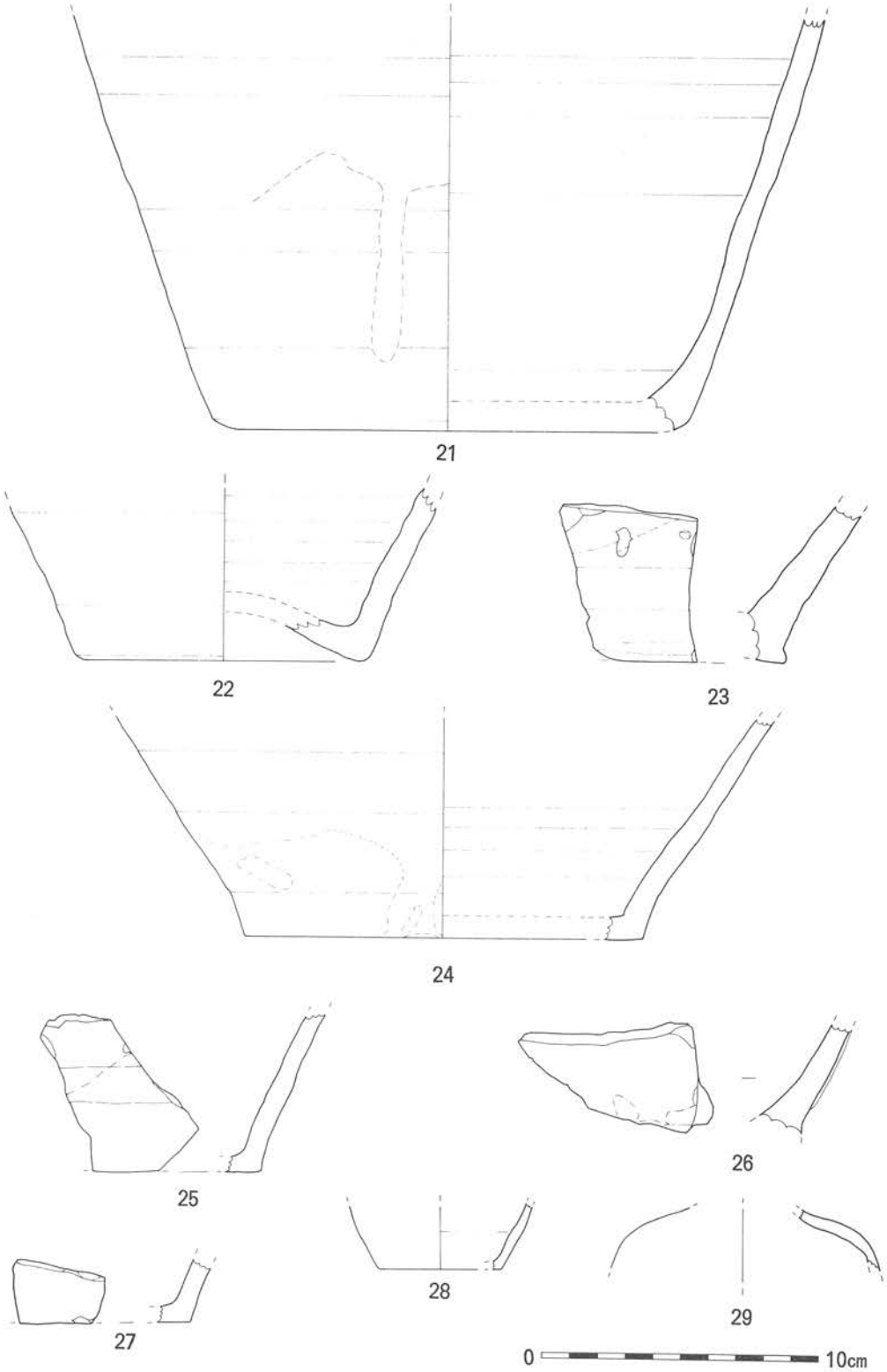
同図18は胴上部に２本の圏線を廻らす。釉は淡黄緑色で外面に施す。内面は頸下部に釉が垂れている。素地は灰褐色の細粒子で白色の鉱物と有色鉱物を少量含む。貫入はない。Ｅ－３第２層出土。16世紀代。

同図19は横耳を貼付けた胴部片で、淡茶色の釉を外面にのみ施す。素地は灰白色の粗粒子で、白色鉱物を多量に含んでいる。貫入はない。Ｅ－３第３層出土。

同図20は黒色の釉を外面に施している。素地は淡橙色の細粒子、白色鉱物が微量に混入する。貫入はない。Ｅ－２第２層出土。

５）壺底部

Ｉ類



第14図（PL. 18）褐釉陶器　壺底部（Ⅰ類:21•22、Ⅱ類ａ:23、Ⅱ類ｂ:24〜26）•洗底部27•茶入れ壺28•29

第14図21は推算底径が16cmを測った。釉は下地に鉄釉を施した後に黒釉を胴下部に施す。素地は淡紫色の細粒子である素地に多量の白色および有色鉱物を含んでいる。貫入はない。B－2第1層出土。

同図22は揚げ底状の底部で推算底径が10.3cmと求められた。釉は黄茶褐色で両面に施されている。内面の釉は薄く色あせる。素地は灰白色の微粒子で白色と有色鉱物を含んでいる。非常に細かい貫入が外面で観察できる。B－3第1層出土。

Ⅱ類a

同図23は淡黄色の釉が胴下部に残存する。内面には透明釉が施されている。素地は淡橙白色の細粒子で、非常に細かい白色鉱物が微量ながら含まれている。貫入はない。E－3第4層出土。

Ⅱ類b

同図24は推算底径14.5cmを測った。釉は茶褐色で胴下部に施されている。素地は淡橙色の細粒子で白色鉱物と有色鉱物を少量混入させる。貫入はない。E－3第2層出土。

同図25は濃茶色の釉を胴下部に施している。素地は淡橙色の細粒子で白色鉱物・有色鉱物・ガラス質の鉱物を混入させる。貫入はない。B－3第4層出土。

同図26は外面には天目茶碗に用いられている黒釉を施している。内面には淡茶色の釉を施す。素地は白色の微粒子で、青磁や白磁に利用されるものを素地としている。貫入はない。E－1第2層出土。

6）洗底部

同図27は内面に淡褐色の釉を施す。素地は淡橙色の細粒子で白色鉱物が少量含まれている。E－1第1層出土。

7）茶入れ壺

同図28は茶入れの底部片で推算底径が4.4cmを測った。黒色の釉を底部近くまで施す。素地は灰白の微粒子である。貫入はない。E－1第1層出土。

同図29は胴部破片で最大胴径が9.4cmを推算した。釉は茶黒色で内面にのみ施される。素地は紫を帯びた茶色で非常に細かい微粒子。素地はねばりがあり、精選されている。貫入はない。E－3第1層出土。

小　結

褐釉の瓶の資料は県内で初めての出土であり、しかも外底に緑色の釉を施している。文様の構成から類例を捜すと今帰仁城跡出土[(註1)]の緑釉陶器と施文・手法が類似する。本品は元来、緑釉として製作されたものが釉掛けの段階で、製作者などの事由で褐釉を施したとも考えられる。時期は16世紀代であろう。

水注の出土例は、新里村遺跡[(註2)]で初めて県内で確認されているこれに次ぐものであろう。

褐釉陶器壺の口縁資料で、Ⅲ類aは与那原遺跡[(註3)]のⅡa類と近似する。Ⅳ類bの類例は成屋遺

跡[註4]から出土している。V類bの類例は新里村遺跡[註5]で出土していて、肩の張るタイプの壺で縦耳を四個貼付けている。この種の壺は14世紀前半まで遡ることが判明している。Ⅶ類のように強く外反するタイプの壺は与那原遺跡[註6]や阿波根古島遺跡[註7]などから出土していて、比較的新しい時期に登場してくるものとして一応考えられる。その時期は16世紀前後のものとして位置付けたいところである。

胴部資料のイ類の中で、外面に顕著な轆轤を施した資料は特徴的で目立つものである為、注目される。手塚直樹氏は拠れば15世紀代と御教示を戴いた。

底部資料のⅢ類に、全体形を窺うことが出来ないが、これと同じ素地のものが新里村遺跡で出土している。この種のものは関東地方では主に骨蔵器[註8]として利用されていることが判明している。

茶入れ壺の出土例は、12・13世紀に位置付られるビロースク遺跡[註9]から登場し、新しい時期では与那原遺跡[註10]で出土している。

註

註1　金武正紀・宮里末廣ほか　『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註2　金武正紀　「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器編年試案」沖縄県立博物館紀要第15号　1989年。

註3　金城亀信　『与那原遺跡』与那国町教育委員会　1988年。

註4　青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学第9号　1987年。

註5　新里村遺跡出土の褐釉陶器資料整理中に確認した。

註6　註3に同じ。

註7　金城亀信・長嶺均ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会　1990年。

註8　手塚直樹氏の御教示による。

註9　金武正紀ほか『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会　1983年。

註10　註3に同じ。

第5表　褐釉陶器・茶入れ壺・天目茶碗出土状況

地区・層序 ＼ 器種		瓶	水注	壺																壺底部				洗底部	茶入れ壺			天目茶碗	合計
				Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	耳(把手)		胴部	底部	Ⅰ	Ⅱ		Ⅲ		口縁	胴部	底部		
				a	b		a	b	a	b	a	b				イ	ロ				a	b							
第Ⅰ地区	表採																	11											11
	第Ⅰ層		1	1	1	1	1				1	1		1			3	44		2				1		1	1	1	61
	Ⅱ層		1		1	1		1		1			1			2	2	51				1	1						63
	Ⅲ層	1												1	1		1	15											19
	Ⅳ層								1									8			1	1							11
	不明																												0
小計		1	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	6	129	0	2	1	2	1	1	0	1	1	1	165
合計				3			2		2		2					8		129		6					2				
第Ⅱ地区	表採																	1											1
	第Ⅰ層																1	12											13
	Ⅱ層				1											1		4	1	2									9
	Ⅲ層																												0
	Ⅳ層																												0
	不明																												0
小計		0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	17	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	23
合計				1			0		0		0					2		18		2					0				
拝所内	表採											1					1												2
	第Ⅰ層																	1											1
	Ⅱ層																	14							1				15
	Ⅲ層																												0
小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	15	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	18
合計				0			0		0		1					1		15		0					1				
合計		1	2	1	3	2	1	1	1	1	1	2	1	2	1	3	8	161	1	4	1	2	1	1	1	1	1	1	206
				4			2		2		3					11		162		8					3				

第6表 染付出土状況

器種 / 地区・層序		碗																							皿			杯			皿		碗	碗・皿の小破片		合計
		Ⅰ	Ⅱ			Ⅲ	Ⅳ				Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ												Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ		a	b	Ⅳa～Ⅳdのいずれか	無文	有文	
			a	b	c		a	b	c	d			a	b															a	b						
第Ⅰ地区	表採					1					2	4	1	1																1						10
	第Ⅰ層				1						2	6	10	5													1		1			2	2	5	6	41
	Ⅱ層			3	1	1	1	1		1	2	5	3	5													1		2	1				4	13	44
	Ⅲ層			1	2		1			1		2		1													1				1				1	11
	Ⅳ層		1	2	1				1		2														1	1	2	1		1					1	14
	不明																																			0
小計		0	1	6	5	2	2	1	1	2	8	17	14	12											1	1	5	1	3	3	1	2	2	9	21	120
合計			12				6						26																6		3			30		
第Ⅱ地区	表採																																			0
	Ⅰ層																																			0
	Ⅱ層	1											1																							2
	Ⅲ層																																			0
	Ⅳ層																																			0
	不明																																			0
小計		1											1	0																						2
合計													1																							
合計		1	1	6	5	2	2	1	1	2	8	17	15	12											1	1	5	1	3	3	1	2	2	9	21	122
			12				6						27																6		3			30		

ホ．染　付

本遺跡では元様式の染付の出土はなく、すべて明・清様式の染付である。時期的には14世紀後半から17・18世紀に位置付けられるものである。

器種は碗・皿・杯・壺の４器種が確認された。分類に関しては、器種ごとに実施し、さらに時期的にまとめた。出土量については、第６表に示し、個々の記述は、地区ごとに行った。

ここでは、器形と時期的な要素を基に分類概念を次のように行った。

イ）碗

碗については、器形と時期的なものを基準にして、Ⅰ類からⅦ類に分類した。

Ⅰ類

Ⅰ類は14世紀後半から15世紀中頃に位置付けられる資料で、Ⅱ地区から底部のみ１点出土している。底部資料は無文で高台の削り出しは内面が、外面より若干、深く、丁寧に成形する。

Ⅱ類

Ⅱ類は15世紀前半～15世紀後半頃に所属するもので、器形や文様等からａ～ｃまでの３種類に細分した。

Ⅱ類ａ：ゆるく内彎する体部から口縁を鍔状に強く屈曲させる碗で、高台が内側に閉じる器形である。文様は外面胴部に竹と松枝、口縁に四方襷文を描く。内面には口縁に四方襷文、内底に竹と松枝を描く、一例のみ出土した。

Ⅱ類ｂ：いわゆる「蓮子型」と称される碗である。体部からゆるやかに内彎気味に開き、そのまま口縁に移行する。文様は外面胴部にアラベスク・飛馬如意雲・芭蕉文などを描く、口縁には波濤文を描き、内底に蓮花文を描いている。

Ⅱ類ｃ：Ⅱ類ｂと同様な器形であるが、外面口縁に簡素化された波濤文が描かれる。文様の構図はⅡ類ｂと共通する。

Ⅲ類

Ⅲ類は15世紀中頃から15世紀後半頃に位置付けられる資料である。腰折れの器形を示す碗で、胴部から直線的に口縁に移行する。高台径は他の群よりも大きい。外面には波濤文とアラベスクを描く、内底に蓮花文を描いている。

Ⅳ類

Ⅳ類は15世紀中頃から16世紀前半頃に比定されるものである。いわゆる「蓮子型」もこの中に含まれる。文様等からａ～ｄの４つに細分した。

Ⅳ類ａ：蓮子型の碗で、器形的にはⅡ類ｂと同様なものであるが、一例のみ口縁が僅かに外反する。外面に花果唐草文を描く、内底に花卉を描いている。

Ⅳ類ｂ：基本的な器形はⅡ類ａに近いものが推定される。外面に唐草文を描く。

Ⅳ類ｃ：これも蓮子型の碗で、器形は内彎するが、Ⅱ類ｂより外側に開き気味である。外面

および内底に梵字文を描く。高台の成形は削り出しではなく、貼付けによる技法を用いている。

Ⅳ類ｄ：小破片で器形が判然としないものや文様構成等が明確には識別できない資料である。口縁資料は直口の器形が考えられる。底部資料は内底に花文？とコウモリ？を描いている。

Ⅴ類

Ⅴ類は16世紀に位置付けられる資料である。この種類の器形もいわゆる「蓮子型」である。外面には菊果唐草文や唐草文を描く。

Ⅵ類

Ⅵ類も時期的には16世紀代に比定される。小振りの碗もしくは杯とみられる資料である。口縁は鍔状に強く屈曲させるのが特徴である。外面胴部には「唐子文と鳥」・「鳥と枝?」・「網目文」などを描く、内底に□明□成と書き現したのもある。おそらく大明年成と書かれたいたものと思われる。

Ⅶ類

Ⅶ類も16世紀から17世紀代に比定される碗であるが17•18世紀まで伝世される。素地等からａ・ｂの二種に分類した。

Ⅶ類ａ：安定感のある器形で、器高が低く、しかも高台径が大きい。素地は白色の半磁胎で、微粒子のものが多い。施釉は二度掛けである。内底面の釉を輪状に掻き取る。外面胴部には単略化された構図不明の文様が多い。

Ⅶ類ｂ：Ⅶ類ａと同様に安定感がある器形である。素地は灰白色・白色の微粒子である。焼成はⅦ群ａよりも堅緻である。外面に花文などを描く。内底釉を輪状に掻き取る。

ロ）皿

皿の資料は、いわゆる「碁笥底」の皿を主体とするものである。文様構成からⅠ類からⅢ類に分類した。15世紀中頃〜16世紀代の皿である。

Ⅰ類

Ⅰ類の所属時期は15世紀中頃から15世紀後半頃に位置付けられるもので一例のみ得られた。体部は若干丸味を持ち、そのまま直線的に開く器形である。文様は内面口縁にのみ圏線を描く。

Ⅱ類

Ⅱ類もⅠ類と同様の時期に比定される資料である。いわゆる「碁笥皿」である。器形もⅠ類と同様に胴下部から丸みを持ちながら口縁にそのまま直線的に移行する。外面には波濤文帯と芭蕉文などを描く、内底には草花文を描く。

Ⅲ類

Ⅲ類は16世紀代に位置付けられる皿で、底面のみの破片資料である。内底の文様構成は判らないが外底面に「貴」の文字が書かれている。

ハ）杯

杯の資料は短筒型で、腰折れの杯と腰部に丸味を持つ杯がある。時期的には15世紀中頃から

16世紀前半に位置付けられる。Ⅰ類とⅡ類に分類した。

Ⅰ類

Ⅰ類：口縁の破片資料で、15世紀中頃に位置付けられる。一例のみ得られた。外面に隆圏線を廻らし、その上に唐草文を描く。

Ⅱ類

Ⅱ類は腰部の形態から便宜上、ａとｂに細分した。この手は15世紀中頃から16世紀前半に比定される。

Ⅱ類ａ：腰部で丸味を持つ杯である。口縁と底部を欠くが、胴中央に隆圏線を廻らす。腰部外面に如意頭文を描く。

Ⅱ類ｂ：腰折れの杯である。隆圏線の下に如意頭文を描く。内底には草花文などを描く。

ニ）壺

壺は胴部が２片のみ出土した。時期的には15世紀中頃から16世紀前半に位置付けられる資料以外に時期が特定しにくいものがある。便宜的にａとｂに分類した。

ａ類：界線を境に上に唐草文、下に如意頭文を描く壺である。

ｂ類：外面に枝と葉を描く、内面には成形により凸帯状に隆起する箇所がみられる。

第Ⅰ地区、染付

染付の大部分は、この第Ⅰ地区から出土した。以下、各種類ごとに記述を行なう。

（１）碗

Ⅱ類ａ

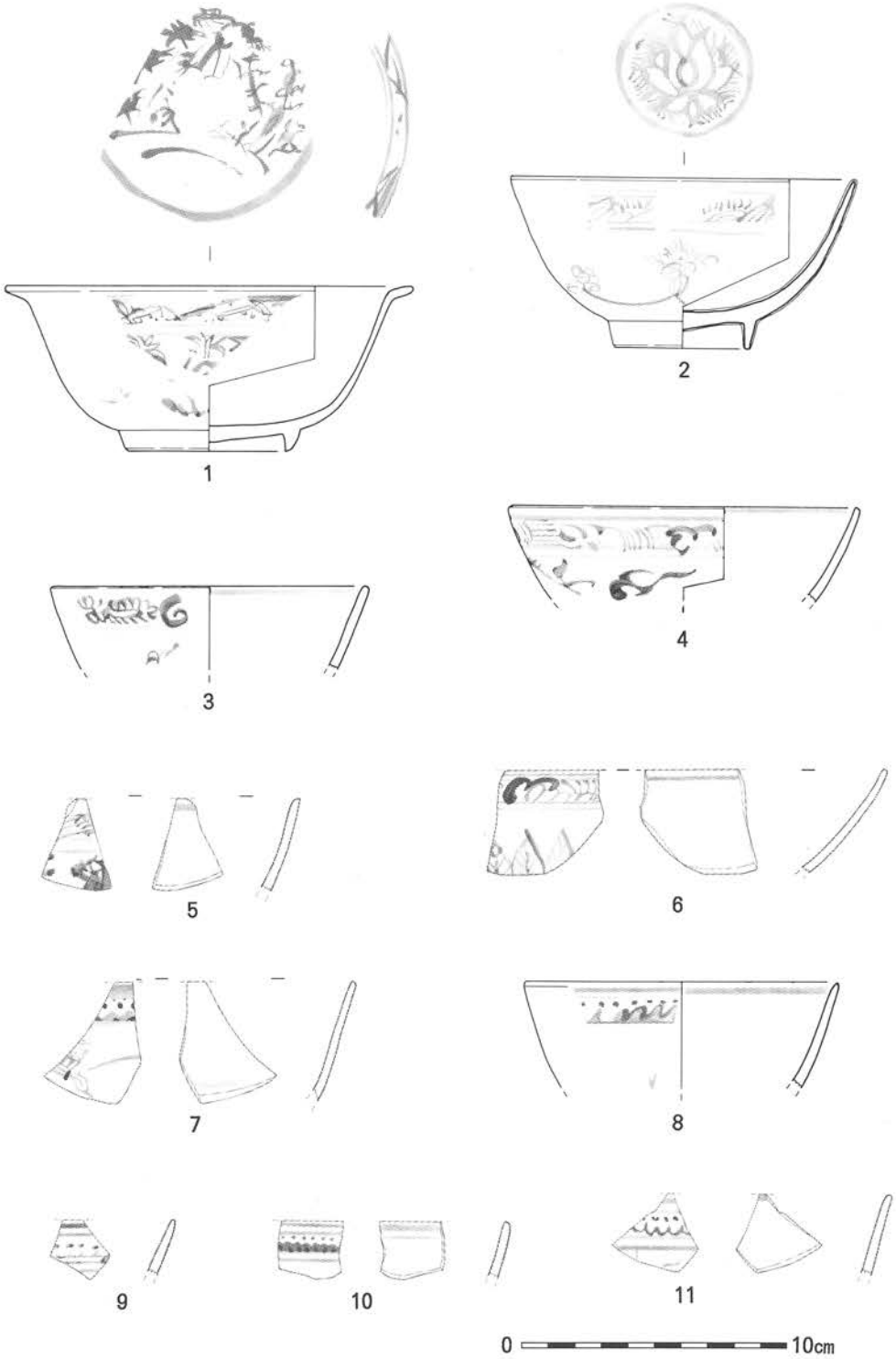
第15図１は復元可能な資料で、口径の推算が15.6㎝、推定器高は6.3㎝、高台径は6.2㎝を測る。口縁の内外面には四方襷文と界線を描き、外面体部と内底には竹と松枝を描く。素地は白色の微粒子。釉は淡黄白色で、畳付を除き総釉する。呉須は紫色で濃淡をつけて施す。細かい貫入が両面に認められる。Ｂ－３第Ⅳ層出土。

Ⅱ類ｂ

同図２は口径の推算が13.2㎝を測る。推定器高は6.5㎝、高台径は5.2㎝を測った。外面口縁には波濤文帯、腰部にアラベスクを描く。内底には蓮花文を描いている。素地は灰白色で、淡橙色を帯びる。釉色は淡青白色。畳付のみ露胎する。呉須は淡紫色。貫入はない。Ｂ－３第Ⅳ層出土。

同図３は推算口径が13.1㎝を測った資料である。外面には波濤文とアラベスク?を描く。内面口縁には界線のみ認められる。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色である呉須は紫色で濃淡をつける。貫入はない。Ｅ－３第Ⅱ層出土。

同図４と５は同一の破片資料である。推算口径は13.2㎝を測った。外面には波濤文と飛馬如



第15図（PL. 19）染付　碗（Ⅱ類a：1、Ⅱ類b：2～6、Ⅱ類c：7～11）

意雲を描いている。内面口縁は界線のみ廻らす。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色である。呉須は紫色で濃淡をつけて描く。貫入はない。B－3第Ⅳ層出土。

同図6は外面に波濤文と芭蕉文を描く、内面は界線のみ認められる。素地は白色の微粒子である。釉は淡黄白色。呉須は紫色。両面に細かい貫入がある。E－3第Ⅱ層出土。

Ⅱ類c

同図7は外面には簡素化した波濤文とアラベスクを描く、内面腰部に界線を描いている。素地は白色微粒子。釉は淡黄白色である。呉須は紫色。両面に荒い貫入がある。B－1第Ⅰ層出土。

同図8は推算口径が12cmを測る。外面には波濤文と構図不明の文様を描く、内面は界線のみ廻らす。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色である。呉須は青色。貫入はない。B－3第Ⅳ層出土。

同図9は口縁の小破片で、外面には波濤文のみが描かれている。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色である。呉須は青色。貫入はない。E－3第Ⅱ層出土。

同図10・11も口縁の小破片である。10は外面のみ波濤文が描かれている。内面は二本の界線を廻らす。11は波濤文と構図不明を描く、内面は界線のみ廻らす。10・11の素地は白色の微粒子で、釉色も淡青白色。呉須も同一で青色を用いている。貫入は両者とも認められない。10・11の出土層はB－3第Ⅲ層である。

Ⅲ類

第16図12は推算口径が12.4cmを測る。外面は波濤文とアラベスクを描く、内面口縁と腰部に界線を描く。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色である。呉須は青色。貫入はない。E－3第Ⅱ層出土。

同図13は口径の推算が12.5cmを測る。器高は5.7cm、高台径が6.5cmを測った。外面には波濤文帯・アラベスク・界線を描く。内面の口縁と胴下部に界線を施し、見込みに蓮花文を描いている。釉は淡青白色で施釉する。畳付と高台内面のみが露胎する。素地は白色の微粒子。呉須は淡青色である。貫入はない。B－3第Ⅰ層出土。

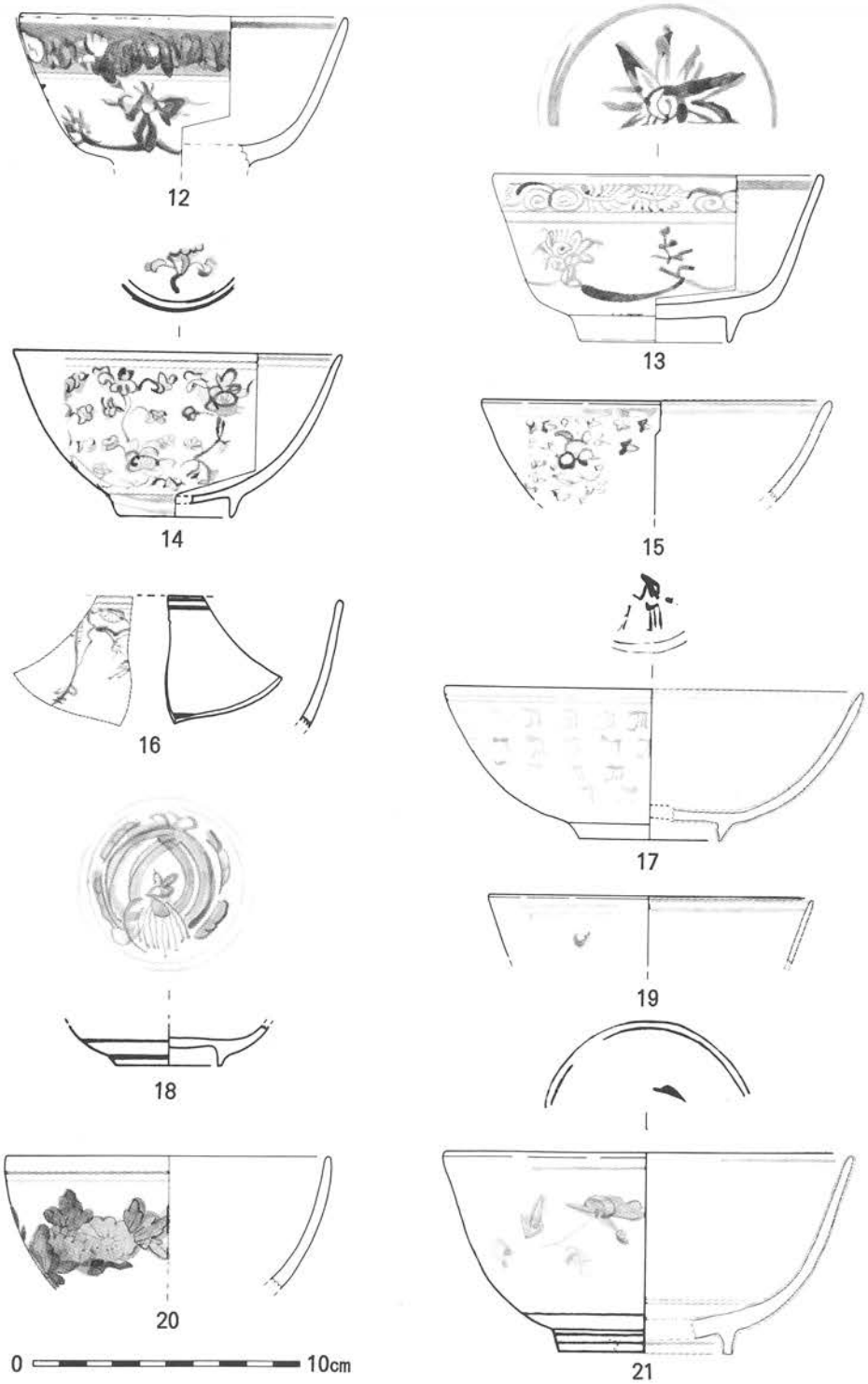
Ⅳ類a

同図14は推算口径が12.4cm、器高が6.3cmを測る。高台の直径は4.4cmを測る。外面には牡丹唐草文と界線を描き、内面は口縁と腰下部に界線、内底に唐花文を描く。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色で、畳付のみ露胎する。呉須は青色。貫入はない。B－3第Ⅲ層出土。

同図15は口径の推算が13.1cmを測った。外面には牡丹唐草文と界線、内面に界線のみが描かれている。素地・釉色・呉須等は14と一致する。出土層位はB－3第Ⅱ層である。

Ⅳ類b

同図16は外面に唐草文?と界線を描く、内面の口縁と腰下部にも界線を描いている。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色。呉須は青色。貫入はない。E－3第Ⅱ層出土。



第16図（PL. 20）染付　碗（Ⅲ類:12•13、Ⅳ類ａ:14•15、Ⅳ類ｂ:16、Ⅳ類ｃ:17、Ⅳ類ｄ:18•19、Ⅴ類20•21）

Ⅳ類ｃ

同図17は口径の推算が15.6cmと求められた。推定器高は5.2cm、推定高台径は5.2cmを測った。高台は貼付けである。梵字文は外面と内底面に描かれている。界線は外面が口縁と高台脇、内面が口縁と腰下部に描く。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色。呉須は青色。荒い貫入が両面に認められる。B－３第Ⅳ層出土。

Ⅳ類ｄ

同図18は底部破片で、高台径が４cmを測った。外面には高台脇と腰下部に界線を描く、内底には界線とコウモリ？と花文？を描く。素地は白色の微粒子。釉色は淡青色を総釉させるが畳付のみ露胎させる。呉須は青色を用いて濃淡をつける。貫入はない。E－２第Ⅱ層出土。

同図19は推算口径が12.2cmを測った。外面には界線と構図不明のものが描かれている。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色である。呉須は青色。貫入はない。B－３第Ⅳ層。

Ⅴ類

同図20は口径の推算が12.2cmを測った。外面には界線と菊果唐草文を描く。内面は無文。素地は白色の微粒子。釉色は白色。呉須は青色。貫入はない。E－３第Ⅱ層出土。

同図21は口径の推算が15cmを測った。器高は7.1cm、高台径が6.4cmを測った。外面に唐草文と界線を描く、内面口縁に界線が認められた。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色で、総釉後に畳付を掻き取り露胎させる。呉須は青色。貫入はない。B－１第Ⅱ層から出土。

第17図22は高台径6.7cmが求められた蓮子型の碗底部である。外面及び内底には大根葉状の葉と界線を描いている。素地は灰白色の微粒子。釉色は淡青白色を呈する。釉は畳付のみ露胎し荒い貫入が両面に認められる。呉須は淡青色。B－３第Ⅳ層出土。

同図23は蓮子型の碗の底部破片である。文様の構図や構成は上記22と一致する。素地は灰白色の微粒子である。釉色は淡青白色。呉須は濃青色。貫入は認められない。B－３第Ⅳ層出土。

Ⅵ類

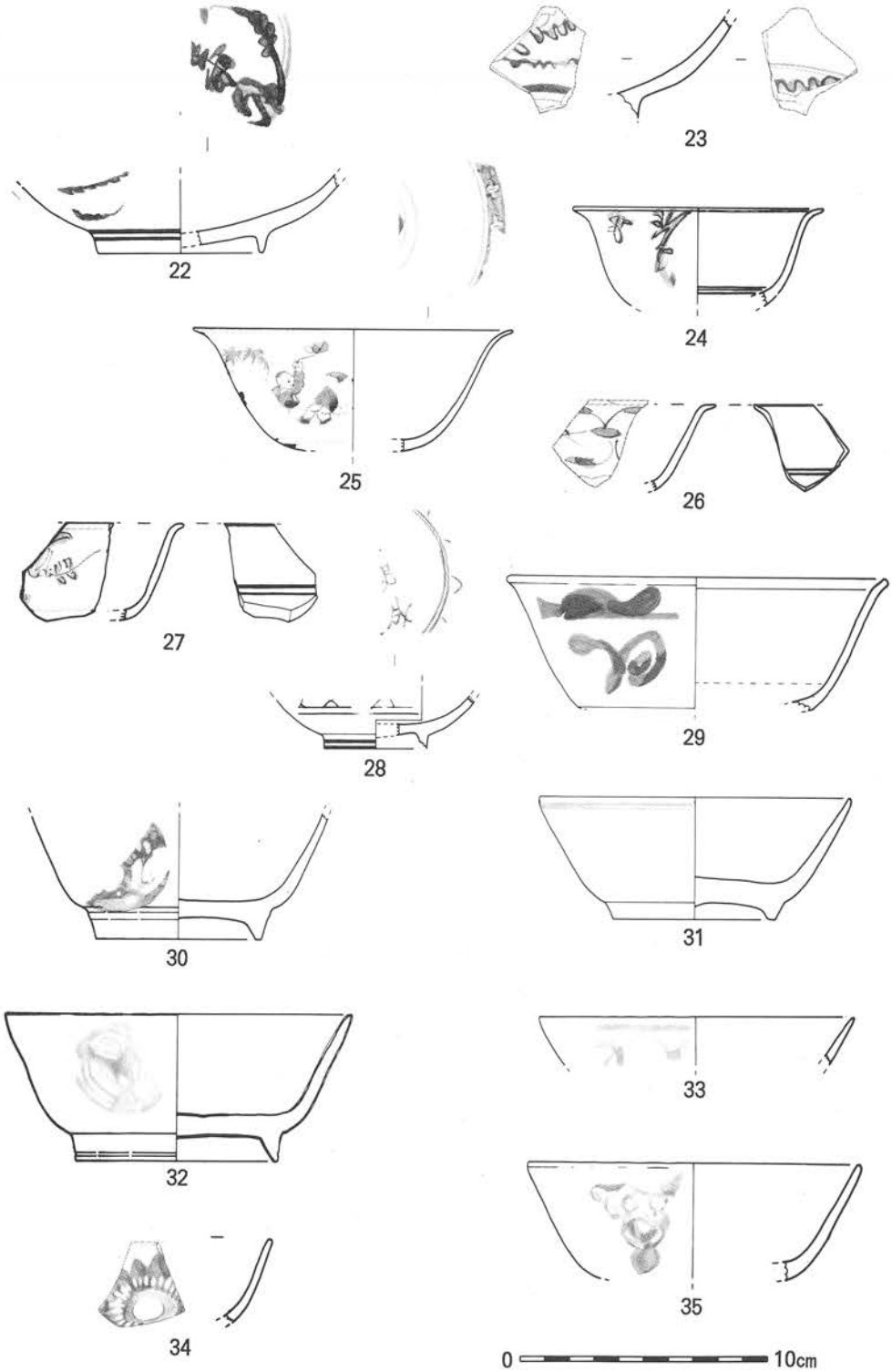
同図24の推算口径は10.2cmを測った資料である。外面には界線と抽象化した鳥文と唐子文を描く、内面には界線を口縁と胴下部に描く。素地は白色の微粒子である。釉色は灰白色である。呉須は淡青緑色。貫入はない。Bトレンチ。第Ⅰ層出土。

同図25は推算口径が13.1cmを測る。外面に界線・唐子文と鳥文を描く。内面の口縁には松葉と花文で文様帯を描く、内底には界線と構図不明を描く。素地は白色の微粒子である。釉色は淡青白色を呈する。呉須は淡青色。貫入はない。B－３第Ⅲ層。

同図26は外面に連鎖草花文?と界線を描いている。内面は口縁と胴下部に界線を描く。素地は白色の微粒子である。釉は淡青白色。呉須は淡青色である。貫入はない。E－３第Ⅰ層出土。

同図27は外面に鳥文・小枝・界線を描いている。内面の口縁と胴下部に界線を描く。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色を帯びる。呉須は淡青色を呈する。貫入はない。E－２第Ⅱ層。

同図28は高台脇での推算径が 4.2cmを測る。内外面に界線と細目文を描き、見込みに□明□



第17図（PL. 21）染付碗（Ⅴ類:22•23、Ⅵ類:24～28、Ⅶ類ａ:29～31、Ⅶ類ｂ:32～35）

成の銘を記す。素地は白色の微粒子である。釉は淡灰白色。呉須は淡青色である。細かい貫入が両面に認められる。B－1第Ⅰ層出土。

Ⅶ類a

同図29は推算口径が15.4cmを測る。口縁が若干外反し、内面には、明瞭な稜が認められる。外面には雲?とカタツムリ?を描く。素地は白色の微粒子で半磁胎である。釉は二度掛けされていて、初めに下地として黄白色の釉を掛け、最終的に透明釉を施す。釉は内面の胴下部まで施されている。呉須は淡青緑色を呈する。細かい貫入が両面に認められる。B－1第Ⅰ層。

同図30は高台の直径が6.8cmを測った。外面に構図不明の円文を描く。施釉の手法及び釉色は上記29と一致する。高台の内外面と畳付のみ露胎する。内底の釉を輪状に掻き取っている。素地は白色の微粒子で、半磁胎である。呉須は淡紫色。細かい貫入が両面で認められた。B－1第Ⅰ層。

同図31は推算口径12.8cm、器高5cm、高台直径6.6cmを測る。施釉の手法及び釉色は上記29・30と同一である。内底釉を輪状に掻き取っている。外面には界線のみが認められる。素地は白色の微粒子で、半磁胎。呉須は淡青色。細かい貫入が両面に認められる。B－1第Ⅰ層出土。

Ⅶ類b

同図32は推算口径が14.6cmを測る。器高は6.0cmで、高台直径が8.2cmを測る。外面に単略化した鶴文?を描く。素地は灰白色の微粒子。釉は高台の内外面と畳付が露胎し内底が輪状の掻き取りを行っている。釉色は淡青白色で、呉須が淡紫色で施されている。貫入はない。表採資料。

同図33は推算口径が12.8cmを測った資料である。外面に界線と雲文?を描く。素地は灰白色の細粒子である。釉色は灰白色で透明釉である。呉須は淡灰緑色を呈している。外面のみ細かい貫入が認められる。E－3第Ⅱ層出土。

同図34は外面に花文を描く資料である。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色である。呉須は淡青色で施す。貫入はない。Bトレンチ表採。

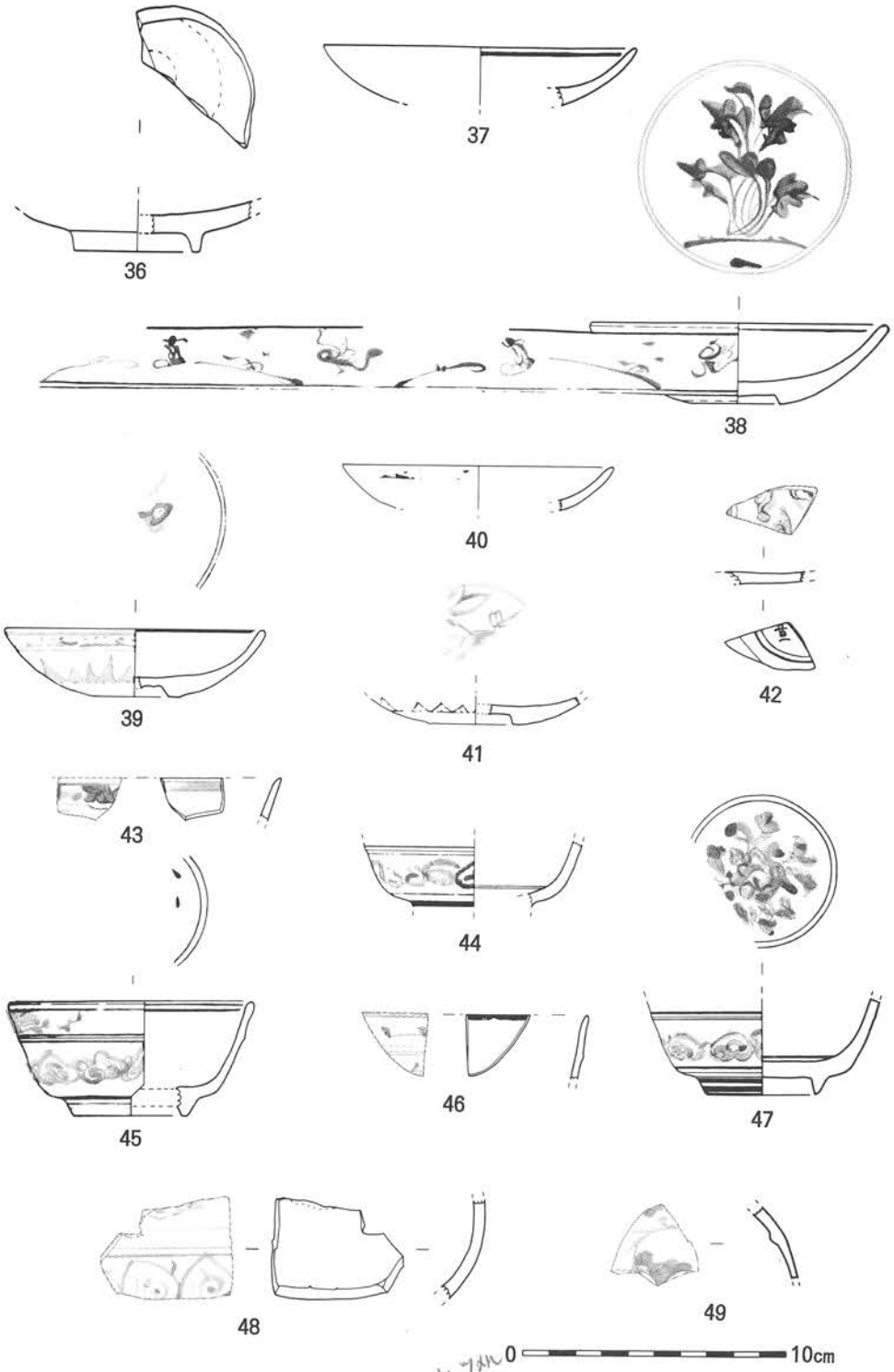
同図35は口径の推算が13.6cmを測った。外面に逆三角形状の文様を描く、釉色は白色で、内面の胴下部のみが露胎する。素地は白色の微粒子である。呉須は淡青色両面に荒い貫入が認められる。B－2第Ⅰ層出土。

第18図36は高台径4.8cmが推算できた。灰白色の釉を施した後に内底釉を輪状に掻き取っている。畳付のみ露胎する。素地は白色の微粒子である。両面に荒い貫入が認められる。E－3第Ⅰ層。

（2）皿

Ⅰ類

同図37は推算口径12.1cmを測る内彎気味の皿である。内面の口縁および胴下部に界線を施す。素地は白色の微粒子である。釉色は淡青白色である。呉須は淡青色を帯びる。荒い貫入が両面に認められる。B－3第Ⅳ層出土。



第18図（PL. 22）染付　碗（Ⅶ類b:36）・Ⅲ（Ⅰ類:37・38、Ⅱ類:39～41、Ⅲ類:42）
・杯（Ⅰ類:43、Ⅱ類a:44、Ⅱ類b:45～47）・壺（a類:48、b類:49）

同図38は口径11.2cm、器高3.1cm、底径3.2cmを測る碁笥底の皿である。両面の口縁と胴下部に界線を施し、外面には仙人?と龍?を描く。内底面には草花文を描いている。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色で、畳付とその周辺のみを露胎させる。呉須は淡青色。両面に荒い貫入が見られる。B－3第Ⅳ層出土。

Ⅱ類

同図39も碁笥底の皿で、推算されたサイズは、口径が10.1cm、器高2.6cm、底径3.4cmである。口縁には波濤文帯、胴部に芭蕉文を描く。内面の口縁と胴下部に界線、内底に人物と観られるものを描いている。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色で、畳付とその周辺のみを露胎させる。呉須は淡青色である。荒い貫入が外面にのみ認められる。E－3第Ⅲ層出土。

同図40は推算口径10.4cmを測る。文様は同図39と同じ構成である。素地は白色の微粒子である。釉は淡青白色を帯びる。呉須は淡青色。貫入はない。B－1第Ⅰ層出土。

同図41は碁笥皿の底部で、推算底径は3.5cmが求められた。外面には芭蕉文、内底面に界線と草花文?とみられる文様を描いている。素地は淡橙白色の微粒子である。釉は畳付とその周辺が露胎する。釉色は淡黄白色を帯びている。呉須は淡青色である。両面に細かい貫入が観られる。B－3第Ⅳ層出土。

Ⅲ類

同図42は底面のみの資料である。外底面に界線と「貴」の一字のみ残っている。内底面には魚の尾鰭が描かれている。素地は白色の微粒子。釉色は淡青白色を帯びる。呉須は淡青色である。貫入はない。B－3第Ⅳ層出土。

（3）杯

Ⅰ類

第18図43は口縁の小破片で、外面に唐草文を描く、内面に界線がみられる。素地は白色の微粒子である。釉は淡青白色を帯びる。呉須は淡青色。貫入はない。B－3第Ⅳ層出土。

Ⅱ類a

同図44は腰部で丸味を持つ杯の資料である。外面の胴中央に隆圏線を廻らし、その直下に如意頭文と界線を描く、内面の腰下部に界線が廻らされている。素地は白色の微粒子である。釉色は淡青白色を帯びる。呉須は淡青色。B－2第Ⅰ層。

Ⅱ類b

同図45は腰折れの杯の復元資料である。推算されたサイズは、口径9.4cm、器高4.4cm、高台径4.3cmを測った。外面には隆圏線、草花文、如意頭文?界線を描く、内面の口縁と腰下部に界線を施す。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色で、畳付のみ露胎させる。両面に荒い貫入がみられる。呉須は淡青色である。E－3第Ⅱ層出土。

同図46は口縁破片で、外面に隆圏線、枝?などを描く。内面の口縁端部には重ね焼きによる

釉の癒着が顕著に認められる。素地は白色の微粒子で呉須は淡青色を用いている。貫入はない。E－3第Ⅳ層出土。

同図47は腰折れ杯の底部資料で、高台径が4.4cmを測った。外面には界線、隆圏線、如意頭文を描く。内底面に界線と草花文を描く。素地は白色の微粒子。釉は淡青白色で、畳付のみ露胎させる。貫入はない。呉須は淡青色。Bトレンチ表採。

（4）壺

a類

同図48は壺の胴部破片で、外面に唐花文？、界線、如意頭文を描く。素地は白色の微粒子。両面には淡青白色の釉を施す。呉須は淡青色。貫入はない。E－3第Ⅲ層出土。

b類

同図49も壺の破片である。外面に樹木を描いている。内面には継ぎ目によって生じたとみられる凸帯がある。素地は白色の細粒子。釉色は淡青白色で、両面に施釉。呉須は淡青色。外面にのみ細かい貫入が観られる。E－3第Ⅰ層出土。

小　結

第Ⅰ地区では15世紀後半から17・18世紀代までの染付が多く出土している。特に15・16世紀代の資料が目立っている。碗のⅡ類bは成屋遺跡[註1]・今帰仁城跡[註2]で出土している。碗のⅢ類は成屋遺跡[註3]・フルスト原遺跡[註4]・ヤマバレー遺跡[註5]・住屋遺跡[註6]と出土例が多い。また、碗Ⅳ類cはカンドウ原遺跡[註7]でも出土している。碗のⅦ類bは竿若東遺跡[註8]・砂川元島遺跡[註9]などで報告され、比較的新しい時期（17・18世紀）まで伝世される。

皿は碁笥皿の例が多い。Ⅲ類の例はフルスト原遺跡[註10]・成屋遺跡[註11]などで報告されている。また、杯のⅡ類は今帰仁城跡[註12]のものと特徴が一致している。今回の発掘調査で染付の復元資料が10点余りも得られた。宮古・八重山地域で今日までこれほど復元された例はなかった。この様な面からも本遺跡の染付は宮古・八重山地域での編年的研究などに貴重な資料を提供してくれた。

註

註1　青山学院大学成屋遺跡調査団「成屋遺跡発掘調査概報」青山史学　第9号　1987年。

註2　金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註3　註1に同じ。

註4　金武正紀ほか『フルスト原遺跡』石垣市教育委員会　1977年。

註5　ヤマバレー遺跡調査団「沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報」青山史学　第6号　1980年。

註6　金武正紀『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』平良市教育委員会　1983年。

註7　知念勇・当真嗣一ほか『カンドウ原遺跡発掘調査報告』沖縄県教育委員会　1977年。

註8　安里嗣淳・大城慧ほか『竿若東遺跡発掘調査報告』沖縄県教育委員会　1978年。

註9　島袋洋ほか『砂川元島』城辺町教育委員会　1989年。
註10　註4に同じ。
註11　註1に同じ。
註12　註2に同じ。

第7表　土器分類別出土状況

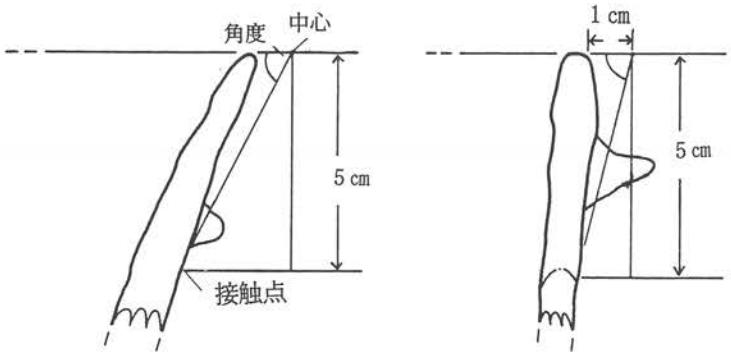
地区・層序 ＼ 分類	鍋形土器（口縁）																鍋形底部				鍋胴部	壺形土器								不明		合計
	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ	Ⅰ・Ⅰa(?)	Ⅱ・Ⅱa・Ⅱc	Ⅲb(?)	Ⅳb(?)	分類不可	Ⅰ	Ⅱ～Ⅲ	Ⅲb	Ⅱ～Ⅳ		口縁			底部			口縁破片	胴部	底部			
	a	b	a	b	c	a	b	a	b	c												Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	a	b	c			イ	ロ	
第Ⅰ地区 表採	1			1	1										1	19					45							2	3			73
第Ⅰ地区 第Ⅰ層	1		1		2		3	1	3	1			1	1		214					974		2					4	1			1209
第Ⅰ地区 Ⅱ層	4	2	1		5	2	2	3	4	1		1				206		1			362	1	2	1	1	2		27	31	3	1	663
第Ⅰ地区 Ⅲ層	3		1	2	1	1	1	1								66		1			188					1		1	6			273
第Ⅰ地区 Ⅳ層	2			2	1						1					16			1		84			2				2				111
第Ⅰ地区 不明							1									11	1				140						1					154
小計	11	2	3	5	10	3	7	5	7	2	1	1	1	1	1	532	1	2	1	0	1793	1	4	3	1	3	1	36	41	3	1	2483
合計	13		18			10		14									4					8			5					4		

地区・層序 ＼ 分類	鍋形土器（口縁c）																鍋形底部				鍋胴部	壺形土器								不明		合計
	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ	Ⅰ・Ⅰa(?)	Ⅱ?Ⅱa・Ⅱc	Ⅲb(?)	Ⅳb(?)	分類不可	Ⅰ	Ⅱ～Ⅲ	Ⅲb	Ⅱ～Ⅳ		口縁			底部			口縁破片	胴部	底部			
	a	b	a	b	c	a	b	a	b	c												Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	a	b	c			イ	ロ	
第Ⅱ地区 表採																4					12											16
第Ⅱ地区 第Ⅰ層		1			3		3						1	1		51				1	259		1									321
第Ⅱ地区 Ⅱ層		1					2									23	1			1	71											99
第Ⅱ地区 Ⅲ層																1					4											5
第Ⅱ地区 Ⅳ層																0					1											1
第Ⅱ地区 不明																28					123											151
小計	0	2	0	0	3	0	5	0	0	0	0	0	1	1	0	107	1	0	0	2	470	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	593
合計	2		3			5		0									3					1			0					0		

地区・層序 ＼ 分類	鍋形陶器（口縁）																鍋形底部				鍋胴部	壺形土器								不明		合計
	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ	Ⅰ・Ⅰa(?)	Ⅱ・Ⅱa・Ⅱc	Ⅲb(?)	Ⅳb(?)	分類不可	Ⅰ	Ⅱ～Ⅲ	Ⅲb	Ⅱ～Ⅳ		口縁			底部			口縁破片	胴部	底部			
	a	b	a	b	c	a	b	a	b	c												Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	a	b	c			イ	ロ	
拝所内 第Ⅱ層	1	1						2				1				23					112		1		1				4	1		147
拝所内 Ⅲ層																0					2											2
小計	1	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	23	0	0	0	0	114	0	1	0	1	0	0	0	4	1	0	149
合計	2		0			0		2									0					1			1					1		

へ. 土　器

土器は鍋形と壺形の２器種が確認された。特に鍋形が圧倒的に多く得られた。分類に関しては口縁形態・器面調整など以外に器形の開き具合いを調べる為に角度による方法を取り入れながら分類を試みた。角度に関しては、口径が推算できた大型の破片資料や復元土器を対象とした。小破片は除外した。計測方法は、図化した実測図を利用した。初めに口唇外端から水平方向に１㎝移動した箇所に中心を設定し、中心から下に垂直に５㎝下がった点から計測する土器外面方向へ水平に線引きし、土器外面と接触した点が出来る。中心とこの接触した点を結んで口縁の傾き具合いを分度器で読み取って実施した。胎土・混入物の分類に関しては、A～E類の５種類に区別し、以下に記した。



第19図　口縁の傾斜角度の測定方法

A類：胎土に貝殻の細片を多量に混入しているもの。

B類：A類と同様に胎土に貝殻の細片を混入する土器で大半が、貝殻の細片が脱落して多孔状となるものが主流である。

C類：胎土は精選され、微細な砂粒と有色の物質を混入させる。

D類：混入物がほとんど観察できないもので、器面が多孔状となる。数点出土している。

E類：A類と同様に貝殻の細片を混入させるが、軽石片を潰し胎土と混合させる為、器面に荒いヒビ割れが生じる。例外的に一例のみ得られた。

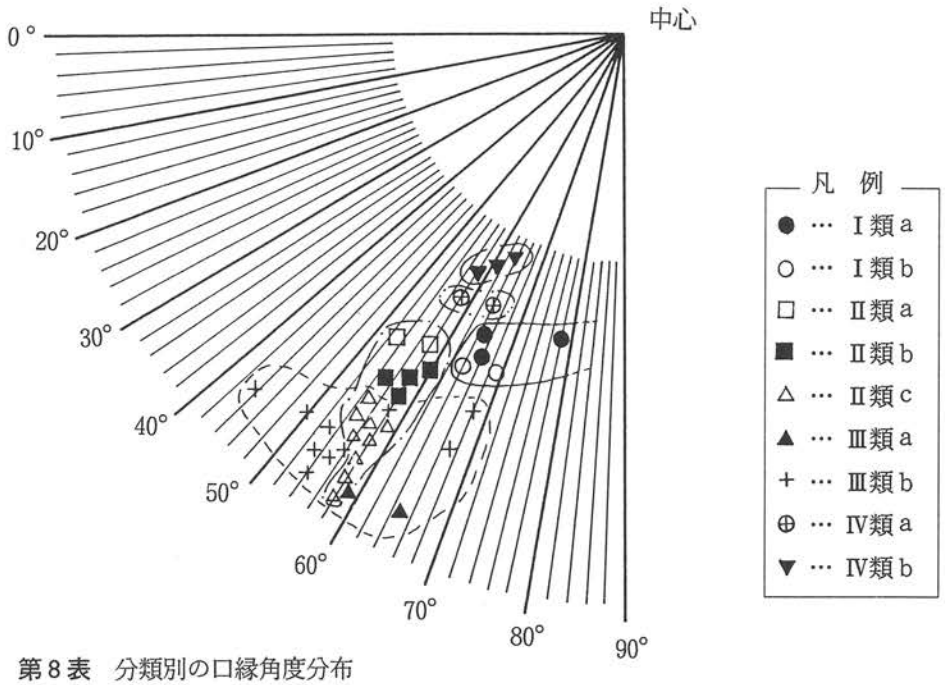
胎土・混入物に関しては、「A類」・「B類（多孔状）」・「C類」と文章中で、記述する。

イ）鍋形土器

鍋形土器は口縁形態などからⅠ～Ⅵ類に分類し、必要に応じて、細分した。

Ⅰ類

Ⅰ類：直口状もしくは僅かに外傾する器形で、平底を主体とする。口縁の傾き具合は64°～76°の範囲に納まるものである。外面の器面の仕上げの調整からａ・ｂの２種に分類した。ａ種は主に箆削り後にナデで口縁から胴下部を仕上げるもの。ｂ種は口縁はナデ仕上げであるが、口



第8表　分類別の口縁角度分布

第9表　パナリ焼出土状況

器種 / 層序		壺 a	壺 b	壺 c	壺 d	壺 胴部	小鉢	火舎 口縁	火舎 低部	計
第Ⅰ地区	表採				1		1			2
	第Ⅰ層	1	2	3		1		1	2	10
	第Ⅱ層		1							1
小計		1	3	3	1	1	1	1	2	13
合計		9								

器種 / 層序		壺 a	壺 b	壺 c	壺 d	壺 胴部	小鉢	火舎 口縁	火舎 低部	計
第Ⅰ地区	第Ⅰ層					1				1
小計		0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計		1								

第10表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅰ）第Ⅰ地区

図版番号	分類	サイズ（cm）			耳(把手)のサイズ(cm)			角度	出土地点	図版番号	分類	サイズ（cm）			耳(把手)のサイズ(cm)			角度	出土地点
		口径	器高	底径	a	b	c					口径	器高	底径	a	b	c		
第20図1	Ⅰ類a	26.5	19.1	21.6	1.8	6.2	1.5	76°	E-2第2層	第22図21	Ⅰ類a				2.9	(7.0)	1.6		E-1第3層
〃2	〃	30.0	13.4	22.0				66°	表　採	〃22	Ⅱ類a								E-3第3層
〃3	〃								E-2第2層	〃23	Ⅱ類b				1.3	(5.0)	(0.8)		E-3第3層
〃4	〃								E-2第3層	〃24	Ⅱ類c				1.3	4.8	0.6		B-3第4層
〃5	〃							-	B-0第1層	〃25	〃				1.4	(7.2)	0.7		Bトレ第2層
〃6	Ⅰ類b				1.3	(5.8)	0.7		Bトレ第2層	〃26	〃				1.3	5.5	0.7		B-3第2層
〃7	〃	34.8			1.4	7.0	(1.0)	69°	E-1第2層	〃27	〃				1.1	6.1	0.6		B-3第3層
〃8	Ⅱ類a	35.6						53°	B-2第1層	〃28	Ⅱa or Ⅱc								E-1第1層
〃9	〃	35.8						58°	E-2第2層	〃29	Ⅲ類a	37.8						59°	E-3第3層
〃10	Ⅱ類b	31.4						58°	E-3第3層	〃30	〃								E-3第2層
第21図11	〃	29.0						60°	B-3第4層	第23図31	〃	25.0			1.3	5.5	0.9	65°	B-2第2層
〃12	〃	30.8						58°	表　採	〃32	Ⅲ類b	39.8	17.7	22.8				54°	E-3第2層
〃13	〃	36.8			2.0	7.0	0.7	55°	D-3第4層	〃33	〃	49.8	21.0	20.5				56°	B-3第3層
〃14	Ⅱ類c	28.4						56°	E-3第2層	〃34	〃	34.0						55°	B-2第2層
〃15	〃	34.0						58°	E-3第2層	〃35	〃	40.3	(19.0)	(19.0)	1.4	6.4	0.8	67°	B-3不明
〃16	〃	38.4			1.4	5.8	0.8	59°	B-1第1層	〃36	〃	44.4	(16.2)	(21.0)	1.4	6.0	0.8	53°	B-2第1層
〃17	〃	39.2			1.3	7.0	0.6	58°	B-3第1層	第24図37	〃	42.6						44°	B-0第1層
〃18	〃	42.4			1.2	6.0	0.7	58°	表　採	〃38	〃								B-0第1層
第22図19	〃	44.0			1.4	(7.0)	1.1	58°	E-1第2層	〃39	Ⅳ類a	30.2						60°	B-0第2層
〃20	Ⅰ類a				2.5	(6.0)	1.4		E-3第4層	〃40	〃				1.4	5.3	1.5		E-3第3層

注.（　　）内は推定復元による数値である。

第11表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅱ）第Ⅰ地区

図版番号	分類	サイズ（cm）			耳(把手)のサイズ(cm)			角度	出土地点
		口径	器高	底径	a	b	c		
第24図41	Ⅳ類b	37.2						61°	E-3第2層
〃42	〃								B-3第1層
〃43	〃	40.4						58°	B-0第1層
〃44	〃								E-3第2層
〃45	〃				2.2	6.3	1.4		E-2第2層
〃46	〃	31.4						64°	E-1第1層
第25図47	Ⅳ類a								E-3第2層
〃48	〃								E-1第1層
〃49	〃								E-3第2層
〃50	Ⅳ類b				2.0	(6.0)	(1.2)		E-3第2層
〃51	Ⅳ類c								E-1第1層
〃52	〃								E-2第2層
〃53	Ⅴ類								B-3第4層
〃54	Ⅰ類a				1.7	(4.5)	1.2		E-1第2層
〃55	〃				1.6	(5.5)	1.3		E-3第3層
〃56	〃				2.3	(5.5)	1.4		B-3第4層
〃57	〃				2.0	(5.0)	1.1		E-2第2層
〃58	Ⅰ類a?				2.2	4.3	1.4		E-2第2層
〃59	Ⅲ類b?				1.3	(6.5)	0.6		B-1第1層
〃60	Ⅳ類b?				2.3	(5.0)	1.5		表　採

図版番号	分類	サイズ（cm）			耳(把手)のサイズ(cm)			角度	出土地点
		口径	器高	底径	a	b	c		
第25図61	底部Ⅰ			25.0					不　明
〃62	〃Ⅱ～Ⅲ			10.0					E-3第2層
〃63	〃Ⅱ～Ⅲ			10.0					E-3第3層
〃64	〃Ⅲb			22.4					B-3第4層
第26図65	壺Ⅰ	21.0							E-2第2層
〃66	〃Ⅱ	19.0							B-2第1層
〃67	〃Ⅱ	18.4							B-3第2層
〃68	〃Ⅱ	16.0							E-3第2層
〃69	〃Ⅱ	24.0							B-1第1層
〃70	〃Ⅲ	9.6							B-3第2層
〃71	〃Ⅲ	20.0							B-3第4層
〃72	〃Ⅲ	18.8	29.7	17.6					E-3第4層
第27図73	底部a			15.0					E-1第2層
〃74	〃b			12.0					E-3第2層
〃75	〃b			18.2					E-3第3層
〃76	〃b			11.4					B-3第2層
〃77	〃c			16.8					B-3
〃78	〃イ			11.2					B-2第2層
〃79	〃イ			10.0					E-3第2層
〃80	〃イ								E-3第2層
〃81	〃ロ								E-3第2層

注.（　　）内は推定復元による数値である。

唇部から下に５㎝以上の箇所に箆削りを加えて仕上げるものもある。

Ⅱ類

Ⅱ類：口縁と胴部は外傾し、直口状となるもので、口縁は僅かに外反する。全体形は逆ハの字状となる。擬似肥厚のものも一例ある。口縁の傾き具合は50°～ 60°の範囲内にあるものである。この範囲のものが他のグループにおいても多い。外器面の仕上げの調整からａ～ｃに分類した。ａ種は口縁から胴下部まで箆削り後にナデを施して仕上げるものを主体とする。ｂ種は口縁はナデ仕上げであるが、口唇部から下に2.1～4.9㎝の箇所から箆削りを施して仕上げるものを主体とする。C種は口縁はナデ仕上げであるが、口唇部から下に5.0～9.1㎝の箇所から箆削りを施して仕上げるものを主体とする。

Ⅲ類

Ⅲ類：全体的な器形は主に逆ハの字状で、口縁でゆるく外反する平底のものを主体とする。口縁の傾き具合はⅡ類と同様に50°～ 60°の範囲のものが主体であるが、例外的に67°・68°を示す資料が含まれている。これは箆削りが施されている点などから分離し、本類に含めた。外面の器面の仕上げの状況からａ・ｂの２種に分けた。ａ種は口唇から下に0.5～4.9㎝の箇所から箆削りを施して仕上げるものを主体とする。ｂ種は口唇から下に5.0～6.4㎝の箇所から箆削りを施し仕上げるものを主とする。

Ⅳ類

Ⅳ類：全体形はⅡ・Ⅲ類と同様に逆ハの字状に開くが、口縁で僅かに内彎する。口縁で内彎する為口縁の傾き具合は、58°～ 68°と大きくなり、Ⅰ類と近似した数値となっている。ａ～ｃ種に細分した。ａ種は基本的にナデのみで仕上げるもの。ｂ種は口唇から下5.0㎝～6.5㎝の箇所から箆削りを施して仕上げるもの。ｃ種は口縁端部近くが指で窪ませて、凹線状に仕上げるものである。

Ⅴ類

Ⅴ類：外傾する肥厚口縁である。一点のみ出土した。

ロ）壺

壺はナデ肩のものが多く、怒り肩のタイプは一例のみ得られた。口縁形態からⅠ～Ⅲに分類した。

Ⅰ類

Ⅰ類は外反のきついタイプの壺で、ナデ肩が推定される。

Ⅱ類

Ⅱ類は外反のゆるいタイプの壺で、Ⅰ類と同様ナデ肩の壺が推定される。

Ⅲ類

Ⅲ類は直口気味に立ち上がり、僅かに外反する壺である。ナデ肩のものと怒り肩の二種類がある。

その他に耳（把手）の貼り付け位置や箆削りが施され始める位置を測定した。測定方法は口唇から耳（把手）の最も突出した部分を計測した。箆削りの場合は口唇に近い部分と平均的な部分から計測した（例言の13を参照）。

底部資料については復元資料が得られているので、上記した鍋形の分類に適用させた。それでも適応出来ないものについては、Ⅱ～Ⅲ類などと幅を持たせた。

壺の場合は復元資料が１例しかない為、個々の記述の中で分類し、特徴等を記すことにした。その他に鍋か壺に分類出来ない資料についても取り扱い、必要に応じて分類し特徴等を個々に記した。

土器は焼成が悪く、脆いものが主体であり、焼成の良いものは壺形土器で２・３点に認められる程度である。

第Ⅰ地区　土器

本地区では、2,554個の土器が得られた（第７表）。器種は鍋形土器と壺形土器の２器種のみである。前記したように、鍋形土器が最も多く出土した。以下、分類概念に従って記述を行なう。

１）鍋形土器

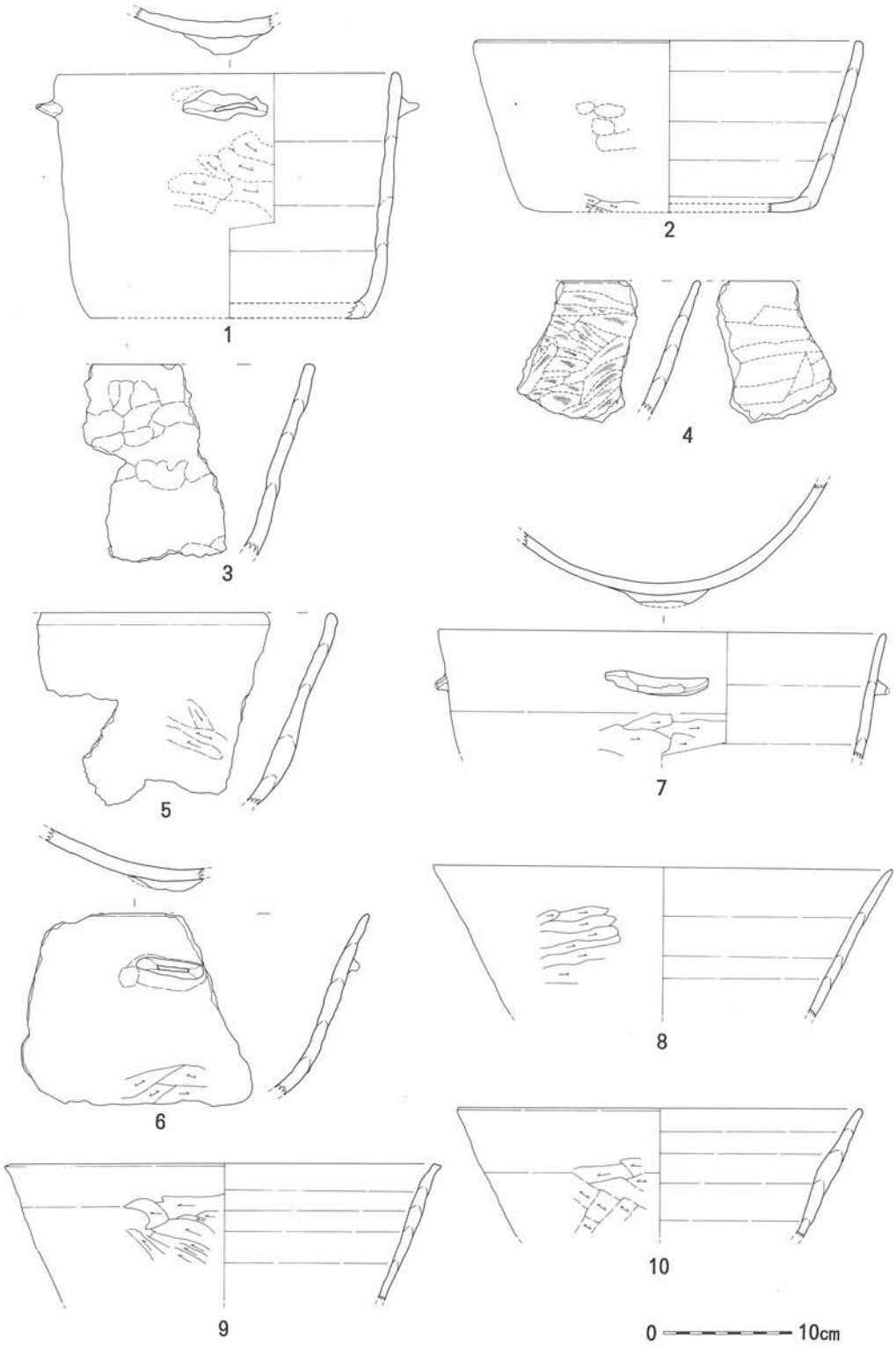
Ⅰ類ａ

第20図１は推算されたサイズが口径26.5㎝、器高19.1㎝、底径21.6㎝を測った。口唇から下、３㎝前後の箇所に耳を貼り付ける。口唇を平坦に成形する。胴中央から底部まで箆削りを施した後にナデ消すが底部近くでは消えきっていない。器色は口縁から底部近くまで明茶色で、底部は茶褐色となる。胎土は細かい。混入物はB類（多孔状）である。E－２第２層。

同図２は推算口径3.0㎝、器高13.4㎝、推算底径22㎝を測った。口唇を平坦に成形するが雑である。外面は箆削りで全体的に整形した後にナデを施すが底部近くは消し忘れている。内面はナデ仕上げである。器色は口縁から底部近くまでが淡黄茶色で、底部は淡褐色を帯びる。胎土は細かい。混入物はA類である。石積み中から採集。

同図３・４はいづれも口唇を平坦に成形する。両者ともナデで仕上げるが、３は雑である。４は指で押し引いた様なナデを両面に施している。３の内面もナデ仕上げであるが、中央に鉄滓が付着する器色は両者とも明黄色である。胎土は両者とも粗い。３はA類、４がB類（多孔状）となっている。３はE－２第２層出土。４がE－２第３層出土。

同図５は口唇を舌状に成形する。胴下部は箆削り後にナデを施すが消えきっていない。また、指による押し引きが一部分に認められる。器色は茶褐色を主体とし部分的に褐色となる。胎土は細かく、混入物はA類である。B－０第１層出土。



第20図（PL. 23）土器　Ⅰ類a：1～5、Ⅰ類b：6・7、Ⅱ類a：8・9、Ⅱ類b：10

Ⅰ類b

同図6は口縁から底部までの破片である。口唇は尖り気味である。口唇から下に4㎝の箇所に耳を貼り付ける。耳の下から底部近くまでは器面が禿げ落ちるが、残存する部分からは耳から下に篦削りを施している様である。器色は明茶色を主とする。底部近くでは茶褐色となる。胎土は細かい。混入物はB類（多孔状)。B－3第2層出土。

同図7は推算口径34.8㎝を測る。口唇は尖り、口唇下 4㎝の筒所に耳を貼り付ける。口唇から下7㎝の箇所から篦削りが施される為、部分的に稜が生じてくる。器色は褐色を主体とするが、部分的に茶褐色となる。胎土は粗い。A類。E－1第2層。

Ⅱ類a

同図8は推算口径35.6㎝を測った。口唇は尖状に尖らせて成形する。器面は篦削りとナデを併用する。器色は褐色を主とするが部分的に淡黄色となる。胎土は細かい。B類（多孔状）。B－2第1層出土。

同図9は口径が35.8㎝と推算できた。口唇部を平坦に成形するが雑である。篦削り後にナデを施すが消え切っていない箇所が部分的に認められる。器色は淡茶色を主体とするが篦削りが残存する箇所のみが茶褐色となる。胎土は細かい。A類。E－2第2層出土。

Ⅱ類b

同図10の口径の推算は31.4㎝と求めることが出来た。口唇は舌状を呈し、比較的丁寧である。口唇直下4.5㎝の箇所から篦削りが施される為、稜が出来る。器色は茶褐色を主体とするが口縁では淡茶色となる。胎土が細かい。A類。E－3第3層。

第21図11は口径が29.0㎝と推算できた。口唇は尖らすが、部分的に平坦となる。外面は口唇直下4.5㎝の箇所から篦削りを施す。器色は褐色を帯びる。胎土は細かい。A類。B－3第4層出土。

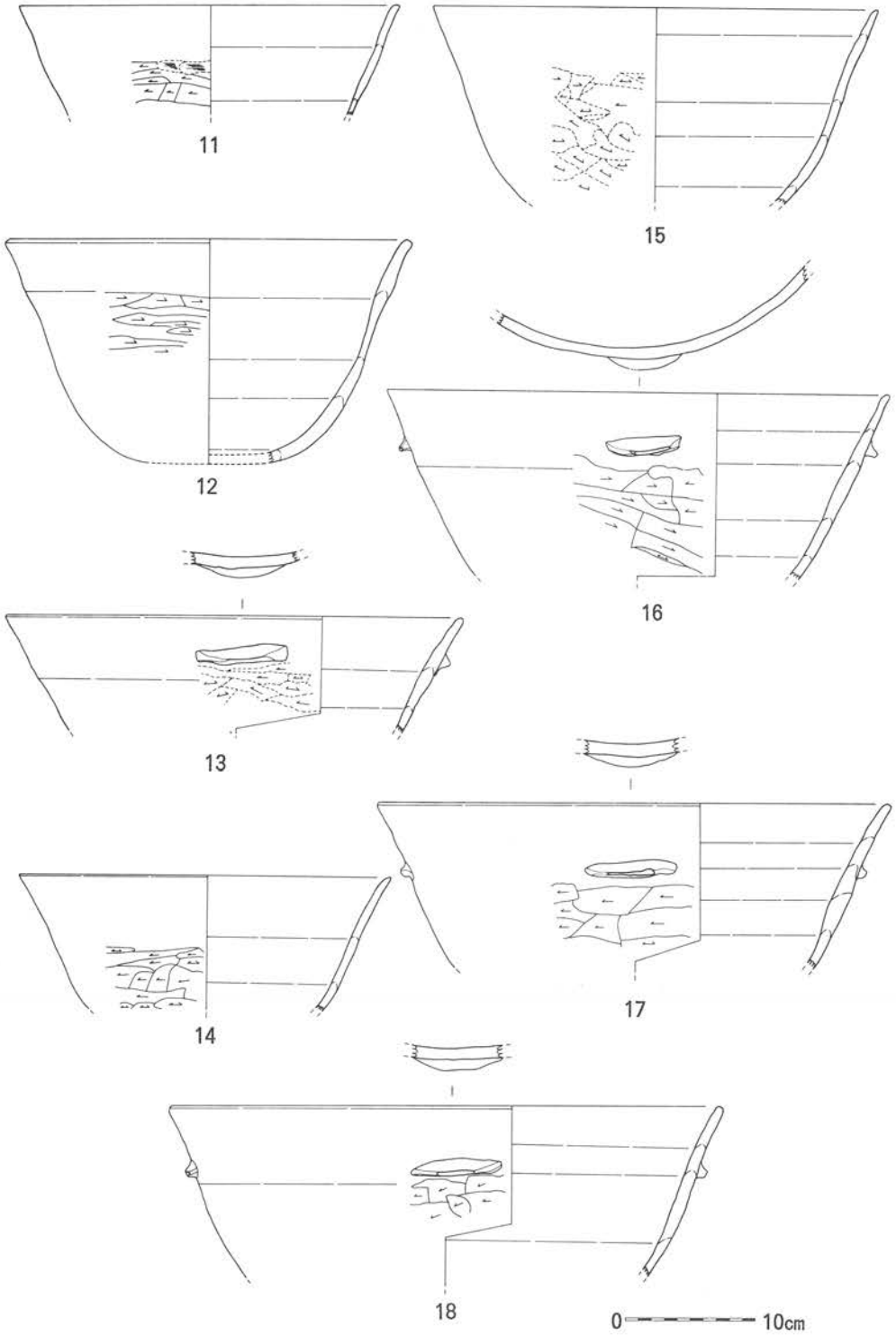
同図12は篦削りで口縁に段を作り、擬似肥厚口縁とする口唇は平坦に仕上げる。復元されたサイズは口径30.8㎝、器高17.2㎝、底径10.4㎝である。口縁はナデで、肥厚帯直下から篦削りを施すが大半はナデ消される。器色は口縁から底部近くまでが淡黄色。底部は淡褐色となる。胎土は細かい。A類。層不明。

同図13は口径が36.8㎝を測った。口唇は尖り気味に成形する。口唇直下3.5㎝の箇所に耳を貼り付ける。胴部の篦削りは大半がナデ消されている。器色は茶褐色を主とするが部分的に明茶色を帯びる。胎土は細かい。A類。B－3第4層出土。

Ⅱ類c

同図14は口径の推算が28.4㎝を測った。口唇は尖状に成形するが、口唇直下5.5㎝の箇所から篦削りを施す。器色は茶褐色を主体とするが一部分褐色となる。胎土は細かい。B類（多孔状)。E－3第2層出土。

同図15は推算口径が34㎝を測る。口唇は尖状に丁寧に成形する。篦削りは口唇直下5.5㎝の箇



第21図（PL. 24）土器　Ⅱ類ｂ:11～13、Ⅱ類ｃ:14～18

所から底部近くに施すが大半はナデ消される。器色は淡茶色を主体とするが底部近くで褐色となる胎土は細かい。A類。E－3第2層出土。

同図16は口径が38.4cmと推算された。口唇は尖状に成形するが部分的に平坦となる。耳は口唇部から下に4.5cmの箇所に貼り付ける。篦削りは口唇から下に5.8cmの箇所から施される。器色は淡茶褐色を主体とするが部分的に褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。B－1第1層。

同図17は推算口径39.2cmを測った。口唇は舌状に成形する。口唇から下に5.5cmの箇所に耳を貼り付ける。篦削りは耳の直下から施される。器色は淡茶色を主とするが部分的に茶褐色となる。胎土は粗い。B類（多孔状）。B－3第1層出土。

同図18は口径が42.4cmと求められた。口唇は舌状である。耳の貼り付け箇所は口唇から下に5cmであり、その直下から篦削りが始まるが部分的にナデ消される。器色は淡茶色を主体とするが部分的に茶褐色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。Bトレンチ表採。

第22図19は口径が44cmと推算出来た。口唇は舌状を呈す。耳は口唇から下に4cmの箇所に貼り付ける。篦削りは口唇から下7.7cmの箇所から施される。器色は口縁が淡茶色、胴上部から下は褐色を帯びる。胎土は粗い。A類。E－1第2層。

Ⅰ類a、Ⅱ類a・b・c等の破片資料

主に耳（把手）を貼り付けるものである。以下、各種類別に記す。

Ⅰ類a

第22図20は口唇を尖り気味に成形した後に尖端を軽く平坦に仕上げる。口唇から下に3.5cmの箇所に耳を貼り付ける。ナデと指圧で調整される。器色は明茶色。胎土は細かい。A類。E－3第4層。

同図21は口唇を舌状に成形する。口唇から下2.6cmの箇所に耳を貼り付ける。篦削り後にナデを施している。器色は淡茶色を主とするが部分的に褐色を帯びる。胎土は細かい。A類。E－1第3層。

Ⅱ類a

同図22は口唇を舌状に成形するが部分的に平坦に調整する。篦削り後に篦ナデを施すが消え切っていない。器色は黄緑色を帯びている。胎土は細かい。B類（多孔状）。E－3第3層。

Ⅱ類b

同図23は口唇を舌状に成形する。口唇から下に2.8cmの箇所に耳を貼り付ける。篦削りは口唇から下4cmの箇所から施されるがナデ消される。胎土は粗い。B類（多孔状）。E－3第3層。

Ⅱ類c

同図24・25の口唇は尖状に成形する。同図26・27の口唇は舌状に成形して仕上げる。耳の貼り付け位置は、24・25が4.3cmの箇所に、26は5.1cm、27が3.6cmの箇所に貼り付いている。いづれも口唇から耳までの距離である。篦削りの施された箇所についても口唇から計測した。24は

第22図（PL. 25）土器　Ⅱ類ｃ:19、Ⅰ類ａ:20•21、Ⅱ類ａ:22、Ⅱ類ｂ:23、Ⅱ類ｃ:24～27、Ⅱ類ａかⅡ類ｃ:28、Ⅲ類ａ:29•30

6.6cm、25が7.0cm。26は6.9cm、27が5.2cmを測った。口縁のナデを除いて篦削りで仕上げるものが特徴である。器色は24・27が褐色。25は黄褐色、26が茶褐色を帯びる。胎土の細かいものは25のみで他は粗い。25のみB類（多孔状）で他はA類である。24はB－3第4層、25がEトレンチ第2層出土。26はB－3第2層、27がB－3第3層出土。

Ⅱ類aかⅡ類c

同図28は小破片の為、種類を特定出来ない資料である。外面にはナデ以外に刷毛目様の調整を施すが消え切っていない。器色は暗黄色を帯びる。胎土は細かい。A類。E－1第1層。

Ⅲ類a

同図29は推算口径が37.8cmを測る口唇外端を突出させて、平坦に仕上げる。胴上部は横位の篦削りを施し稜を造る。篦削りは1.5～3.0cmの範囲に限定される。胴部は篦削り後に指ナデや篦ナデで消しているが消え切っていない。器色は淡茶色を主として部分的に茶褐色を帯びている。胎土は粗い。A類。E－3第3層。

同図30も口唇外端を同図29よりも大きく、外側に突出させる。口唇から下、2.1cmの箇所から篦削りを施す。器色は淡茶色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。E－3第2層出土。

第23図31は推算口径が25cmを測る。耳は口唇から下、3cm前後の箇所に貼り付ける。篦削りは口唇から下に4.5cmの箇所から施されている。器色は茶褐色を主体とするが部分的に褐色を帯びる。胎土は粗く、B類（多孔状）。B－2第2層。

同図32は口径39.8cm、器高17.7cm、底径22.8cmで推定復元された資料である。口唇から下に1.5cmの箇所から篦削りを施す。篦削りは横位方向に4～5cm幅で帯状に施す。胴部は篦削り後にナデを施すが徹底しない。器色は茶褐色を帯びている。胎土は粗い。A類。E－3第2層。

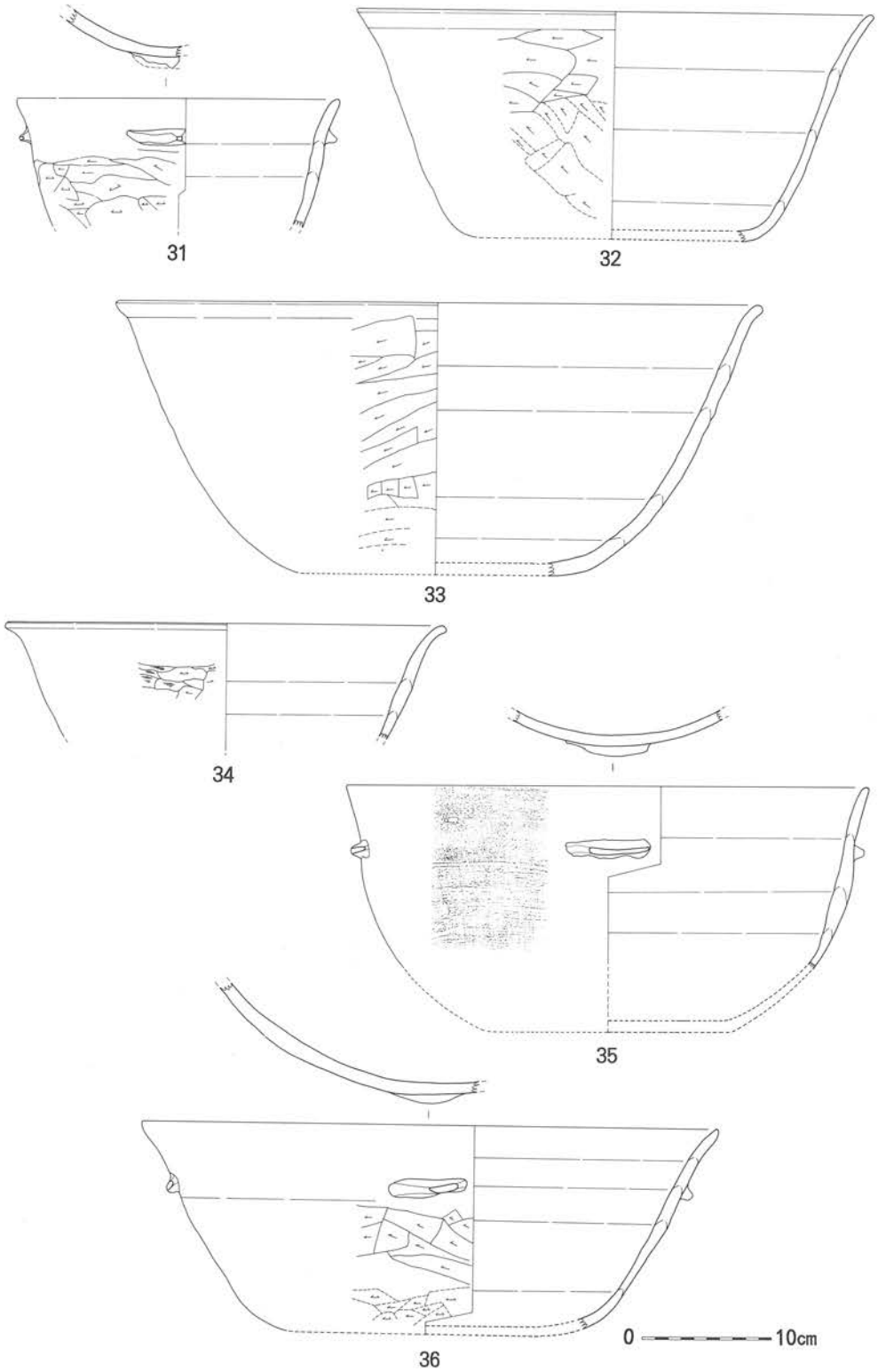
同図33は推定復元を試みた資料である。サイズは口径49.8cm、器高21cm、底径20.5cmを測った。篦削りは口唇から下、2cmの箇所から胴下部まで施す。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。A類である。B－3第3層出土。

Ⅲ類b

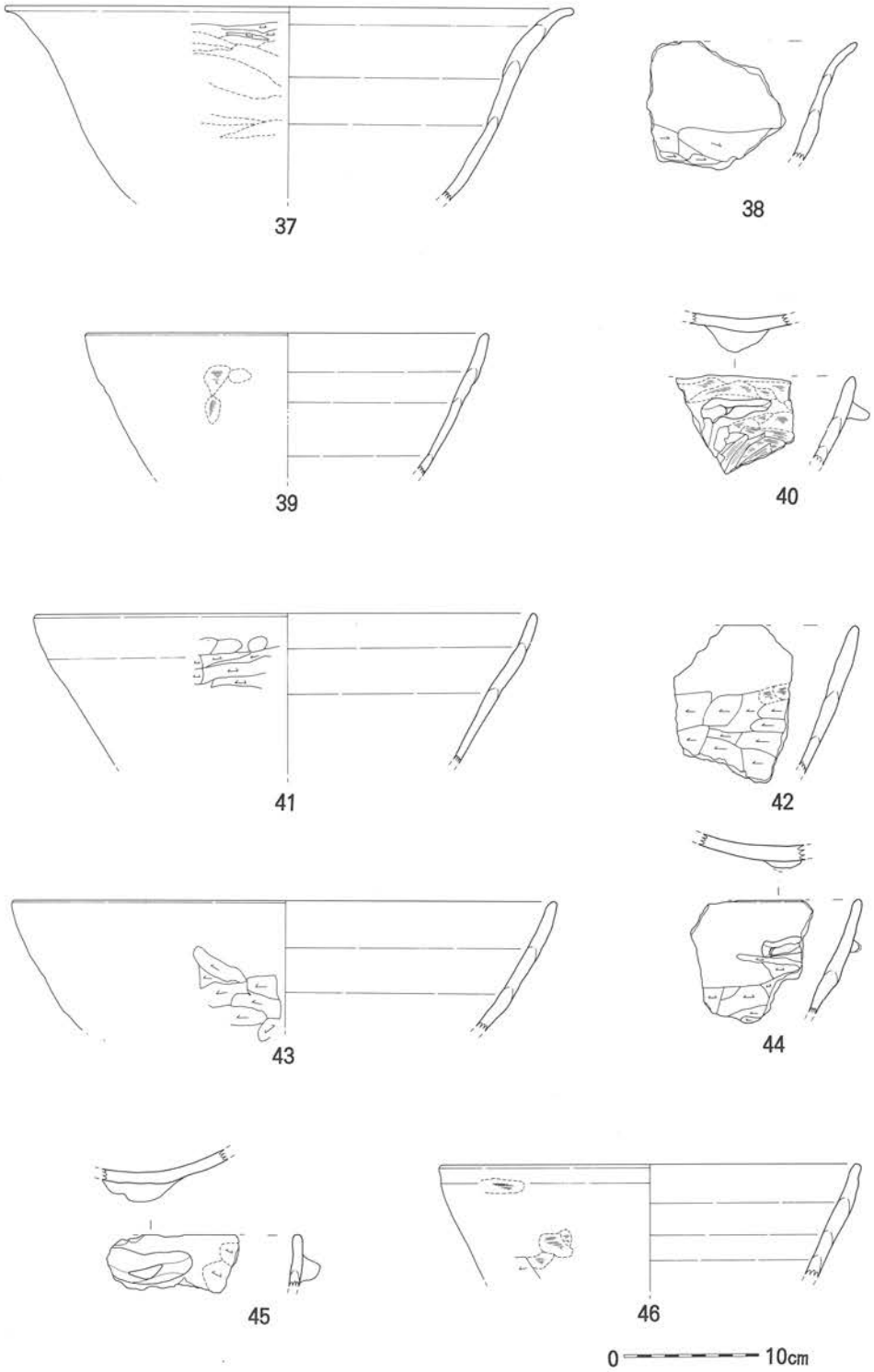
同図34はⅢ類aと同様に口唇外端を突出させる点で共通するが、口唇を舌状に成形する点で異なっている。口唇から下、5.5cmの箇所から篦削りが施されるが部分的に刷毛目様の調整痕や篦ナデがみられる。器色は褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。B－3第2層。

同図35は口縁の傾き具合が67°を示した資料である。復元されたサイズは、口径40.3cm、器高20cm、底径20cmである。耳の貼り付けは口唇から下、5cmの箇所にある。篦削りは耳の直下から施される。削りの方向は右から左である。篦削りの単位はつかめない。器色は褐色を主体とし部分的に茶褐色を帯びる。胎土は細かい。A類。B－3・層不明。

同図36は口唇を尖状に成形する。推算されたサイズは口径が44.4cm、器高16.2cm、底径21cmである。耳は口唇から下、5.5cm内外に貼り付ける。篦削りは口唇直下、8cmの箇所から底部近くまで施す胴中央から底部近くではナデ消しやナデがみられる。器色は口縁部で淡茶色、他の



第23図（PL. 26）土器　Ⅲ類ａ:31～33、Ⅲ類ｂ:34～36



第24図（PL. 27）土器　Ⅲ類:37・38、Ⅳ類ａ:39・40、Ⅳ類ｂ:41～45、Ⅳ類ｃ:46

部位は褐色となる。胎土は細かい。A類。B－２第１層出土。

第24図37は口径の推算が42.6cmを測る。口唇から下に2.7cmの箇所から篦削りを施すが大半がナデ消されている。部分的に篦ナデもみられる。器色は黄褐色を帯びる。胎土は粗い。A類。B－０第１層。

同図38は口唇から下、６cmの箇所から篦削りを施す。器色は茶褐色を主体とするが部分的に褐色を呈している。胎土は細かい。A類。B－０第１層。

Ⅳ類ａ

同図39は口径が30.2cmと推算出来た。篦削り後にナデで仕上げとするが部分的な指圧もみられる。黄褐色を呈する。胎土は粗い。B類（多孔状）。B－１第２層。

同図40は口唇から下、２cmの箇所に耳を貼り付ける。外面はナデで仕上げる。器色は黄褐色を帯びる。胎土は粗い。A類。E－３第３層。

Ⅳ類ｂ

同図41は口径が37.2cmと推算できた。同図41・42は両者とも黄褐色を帯びる。篦削りは41が口唇から下、3.5cmの箇所から施すが大半がナデ消されている。42は口唇直下4.5cmの箇所から篦削りを施す。胎土は両者とも細かい。両方ともB類（多孔状）である。41はE－３第２層出土。42がB－３第１層の出土である。

同図42は口径が40.4cmを測った。同図43・44の器色は茶褐色を帯びる。篦削りは42が口唇直下6.2cmの箇所から施す。44は口唇から下、5.5cmの箇所から施している。44の耳は口唇から下、3.3cmの箇所に貼り付ける。胎土は両者とも細かい。混入物は両者ともB類で多孔状を呈する。43はB－０第１層出土。44はE－３第２層出土。

同図45は口唇から下、2.2cmの箇所に耳を貼り付ける。口唇は平坦に成形するが部分的に丸味を帯びている。篦削りは口唇近くまで施されるがナデ消される。器色は褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。E－２第２層出土。

Ⅳ類ｃ

同図46は口縁を窪ませて凹状に成形し廻らす。ナデ仕上げであるが僅かに篦削りの痕跡が認められる。推算口径15.7cmを測る。器色は黄褐色を帯びる胎土は細かい。B類（多孔状）。E－１第１層出土。

Ⅳ類ａ・ｂ・ｃの破片資料

主に口縁の小破片や耳を貼り付けたものを図化した。

Ⅳ類ａ

第25図47～49に図示した。基本的に３点ともナデで仕上げる。47と48のみ篦削りの痕跡があるがナデ消されていない。器色は47が淡茶色。48は茶褐色で49が淡黄色を帯びている。胎土は47のみ粗く、他は細かい。47のみB類（多孔状）、他はA類。47はE－２第２層、48がE－１第１層。49はE－３第３層の出土である。

Ⅳ類ｂ

同図50は口唇から下に1.5㎝の箇所に耳を貼り付ける。篦削りの耳は直下に施されるがナデ消されている。器色は黄褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。E－３第２層出土。

Ⅳ類ｃ

同図51・52は口縁の端部近くを指圧で窪ませ凹線状に成形する。両者とも茶褐色を帯びている。52は細かい胎土であり、53は粗い。両者ともB類（多孔状）。51はE－１第１層。52はE－２第２層出土。

Ⅴ類

同図53は肥厚口縁で、口唇を尖らして成形する。肥厚帯と同帯直下に肥厚を強調（整形）する為の篦削りを施す。器色は茶褐色を帯びている。胎土は粗い。A類、B－３第４層出土。

耳（把手）の資料

第Ⅰ地区から得られた耳（把手）の資料をすべて図化した。これらは明確な分類が出来ないが可能性のあるタイプに分類し、疑問符を各類の後に付した。

Ⅰ類ａ？

同図54～58に示した５点である。耳（把手）の貼り付け位置は、口唇から下に1.8～2.8㎝の範囲内に納まる。篦削りもナデ消した例は58のみであった。他はナデと指圧によって仕上げる。器色は54・55が黄褐色を帯びる。56～58は茶褐色を呈する。胎土は57・58が細かく、他は粗い。A類は55・56・58の３点で、他の２点はB類（多孔状）である。出土地点及び層は54がE－１第２層、55がE－３第３層。56はB－３第４層、57・58の２点がE－２第２層出土である。

Ⅲ類ｂ？

第25図59は口唇を尖状に尖らす。ナデのみで仕上げている。耳は口唇から下に4.1㎝の位置に貼り付けている。器色は茶褐色を帯びている。胎土は細かい、A類である。B－１第１層出土。

Ⅳ類ｂ？

同図60は口唇を舌状に成形する。耳は口唇から下に1.2㎝の箇所に貼り付けている。ナデのみが観察できる。器色は黄褐色を呈する。胎土は細かい。A類である。表採。

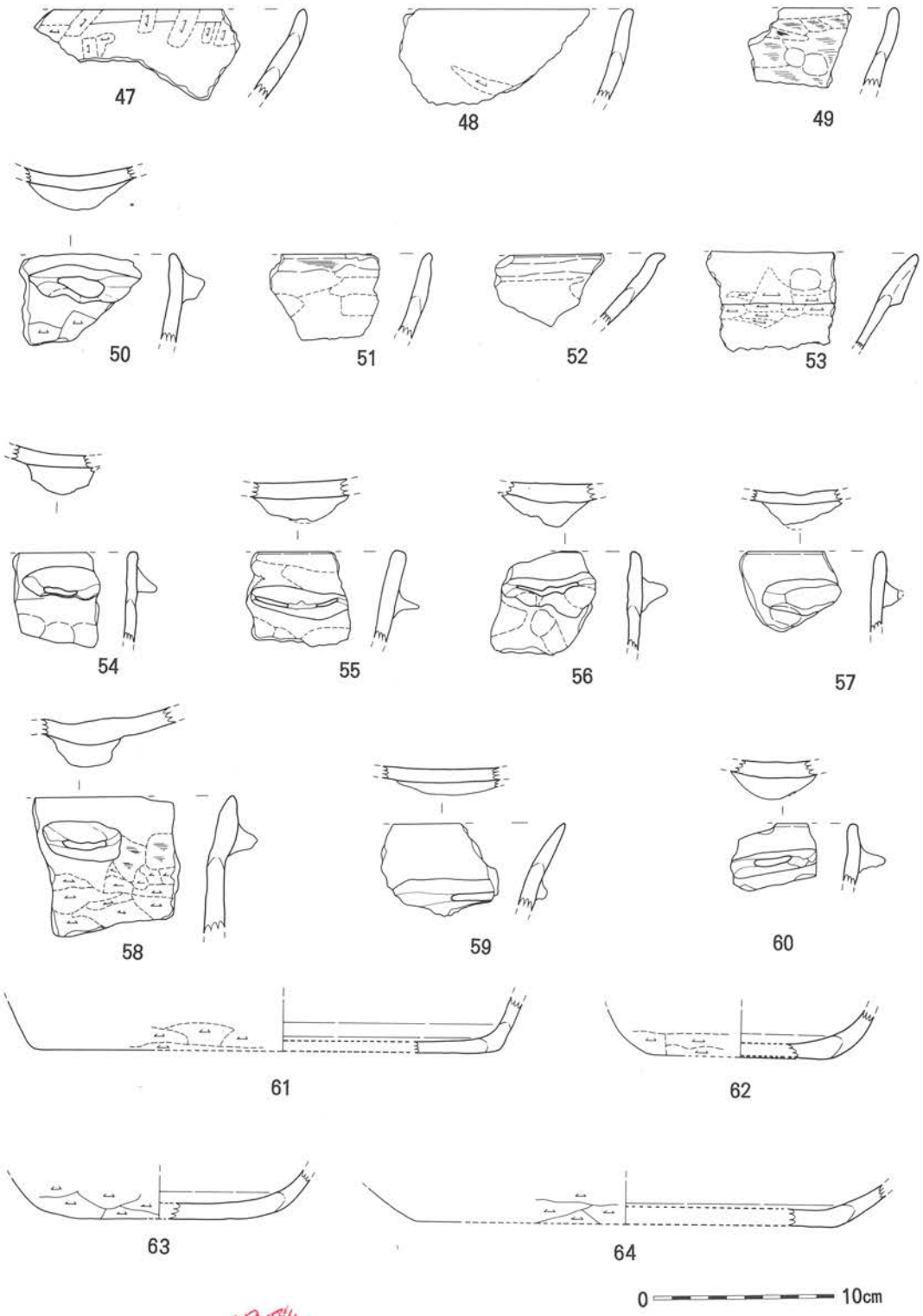
底部資料

鍋形土器の底部として特定できた資料を４点図化した。いずれも復元資料や器形からある程度予想出来そうなものを対象とした。分類は鍋形土器のものと一致させた。

Ⅰ類

同図61は推算底径が25㎝と求められた。外面に篦削りを施した後にナデを施して仕上げる。底面は器面の保持が悪く、不明瞭であるがナデ調整かと考えられた。器色は茶褐色を帯びている。胎土は粗い、A類である。第Ⅰ地区層不明。

Ⅱ～Ⅲ類



鍋形

第25図（PL. 28）土器　Ⅳ類ａ:47～49、Ⅳ類ｂ:50、Ⅳ類ｃ:51・52、Ⅴ類:53、Ⅰ類ａ？:54～58、Ⅲ類ｂ?:59、Ⅳ類ｂ?:60、Ⅰ類:61、Ⅱ～Ⅲ類:62、Ⅲ類ｂ：64

底部　1.63

同図62は底面及び外面を篦削りを施した後にナデを施すが消え切っていない。同図63は外面が篦削りを施し、底面は篦削り後にナデを施して仕上げている。62・63の推算底径は10cmであった。62は淡黄色、63が茶褐色を帯びている。胎土は両者とも粗い。62はB類（多孔状）。63がA類に含まれる。62はE－3第2層出土。63はE－3第3層出土。

Ⅲ類b

同図64は推算底径が22.4cmを測った。外面および底面は篦削りを施すが大半が雑なナデで消されている。器色は黄褐色を主体とするが部分的に褐色を帯びている。胎土は粗い。A類である。B－3第4層。

2）壺形土器

Ⅰ類

第26図65は推算口径が21.0cmを測る。口唇は舌状に仕上げるが部分的に平坦に成形する箇所もある。両面とも丁寧なナデで仕上げる。器色は黄褐色を帯びる。胎土は細かい。A類。E－2第2層出土。

Ⅱ類

同図66は推算口径19cmを測った。口唇は尖状に尖らして成形する。丁寧にナデを施す。器色は淡茶色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。B－2第2層。

同図67は口径の推算が18.4cmを測った。口唇は舌状に成形する。口唇から下に4.4cmの箇所から篦削りを施してナデ消している。器色は黄褐色を主体として部分的に淡橙色となる。胎土は細かい。B類（多孔状）。B－3第2層。

第26図68は口径が16cmと推算できた。口縁の内外端は剥離し、口唇が僅かに残る。篦削りは胴中央から下に施されるが大部分はナデ消されている。器色は暗褐色を主体とするが部分的に灰黄色を帯びている。胎土は細かい。B類（多孔状）。E－3第2層出土。

同図69は推算口径が24cmを測る。大半がナデで仕上げるが、部分的に篦削りを施した後にナデで調整している。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。A類。B－1第1層。

Ⅲ類

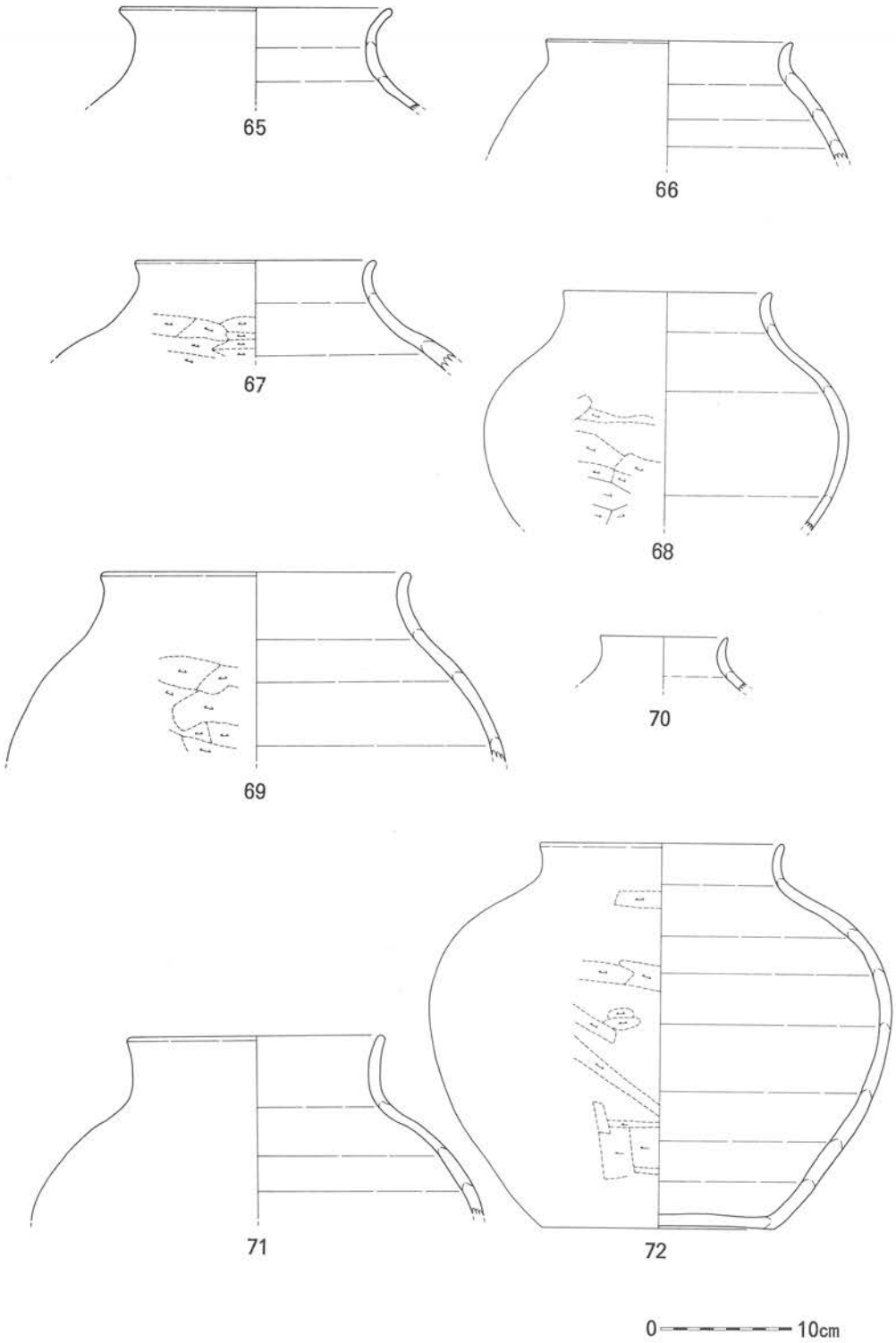
同図70は口径の推算が9.6cmを測った。口唇は尖状に尖らせて成形する。ナデは丁寧に施されている。器色は黄褐色を帯びる。胎土は細かい。混入物はB類（多孔状）である。B－3第2層。

同図71は口径が20cmを測った。口唇は平坦に仕上げる。他は、ナデで仕上げる。器色は黄褐色を主体とするが胴部で部分的に褐色を帯びている。B－3第4層。

同図72には唯一の復元資料である。サイズは口径が18.8cm。器高は29.7cm、底径が17.6cmを測った。篦削りは胴上部から底部近くまで施すが大半がナデ調整や篦ナデで消されている。胎土は細かい。A類。E－3第4層出土。

壺形土器の底部と器種不明の底部資料

壺の底部は便宜的に立ち上がりの形状からa～c種の三種に分類した。分類概念は以下に略記した後に個々の特徴を記述する。



第26図（PL. 29）土器　Ⅰ類:65、Ⅱ類:66～69、Ⅲ類:70～72

a種：底面からの立ち上がりで丸味を保持しながら外側に開き気味に胴部へ移行する。

b種：底面からの立ち上がりは直線的に立ち上がり外側に開き気味に胴部へ移行する。

c種：底面からの立ち上がりは垂直に近い感じで立ち上がりそのまま外側に開き気味に胴部へ移行する。

a種

第27図73は底径の直径が15cmを測った。外面の胴上部に篦削りが部分的に観察される。他はナデや篦ナデ（光沢を帯びる）を施している。底面はナデ仕上げである。器色は黄褐色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。E－1第2層。

b種

同図74は底径の推算が12cmを測った。外面は篦削りを施した後にナデ消すが消えきっていない。底面は器面が磨耗する為、判然としない。器色は黄褐色を帯びている。胎土は精選される。C類である。E－3第2層。

同図75は推算底径18.2cmと求められた。外面は篦削り後に篦ナデを主体にナデ消しを施す。底面は器面の大半が剥落するが残存面からナデ仕上げかとみられる。器色は黄褐色を主体とするが部分的に橙色を帯びる。胎土は細かい。A類。E－3第3層。

同図76は底径が11.4cmと求められた。外面は篦削りを施した後にナデを施すが徹底しない。底面はナデ仕上げ。器色は淡褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。B－3第2層。

c種

同図77は底径が16.8cmと推算できた。外面は雑なナデで仕上げる。底面は器面が磨耗し判然としないがナデかとみられる。器色は淡茶色を呈する。胎土は細かい。A類。B－3グリッド出土。

器種不明の底部

器種の特定出来ない底部資料である。壺の底部と同様に立ち上がりの形状で分類を試みた。分類は以下に示すイ・ロの2種類に分けた。

イ種：底面からの立ち上がりで丸味を保持しながら外側に開き気味に胴部へ移行する。

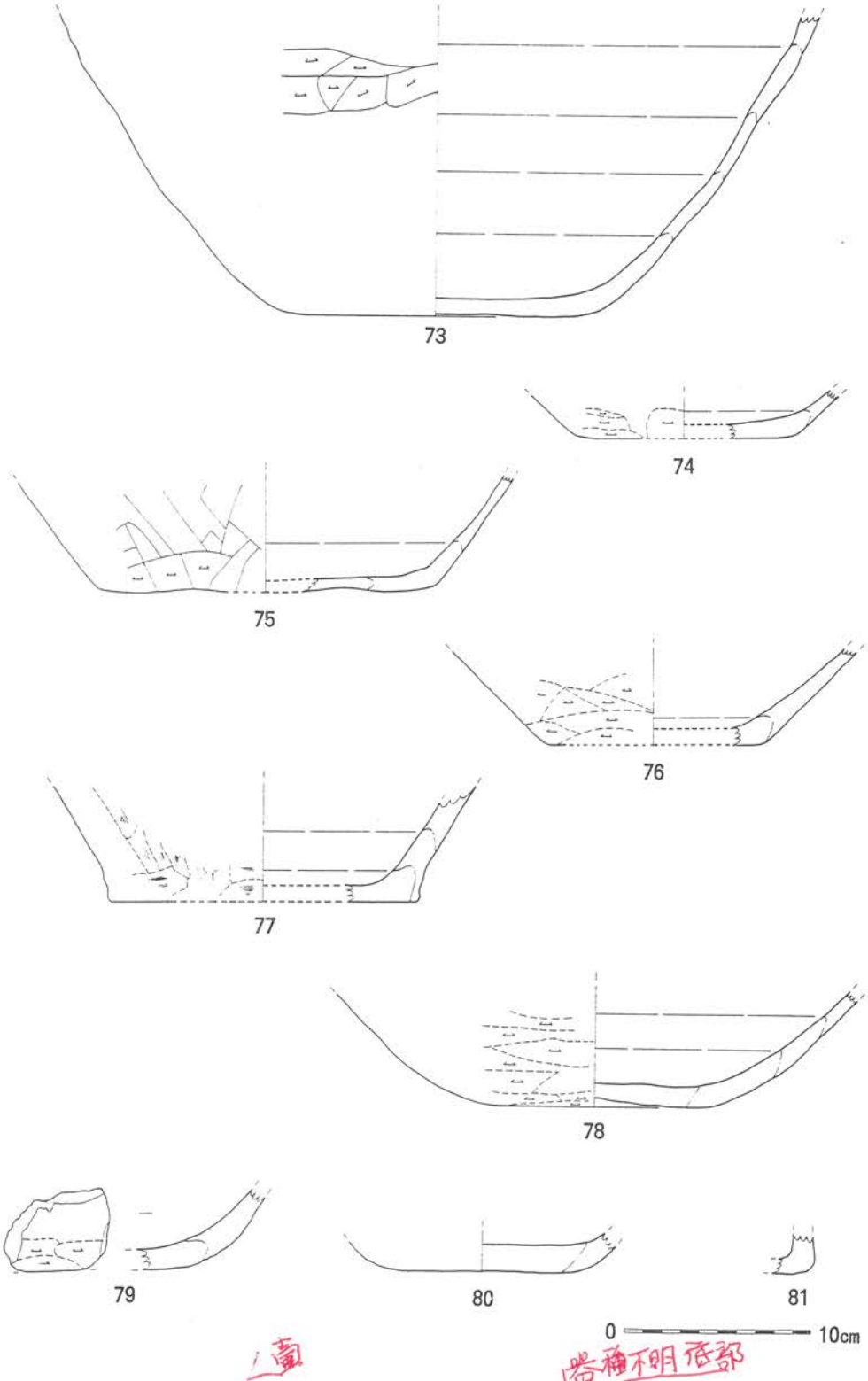
ロ種：底面からの立ち上がりは垂直に近い感じで立ち上がる。

イ種

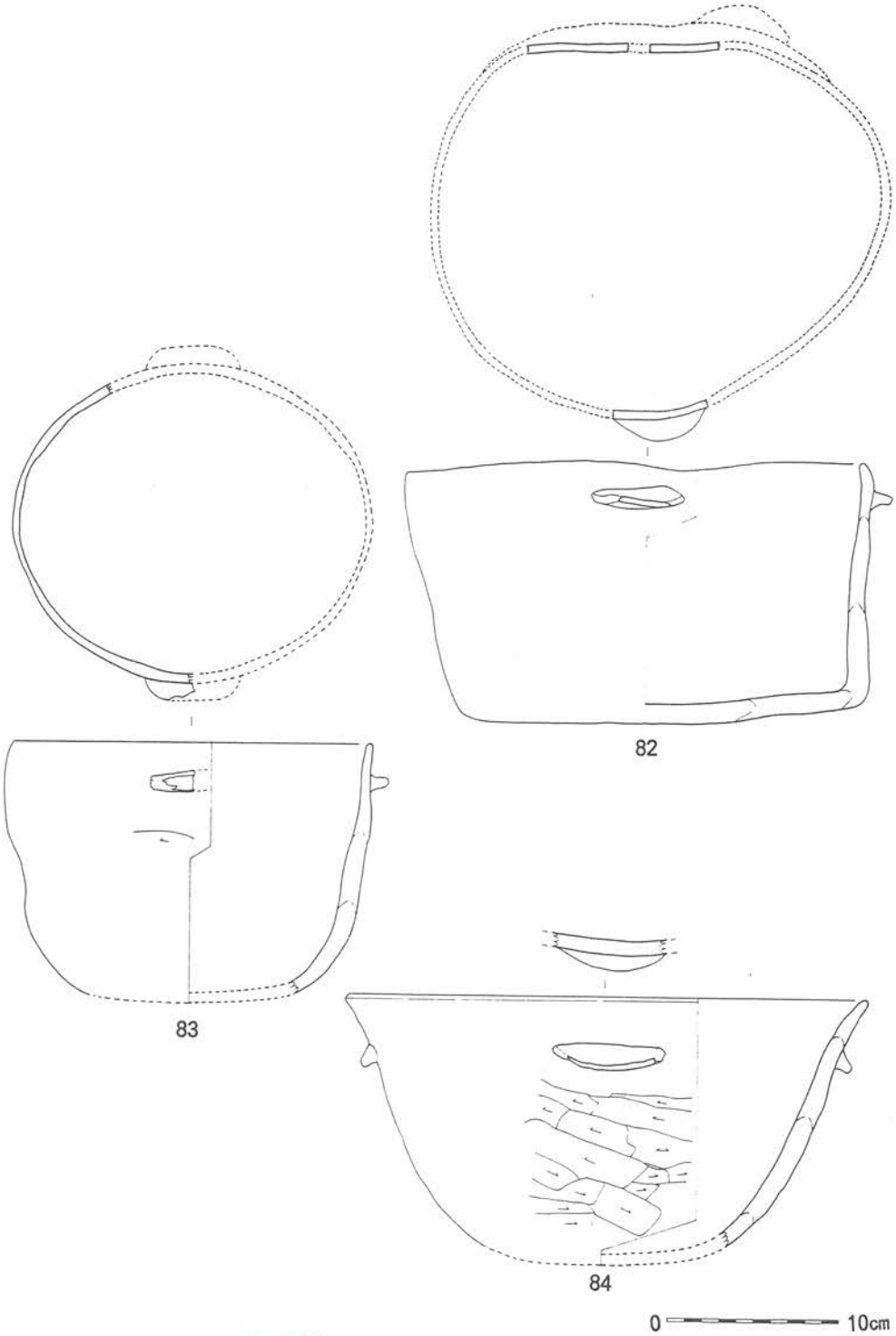
第27図78は底径が11.2cmと求められた。外面および底面は篦削り後にナデを施すが徹底しない。器色は淡褐色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。B－2第2層。

同図79は底面の立ち上がりの部分と底面に篦削りを施した後にナデを施すが消え切っていない。他はナデで仕上げる。器色は黄褐色を主体とするが一部分褐色を帯びている箇所がある。胎土は粗い。B類（多孔状）。E－3第2層。

同図80は推算底径が10cmと求められた。外面および底面はナデで仕上げるが徹底しない。器色は淡褐色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。E－3第2層出土。



第27図（PL. 30）土器　a種:73、b種:74～76、C種:77、イ種:78～80、ロ種:81



鍋形

第28図（PL. 31）土器　Ⅰ類ａ:82、Ⅰ類ｂ:83、Ⅲ類ｂ:84

ロ種

同図81は外面をナデで仕上げる。底面は磨耗するがナデが推定される。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。C類。E－3第2層。

鍋形Ⅰ類a・b、同Ⅲ類bの追加資料

第28図82～84は鍋形土器のⅠ類a・b及びⅢ類bの資料である。同図82は成形後に形が崩れたものをそのまま焼成したものであろう。胴下部が内側にきつく歪んだ状態で焼成されるが焼成時に破損したものであり、鍋としての使用はない。器形からⅠ類aに所属する。外面はナデで雑に仕上げる。底面は箆削り後にナデを施したようである。胎土は細かい。A類。耳は口唇から下2.2cmの箇所に貼り付けている口縁は略三角形状に成形する。口縁の長径は27.2cm、短径は22.1cmを測る。器高の最高は15.9cm。底径の長径23.0cm、短径21.0cmを測る。E－3第2層出土。同図83は唯一の軽石を混入させる資料である。これも上記、82と同様に鍋としての使用はないものである。外面には軽石を混入させた為、ヒビ割れが生じている。口唇から下2.5cmの箇所に耳を貼り付ける。また、口唇から下、5cmの箇所に箆削りが施されているが大半はナデ消されている。歪な形ではあるが諸特徴からⅠ類bに所属するものとみられる。口縁の長径21.2cm、短径18.6cm、器高の最大は16cmを測る。底部は丸底気味の平底である。底部の長径は12.0cm、短径が10cmを測る。胎土は粗い。E類。E－3第3層出土。

同図84はⅢ類bに所属する資料である。口径の推算は30.8cm、器高が15.8cm、底径は8cmを測る。口唇部から下に3.8cmの箇所に耳を貼り付ける。胴部から下6.5cmの箇所から箆削りが施される。胎土は細かい。A類。B－1第1層出土。

ト．パナリ焼

ここで取り扱ったパナリ焼きとは早稲田大学の編年第四期[註1]相当に位置付けられる資料である。従来の外耳土器[註2]や中森式土器[註3]とは器形・器種などが異なり、器壁が外耳土器と比較して厚手であるのも特徴のひとつである。回転台を使用したものと使用しないものがあるが本遺跡の資料からは前者のものが多い。器面調整の調整手法も外耳土器よりも丁寧である。ナデの場合は器面が滑面に仕上げられる点などから篦ナデや水ナデが考えられる。篦削りの場合は器面の凹凸をなくす為、凸面を削り曲線（正円）に近い状態に削り出している。従来までパナリ焼きが報告された例がなく、その概念も不鮮明である。

パナリ焼といえばすぐ八重山を連想するほどポピュラーなものであるがその起源等については不明である。記録によると安政4年[註4]（1857年）頃までパナリ焼が作られていたようである。また、竹富島ではパナリ焼を造る際に謡われた「はなり焼あゆー[註5]」が知られている。

本遺跡のパナリ焼は出土傾向から第1層に集中し、染付のⅦ類と平行する関係から一応、16世紀後半から17世紀初め頃から登場してくることが考えられる。また、外耳土器とも一時期重なる。第Ⅰ地区で最も多く出土し、第Ⅱ地区では壺の胴部片が1点のみ得られた。

本遺跡で出土したパナリ焼の器種は壺・小鉢・火舎の三器種であった。分類は壺形のみ実施した。他の器種は各二・三点ずつ得られているので分類を実施しなかった（第9表）。以下、壺・小鉢・火舎の順に記述を行うことにする。

（a）壺

壺の中には広口の壺と口の狭い壺の二種類がある。広口の壺は下脹れの丸底気味[註6]の器形が考えられる。口縁形態等からa～d種に分類した。

a種：広口の壺で、口縁部の外反はゆるく、頸部が短い。

b種：口の狭い壺で、口縁部がきつく外反するタイプである。

c種：b種と同様に口が狭い。口縁部がゆるく外反する。

d種：口縁部の外反はc種よりもゆるく、直口状に近い。

以下、種別に記述する。

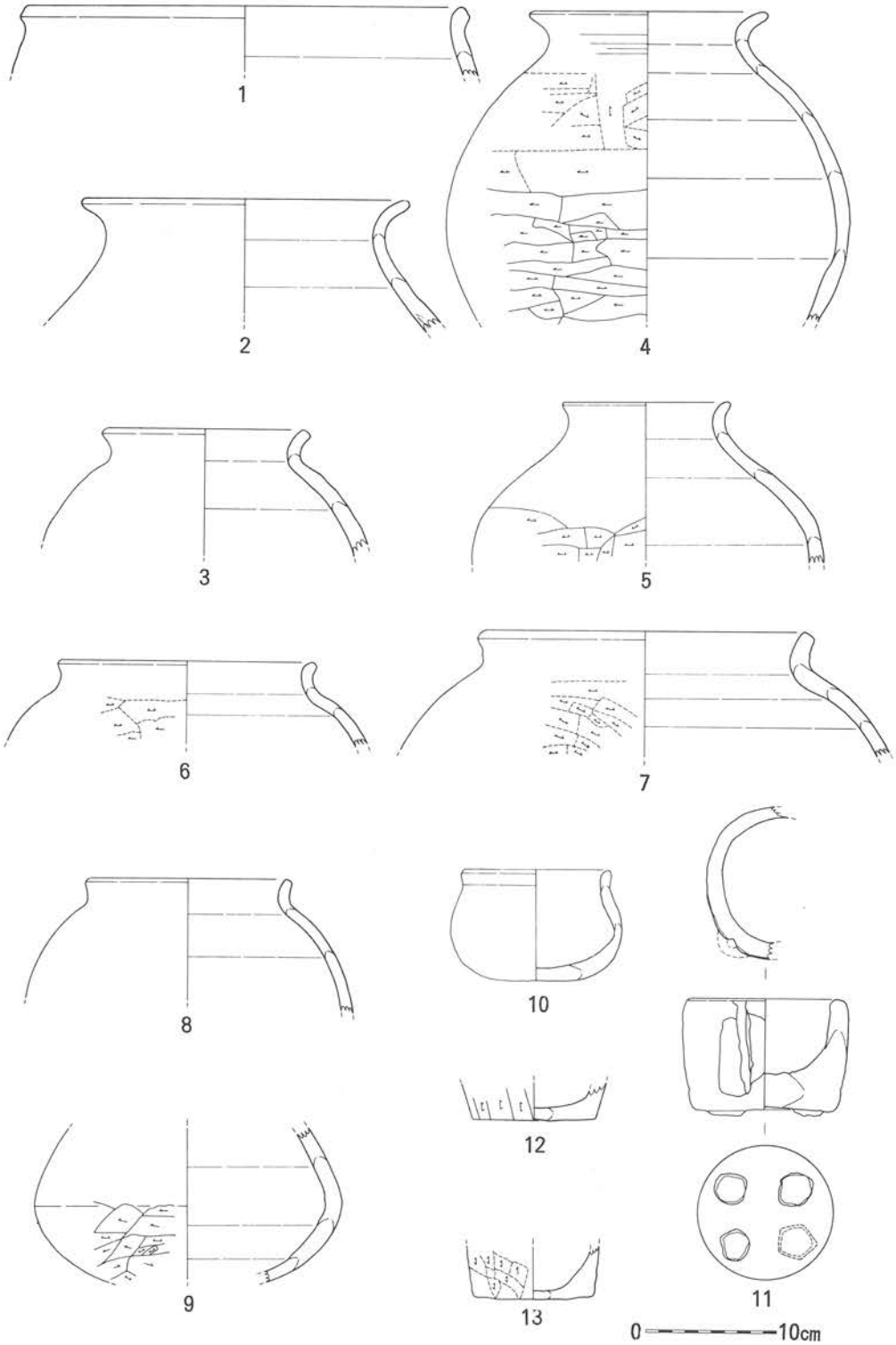
a種

第29図1に図化した資料で口径が33.4cmと推算できた。口縁の両面は丁寧にナデで仕上げる。がナデを施す前に篦削りが施されている様である。器色は黄褐色を呈する。胎土は細かい。混入物はほとんど認められない。器面は多孔状となる。E－3第1層。

b種

同図2は推算口径25.4cmを測った。内外面とも丁寧にナデで仕上げる。器色は淡黄茶色を帯びている。胎土は細かく、石灰質の微砂粒・サンゴの小破片を混入させる。E－3第1層。

同図3は口径が15cmと推算出来た。両面とも丁寧なナデで仕上げる。器色は淡茶色を帯びて



第29図（PL. 32）パナリ焼 壺a種: 1、b種: 2～4、c種: 5～7、d種: 8・9、小鉢:10、火舎:11～13

いる。胎土は細かい。胎土に石灰質の微砂粒やサンゴの小破片を混入させる。器色は多孔状を呈している。B－0第1層出土。

同図4は口径が18.4cm、胴の最大径31cmを測った。外面は胴上部から下に箆削りを施した後に胴上部をナデ消すが徹底しない。内面は丁寧なナデで仕上げる。器色は茶褐色を帯びる。胎土は細かく、石灰質の微砂粒とサンゴの小破片を混入させている。B－2第1層出土。

c種

第29図5は推算口径が13cmと求められた。外面は口縁から胴上部まで丁寧なナデで仕上げる。胴中央部は箆削りのみが施されている。内面は丁寧なナデで仕上げる。器色は茶褐色を呈している。胎土は細かく、石灰質の微砂粒やサンゴの小破片を混入させる。B－0第1層出土。

同図6は頸部近くに箆削りを施した後にナデで調整するが消えきっていない。内面は丁寧にナデで仕上げる。器色は黄褐色を帯びている。胎土は粗く、石灰質の微砂粒やサンゴの小破片を混入させる。器面はサンゴの小破片が抜け落ち部分的に多孔状となる。推算口径が19.6cmを測った。B－0第1層。

同図7は6と同様に頸部から下に箆削りを施した後にナデを施すが消え切っていない。内面はナデ仕上げ。器色は黄褐色を呈してる。胎土は細かい。石灰質の微砂粒とサンゴの小破片を含む。口径が24.2cmと推算された。B－0第1層出土。

d種

同図8は口径16cmが推算出来た。両面ともナデで仕上げるが、内面は比較的雑である。器色は淡い茶色を呈している。胎土は細かい。混入物はほとんど見えないが、器面は多孔状となった箇所にサンゴの小破片が2・3片確認できる。表採資料。

壺胴部資料

同図9は側面観が角のとれた算盤玉に近い壺の胴部片で、最大胴径が23.8cmを測った。箆削りは胴中央から下に施され、ナデの部分と明確に区別される。器色は茶褐色を呈している。胎土は粗く、貝殻の小破片を少量ながら混入させる。B－0第1層出土。

（b）小鉢

同図10は復元された小鉢でサイズが口径11.7cm、器高8.6cm、底径6.0cmである。口縁から胴上部は雑なナデを加えている。胴中央か胴下部までは箆削りの後に箆ナデを施していて光沢を帯びる。底面は大半が禿げ落ちているが残存部分からナデ仕上げが考えられる。器色は淡褐色を主体とするが部分的に黄褐色を帯びている。胎土は粗く、石灰質の微砂粒・サンゴの小破片・貝殻の小破片を多量に混入させる。B－1第1層出土。

（c）火舎

同図11は火舎の復元資料で口縁から胴下部に縦長の有孔の把手を貼り付けている。孔は6mm前後が推定された。底面には4箇の足を削り出して作っている。足の平面観は概ね五角形状に成形する。サイズは口径12.1cm、器高9.1cm、底径11cmを測った。器壁は資料中最も厚く、口縁

で1.2cm、底面で2.6cmを測った。外器面は大半が禿げ落ちているが、残存部分からは篦削り後に篦ナデを加えている為、光沢を帯びる箇所がある。底面は篦削りのみで成形する。内面は雑なナデを施している。器色は茶褐色を帯びる。胎土は粗く、貝殻の小破片やサンゴの小破片を多量に混入させる。表採資料。

火舎の底部破片

同図12・13は火舎の底部破片で、12は底径9.5cmを測り、13が9.2cmを測った。12は外面に縦方向の篦削りを施し、光沢を帯びている。14は篦削り後にナデを施すが消え切っていない。篦削りの方向は縦位である。底面は両者とも篦削り後にナデ消すが徹底していない。器色は12が黄褐色、13が茶褐色を帯びている。12の胎土は細かい。石灰質の微砂粒・サンゴの小破片を微量混入させる。器面は多孔状となっている。13は胎土が比較的粗く、石灰質の微砂粒やサンゴの小破片を少量混入させる。器面は多孔状を呈している。12はB－２第１層出土。13がE－１第１層の出土である。

小　結

このパナリ焼と同時期のものとして宮古島の土器[註6]の中にも見い出せる。沖縄大学学生文化協会による砂川村落から採集された資料の中に沖縄本島産の陶器の影響を受けた宮古製陶質土器[註7]や安里進氏の宮古第二型式土器[註8]などが確認されている。この土器の特徴として回転台を使用し、焼成も硬質化する。肩部に波状文や平行線文[註9]が施されている。時期的な背景については沖縄大学学生文化協会による報告を要約すると砂川村落の調査でC地域（現村落）は1771年の明和の大津波以降からしか存在しない為、この地域から伊万里染付のみしか検出させなかった。とある。

この背景には首里王府の制圧により一地方独自の海外交易が行われなくなり、南支染付や安南染付が全く手に入らずに薩摩を経由して多量の日本製（伊万里）磁器が入ったと推論している。この土器の時期については安里進氏は15世紀後半～16世紀頃と位置づけ[註10]ている。また安里氏は陶質土器と沖縄陶器の共存を指摘している。この様な状況は宮古島では宮国元島遺跡[註11]・砂川元島遺跡[註12]などで確認されている。八重山ではカンドウ原遺跡[註13]で沖縄製陶器と沖縄製陶質土器などと一緒に外耳土器とパナリ焼きの火舎の把手と底部資料が２点含まれている。カンドウ原遺跡ではパナリ焼と外耳土器の混入物等で大差が認められなかったが、本遺跡ではほぼ分離することが出来た。混入物の場合は外耳土器では貝殻片を潰して混和させるが、パナリの場合は海岸の砂を潰して混入させていることが判明した。これからすると従来から言われていた様にパナリ焼は八重山の各島々で地元の土を使用しながら島単位に製作されていたことを裏付ける結果となった。パナリ焼きは無文が多く、壺・火舎・小鉢以外に香炉・土製の棺[註14]などの煮沸用でないものが目立っている。パナリ焼の中で新しい時期に入ると沖縄製陶器や八重山製陶器などの影響を受けると考えられるがその祖型となるものについては判然としない。ただ、外耳土器の壺から来る可能性も考慮できるが不十分である。将来の調査研究に期待される土器であろう。

註

註1　西村正衛ほか「八重山の考古学」沖縄八重山　校倉書房　1960年。

註2　鳥居龍蔵「沖縄諸島に移住せし先住民に就いて」人類学雑誌　第20巻第227号　日本人類学会　1905年。

註3　高宮廣衛「編年試案の一部修正について」南島考古　第7号　沖縄考古学会　1981年。

註4　曽根信一・安里進・宮城篤正『図録沖縄の古窯』やちむん会　1979年。

註5　上勢頭亨『竹富島誌』歌謡・芸能篇　法政大学出版局　1979年。

註6　沖縄学生文化協会『郷土』第11号　沖縄大学　1972年。

註7　註6と同じ。

註8　安里進「(特別寄稿) 沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」やちむん　第5号　やちむん会　1975年。

註9　註6・7と同じ。

註10　註7と同じ。

註11　当真嗣一・大城慧『宮国元島』上野村教育委員会　1980年。

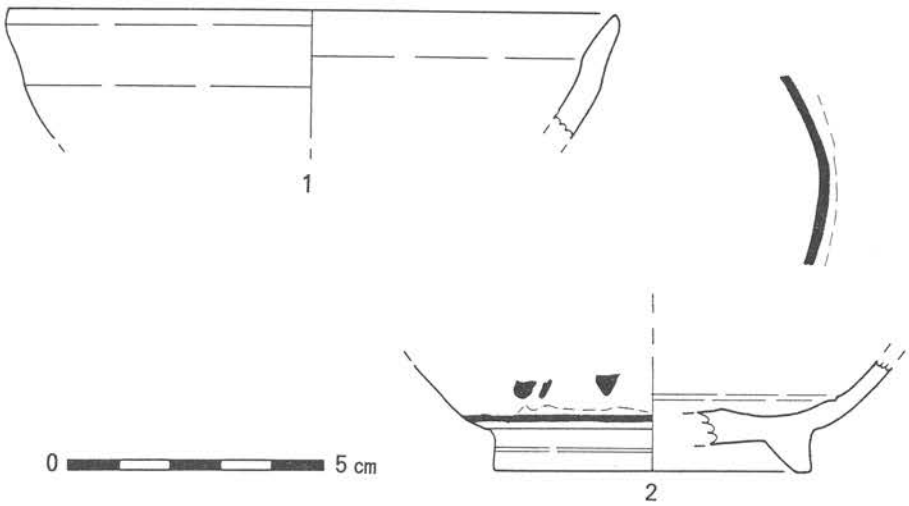
註12　島袋洋ほか『砂川元島』城辺町教育委員会　1989年。

註13　大城慧・金城亀信・比嘉春美『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註14　註4と同じ。
石垣市立博物館にて確認。

チ. 天目茶碗

天目茶碗が第Ⅰ地区のCトレンチ第1層から得られた。天目茶碗以外に褐釉陶器の中で報告



第30図（PL. 33）天目茶碗: 1、タイ陶器: 2

した茶入れ壺が２・３点出土している（第５表）。

第30図１に図示した口縁破片である。推算口径12.0cmを測った。口縁のひねり返しはゆるい。べっ甲口縁のタイプに入るものである。釉色は淡褐色を帯びる。素地は白色の微粒子。

天目茶碗の類例として、ビロースク遺跡[註1]・新里村遺跡[註2]などで出土例がある。近世においては天目茶碗が八重山でも製作されるようである[註3]。

註

註１　金武正紀・阿利直治ほか『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会　1983年。

註２　新里村跡遺跡の資料整理で確認されている。

註３　上江洲敏夫・宮城篤正ほか『県内漆器・陶器遺品調査報告書』沖縄県教育委員会　1980年。

リ.タイ陶器

タイ陶器は１点のみ得られた。第30図２に図示した底部である。推算された高台径は6.2cmである。両面には施釉前に鉄釉で界線を描いている。外面の文様構成は不明である。内面の胴下部に陰圏線を廻らす。灰白色の釉を外面の高台際まで施し、内面は胴下部まで施されている。素地は灰白色の細粒子で、微細な黒色鉱物も観られる。畳付は研磨され、滑面となる。Ｂ－１第２層出土。

今日までタイ陶器の発見は、宮古・八重山地域ではなかった。本品が初めて確認されたことは、宮古・八重山地域と沖縄本島との交易等を検討する上で非常に重要である。沖縄本島では、今帰仁城跡[註1]・伊原遺跡[註2]・阿波根古島遺跡[註3]などのグスク時代の遺跡から出土している為、交易船の海上ルートの中で八重山・宮古を経由して沖縄本島に持ち込まれてきたことが可能性として想定できる。本品の所属時期は幅を持たせて14世紀後半から15世紀初頭頃が考えられるところである。沖縄本島の出土時期とほぼ一致する。他に成屋遺跡[註4]でタイ産もしくは中国福建廣東地方窯の合子と思われるものが出土しているが判然としない。

註

註１　金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ｉ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註２　大城慧・島袋洋ほか『伊原遺跡』沖縄県教育委員会　1986年。

註３　金城亀信・長嶺均ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会　1990年。

註４　青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学第９号　1987年。

ヌ．瑠璃釉

第Ⅰ地区から瑠璃釉の小杯が1点出土した。第31図1に図示した資料である。復元されたサイズは口径3.9cm、器高2.9cm、高台径1.4cmを測った。釉色は外面が濃青色、内面は淡青白色を帯びている。釉は高台外面途中まで施釉する。外底はベタ底状に成形する為、畳付が不明瞭となる。素地は白色の微粒子である。貫入はない。16世紀初から17世紀初に位置付けられる。B－3第1層の出土。

瑠璃釉の類例は宮古・八重山地域では報告例がない。沖縄本島では今帰仁城跡[註1]・阿波根古島遺跡[註2]などで報告されている。

第31図（PL. 33）瑠璃釉: 1

註

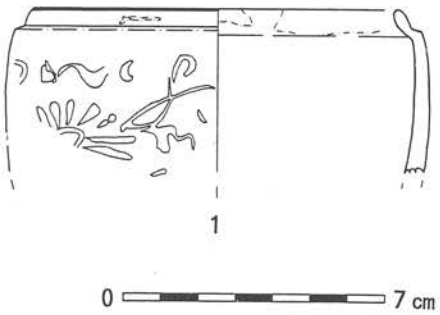
註1　金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註2　金城亀信・長嶺均ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会　1990年。

ル．赤絵

第Ⅰ地区のE－1第1層から赤絵の袋物とみられるものが1点出土している。第32図1に図示した。袋物は身の部分で蓋は検出されていない。蓋受けの部分と内面の端部のみが露胎する。白色の釉掛けを行った後に焼成し、さらに外器面に赤色釉薬で文様を描き再度焼成する。文様の構図は花文を主体に描いている。素地は白色の微粒子である。両面に細かい貫入がみられる。中国産16世紀か。蓋受けの最大径10.3cm、最大胴径11.3cm。E－1第1層。

鉄絵[註1]や色絵[註2]の報告例はあるが赤絵の例は県内では今のところ報告されていない。



第32図（PL. 33）赤絵: 1

註

註1　当真嗣一・宮里末廣・岸本義彦『佐敷グスク』佐敷町教育委員会　1980年。

註2　島福善弘・松田博文「田井等遺跡」名護市教育委員会　1988年。

第12表　沖縄製陶器出土状況

産地・器種 / 地区・層序	荒焼																	上焼						産地不明	合計
	①							②			③				①				①		④					
	壺			瓶		急須	火舎	壺		皿	壺	瓶	氷鉢	器種不明	摺鉢				摺鉢	壺	香炉	瓶	碗	急須		
	口縁	胴部	底部	口縁	胴部			口縁	胴部		胴部	口縁			イ	ロ	ハ	底部	ハ	低部						
表採		6							1			1				1	1	1			2	1	1		1	16
第Ⅰ層	1	27	1	1	1		1	2	3	1			1	1	1	1	1	2		1	1		2	1		50
Ⅱ層	1	16	1	1					8		1								1							29
小計	2	49	2	2	1	0	1	2	12	1	1	1	1	1	1	2	2	3	1	1	3	1	3	1	1	95
合計	53			3				14							8											
拝所内表採						1																				1
小計	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計	0			0				0							0											
合計	2	49	2	2	1	1	1	2	12	1	1	1	1	1	1	2	2	3	1	1	3	1	3	1	1	96
	53			3				14							8											

（注）①…八重山産、②…八重山産？、③…八重山産or沖縄本島産、④…沖縄本島産

（注）胴部分類の結果、八重山産が主流であるが確認出来た。上焼は沖縄本島産のものが目立っている。

ヲ．沖縄製陶器および瓦

沖縄製陶器の中には地元八重山産と沖縄本島産のものがある。陶器は大部分が荒焼である。上焼の資料の中には遺跡内から採集された壺屋の瓶（前大恒子氏保管）があるのでこれも紹介する。また、赤瓦も１点得られたので報告する。沖縄製陶器は第Ⅱ地区の一例を除いて全て第Ⅰ地区からの出土である。沖縄製陶器の器種としては荒焼が壺・瓶・皿・急須・摺鉢の５器種が出土している。上焼は火舎・瓶の二種類がある。一応、地元八重山産の識別には曽根信一・安里進・宮城篤正[註1]氏らによる八重山焼の特徴と一致したものを八重山焼とした。以下、荒焼（壺・瓶・皿・急須）・上焼（壺・香炉・瓶）・荒焼（水鉢・摺鉢・瓦）の順に記述する。

１．荒焼（壺・瓶・皿・急須）

a．壺

第33図１は口縁を方形状に肥厚されるもので肩部の張り出しが強く、怒り肩となる。肥厚帯下端には調整により明確な稜が成形されている。内外面には轆轤痕が観察できる。素地は明茶色で細粒子である。素地は微細な白色の鉱物を少量混入させる。器色は外面が淡褐色、内面は明茶色を帯びている。推算口径21.5cmを測る。E－２第２層出土。八重山焼。

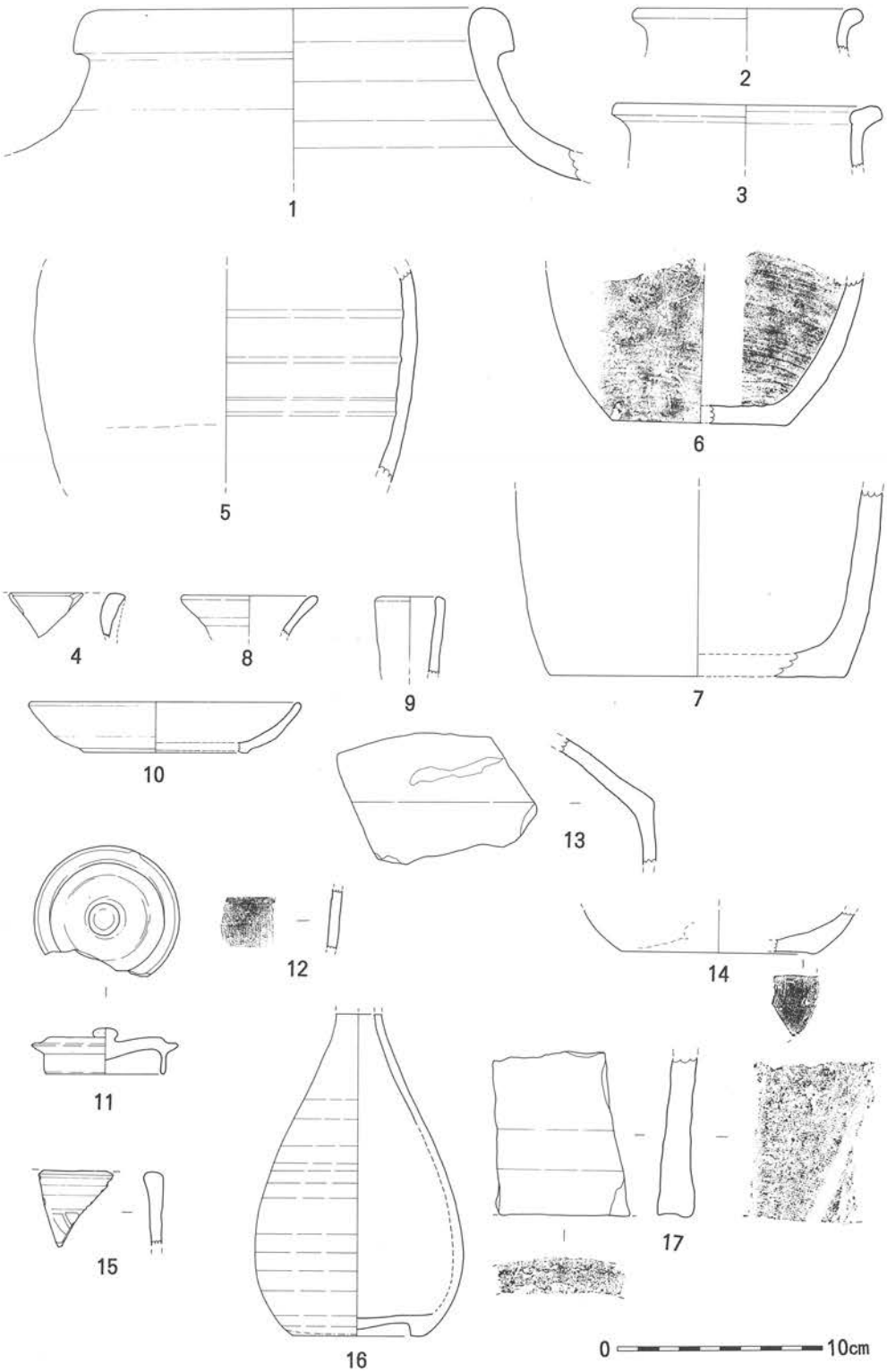
同図２は肥厚口縁で僅かに外反させる。両面に回転擦痕が観られる。器色は両面とも灰褐色を帯びている。素地は灰褐色の微粒子で、微細な白色鉱物を微量混入させる。推算口径11.3cmを測る。E－３第１層。八重山焼？。

同図３は口縁を逆L字状成形したもので、口唇は幅広となっている。両面とも回転擦痕が認められる。内面の口縁には轆轤痕で凹線となっている。両面および素地は淡茶色で、微粒子。微細な白色鉱物を微量ながら混入する。劈開面には製作中に陶土を引き上げた際に生じたとみられる非常に幅の狭い縦縞状の黄白色の陶土が観られる。推算口径13.2cmを測る。B－０第１層。八重山産？。

同図４は口縁の外面が欠落する。器色は外側が灰褐色、内面は茶褐色。素地は茶褐色の微粒子で粗い白色の鉱物が微量ながら含まれる。この素地は煙管の素地と一致する為、煙管も八重山焼として考えられる。E－３第１層。

同図５は壺の胴部破片で最大胴径18.7cmを測る。茶褐色の鉄釉が胴下部まで施されている。外面は茶褐色、内面は灰褐色を帯びる。劈開面は陶土がサンドイッチ状の色合となり両側は灰褐色•心部は茶褐色を帯びている。素地は細かく、粗い白色の鉱物を多量に混入させる。表採資料で八重山焼の典型的な資料である。

同図６は推算底径が8.6cmを測る。底面からの立ち上がりは丸味を保持しながら内側に閉じ気味に胴部へ移行する。外面の胴下部から底部近くまで平行叩きを施す。胴上部は縦位方向の篦ナデが部分的に施されている。内面には回転擦痕•底面には指による掻き取りや静止の指ナデがみられる。外底面は雑な篦削りで仕上げる。器色は外面および底面が淡橙色で、外面から部分的に淡茶色を帯びている。内面は茶褐色を帯びる。素地は茶褐色の細粒子で、上記３と同



第33図（PL. 34）沖縄製陶器　荒焼（壺: 1～7、瓶: 8・9、皿:10、急須:11）・
有文・特殊胴部12・13、・上焼（壺:14、香炉:15、瓶:16）・瓦:17

様に非常に幅の狭い縦縞や横縞が層状にみられる。この縞は淡黄白色である。粗い白色鉱物を少量混入させる。B－3第1層。八重山焼。

同図7は底径が14.5cmと求められた。底面からの立ち上がりは丸味を保持しながら内側にきつく閉じ気味に胴部へ移行する。外面と底面には茶褐色の釉が施され大半が禿げ落ちる。内面には轆轤痕が顕著に観察できる。外面および底面は灰褐色、内面は茶褐色を帯びている。素地は灰褐色の細粒子で粗い白色の鉱物を多く混入させる。B－2第2層出土で典型的な八重山焼である。

b．瓶

同図8は徳利の口縁破片で口径は6.7cmを測った。両面には薄い茶褐色の釉を施す。両面には回転擦痕が顕著にみられる。素地は灰黒色の微粒子である。不純物の混入はない。B－トレンチ表採。八重山焼か沖縄本島産。

同図9は花瓶の細口口縁である。口径は3.4cmと推定された。内面に茶褐色の釉が施されている。外面は雑なナデ仕上げであるが、内面には丁寧な回転擦痕がみられる。素地は茶褐色の細粒子で微細な白色鉱物を多量に混入させる。E－2第2層。八重山焼。

c．皿

同図10は唯一の皿の破片である。復元されたサイズは口径13.3cm、器高2.5cm、底径8cmを測る。外面の口縁から胴中央までは回転擦痕、胴下部から高台外面は静止もしくは回転の遅い時期での箆削りが施されている。畳付には釉が付着（重ね焼きによるもの）する。内面には茶褐色の釉を全面に施し、釉の一部は外面口縁まで及んでいる。素地は灰褐色の微粒子で微細な白色鉱物、黒色鉱物を微量混入させる。E－1第1層。八重山焼？。

d．急須

同図11は唯一の急須の蓋である。蓋の中央で凹み、中心部には円形の把手を貼り付ける。最大径7cm、身受けの直径は6cmを測る。蓋は歪みが生じ、回転擦痕が両面に施されている。器色は灰褐色を帯びている。素地は茶褐色の微粒子で、細かい白色の鉱物が微量混入される。第Ⅱ地区拝所内から表採。八重山焼。

e．有文および特殊胴部

同図12は内面に櫛描きによる縦沈線を施す。器種が不明のものである。両面には回転擦痕が顕著に残る。器色は両面とも茶褐色を帯びている。素地は茶褐色の微粒子で不純物はない。E－3第1層。八重山焼か沖縄本島産。

同図13は壺の肩部破片で、く字状に屈曲する為、稜が走る。肩部に釉禿げがみられるが目痕かどうか判然としない。外面に茶褐色の釉を施す。内面は露胎する。素地は灰白色の粗粒子で白色の粗い鉱物を少量含んでいる。表採資料。産地不明。

2．上焼（壺・香炉・瓶）

a．壺

同図14は推算底径9.2cmを測る。底面はベタ底状で立ち上がりの部分で若干、丸味を保持しながら外側に開き気味に立ち上がる。濃緑色の釉を外面と内面に施す。底面は露胎する。素地は灰褐色の細粒子で、細かい白色鉱物を微量ながら含んでいる。劈開面には黄白色の陶土が縞文様に数本器面に沿って走っている。底面に「年」の字の一部がヘラ書きされている。E－3第1層出土。八重山焼。

b．香炉

同図15は香炉の口縁資料で、外面に界線と斜沈線を丸彫りの箆で描く。外面及び口縁内端まで濃緑色の釉を施す。内面に回転擦痕が認められる。素地は淡橙白色の粗粒子で微細な白色の鉱物を少量混入させる。表採。沖縄本島産か。

c．瓶

同図16は前大恒子氏が遺跡内にあるブナリの墓の上から採集した資料である。口縁は欠落するが破損面に研磨を施して新しく口縁を造っている。釉色は淡黄白色の透明釉である。荒い貫入が外面にみられる。釉は頸部から外底面まで施した後、畳付の釉を掻き取って露胎させる。畳付及び高台には重ね焼きの目痕が観察できる。素地は淡茶白色の微粒子。沖縄本島産（壺屋焼徳利）。

3．荒焼（水鉢・摺鉢）

a．水鉢

第34図18は推算口径が36.5cmを測る。口縁は逆L字状に肥厚し、口唇は幅広となる。口唇には0.8mm幅の沈線を廻らす。両面とも回転擦痕が観察出来る。器色は外面が淡橙色、内面は淡茶色を帯びる。素地は茶褐色の微粒子で、微細な砂粒•粗い有色鉱物•細かい白色鉱物を微量混入させる。Bトレンチ第1層。八重山焼か沖縄本島産。

b．摺鉢

摺鉢は口縁形態でイ～ハの3種に分類できる。分類概念を略記した後に個々の記述を行なう。

イ類：水鉢と器形や口縁形態が一致する。内面に6条一組とみられる摺り目を施す。

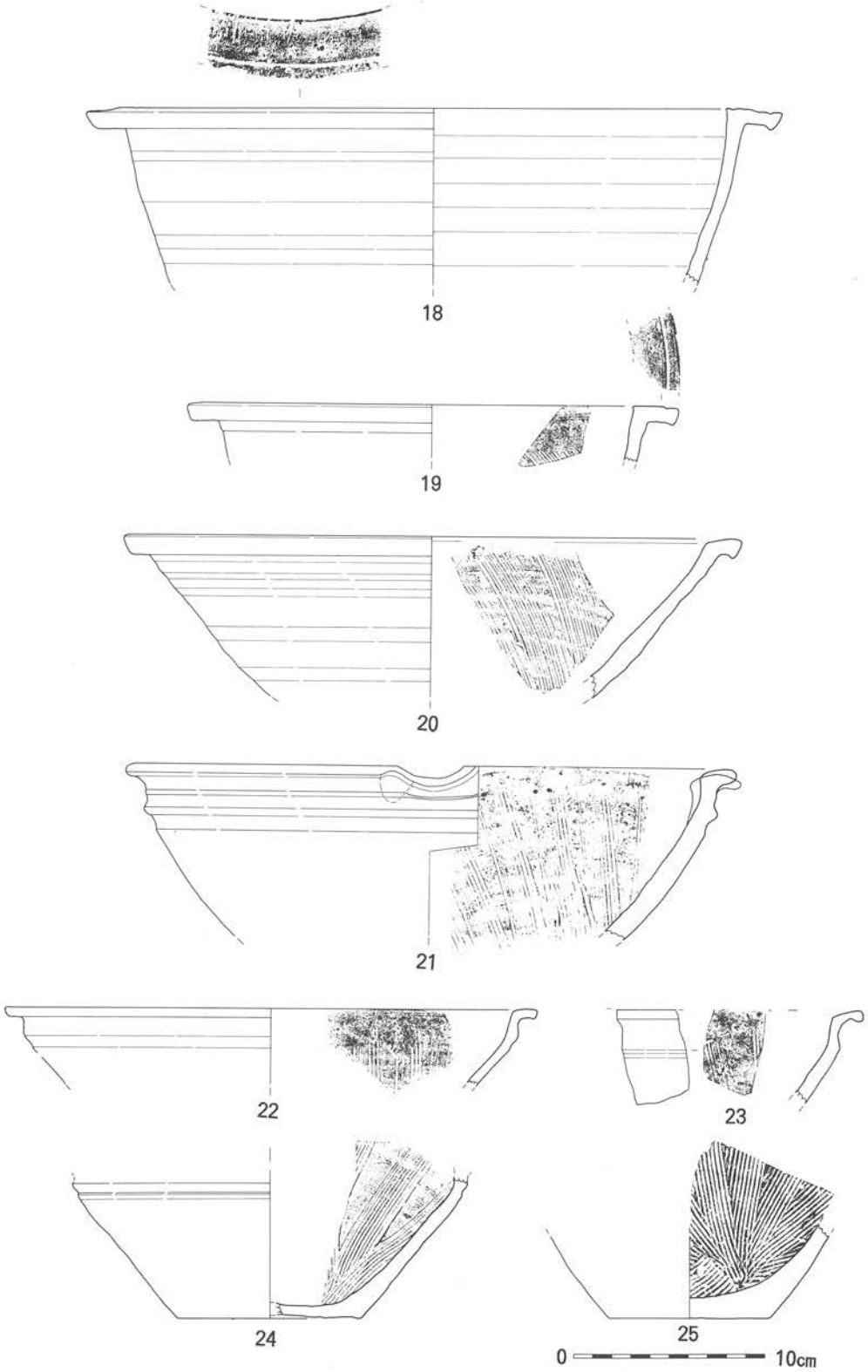
ロ類：全体的にきつく外側に直線的外傾する。肥厚帯下端を突出させる。摺り目以外の文様はない。

ハ類：器形はロ類よりもゆるく外側に外傾するが若干丸味を帯びる。頸部と胴部の境い目に轆轤調整で明瞭な稜や凸帯文を一・二条施す。

以下、順に記述する。

イ類

第34図19は口唇端部近くに幅1mmの沈線を廻らす。内面には6条一組とみられる摺り目を施す。器色は外面が茶褐色、内面は淡茶色を帯びている。素地は茶褐色の微粒子で、微細な砂粒



第34図（PL. 35）沖縄製陶器　荒焼（水鉢:18、摺鉢:イ類:19、ロ類:20、ハ類:21～24、摺鉢底部:24・25）

や白色鉱物を微量混入させる。推算口径25.7cmを測った。E－3第1層。八重山焼。

ロ類

第34図20は推算口径が32.4cmを測った。轆轤痕が顕著に認められる。器色は淡茶色である。内面には14条一組の摺り目を施す。素地は茶褐色の微粒子で、細かい白色鉱物と粗い黒色鉱物を混入させる。B－0第1層。典型的な八重山焼。

ハ類

同図21は注ぎ口が残存する資料で、胴上部に凸帯文を一条廻らしている。内面には8条一組の摺り目を施す。器色は外面が茶褐色である。内面は茶色を呈している。素地は茶褐色で細かく、粗い白色鉱物と細かい黒色鉱物を混入させる。推算口径32.2cmを測る。表採資料。八重山焼。

同図22は外面に微弱な凸帯文を2条廻らす。摺り目は6条一組である。外面は赤紫色、内面は茶色を帯びている。素地は茶褐色の微粒子で、細かい白色鉱物を少量混入させる。推算口径27.8cm。B－3第1層出土。典型的な八重山焼である。

同図23は外面の胴上部に轆轤調整で稜を造る為、角ができる。内面には黒色の釉が施され一部、口唇の内側まで掛けられている。摺り目は7条一組であるが釉掛けで目が潰される。外面は褐色を帯びている。素地は茶褐色の微粒子で、粗い白色鉱物が混入されている。E－3第2層出土。八重山焼。

同図24は口縁のみを欠くが、ハ類の特徴である微弱な稜が造られている。底面のみ箆削りで仕上げる。両面とも赤紫色を帯びる。摺り目は10条一組である。素地は赤紫色の微粒子である。不純物はなく、良質である。推算底径は9.6cmを測る。E－3第1層。八重山焼。

摺鉢の底部資料

同図25は 底径の推算が8.4cmを測った。外面は回転の遅い箆削りや静止箆削りで仕上げられる。底面も箆削りで仕上げるが雑である。内面には11条一組の摺り目を密に施す。両面とも茶色を帯びる。素地は茶褐色で微粒子である。微細な白色鉱物・有色鉱物を微量混入させる。表採資料。八重山焼。

4．赤瓦

赤瓦が1点出土した。拝所の屋根に葺かれていたものであろうか。

第33図17に図化した軒平瓦である。外面は箆削りで調整される。内面には布目の痕跡が顕著にみられる。器色および素地は茶褐色を帯びている。素地は粗粒子で粗い白色鉱物と細かい石英・石灰質微砂粒を混入させる。B－3第1層出土。八重山焼。

小　結

陶器の大部分が地元八重山産のものであった。瓦は西表島で焼かれたものであり、瓦窯が高嘉良村[註2]（現在の住吉集落付近）で焼かれていたようである。波照間島でも瓦窯が昭和30年代頃

まで存在していた。[註3]

陶器の中で地元、八重山産の識別には前記した曽根・安里・宮城の三氏による報文を今回も重視した。これによると次の様に記されている「八重山焼には上焼と荒焼がある。総体的にみて荒焼の製品が大半を占めている。中略、胎土に小粒の砂や小石を多く含んでいる火による景色の面白さもある[註4]」。この特徴以外にかなり良質の陶土を用いた例も確認された（第33図４）。また劈開面に黄白色の縞が入り込んでいるのも特徴である。明確に沖縄本島産と言えるのは壺屋焼の徳利のみであった。八重山産の上焼の壺（底部資料）にはヘラ描きで「年」と判読できる資料が出土している。ヘラ記号や文字の例としてカンドウ原遺跡[註5]で報告がある。

八重山での陶業は1724年に仲村渠致元[註6]によって伝授され、その後かなり定着・発展したことが今回の資料からも窺える。また、瓦窯については公事窯として1695年から名蔵瓦窯で焼かれた様である。八重山の古窯として高山窯・平田窯・黒石川窯などがあり、特に黒石川窯は最近、発掘調査が実施され、窯などが検出されていて、良質の焼物も製作されているようである[註7]。

摺鉢は全て八重山焼の特徴を保持している。摺鉢の摺り目は磨耗の度合[註8]が全体的に小さい点や磨耗がない点が再度確認された。また、摺り目に釉を施した例もみられたので、摺鉢としての機能を十分に生かされていない様である。摺り目の磨耗の度合から、木製の摺り棒で潰していたのかあるいは根栽植物（イモなど）を直接摺り潰せば磨耗[註9]がほとんどないことも考えられる。香炉の類例として松田遺跡[註10]で出土しているようである。

註

註１　曽根信一・安里進・宮城篤正『図録沖縄の古窯』やちむん会　1979年。

註２　石垣金星氏による教示によると高嘉良村の水田近くに瓦窯があり、35年前まで生産されていた。

註３　◦滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房　1960年。

◦波照間島出身者から聞き取りで富嘉と名石集落の中間に一ケ所そして北集落と現小中学校の中間に一ケ所あり、30年前まで瓦窯があった。また、下田原貝塚の調査期間中にも現地で聞き取った。

註４　註１と同じ。

註５　大城慧・金城亀信・比嘉春美『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註６　註１と同じ。

註７　金武正紀・石垣久雄・黒島為一・阿利直治・池田栄史「八重山の古窯を語る」八重山日報　日刊　1991年１月１日・１月５日～１月10日。

註８　註５に同じ。摺り目の磨耗についてはカンドウ原遺跡で森田勉氏に御教示を戴いた。

註９　宮城篤正氏（浦添市立美術館々長）より御教示を戴いた。記して謝意を表わしたい。

註10　盛本勲『松田遺跡』沖縄県教育委員会　1986年。

ウ．伊万里

伊万里系の染付が第Ⅰ地区から7点得られた。また、ほぼ完形の白磁の瓶が半島西側にあるインガーの側から前大恒子氏によって採集されているので今回これも報告する。伊万里染付は碗・瓶の二種類が出土している（第3表）。以下、順に記した後に伊万里白磁瓶を紹介する。

イ．染付碗

第35図1は推算口径11.8cmを測る内彎気味の碗である。白色の釉を両面に施している。文様は外面にのみ施され、草と木を描く。素地は白色の非常に細かい粒子である。貫入はない。B－0表採。

ロ．瓶

同図2は瓶の胴部片である。外面に淡灰色の呉須で花文や界線を描いている。釉色は淡灰白色で外面にのみ施す。素地は淡灰白色で微粒子である。貫入はない。E－3第1層。

同図3も胴部片である。淡青色の呉須で網目文を描く、釉色は白色で両面に施している。素地は白色の微粒子である。E－3第1層出土。

同図4は高台径5.9cmと推算された瓶の底部である。高台外面に2本一組の界線を施す。釉は外面に全釉した後、畳付を掻き取っている。釉色は白色で外面に施されるが細かい貫入がある。

インガー採集の白磁瓶

同図5は前大恒子氏所有の資料である。底部は碁笥底状に成形し、外底を深く削り出す。釉は内面の頸部から外底面まで施した後に畳付を露胎させる。畳付に糸切りの痕跡が観察できる。頸部には絞り目が外面でも幾分か認められる。刷毛目様のカンナが頸部から外底面にみられ、外底面のものは同心円状となっている。釉は淡灰白色で貫入はない。素地は灰白色の微粒子である。サイズは口径3.4cm、器高17.6cm、最大胴径10.8cm、高台径5.8cmを測った。

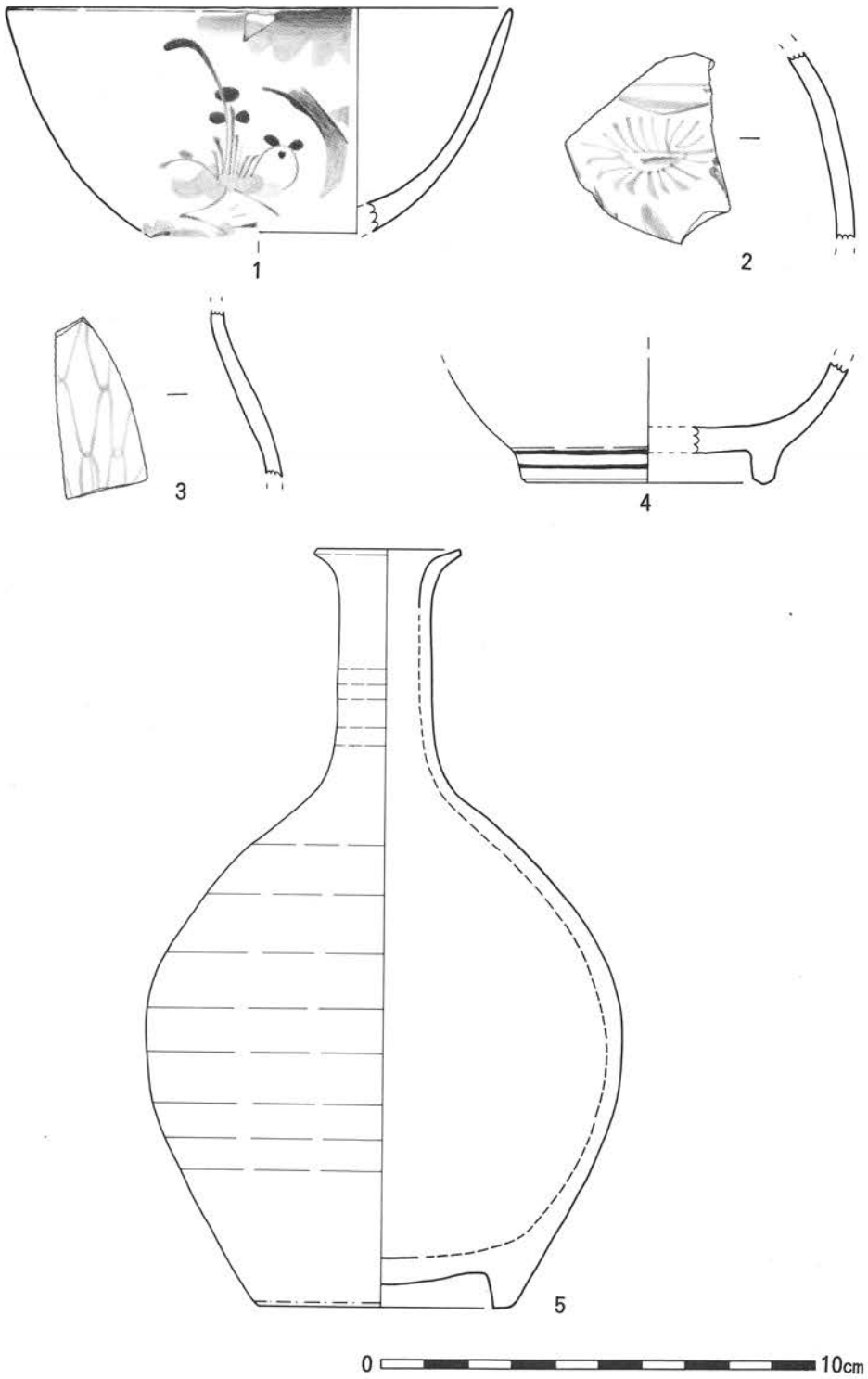
小　結

伊万里系のものは第Ⅱ地区からは1点も得られなかった。伊万里系のものは新城島下地[註1]・フルスト原遺跡[註2]などで瓶類が出土している様である。遺跡内には板石墓や円柱状の墓がある為、墓に伴う副葬品などとして使用されたとも考えられる。

註

註1　安里嗣淳ほか『パナリ　新城島下地の遺跡』－分布調査報告－　竹富町教育委員会　1987年。

註2　当真嗣一・金武正紀ほか『フルスト原遺跡』石垣市教育委員会　1977年。



第35図（PL. 36）伊万里　染付碗１、瓶２～４、白磁瓶５

ノ．煙管・陶製の錘

(i) 煙管

第Ⅰ地区から3点のみ出土している。素材は陶器製と石製の2種がある。以下、特徴等を記述する。

a．陶器製

第36図1は雁首の破片で火皿が半分近く欠落する。火皿および雁首の外面は工具によって削られ雁首の断面は八角形となっている。釉は褐色で薄く釉掛けする。素地は精選された微粒子で茶褐色を呈している。羅宇接続部の直径は9㎜を測る。残存重量4ｇ。E－3第1層出土。

同図2は完形の雁首である。火皿および雁首は工具で面取りされ八角形となる。素地は精選された微粒子で暗褐色を帯びている。釉は茶褐色の釉で厚く釉掛けする。火皿の孔径は1.1㎝、羅宇接続部の直径は9㎜を測った。重量5ｇ。B－3第1層出土。

b．石製

同図3は砂岩製で1／3ほど欠く、円柱状の煙管である。底面及び側面は面取り気味に成形する。残存重量9ｇ。表採品。

小　結

陶器製の煙管の類似としてカンドウ原遺跡[註1]・与那良遺跡[註2]で同一タイプのものが得られている。煙管が沖縄本島産のものなのか八重山焼のものなのかを区別する為に一応、阿波根古島遺跡[註3]のものと比較したところ素地に微妙な違いがみられた。阿波根古島の資料のものは素地が粗く、微細な鉱物の混入が認められる。上村の資料は素地が非常に細かく、混入物が少ない。八重山焼の中には煙管と同一の素地を使用したものがあり、煙管も八重山産であろう。石製のものは地元の砂岩を利用して製作している。

註

註1　大城慧ほか『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註2　与那良遺跡調査団『与那良遺跡発掘調査団概報』1982年。

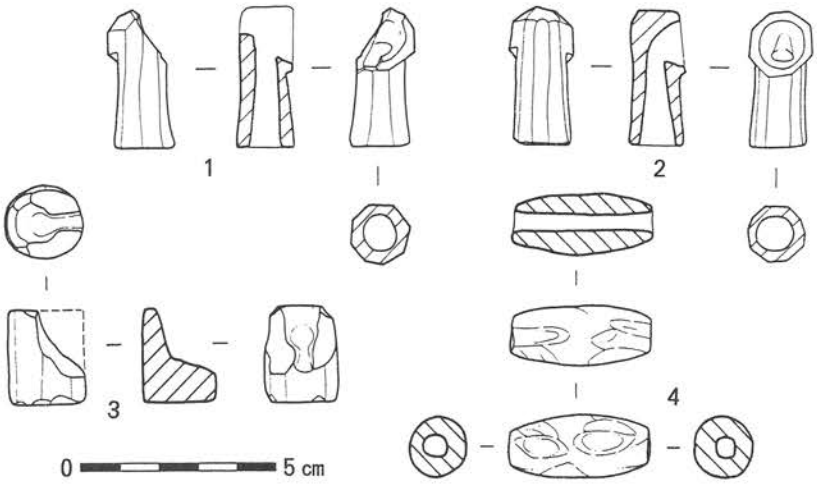
註3　島袋洋ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会　1990年。

(ii) 陶製の錘

第Ⅰ地区から1点出土した。管状の錘である。

第36図4に図化した資料で完形品である。円筒形の管状錘で、長径3.5㎝、短径1.5㎝、重量5ｇを測る。孔の直径は6㎜である。表面は削りの後にナデで仕上げるが徹底しない為、雑な仕上げとなっている。素地は黄褐色で細かく、荒焼の陶土を使用したものとみられる。B－3

第１層。



第36図（PL. 37）煙管（陶製: 1・2、石製: 3）・陶器製の錘: 4

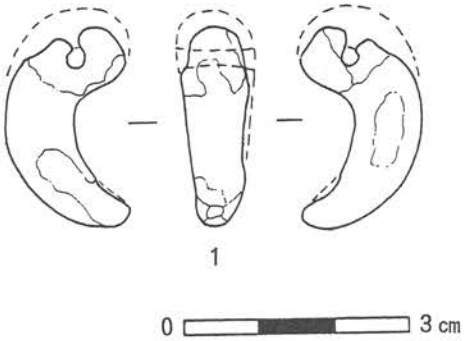
小　結

本遺跡から貝錘と陶器製の錘が出土していることになり、両者は用途によって使い分けられたと推定される。可能性として貝錘はリーフ内外の網などに、陶器製の錘はイノー内での投げ網などが考えられるのではないだろうか。

オ．勾玉

勾玉は、第Ⅰ地区から１点出土した。

第37図１ガラス製の勾玉で、外器面は風化し剥落する。外器面は褐色が本来の色調であろう。剥落面は明黄色となっている。芯部は明黄緑色である。孔は両側から穿たれている。孔の直径は２㎜を測った。最大残存長2.7㎝、最大残存幅９㎜を測った。残存重量3.3ｇ。出土地点はE－３第２層黒色土層から出土。



第37図（PL. 37）勾玉: 1

勾玉の出土例は、カンドウ原遺跡[註1]・アラスク村跡遺跡[註2]・与那原遺跡[註3]などで出土している。

註

註１　大城慧・金城亀信・比嘉春美『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註２　安里嗣淳・盛本勲『アラスク村跡遺跡・ウイヌツズ遺跡発掘調査報告書』沖縄県教員委員会　1985年。

註３　金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会　1988年。

ク．貝製品

貝製品は二枚貝有孔製品のみ４点得られた。第Ⅰ地区で３点、第Ⅱ地区で１点出土している。二枚貝有孔製品の中で３点はヒメジャコ製の貝錘として考えられる。他の１点はシレナシジミ製の有孔製品で用途が不明である。以下、地区別に記述する。

二枚貝有孔製品

第38図１に図示した資料はヒメジャコの左殻に内側から孔を穿ったものである。孔の位置は殻頂寄りの後背縁近くに穿っている。孔の形状は楕円形でサイズが短径2.1cm、長径2.9cmを測る。腹縁部は大半が欠落する（残存殻高7.9cm）。殻長は11.1cmを測った。残存重量91ｇ。表採品。

同図２もヒメジャコの左殻に孔を穿った資料である。外面および内面は面が剥離し、薄くなっている。腹縁部は大半が欠落する（残存殻高7.5cm）。殻長は11.5cmを測る。孔は内側から穿たれている。孔の半分程度は破損する。孔のサイズは長径4.2cm、短径３cmを測る。残存重量61ｇ。B－１第１層出土。

同図３はシレナシジミ製の有孔製品で右殻を使用している。孔は中央部に内側から一ないし二回程度の打撃で穿孔している。孔の形状は円形に近い。サイズは短径1.1cm、長径1.5cmを測る。殻高は5.8cm、殻長6.7cmを計測した。重量20g。表採品。

小　結

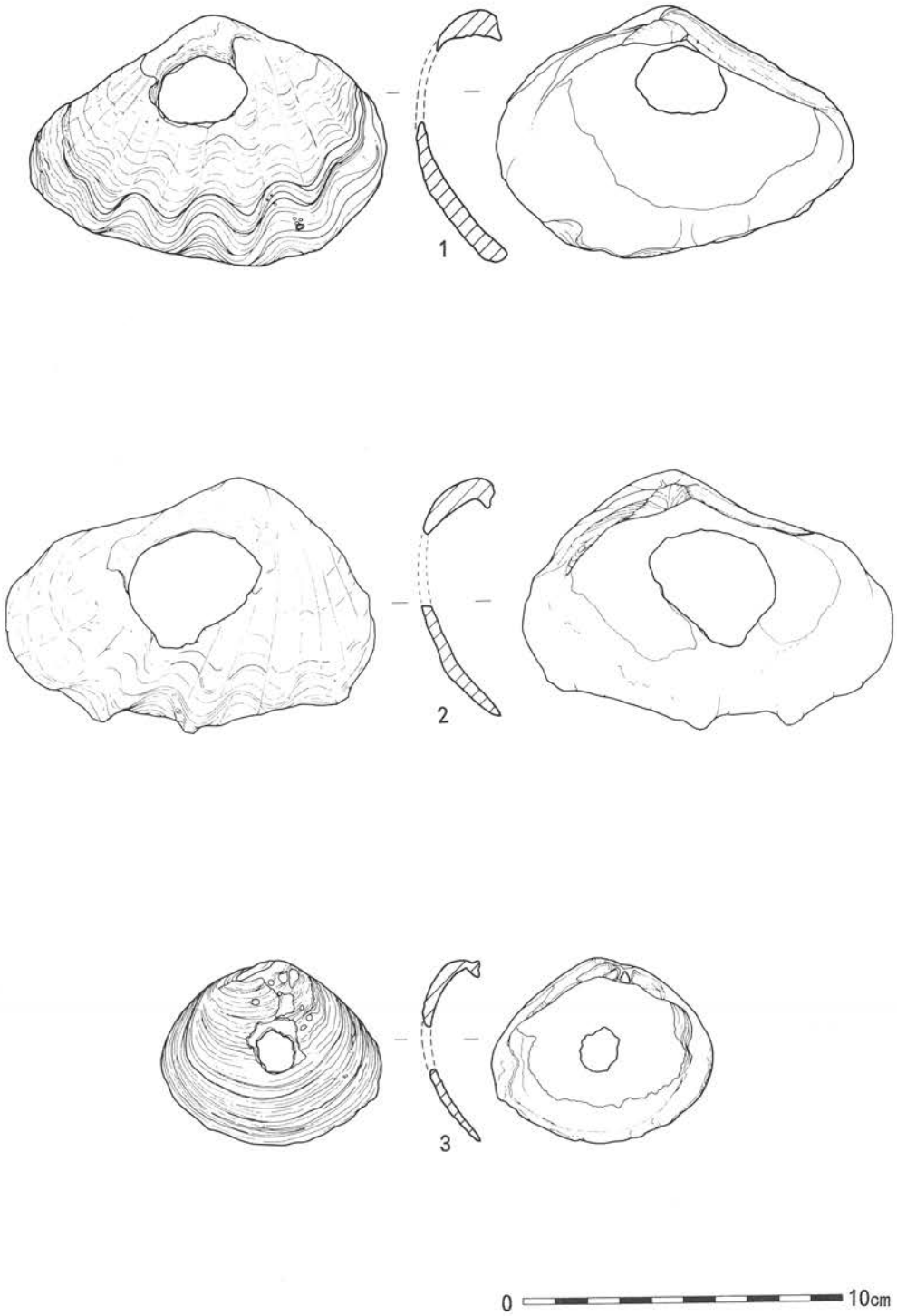
ヒメジャコ製のものは一応、貝錘として考えられるが、他の遺跡と比較して非常に少ない点数である。この種の貝錘については島袋春美氏はカンドウ原遺跡例から次の様な所見を延べている。「多量にある程度まとまって出土する資料が得られなければ、検証することは困難である。中略…民具資料及び出土品の追加をまちたい[註1]。」と報告されている。確かに量的な問題もあるが、海を対象とする道具である為、遺跡内から出土する量は少量でも良いのではないかと考えられる。大富洞窟遺跡[註2]ではシャコガイ有孔製品が46個まとまって出土している。西底原遺跡[註3]の場合は埋葬人骨と伴いシャコガイ製やメンガイ製の有孔製品が18個出土している様である。大富洞窟遺跡や西底原遺跡の場合は例外的な出土であり、集落遺跡の場合はこれよりも少なくなるのではないだろうか。シレナシジミ製の有孔製品は孔のみが穿たれているだけで、孔の位置などからは貝錘としては考え難い。資料の増加等に期待したいところである。

註

註１　当真嗣一・比嘉春美『カンドウ原遺跡発掘調査報告（Ⅰ）』沖縄県教育委員会　1984年。

註２　岸本義彦ほか『与那国町・竹富町の遺跡』沖縄県教育委員会　1980年。

註３　当真嗣一ほか『掘り出された沖縄の歴史』沖縄県教育委員会　1982年。



第38図（PL. 37）貝製品　二枚貝有孔製品: 1～3

ヤ．石　器

第１次調査から第３次調査にかけて出土した石器は砥石と凹石、石皿の３種類で合計６点と大竹祖納堂儀佐の屋敷後に近接して作られているツンマーサ墓からの１点だけで少数の出土となっている。以下、それぞれの形状について記述する。

砥　石

第39図１～４に掲載したのが砥石と判断される資料である。１と２の資料は偏平になるものである。１は側端部と下端部が欠損しているが、残存している形からは長方形状で板状に仕上げてある。表裏面に部分的に砥面が残っている。特に資料中の表面を見ると上半部に砥面がよく残っており斜状に0.2～0.3㎝の細かい溝が出来ている。

現存する長さは15㎝、重量520ｇ、石質は砂岩である表採資料。

２は全面に砥面が残っており、偏平で長方形状になる。表裏面、側縁部ともに細かい砥面となっており、摩滅している。砥石としては、小形の部類に入るものと思われる。あるいは携帯用としての砥石であったか。現存長10.4㎝、幅6.4㎝、厚さ2.2㎝、重量250ｇ、石質は砂岩である。E－３第２層。

３は半分だけ残った資料でやや偏平になる。表裏面と側縁の一部に砥面が残っている。表面は全体に砥面がみられる。裏面は剥落している部分があるが、上半分に砥面がよく残っている。重量480ｇ、石質は砂岩。B－１第１層。

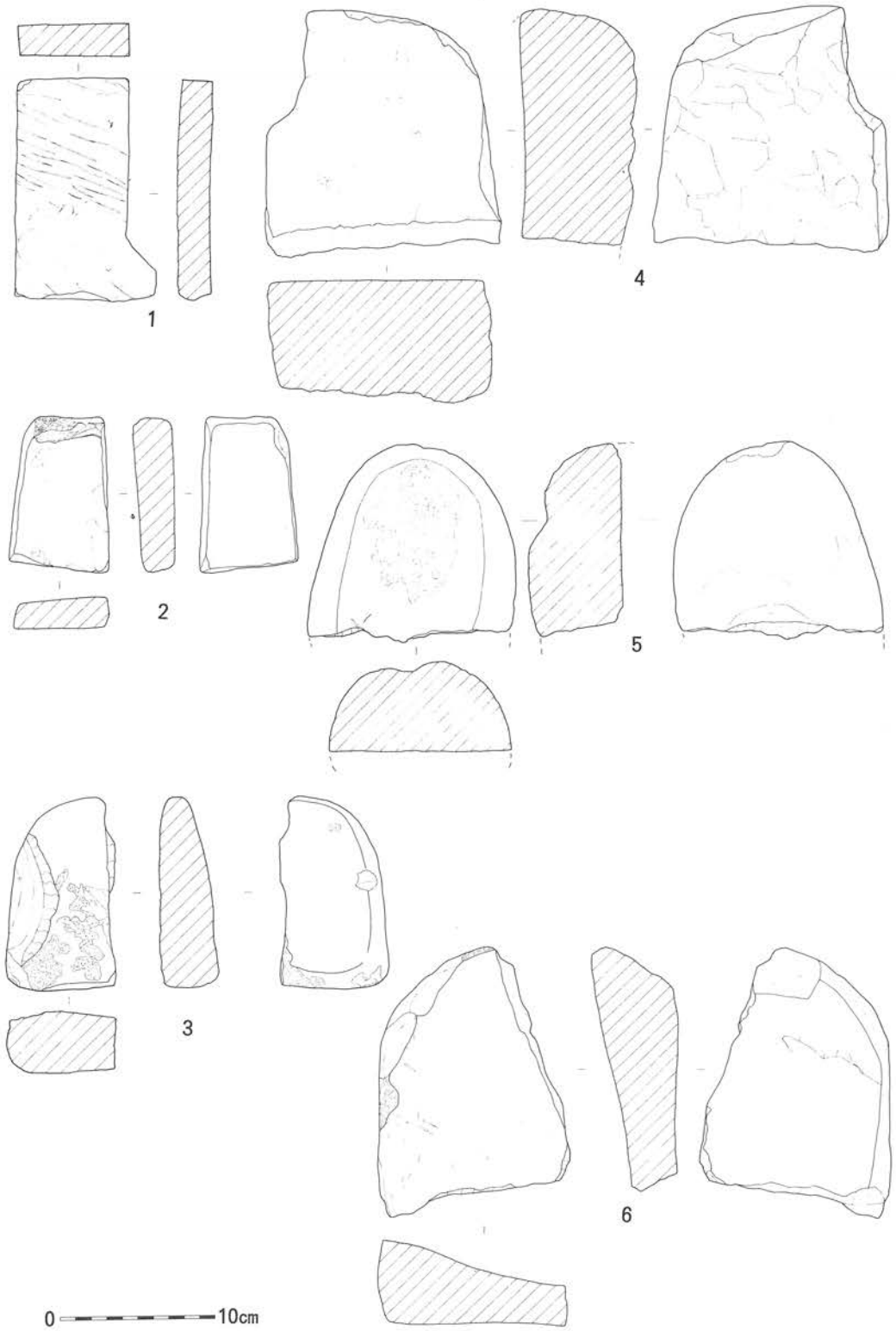
４はやや大形の砥石であるが周縁部が欠損している。砥面は両面に残っている。片面は全面砥面として使われている。片面は自然面を多く残しているが中央部にかけて深みを作り滑らかに摩滅している。長さ14.7㎝、重量1,375ｇ、石質は砂岩。表採。

凹　石

第39図５の資料。片面に敲打による凹が残っている。凹の大きさは直径4.5㎝、最深部0.7㎝。周縁部に小さな打痕が残っている。全面とも自然面で特に裏面は大きく半裁した形になって平坦な面となっている。わずかに摩面が残っている。重量1,400g、石質は砂岩。表採。

石　皿

第39図６の資料。本来の形は円形状になるもので、その部分が残ったものである表裏面に摩面が残っており、周縁部で厚くなり、中心部へ深くなる。中心部では深く摩りけずれ凹が出来ている。表裏面とも同じような摩り形をしており、片面をある程度摩り使った段階でさらに片面を使っている。側縁部は自然面のままとなっている。重量1,400g、石質は砂岩。E－３第１層。



第39図（PL. 38）石器　砥石: 1～4、凹石: 5、石皿: 6

マ．羽　口

第40図１．２．３の資料。

１は本体部から剥離した資料である。不定形であるが風道孔が残っていることから、かろうじて羽口の残片であることがわかる。使用している際に高温化の中で薄く剥がれ落ちた可能性がある。片面は砂岩に付着痕が残っており、片面は炉内に面していた部分である。鉄滓の溶着とともに黒釉状にガラス質の光沢を帯びた状態となっている。高温化の中で溶けたことがわかる。風道孔の大きさ約2.0cm。残存重量170g。B－３第２層。

２は外形が不定形で自然面となっている。風道の長さ７～８cmと中央部の孔径1.0cmが把握出来る。片側面にはノミ痕が残っている。重量1,325g、石質は硬質砂岩。表採。

３の資料も２と同様な割れ形をしており、外形は円柱状になる全体が赤く焼けている。風道の長さ10.5cm、孔径2.8cm、重量1,115g。風道孔は片方がややラッパ状に広がり木呂側の接続部分に細くなる。石質は硬質砂岩。B－１第２層。

ケ．鉄製品

鉄　釘

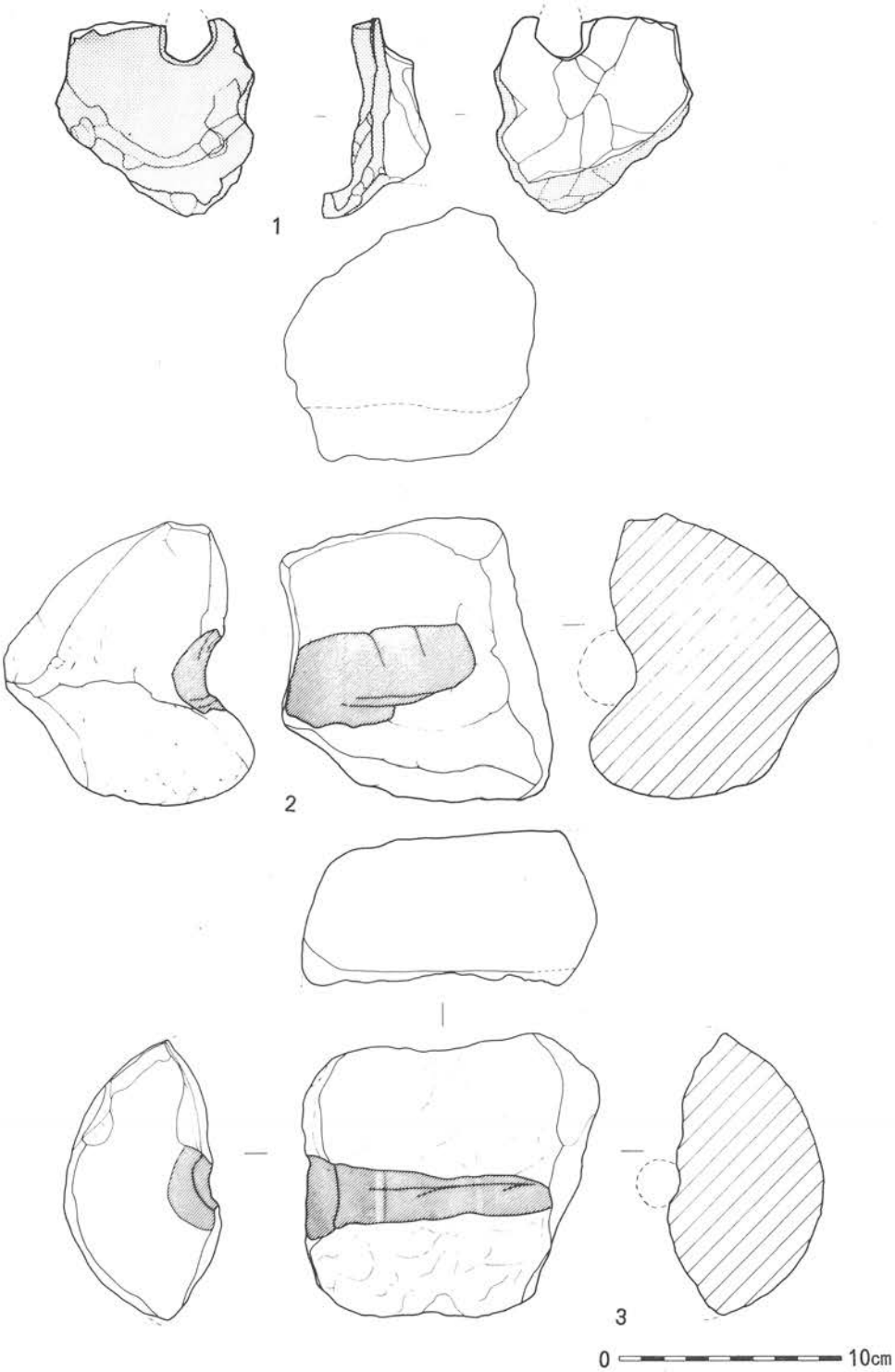
第41図１～７までが釘として判断されるものである。頭部が丸みをなしたものや、平坦に叩打され角状に折り曲げて成形してあるものとなっている。あるいはすでに頭部が角状を作らず叩打で潰れたものもある。頭部の折り曲げの角度や折りの長さに大小の差異が認められる。釘の種類としては角釘の部類に入るものである。断面はいずれも方形状をなす。現存する長さは３cm～９cm前後で、厚みにおいては、最小４mm前後、最大幅で８mm前後となっているが、これは錆膨れの付着分の為、長さにおいては使用時による折れ曲げなどがあり原形の大きさにはなっていない。実測図では現状のままの錆膨れを含んだ形状を示して図化してある。いずれも頭部から先端部にかけて小さなクラックが生じており、縦の剥離が見られる。かろうじて頭部の形状から識別できるが、先端部はすでに鋭利さを欠き、欠損状態や錆膨れで丸く潰れている。出土した資料の大半が、B・Eトレンチを中心として出土したものである。板状に剥離しているのを見ると、焼き入れによる鍛造品として作られたものと考える。

鉄釘状製品

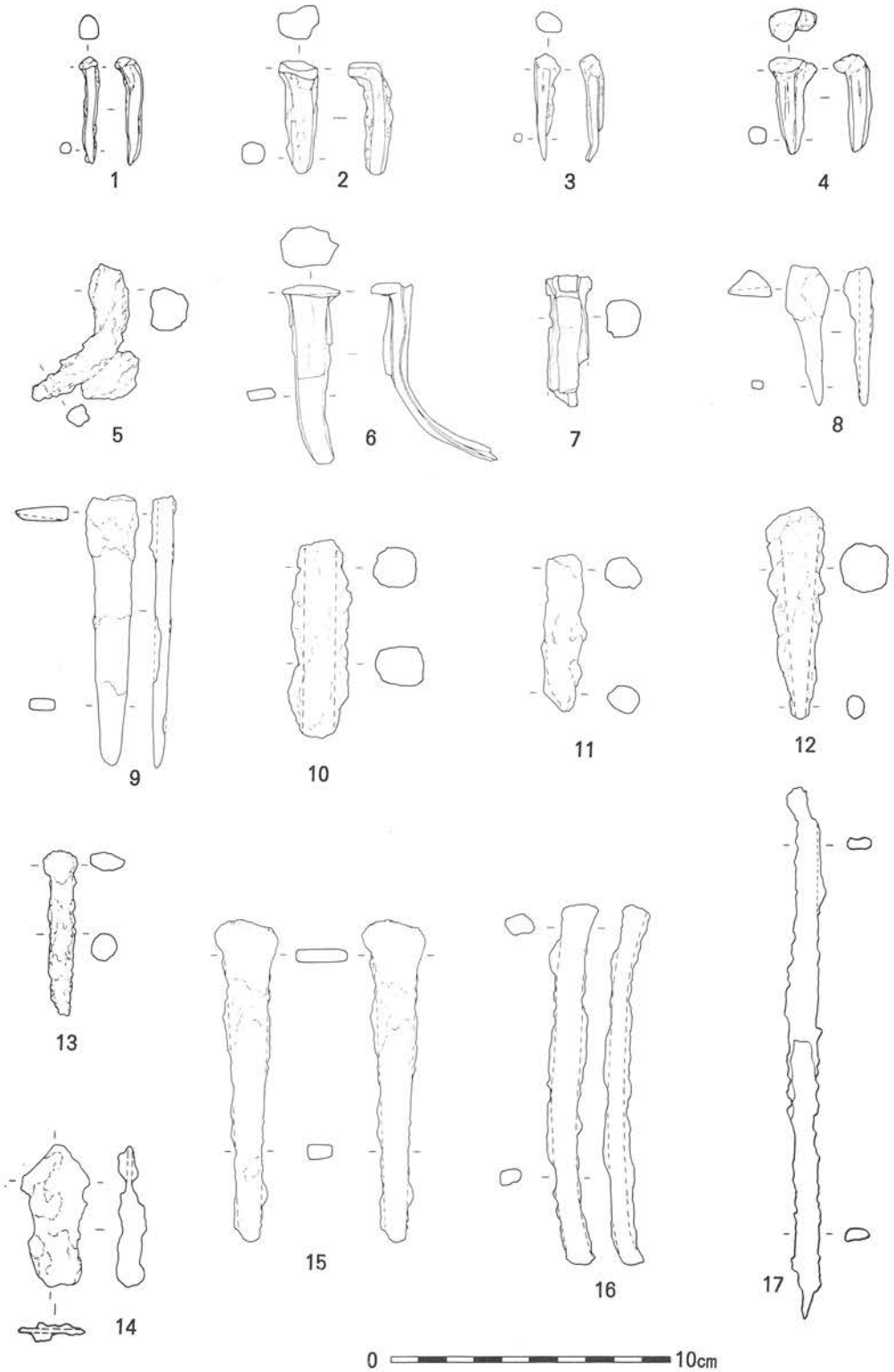
第41図７の資料。頭部と先端部が欠損している。現存する形からは逆L形を保っており、角釘にも共通する形をとっているが判然としない。断面は方形状をなす。頭部の欠損部に茶褐色の錆が発生している。縦に四つの角からのクラックが入り、角に沿って膨れて折れている。

刀子状製品

第41図８、９の資料。２点ともに柄の部分が残ったものである。８、９とも板状に仕上げて



第40図（PL. 39）羽口　砂岩製: 1～3（点描はガラス質鉄滓付着部分、斜線は気孔部分）



第41図（PL. 40）鉄製品　釘: 1～7、刀子: 8・9、形状不明品:10～17

ある。9の資料は木目がわずかに付着している。2～3層に小さなクラックがはいる。

形状不明品

第41図10～17に掲載した資料である。10、11は方形状の断面であることは、ある程度確認出来る。先端部が丸くなり摩滅している。全体が錆に包まれており、全形がわからない。12は断面が方形状になり、一方が細く先を鋭利に仕上げてあったものと判断される。片方が折損している状態にある。錆の付着が厚く原形が判然としない。あるいは釘状製品に入るものか。13も断面が方形状をなし一方を細く、頭部（上端部分）を偏平に仕上げてある。やや反りぎみになる。縦にクラックが入る。先端が欠損している。14は板状になるものである。錆の付着で全形が判然としない。厚さは1～2㎜。15は全体が薄い偏平状に仕上げたものである。断面は方形で一方に細く先端部が尖る。一方はやや幅広に板状になる。小さな錆膨れは発生しているが原形はよく保たれている。現存する長さは11.5㎝、最大幅1.5㎝、最小幅5㎜前後となっている。あるいは刀子状製品の柄の部分に類似するものであろうか。

16は細く偏平状に仕上げたもので上下端が欠損している。錆膨れが著しい。17も偏平状に仕上げたものであるが、すでに縦に大きく剥離している。棒状製品で上下端が欠損している。16、17は類似する資料であるが全形がわからない。10～17の資料は原形からの部分だけ残ったものであり原形の復元図化が困難である。

鉄　鍋

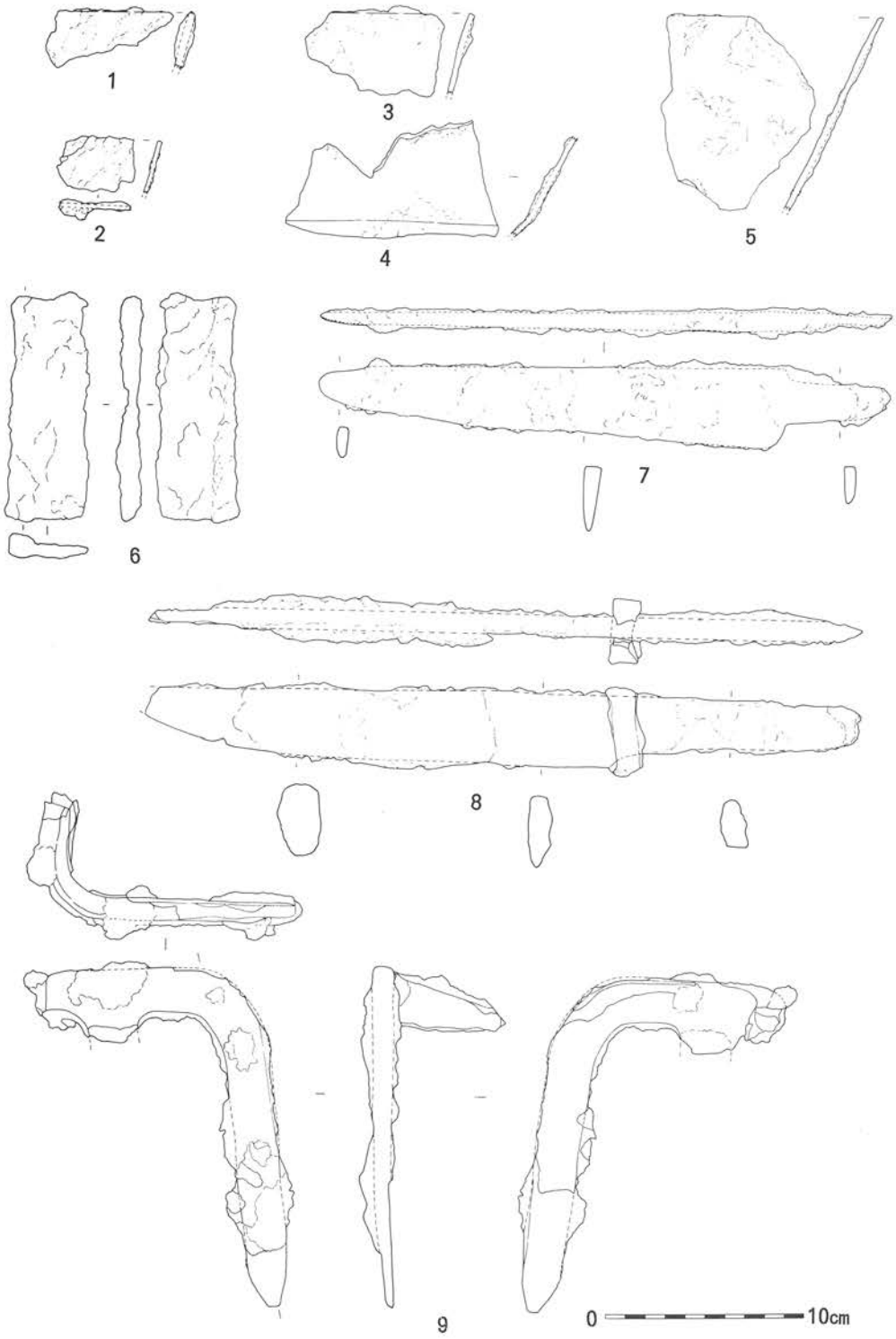
第42図1～5に掲載したものが鉄鍋の破片である。いずれも小さな破片で2～3㎜の薄い板状として残ったものである。1～3、5は口縁部の資料で直状になるものから外側にやや開きぎみになる浅鉢形の鍋である。口唇部は小さくわずかに丸みをもつものや、平縁をなすものである。4の資料は下半部が若干くの字形に折れ曲がっていく腰折れの鍋である。錆汁や小さな錆膨れは発生しているが、表裏面ともに比較的残りは良い。

板状製品

第42図6の資料。現存する長さは11.5㎝、幅3.8㎝、厚さ3～5㎝を測る。全体に淡黄色の錆や淡褐色の気泡状の小さな錆穴が取り巻いている。わずかに木目痕の残片が付着している。全体的には板状になっているが、片側を内側へ折り曲げた跡が見られる。折り曲げ部で8㎜前後で、板状で薄くなった部分で3㎜前後となっている。

山　刀

第42図7、8は山刀としたもので西表島でヤンガラシと呼ばれるものである。7は峯が平担に成形し、先端部に細くなり、中子の方へやや厚くなっている。刃部は両刃となっている。刃



第42図（PL. 41）鉄製品　鉄鍋: 1～5、板状製品: 6、山刀: 7・8、鍬: 9

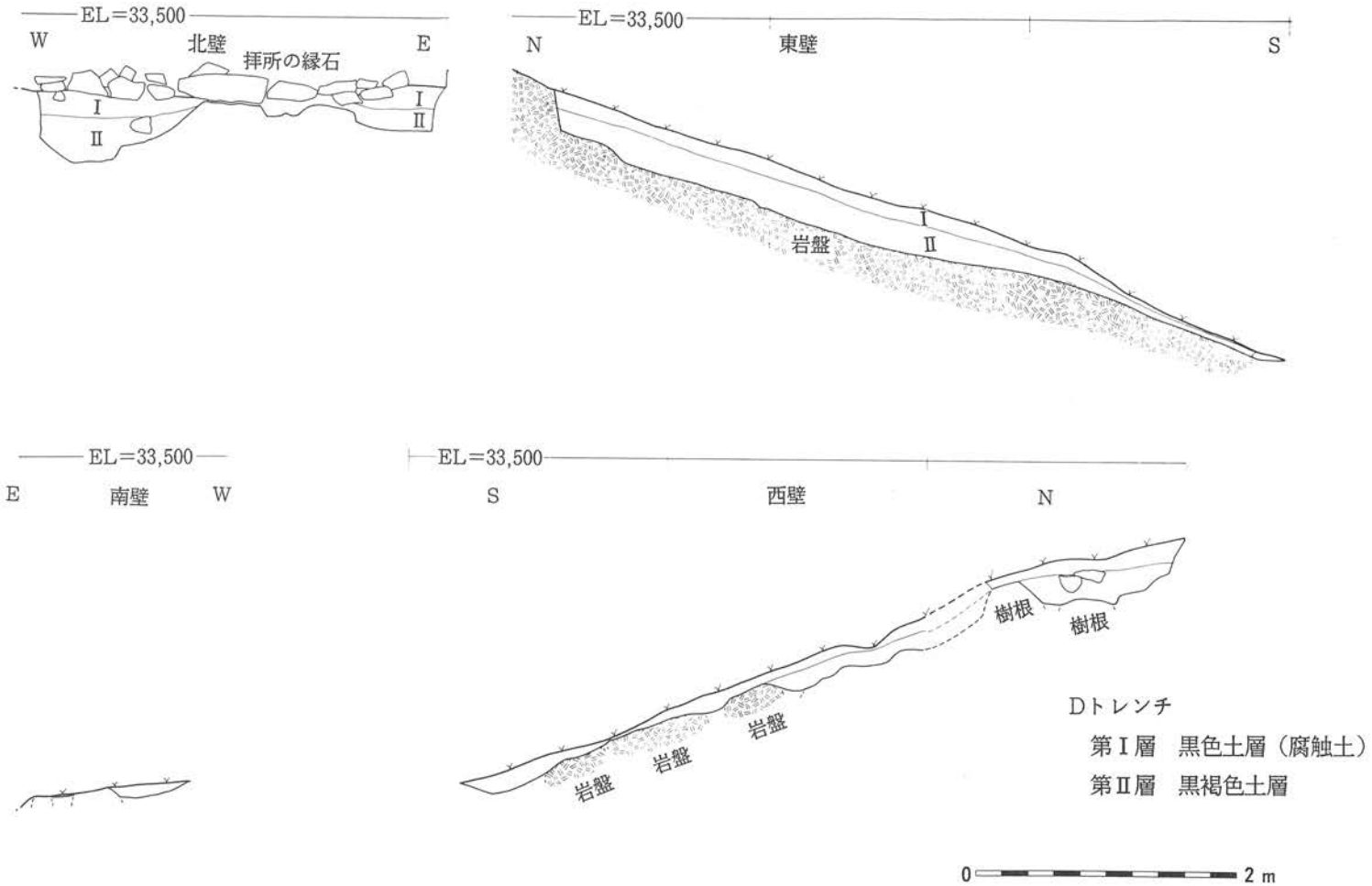
わたりは23.8cm、中子5.2cm。全長29cm。重量307ｇ。切先は磨耗し刃部は刃こぼれができている。刃わたりと中子との境が上下から段をつくっている。先端部の近くから、中子にかけて錆ぶくれが出来ている。

８は峯の切先が細くなっているが、中子にかけては同様な厚みをなす。切先は欠損しているが刃部から切先にかけては外反りになっている。中子の方で、段を作る。７に比べると錆ぶくれが著しく刃部の鋭利さが欠けている。中子に1.4cm幅のリングが残っており、柄の装着部の止め具である。刃わたり24cm、中子12cm、全長36cm、重量432ｇ。

現在、西表島で使われている山刀に比較すると刃幅が、現在のものが広くなっている。古いタイプのものは８のように細身であったとされている。生活の必需品の一部で山・海・畑へ出かける時は、携帯していく万能の利器である。サヤは、それぞれ個々人が工夫して板材で作っている。石垣島の池村鍛冶屋でも数多く作られている。

三又鍬

第42図９の資料である。現在も使用している三又鍬に類似するものである。三又のうち２本が折れている。右側端の根元部分が折れ曲がっている。左側端の部分が残ったものであるが、鍬の先端は三角状に細く成形し全形は偏平に仕上げてある。鍬の外形はU字形になるものである。縦断面からは、下端部に細くなり上端はやや厚くなっている。三又の内、左、右端の刃は若干外側に開いていく。現存する部分で約15cm前後。厚さは８～９mm前後。錆膨れとともに、全体が板状に薄く剥離しており、地金部分が表面に露出している。裏面には細かい木炭痕が付着している。



第43図　第Ⅱ地区層序　Dトレンチ

2．第Ⅱ地区

(1)層　序

第Ⅱ地区は大竹根所とその周辺に限定してＤトレンチを設定した。特に根所約10㎡のフラット面全ての発掘と、南側斜面のトレンチから、層序は次のような状況であった。

拝所内は西側部分に若干削られた跡があり、造成地面として残っていた。東西、南北の各壁面に残った層序は複雑に入り込んでおり、基本層序は第Ⅰ層から第Ⅲ層までとなっているが、層色の違いによって各層の推積状況を示している。

（拝所内）

東壁　第Ⅰ層・・・・淡灰色土層
　　第Ⅱ層・・・・灰黄色混礫土層
　　第Ⅲ層・・・・黒色土層
　　以下、硬質砂岩の岩盤

西壁　第Ⅰ層・・・・欠落する。
　　第Ⅱ層・・・・黒色土層
　　第Ⅲ層・・・・灰黄色土層
　　以下、硬質の岩盤

南壁　第Ⅰ層・・・・淡灰色土層
　　第Ⅱ層・・・・灰黄色混礫土層
　　第Ⅲ層・・・・黒色土層
　　以下、硬質砂岩の岩盤

北壁　第Ⅰ層・・・・淡黄色土層
　　第Ⅱ層・・・・黒色土層
　　以下、硬質砂岩の岩盤

Ｄトレンチ（南側斜面）

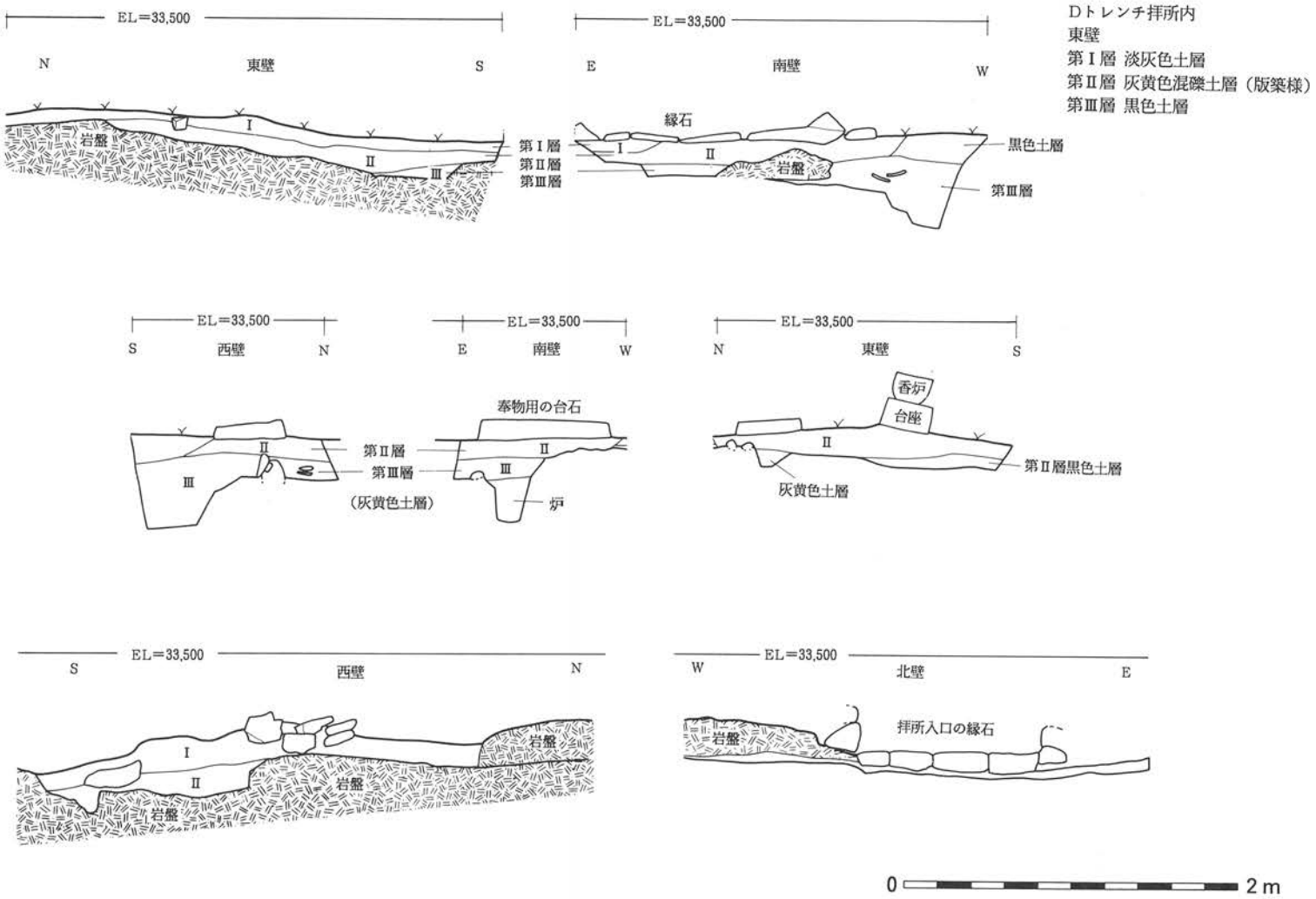
北壁　第Ⅰ層・・・・淡黒色土層
　　第Ⅱ層・・・・黒色土層
　　以下、岩盤

東壁　第Ⅰ層・・・・腐蝕土層
　　第Ⅱ層・・・・黒色土層
　　以下、岩盤

西壁　第Ⅰ層・・・・腐蝕土層
　　第Ⅱ層・・・・黒色土層
　　以下、岩盤

(2)遺　構

大竹拝所は周縁を砂岩で数段に積み上げて方形状に取り囲んである。入口部では基盤の砂岩を造成しており切り石を用いて囲ってある。所有者である大竹八重雄氏での管理のもとに、現在に拝まれている。拝所内の約10㎡の小範囲はフラットに形成されており、人工的に砂岩の混合土を入れて造成された跡があった。造成の厚みが約５～10㎝と薄く、その下層には砂岩の岩



第44図　第Ⅱ地区層序　Dトレンチ拝所内

第45図　遺構図　Dトレンチ及び大竹拝所内

盤が広がっている。岩盤には20cmから30cm前後の小ピットが掘削りされており、ほぼ円形になるものと思われるものと、やや方形状になるものがあった。深さは20cm～25cm前後となっている。

さらに南側傾斜面のＤトレンチにおいて同様なものが検出された。全体のプランを示す形では検出されなかった。ピット内の壁面には、ノミ状工具を想定させる削り痕が残っていた。何等かの施設が存在したピット群であったと思われる。拝所内がフラットな面を形成していることから、これは鍛冶場としてのものか、あるいは拝所を作る時に造成したものか検討を要する。狭い範囲の広場であるが、工房としては十分であったと思われる。東側から南側にかけては斜面を作り廃滓場として、効率よく利用したと考えられる。

また、Ｄトレンチでは、岩盤を階段状に成形した跡や礫を重ねた旧小道が検出された。（下段にある拝所への道）。

(3)出土遺物

第Ⅱ地区

イ．青　磁

Ⅰ類ａ

第46図１は口径の推算が10.１cmを測った。口唇は尖り気味である。外面に片切り彫りで弁先を尖らせて蓮弁を描く、蓮弁の中も箆で丁寧に削り稜を造る。釉色は透明な淡黄緑色を帯びている。素地は白色の微粒子である。貫入はない。Ｄトレンチ第２層黒色土層出土。

Ⅰ類ｂ

同図２は推算口径16.0cmを測った。片切り彫りで弁先を尖らせて描く。釉は淡緑色で失透釉である。素地は淡灰白色の微粒子である。貫入はない。拝所内東側表採。

Ⅴ類ｂ

同図３はほぼ完形に近い資料で、サイズは口径が13.3cm、器高6.7cm、高台径5.3cmを測る。釉は黄緑色の失透釉で、高台外面まで施す。轆轤痕が顕著にみられる。素地は灰白色の細粒子である。貫入はない。Ｄトレンチ拝所内第１層出土。

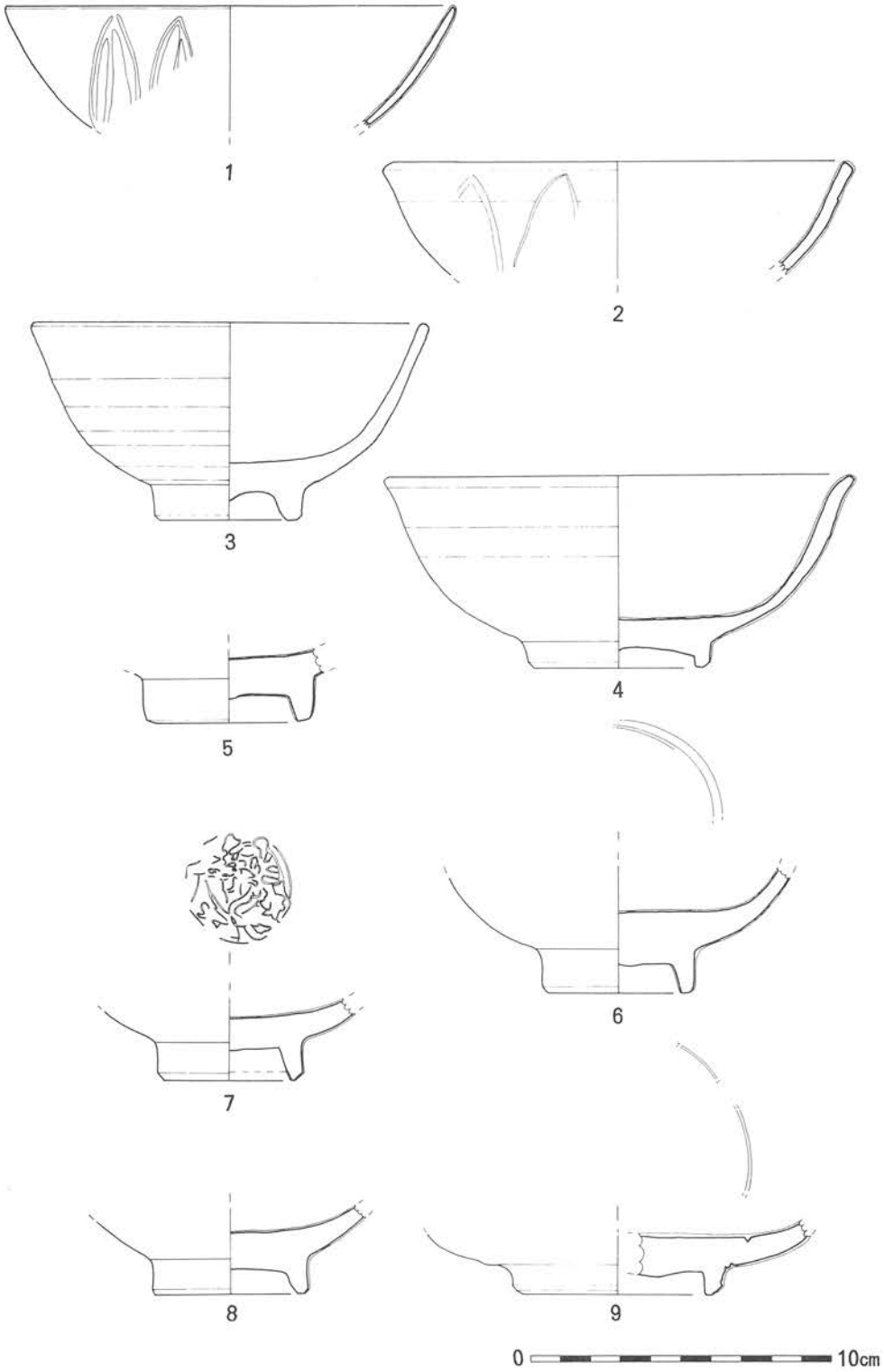
Ⅴ類ｄ

同図４の推算されたサイズは、口径15.6cm、器高6.2cm、高台径6.5cmを測った。内底に圏線を廻らす。釉は明緑色で高台外面まで施す。畳付は研磨される。素地は淡灰白色の微粒子。貫入はない。Ｄ－３第１層出土。

青磁碗底部

ａ種

同図５は高台径5.5cmを測る。釉は全面に施される。外底の一部分を箆で掻き取ろうとしているが途中で止まっている。釉色は淡青色を帯びている。素地は灰白色の細粒子である。内底に



第46図（PL. 42）青磁　碗（Ⅰ類a：1、Ⅰ類b：2、Ⅴ類b：3、Ⅴ類d：4、Ⅴ類：5、Ⅴ類d：4、
碗底部　a種：5、b種：6、c種：7・8、d種：9）

細かい貫入がみられる。拝所内第１層。

ｂ種

同図６は推算高台径が5.2cmを測った。内底に圏線を廻らす。釉は透明な淡黄緑色を帯びている。全面施釉後、外底釉を掻き取っている。畳付は二部研磨されている。素地は白色の細粒子である。両面に荒い貫入がみられる。拝所内第２層出土。

ｃ種

同図７は高台の直径が5.0cmを測る。内底に印花文を施す。釉は透明な淡青緑色である。高台内面途中で釉が掻き取られている。素地は灰色の細粒子である。両面に荒い貫入がみられる。拝所内表採。

同図８の推算された高台径は5.3cmを測った。釉は高台内面途中で止まっている。釉色は淡青色である。畳付は研磨され平坦になっている。素地は灰白色の微粒子である。外面及び外底面に鉄分が付着し、サビが発生している。内面は0.1mm前後の小孔がみられ、釉色も変化し灰青色となっている。内底の小孔は鍛冶製錬で鉄製品を加工する際に飛び散った剥片（スケール）によるものとみられる。前記６の資料にも観察できた。貫入はない。拝所内第２層出土。

ｄ種

同図９の推算された高台径は7.1cmを測った。大振りの碗の底部である。内底に圏線を廻らす。釉は高台外面まで施す。畳付は丁寧に研磨されている。釉色は透明な淡黄緑色である。素地は白色の微粒子である。Ｄ－２第２層出土。

小　結

第Ⅱ地区の青磁の特徴として碗のみが出土している。この地区の青磁の時代幅は14世紀後半から15世紀中頃である。下限の資料はⅠ類ａであり、上限は底部のｃ類である。染付の面からは下限が15世紀前半に位置付けられる為、ほぼ妥当な線であろう。

底部資料の第46図６・８は、内底面に鍛冶製錬で鉄製品を加工する際に飛び散った剥片（スケール）によって、小孔が出来たものとみられる。少なくともこの第Ⅱ地区の拝所内が鍛冶場であったことを裏付けている資料として理解できるのではないだろうか。

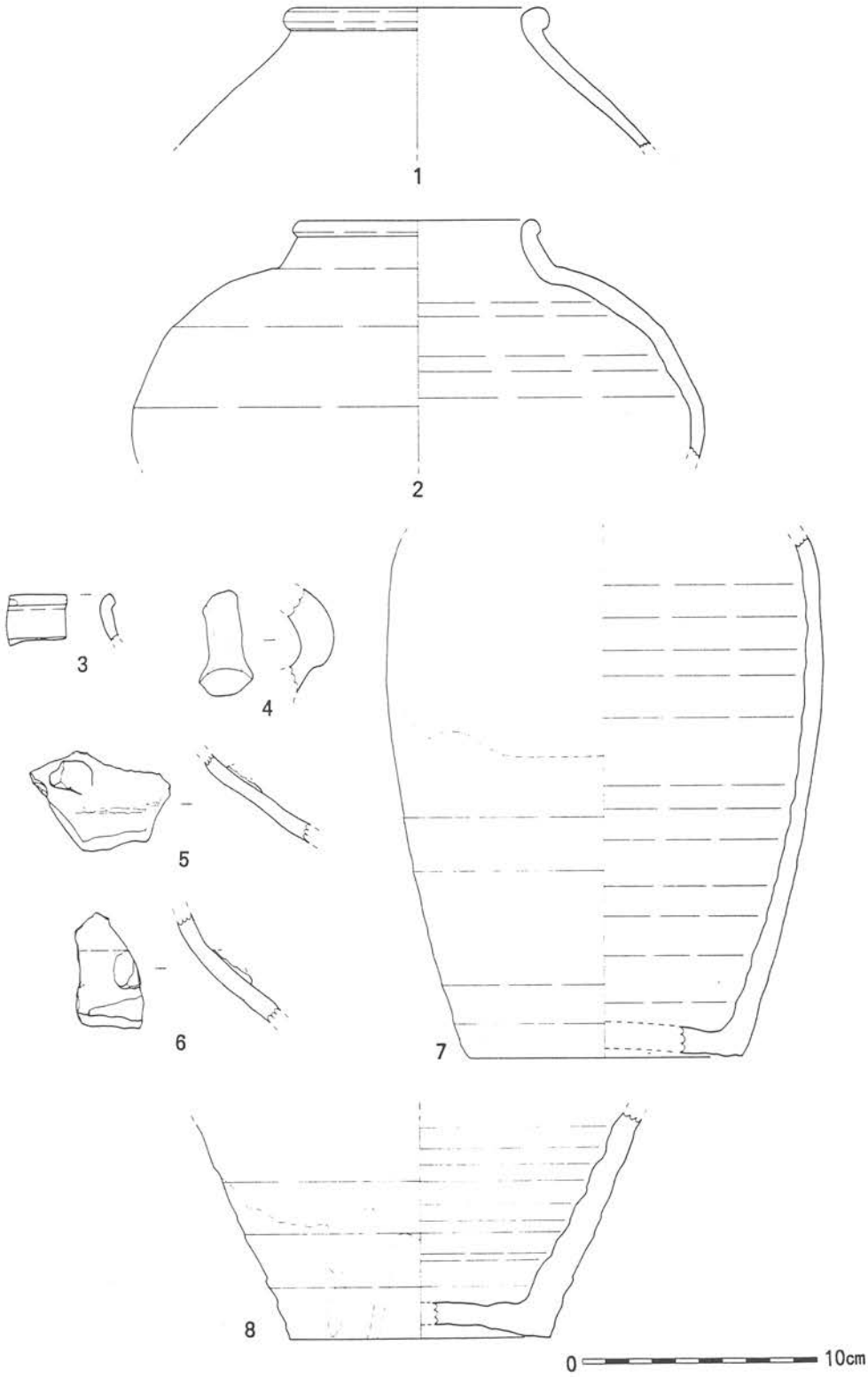
ロ．褐釉陶器

第Ⅱ地区からは、壺・茶入れ壺が出土している。以下、分類概念に従って個々の記述を行う。

1）壺

Ⅲ類

第47図１は口径が11.5cmと推算された。釉は茶褐色で、肥厚帯中央から下に施す。内面には口縁部を除いて、薄く釉を施す。素地は淡茶色の微粒子で、白色鉱物を混入させる。貫入はない。Ｄ－２第２層出土。16世紀代。



第47図（PL. 43）褐釉陶器　壺Ⅲ類: 1、Ⅴ類b: 2、茶入れ壺: 3、壺把手イ類: 4、胴部ロ類: 5・6、胴・底部Ⅰ類: 7・8

V類b

同図2は推算口径10.7cm、最大胴径24.6cmを測った。釉は頸下部の屈曲部分から下に茶褐色の釉を施す。胴上部に重ね焼きの目痕が観察できる。素地は淡紫茶色の細粒子、白色および有色鉱物を多量に含んでいる。貫入はない。拝所周辺の石積み内より表採。15世紀代。

2）茶入れ壺

同図3は口縁の小破片で、茶黒色の釉を両面に薄く施している。素地は淡茶色の非常に細かい微粒子であり、ねばりがある。貫入はない。拝所内第2層出土。

3）胴部資料

イ類

同図4は縦耳の把手資料である。釉色は淡褐色である。素地は淡灰色の細粒子で、白色鉱物・ガラス質の鉱物を少量ながら含んでいる。貫入はない。Dトレンチ第2層出土。

ロ類

同図5は重ね焼きの際の目痕が観察できる。釉は淡黄茶色で外面にのみ施されている。素地は淡橙色の細粒子である。素地に白色および有色鉱物を少量混入する。非常に細かい貫入が観られる。D－4第1層出土。

同図6は淡黄緑色の釉を外面にのみ施す。素地は淡黄白色の細粒子で、有色鉱物と白色鉱物を少量混入させる。貫入はない。拝所内表採。

4）胴・底部の資料

I類

同図7は推算底径が11.8cmを測った。最大胴径は18.8cmであった。全体的に長胴形の器形が予想される。釉は禿げ落ちていて、淡黄白色になっている。胴中央で釉が止まっている。胴中央より下は轆轤痕を箆で削り整形する。素地は淡橙色の細粒子で白色鉱物とガラス質の鉱物が微量ながら含んでいる。貫入はない。Dトレンチ第2層。

同図8は推算底径が11.2cmと求められた。釉は濃茶色で胴下部まで施す。素地は淡い赤紫色の細粒子で粗い白色鉱物を少量混入させる。貫入はない。D－3第1層。

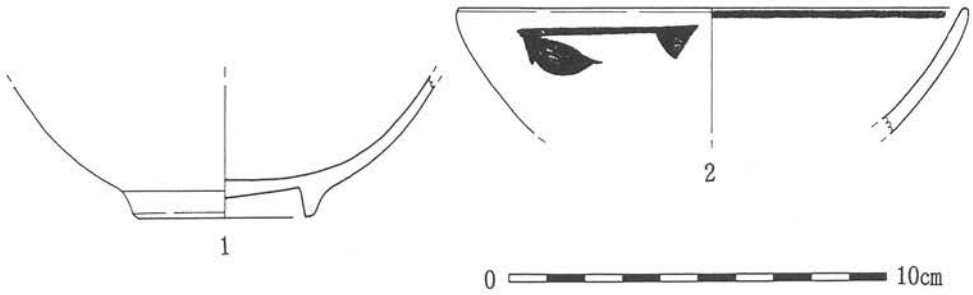
小　結

第Ⅱ地区では少量しか得られていない。茶入れ壺の口縁破片が出土していて、今帰仁城跡[註1]のものと口縁形態が類似する。胴・底部の資料で長頸壺の例は成屋遺跡[註2]で出土しているが、整形等は一致しない。

註

註1．金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

註2．青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学　第9号　1987年。



第48図（PL. 49）染付　碗（Ⅰ類: 1、Ⅶ類a : 2）

ハ. 染　付

Ⅱ地区からは染付が2点得られた。これを図示した。

Ⅰ類

第48図1は高台径4.8cmを測る無文の底部である。素地は白色の微粒子である。釉は畳付のみ露胎し、淡青白色の釉を施す。貫入はない。D－2第Ⅱ層出土。

Ⅶ類a

同図2は口径の推算が13.6cmを測った資料で、外面に界線と文様構図が把握できない図を描く、内面にも界線を廻らす。素地は黄白色の微粒子。淡黄白色の釉を施した後に淡紫色の呉須で文様を描く。貫入はない。D－2第Ⅰ層出土。

小　結

第Ⅱ地区で、包含層中から出土したものは1点のみ得られた。Ⅰ類と分類した碗の底部破片である。他の遺物の共伴関係から15世紀初頭頃が考慮された。Ⅶ類aは16世紀から17世紀に比定されるものであるが、出土層が第Ⅰ層である為、持ち込まれて廃棄された可能性も高い。また、拝所内からは染付の出土例は1点もなかったので、14世紀後半から15世紀前半が考えられた。

ニ. 土　器

本地区からは、総数736点が得られた。確認できた器種は鍋形と壺形の２器種であった。以下、分類概念に沿って記述を行なった。

イ）鍋形土器

Ⅰ類ａ

第49図１の復元されたサイズは、口径30.4cm、器高18.5cm、底径14.6cmを測った。耳は口唇から下、２cmの箇所に貼り付ける。篦削りを胴中央部から下に施した後にナデを施すが消え切っていない。器色は黄褐色を主体とし部分的に茶褐色を帯びている。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。拝所内第２層出土。

同図２は推算されたサイズが口径42cm、器高18.7cm、底径28cmを測った。 耳は口唇から下、2.5cmの箇所に貼り付けている。器面調整は篦削りを胴上部から下に施した後にナデ消しを行なうが徹底しない。器色は黄褐色を主体とするが部分的に茶褐色も帯びる。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。拝所内第２層出土。

Ⅰ類ｂ

同図３は口唇から下、6.5cmの箇所から篦削りが施される。部分的には口縁まで施されている。器色は淡茶色を呈する。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。Ｄ－２第１層出土。

Ⅰ類の耳（把手）資料

同図４はⅠ類の範疇に入る資料である。口唇から下、2.5cmの箇所に耳を貼り付ける。ナデで仕上げている。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。Ｂ類、拝所内第２層。

同図５もⅠ類に所属する資料である。口唇から下、1.4cmの箇所に耳を貼り付ける。ナデで仕上げる。器色は黄褐色を呈している。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。Ｄトレンチ第２層。

Ⅱ類ｃ

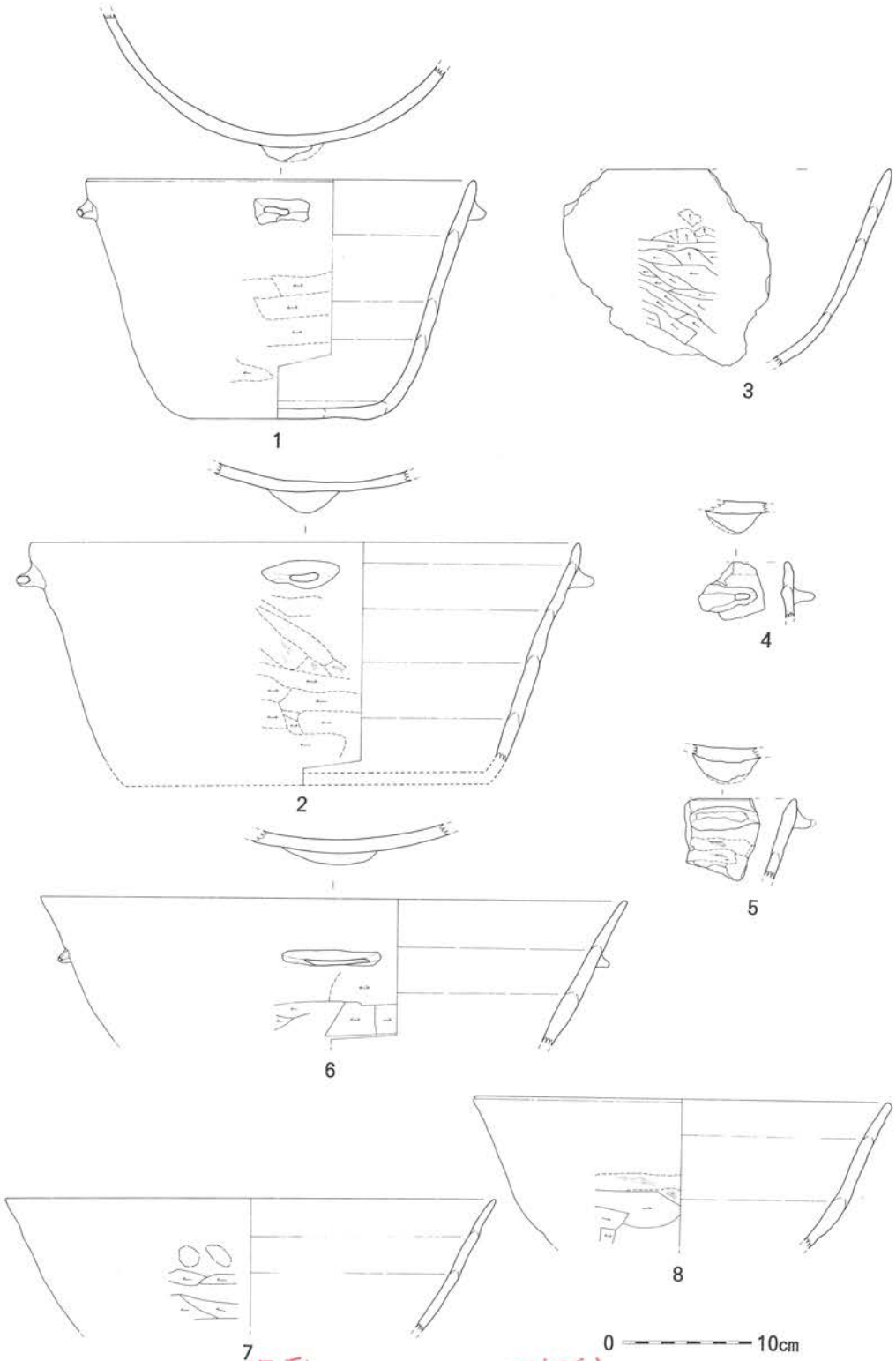
同図６は口径の推算が45.2cmと求められた。耳は口唇から下、５cmの箇所に貼り付ける。篦削りは口唇から下8.5cmの箇所から主に施されている。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。Ｄ－３第１層出土。

同図７は推算口径が38.0cmを測った。同図８の推算口径は32.4cmであった。７・８の篦削りは７が口唇から下、6.2cmの箇所から施し、８が7.5cmの箇所から施している。器色は７が黄褐色で、８が茶褐色を帯びている。胎土は両者とも粗く、Ｂ類（多孔状）である。両者ともＤ－３第１層の出土である。

Ⅲ類ａ

第50図９は口径の推算が34cmと求められた。篦削りは口唇から下５mmの箇所から施されるが大半がナデ消される。ナデは徹底しない。器色は黄褐色を主体とするが部分的に淡黄色となる。胎土は細かい。Ｂ類（多孔状)。Ｄ－２第１層出土。

同図10は推算口径が37cmを測った。篦削りは口唇から下に2.8cmの箇所から施しているが、ほ



第49図（PL. 44）土器　Ⅰ類a：1・2、Ⅰ類b：3、Ⅰ類：4・5、Ⅱ類c：6～8

とんどナデ消されている。器色は淡黄色を主体とするが部分的に黄褐色を帯びている。胎土は細かい。D類（多孔状）。Dトレンチ第2層出土。

Ⅲ類b

第50図11は口径21.6cmと推算された小型の鍋である。口唇の外端を若干、折り曲げて突出させる。この手のものはⅢ類aの中にも見い出せるが、篦削りが口唇から下5.3cmの箇所から施されている為、本タイプに含めた。器色は黄褐色を帯びる。胎土は細かい。D類（多孔状）。D－1第1層。

第50図12は復元されたサイズが、口径40cm、高さ17cm、底径12cmである。丸底気味の底部である。耳は口唇から下3.3～4.5cmの箇所に斜位に貼り付けている。篦削りは口唇から下、7cmの箇所から胴下部まで施している。削りの方向は主に左から右方向に施している。器色は茶褐色を主体とするが、部分的に褐色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。D－2第1層。

同図13は口唇から下、7.6cmの箇所から篦削りを施すが大半はナデ消されている。器色は黄褐色を帯びている。胎土は粗い。B類（多孔状）。D－3第1層出土。

Ⅱ・Ⅲ類の耳（把手）資料

同図14・15は耳を貼り付けた口縁資料である。14は口唇から下、6cmの箇所に耳を貼り付けている。篦削りは耳の直下から施している。15は口唇から下、4.6cmの箇所から耳を貼り付けている。ナデで仕上げている。器色は14が茶褐色、15が黄褐色を帯びている。胎土は両者とも粗く、B類（多孔状）である。14・15ともD－3第1層から出土している。

Ⅳ類a

同図16は口径47cm、器高32.6cm、底径29cmと復元された資料である。耳は口唇から下、2.7cmの箇所に貼り付けている。大半が雑なナデで仕上げているが底部近くで篦削り（ナデ消されている）が施されている。器色は黄褐色を呈している。胎土は細かい。B類（多孔状）。拝所内第2層出土。

同図17は口唇から下、3cmの箇所に耳を貼り付けている。耳の直下に篦削りを施すがナデ消されている。器色は黄褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）。拝所内第2層出土。

底部資料

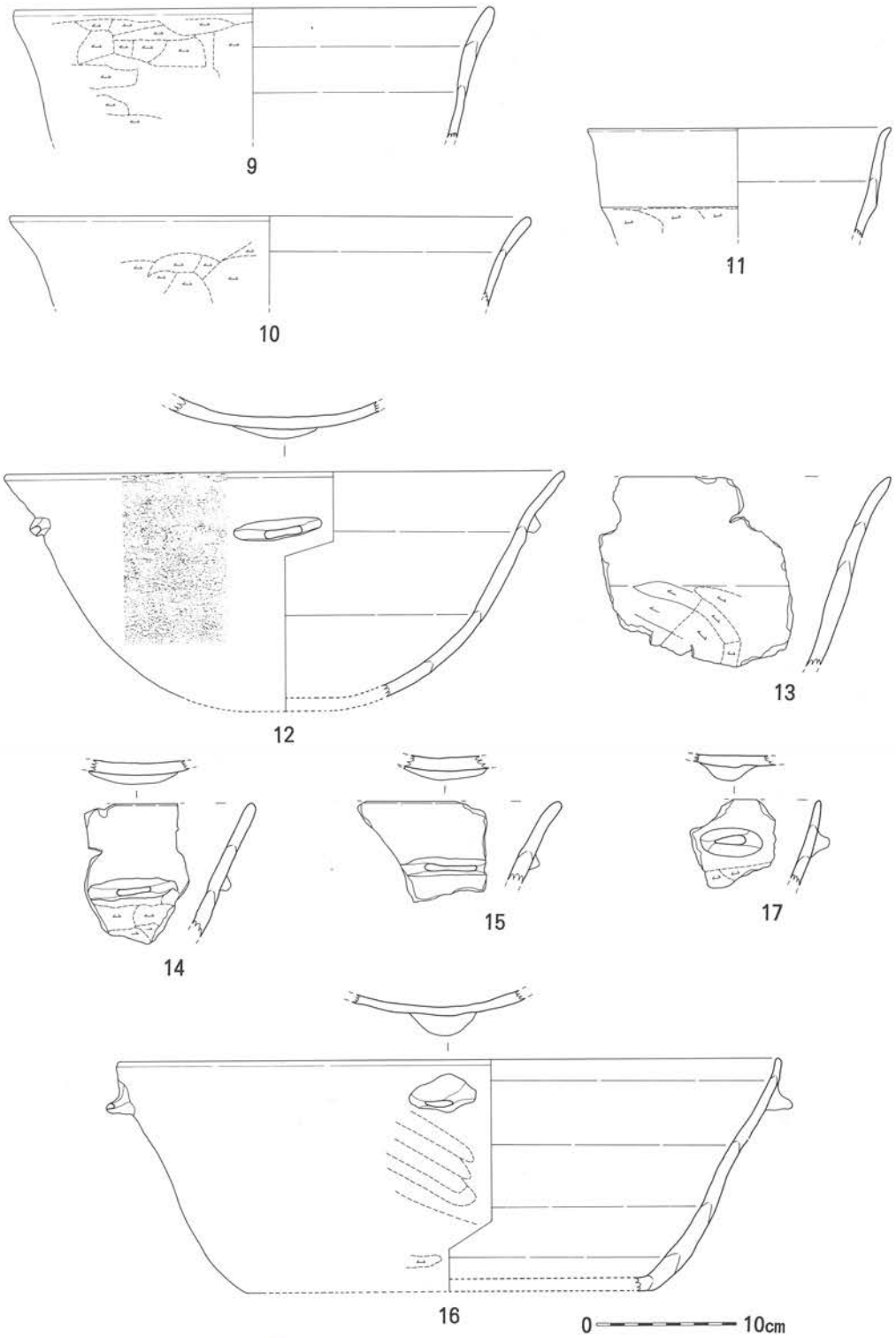
鍋形土器の底部として特定できた資料が3点得られた。分類は鍋形土器のものと一致させた。

Ⅰ類

第51図18は推算底径が23.2cmを測った。器面は剥落し磨耗するが篦削り後にナデを施した可能性がある。器色は黄褐色を帯びる。胎土は粗い。B類（多孔状）である。Dトレンチ第2層。

Ⅱ～Ⅳ類

同図19は底径が27.4cmと推算できた。底面には篦削り後にナデを施すが徹底しない。外面は



第50図（PL. 45）土器　Ⅲ類ａ：9・10、Ⅲ類ｂ:11～13、Ⅱ・Ⅲ類:14～15、Ⅳ類ａ:16・17

ナデ仕上げである。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。B類（多孔状）。Dトレンチ第2層出土。

第51図20は推算された底径が24cmを測った。器面の大半は磨耗するが底面および外面の状況から箆削りの後にナデを施しているものかと推定された。器色は黄褐色を帯びる。胎土は細かい。D類（多孔状）。D－3第1層出土。

ロ）壺形土器

Ⅱ類

同図21は推算口径が13.9cmを測った。ナデで丁寧に仕上げる。器色は淡黄色を帯びる。胎土は細かい。B類（多孔状）。拝所内第2層。

Ⅲ類

同図22は頸部が垂直気味に立ち上がり、口縁端部で僅かに外反する。口径は22cmと推算された。箆削りは頸下部から胴部まで施した後にナデを施すが特に胴部は消え切っていない。器色は黄褐色を帯びている。胎土は細かい。D類（多孔状）。D－2第1層出土。

同図23は推算口径22cmと求められた。外面は全体的に箆削りで調整した後にナデ消す。胴部中央部はナデ消しが徹底していない。器色は黄褐色を呈し、胎土は細かい。B類（多孔状）。D－2第1層出土。

壺形土器底部

壺形の分類は第Ⅰ地区に準じた。1点のみ確認された。

a種

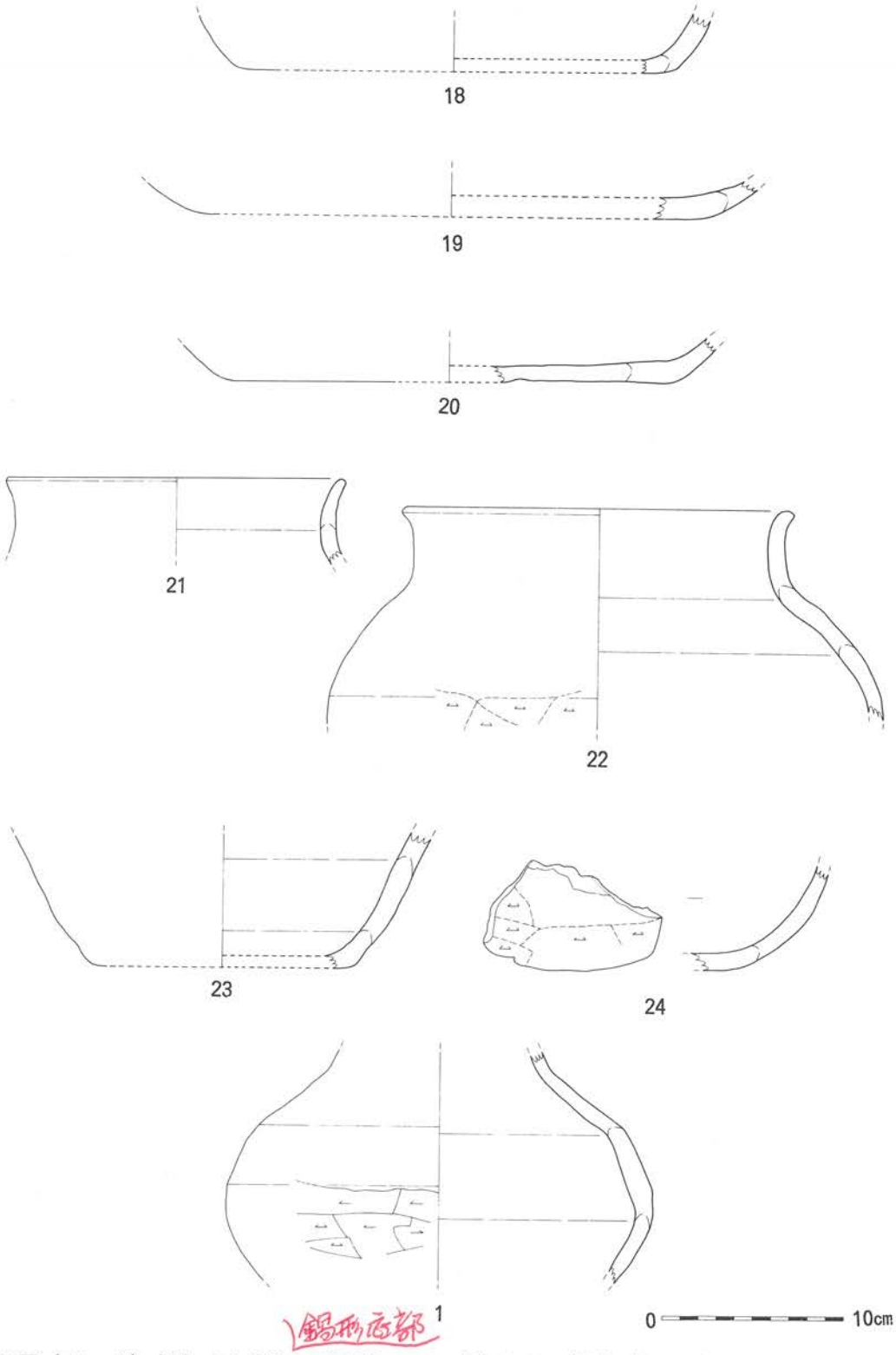
同図24は底径が14cmと推算された。器面は大半が禿げ落ちているが残存部からナデ仕上げが考えられた。器色は茶褐色を帯びている。胎土は細かい。D類。拝所内第2層出土。

器種不明の底部

器種不明の底部も第Ⅰ地区の分類に準じた。2点得られたが1点のみ図化した。2点ともイ類である。

土器収束

第Ⅰ・Ⅱ地区の出土状況から特に拝所内からは鍋形Ⅰ類a・bとⅣ類aのタイプのみ出土している。拝所内は第1層が版築様に固く締まり、本層から下の第2層は安定した層である為、時期も14世紀中頃から15世紀前半と限定出来る。従って鍋形Ⅰ類aとⅣ類aの両タイプは本遺跡で最も古いタイプとなる。また、拝所の成立時期も15世紀頃に特定されてくる。鍋形Ⅰ類aに類似する器形は西新里村遺跡[註1]や成屋遺跡[註2]（Ⅰ群a・b類）などで出土しているもので底面か



第51図（PL. 46）土器・パナリ焼　Ⅰ類:18、Ⅱ～Ⅳ類:19・20、壺形Ⅱ類:21、壺形Ⅲ類:22、壺形底部a種:23、器種不明底部:24、パナリ焼壺胴部: 1

らの立ち上がりは垂直もしくはやや外傾した状態で口縁部まで直線的に移行するものであり、主に口縁から胴下部まではナデで仕上げ、篦削りの痕跡などは胴下部に認められる。

今回の調査でこれらのタイプが14世紀前半〜15世紀前半まで存続し編年的な線引きが可能となった。また、鍋形土器のⅡ・Ⅲ・Ⅴ類の出現時期も15世紀中頃から始まり、一部は17世紀頃まで存続していることが推定され、カンドウ原遺跡(註3)（イ）・（ロ）タイプや成屋遺跡(註4)（Ⅲ群ａ類）などが例で、口縁は外側に大きく傾き、直口もしくは外反する器形などであり、耳（把手）より下に篦削りを施す点などが特徴である。鍋形土器の口縁の傾きを角度で示したのが第８表である。若干、各タイプとも重なるがⅠ類は64°以上の線で抑えられた。他のタイプには例外的な資料も含まれ60°を越えるものが含まれている。傾きが44°を示す例も認められた。

底部径に対する器高・口径の比率については第17表に示す結果が得られ、Ⅰ類ａは1:0.8:1.5、Ⅲ類ｂが1:0.9:2.3とⅢ類ｂがⅠ類ａよりも口径が大きくなる傾向が窺えられた。参考までにⅠ類ａの平均口径は28.9cm、Ⅲ類ｂが38.3cmであり、10cm近くの差が出ている。

耳（把手）の貼り付け位置は第15表に示す結果が得られ、Ⅱ類ｃ・Ⅲ類ｂのグループは口唇から下５cm前後の箇所に耳（把手）が貼り付けられ、Ⅰ類ａよりも１cm以上、貼り付け位置が下方にあることが確認出来、第14表の篦削りの開始箇所と耳（把手）の貼り付け位置が相関関係にあることを窺い知ることが出来た。

耳（把手）の厚さに対する幅・長さを比率を求めたのが第16表である。Ⅰ類ａ・ｂ、Ⅳ類ａ・ｂよりもⅡ類ｂ・ｃ、Ⅲ類ａ・ｂの幅は大きくなっている。他にⅠ類ａよりも耳（把手）の長さが短くなる様な感じを強く受けた。これはⅠ類ａの段階ではある程度、機能していたものがⅡ類〜Ⅳ類の時期で耳（把手）が機能的なものから装飾的なものに変化したことが考えられ、Ⅱ類〜Ⅳ類の器形が大きく外側に外傾あるいは外反した為、耳（把手）が装飾化したことと関係するものと見られる。Ⅱ類〜Ⅳ類の器形（逆ハの字状）からも耳（把手）を貼り付けなくても器を手に乗せやすく、移動しやすい利点があり、装飾化した主な理由は、器形そのものの変化にある。

耳（把手）の平面観・側面観を分類したのが第18〜21表である。第18・21表からも拝所内からはCd・Cf・De・Dfは１点も出土していないことが判明している。耳の形状からも時期的な特徴がある程度把握出来る。これについては与那原遺跡(註5)でも耳の形状と器形についての関係を概略的に報告した。耳（把手）分類のCf・De・Dfの中でCf・Dfは耳（把手）を篦削りなどで調整する為、断面が梯形状となり、耳（把手）としての機能はなく、装飾的なものとなる。この手のものはカンドウ原遺跡（耳の形状分類のBc）の例からも窺い知ることが出来る。

混入物で軽石の細片を混入させたＥ類例は、新里村遺跡(註7)でも出土しているが、土器としての機能はない様で、形もかなり崩れた状態で焼かれている。

今回の調査でⅠ類ａの終末期が15世紀前半に把握できたことが、大きな成果といえる。外耳土器の祖型については、滑石製石鍋模倣土器と鉄鍋があることが新里村遺跡(註8)で確認されていて、

第13表　土器分類別のサイズ一覧表（Ⅲ）第Ⅱ地区

図版番号	分類	サイズ(cm) 口径	器高	底径	耳(把手)のサイズ(cm) a	b	c	角度	出土地点	図版番号	分類	サイズ(cm) 口径	器高	底径	耳(把手)のサイズ(cm) a	b	c	角度	出土地点
49図1	Ⅰ類a	30.4	18.5	14.6	1.9	(5.0)	1.2	65°	拝所内第2層	50図13	Ⅲ類b								D－3第1層
〃 2	Ⅰ類b	42.0	(18.7)	(28.0)	2.2	5.9	1.6	64°	拝所内第2層	〃 14	Ⅱ類				1.5	6.4	0.6		D－3第1層
〃 3	〃								D－2第1層	〃 15	Ⅲ類b?				1.2	(6.0)	0.6		D－3第1層
〃 4	Ⅰ類				2.1	4.5	(1.6)		拝所内第2層	〃 16	Ⅳ類a	47.0	32.6	29.0	2.5	4.7	1.6		拝所内第2層
〃 5	Ⅰ類b				1.8	(5.6)	1.5		Dトレ第2層	51図17	〃				2.0	4.4	1.0		拝所内第2層
〃 6	Ⅱ類c	45.2			1.2	7.6	0.9	55°	D－3第1層	〃 18	底部Ⅰ			23.0					Dトレ第2層
〃 7	〃	38.0						55°	D－3第1層	〃 19	〃Ⅱ～Ⅳ			27.4					Dトレ第2層
〃 8	〃	32.4						57°	D－3第1層	〃 20	〃Ⅱ～Ⅳ			24.0					D－3第1層
50図9	Ⅲ類b	34.0						60°	D－2第1層	〃 21	壺Ⅱ	13.9							拝所内第2層
〃 10	〃	37.0						53°	Dトレ第2層	〃 22	〃 Ⅲ	22.0							D－2第1層
〃 11	〃	21.6						68°	D－1第1層	〃 23	〃 Ⅲ			14.0					拝所内第2層
〃 12	〃	40.0	(17.0)	(12.0)	1.3	6.4	0.8	50°	D－3第1層	〃 24	〃 a								D－2第2層

注（ ）内は推定復元によるの数値である。

第14表　各タイプの箆削り開始箇所

タイプ (cm)	Ⅰb	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ a	Ⅳ b	Ⅳ c	Ⅰ	Ⅲb (?)	Ⅳb (?)	計
1.2～2.0		2			1	3				1		1	8
2.1～3.0													
3.1～4.0					1			1					2
4.1～5.0			3		1	1					1		6
5.1～6.0	1			5		2		1					9
6.1～7.0	1			5		3							9
7.1～8.0				1		1							2
8.1～9.0				1									1
計	2	2	3	12	3	10	0	2	0	1	1	1	37
		17			13		2						

（注）各タイプとも箆削りがナデ消されたものは除外した。
口唇から箆削りの開始箇所までの距離を計測した

第15表　各タイプの耳（把手）の貼り付け箇所

タイプ (cm)	Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅱ a	Ⅱ b	Ⅱ c	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅳ a	Ⅳ b	Ⅳ c	Ⅰa (?)	Ⅱ	Ⅲb (?)	計
1.1～2.0		1												1
2.1～3.0	6	1				1		3	2		1			14
3.1～4.0	2	1		2			1							6
4.1～5.0		1			6		1						1	9
5.1～6.0					4		2							6
6.1～7.0												1		1
計	8	4	0	2	10	1	4	3	2	0	1	1	1	37
	12		12			5		5						

（注）計測箇所は口唇から耳（把手）の中央までの距離である。

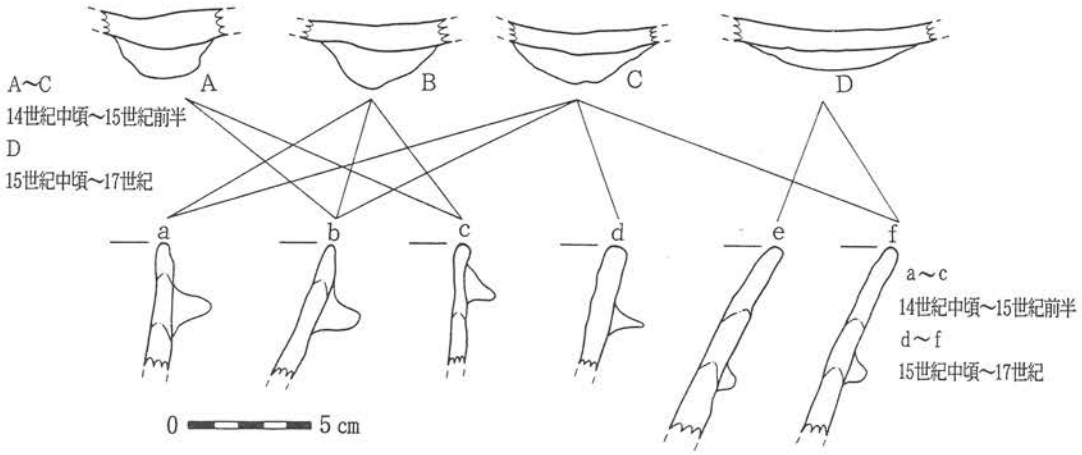
第16表　外耳（把手）の比率

部位 / 分類	厚さ a	幅 b	長さ c	部位 / 分類	厚さ a	幅 b	長さ c
Ⅰa	1	3.4	0.8	Ⅲb	1	4.9	0.6
〃	1	2.6	0.6	〃	1	4.5	0.5
〃	1	2.4	0.5	〃	1	4.3	0.5
〃	1	2.4	0.5	Ⅲb平均	1	4.5	0.5
〃	1	2.6	0.7	Ⅳa	1	3.7	1.0
〃	1	3.4	0.8	〃	1	1.8	0.6
〃	1	2.4	0.6	〃	1	2.2	0.5
〃	1	2.5	0.5	Ⅳa平均	1	2.5	0.7
Ⅰa平均	1	2.7	0.6	Ⅳb	1	2.8	0.6
Ⅰb	1	4.5	0.5	〃	1	3	0.6
〃	1	5	0.7	Ⅳb平均	1	2.9	0.6
〃	1	3.1	0.8				
Ⅰb平均	1	2.7	0.6				
Ⅰ	1	2.1	0.7				
Ⅰ平均	1	2.1	0.7				
Ⅱb	1	3.5	0.3				
〃	1	3.8	0.6				
Ⅱb平均	1	3.6	0.4				
Ⅱ	1	4.2	0.4				
Ⅱ平均	1	4.2	0.4				
Ⅱc	1	4.1	0.5				
〃	1	5.3	0.4				
〃	1	5.0	0.6				
〃	1	5.0	0.7				
〃	1	6.3	0.7				
〃	1	3.7	0.4				
〃	1	5.1	0.5				
〃	1	4.2	0.5				
〃	1	5.5	0.5				
Ⅱc平均	1	4.9	0.5				
Ⅲa	1	4.2	0.7				
Ⅲa平均	1	4.2	0.7				

第17表　口縁・器高・底径の比率

部位 / 分類	口縁	器高	底径
Ⅰa	1.2	0.8	1
〃	1.3	0.6	1
〃	2.0	1.2	1
Ⅰa平均	1.5	0.8	1
Ⅰb	1.5	0.6	1
Ⅰb平均	1.5	0.6	1
Ⅲb	1.7	0.7	1
〃	2.4	1.0	1
〃	2.1	1.0	1
〃	2.1	0.7	1
〃	3.3	1.4	1
Ⅲb平均	2.3	0.9	1
Ⅳa	1.6	1.1	1
Ⅳa平均	1.6	1.1	1

注：底径を1とした場合の比率



第52図　耳（把手）の形状分類概念図（実測図使用）

第18表　土器分類と外耳（把手）の相関関係

土器分類＼外耳（把手）			14世紀中～15世紀前半							15世紀中頃～17世紀				計
			Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ca	Cb	Cd	Cf	De	Df	
第Ⅰ地区	Ⅰ	a	1		3		1	1		1				7
		b									1		1	2
		a(?)		1										1
	Ⅰ													0
	Ⅱ	a												0
		b									①	1		1・①
		c						1			1	1	⑤	3・⑤
	Ⅱ													0
	Ⅲ	a										①		①
		b											2	2
		c												0
		b(?)											1	1
	Ⅳ	a			1									1
		b									1		1・①	2・①
		b(?)											1	1
小　計			1	1	4	0	1	2	0	1	3・①	2・⑥	6・⑥	21・⑧

土器分類＼外耳（把手）			14世紀中～15世紀前半							15世紀中頃～17世紀				計
			Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ca	Cb	Cd	Cf	De	Df	
第Ⅱ地区・拝所内	Ⅰ	a							(1)					(1)
		b	(1)			(1)								(2)
	Ⅰ				(1)									(1)
	Ⅱ	c										1		1
	Ⅱ											1		1
	Ⅲ	b										1		1
	Ⅳ	a			(1)							1		1・(1)
小　計			(1)	0	(2)	(1)	0	0	(1)	0	0	4	0	4・(5)

（注）拝所内出土のものは（　）で示した。また、外耳（把手）の一部破損の資料は推定が可能であったものは○で示した。

第19表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅰ地区）

出土層位＼タイプ		14世紀中〜15世紀前半							15世紀中頃〜17世紀				計
		Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ca	Cb	Cd	Cf	De	Df	
第Ⅰ地区	表採						1					1	2
	第Ⅰ層									1	1	2・(1)	4・(1)
	Ⅱ		1	1		1	2			3	(1)	4	12・(1)
	Ⅲ			2					1	(1)		1	4・(1)
	Ⅳ	1		1							1	1	4
	不明											1	1
計		1	1	4	0	1	3	0	1	4・(1)	2・(1)	10・(1)	27・(3)
比率		10 ＝（33.3%）							17・(3) ＝（66.6%）				100%

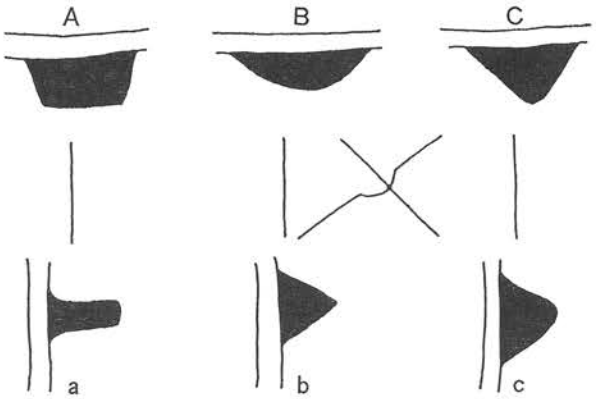
注（　）内は一部破損の資料ではあるが推定が可能であったので、これを分類した。

第20表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅱ地区）

出土層位＼タイプ	14世紀中〜15世紀前半							15世紀中頃〜17世紀				計
	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ca	Cb	Cd	Cf	De	Df	
第Ⅰ層										4		4
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	4
比率	0 ＝（0%）							4 ＝（100%）				100%

第21表　外耳（把手）の形状分類（第Ⅱ地区　拝所内）

出土層位＼タイプ	14世紀中〜15世紀前半							15世紀中頃〜17世紀				計
	Ab	Ac	Ba	Bb	Bc	Ca	Cb	Cd	Cf	De	Df	
第Ⅱ層	1		2	1			1					5
計	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	5
比率	5 ＝（100%）							0 ＝（0%）				100%



第53図　外耳土器の耳の形状分類概念図
（県教委『平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』1976年より）

第22表　遺跡別外耳土器の耳の形状分類一覧（与那国町教委『与那原遺跡』1988年より）

遺跡名	時期	Aa	Bb	Bc	Cb	Cc	不明	計（比率）
与那原遺跡	14C前半～15C中	4 (15.4%)	4 (15.4%)	2 (7.7%)	0 (0%)	1 (3.8%)	15 (57.7%)	26 (≒100%)
平得仲本御嶽遺跡（註3）	14C末～16C初	11 (10.0%)	35 (29.0%)	9 (7.4%)	5 (4.1%)	5 (4.1%)	56(注) (46.3%)	121 (≒100%)
カンドウ原遺跡（註4）（1977年）	15C～16C	1 (0.7%)	12 (8.5%)	104 (74.3%)	1 (0.7%)	2 (1.5%)	20 (15.0%)	140 (≒100%)
カンドウ原遺跡（註5）（1984年）	16C～17C	11 (3.5%)	8 (2.5%)	100 (31.2%)	2 (0.6%)	22 (6.8%)	177 (55.3%)	320 (≒100%)
計（比率）		27 (4.5%)	59 (9.7%)	215 (35.5%)	8 (1.3%)	30 (5.0%)	268 (44.1%)	607 (≒100%)

（注）不明の点数が欠落していたので総数の121点から分類対象となった点数を差し引いて算出した。

滑石製石鍋模倣土器がⅠ類ａの祖型となる。鉄鍋の影響や模倣したタイプはⅡ類・Ⅲ類などのグループである。鉄鍋については外反タイプのものが本遺跡からも出土しているので、これを裏付けている。本遺跡出土の土器は高宮廣衛氏の八重山諸島の編年試案で第Ⅲ期に位置付けられる中森式土器[註9]の範疇にあるもので、中森式土器の細分編年が可能であることが、今回の調査成果から確認出来た。

註

註１．新里村遺跡の資料整理で確認した。

註２．青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」青山史学　第９号　1987年。

註３．大城慧・金城亀信・比嘉春美『カンドウ原遺跡』沖縄県教育委員会　1984年。

註４．註２と同じ。

註５．金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会　1988年。

註６．註３と同じ。

註７．註１と同じ。

註８．註１と同じ。

註９．高宮廣衛「編年試案の一部修正について」　南島考古　第７号　沖縄考古学会　1981年。

ホ．パナリ焼

第Ⅱ地区ではパナリ焼の壺胴部片が１点のみ出土している。第Ⅰ地区の壺胴部片と成形等が一致している。

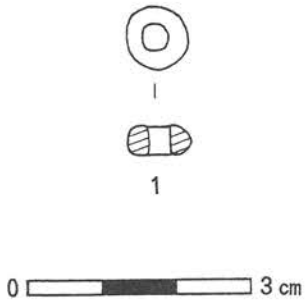
壺胴部の資料

第51図１に図化した資料で胴の最大径が23.6cmと推算された。第Ⅰ地区の壺胴部と最大胴径が近似する。箆削りは胴中央から下に施されている他はナデ仕上げである。器色は黄褐色を主体とするが部分的に黒色を呈している箇所がみられる。胎土は細かく、石灰質の微砂粒やサンゴの小破片を混入させる。器面は混入物の脱落によって多孔状となっている。Ｄ－３第１層出土。

ヘ．玉

第Ⅱ地区から玉が１点出土した。第54図１は人造ガラスで色調は淡茶色を帯びている。巻きつけ技法によるものである。巻きつけの横筋は不鮮明ではあるが３重に巻きつけている。最大高は５㎜、最大長径8.5㎜、最大短径8.0㎜、孔径3.5〜4.0㎜、重量0.4ｇを測る。Ｄトレンチ拝所内第１層（灰黄色土層で版築が認められる）。

類例として、フルスト原遺跡[註1]・平得仲本御嶽遺跡[註2]などで出土している。



第54図（PL. 49）玉: 1

註

註１．当真嗣一・大浜永亘ほか『フルスト原遺跡』　石垣市教育委員会　1977年。

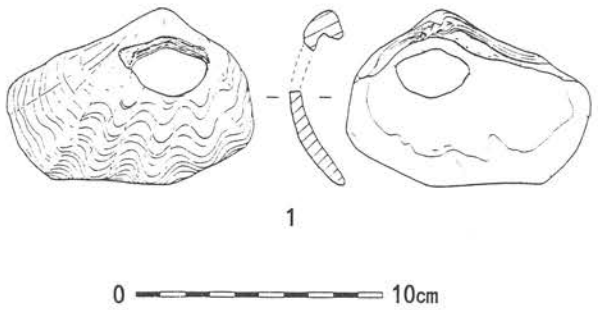
註２．安里嗣淳ほか『平得仲本御嶽遺跡発掘調査報告』　沖縄県教育委員会　1976年。

ト．貝製品

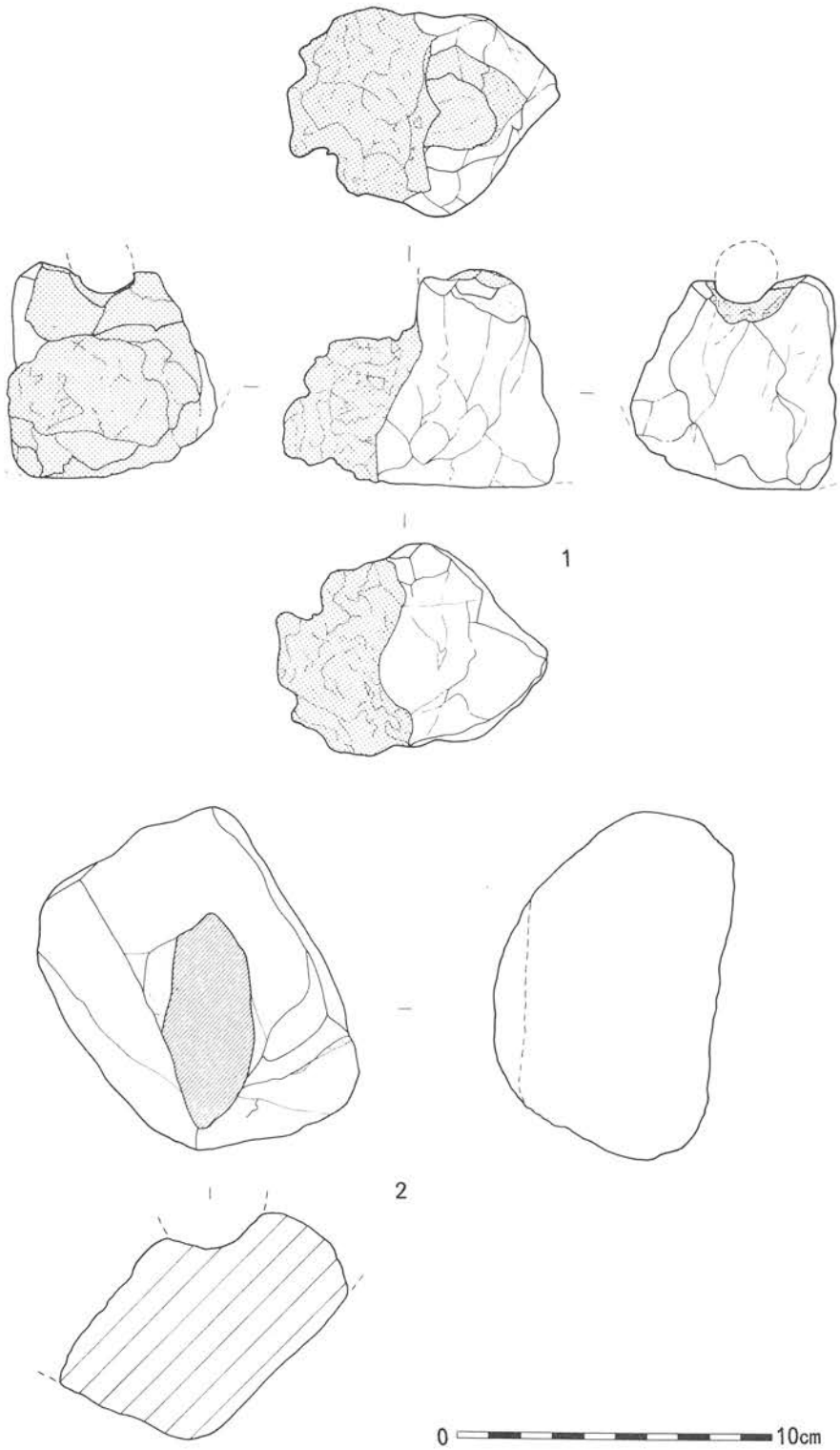
第Ⅱ地区からはヒメジャコ製の貝錘が１点出土した。二枚貝有孔製品として報告する。

ａ．二枚貝有孔製品

第55図１はヒメジャコの左殻を利用したもので、腹縁部の大半が欠落する。孔の位置は殻頂寄りの前背縁近くに内側から穿っている。孔のサイズは短径が1.8cm、長径が2.9cmを測った。残存殻



第55図（PL. 37）貝製品 二枚貝有孔製品: 1



第56図（PL. 47）羽口　砂岩製: 1～2（点描はガラス質鉄滓付着部分、斜線は気孔部分）

高は7㎝、残存殻長9.6㎝を測る。残存重量75ｇ。Ｄ－３第１層出土。貝製品のまとめは第Ｉ地区で述べたとおりである。

チ．羽　口

第56図１・２の資料。１は本体部から剥がれたものである。風道孔がわずかに残っている。鉄滓が付着しており炉内部分へ装着されたものと思われる。鉄滓とともに黒釉のガラス質の光沢も溶着している。風道孔に鉄滓が詰まった状態になっている。残存重量339ｇ。表採。２は不定形で風道をえぐってある。全体に自然面が残る。製作途中のものか使用時による破損のものか判然としない。風道とその周縁に薄いススが付着している。残存重量590ｇ。Ｄ－４第１層。

表　採　品

羽　口

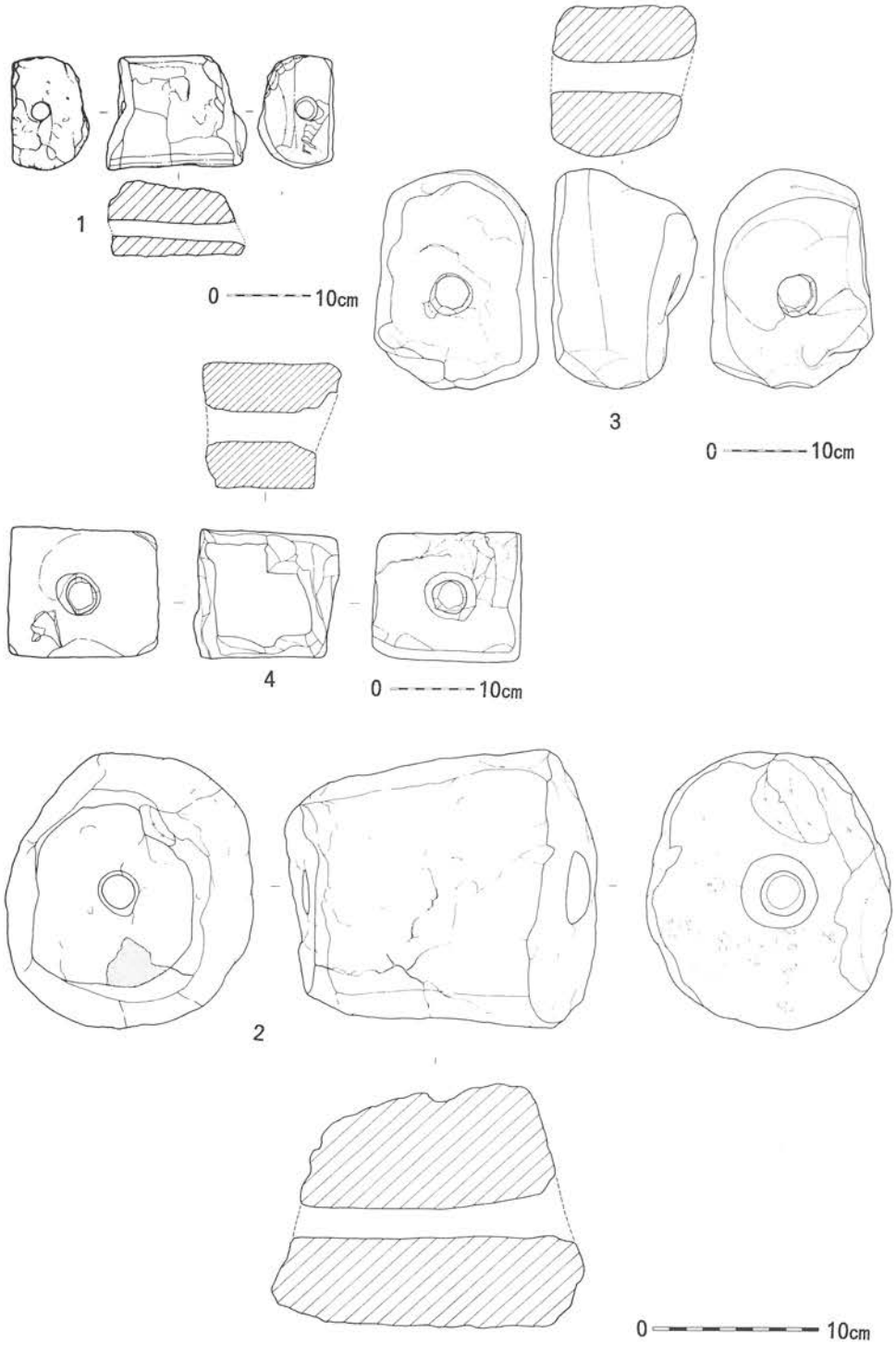
第57図１～４の資料。

１は外形が半月状になる羽口である。片側が半円状になり片面が平坦になる。全体が赤く焼けており小さなクラックが入っている。大竹の根所からの表採品である。孔径はほぼ円形で片側が2.2㎝×2.1㎝、片側が2.8㎝×2.6㎝と一方に太くなっている。木呂に接続する部分と炉内への装着部分が破損している。重量2.5㎏、石質は硬質砂岩。

２も外面が赤く焼けている。孔は木呂の方に接続する部分でラッパ状に広がっており、炉内部にあたるところで、やや細くなっている。木呂に接続する孔径内3.0㎝下に細い粘土のリングが取り巻いている。木呂への接続部分の孔径が2.7㎝、炉内部に面する孔径が2.0㎝、風道の長さが15.4㎝。重量4.4㎏。炉内への装着部分は使用時によるものか、若干破損しており、孔径の近くに溶解した鉄滓が付着している。

３は外形が方形状になるものである。外面にクラックが入っている。木呂に接続する面が破損しているが、炉内部への装着面は平面に完全に残っている。全面は茶褐色に焼けており、炉内側の周縁には鉄滓が付着している。孔径は、ほぼ同一の太さとなっている。孔径は木呂側で6.0㎝、炉内側で5.0㎝。重量10㎏。石質は硬質砂岩。木呂側にラッパ状に太くなっている。

４はやや方形状の外形に全体が自然面のままの羽口である。淡く赤色を呈している。羽口の中では大形の部類に入る。1988年にインガーの周辺から採集されたものである。風道はほぼ同じ太さであるが、炉内側の孔が木呂側へ接続する孔より若干小さくなっている。風道孔の穿孔の際のノミ痕が残っている。風道の長さ14.8㎝、木呂側の孔径5.0㎝、炉内側の孔径4.5㎝、外形の長さ18.5㎝、幅22.5㎝、厚さ15.0㎝、石質は硬質砂岩。



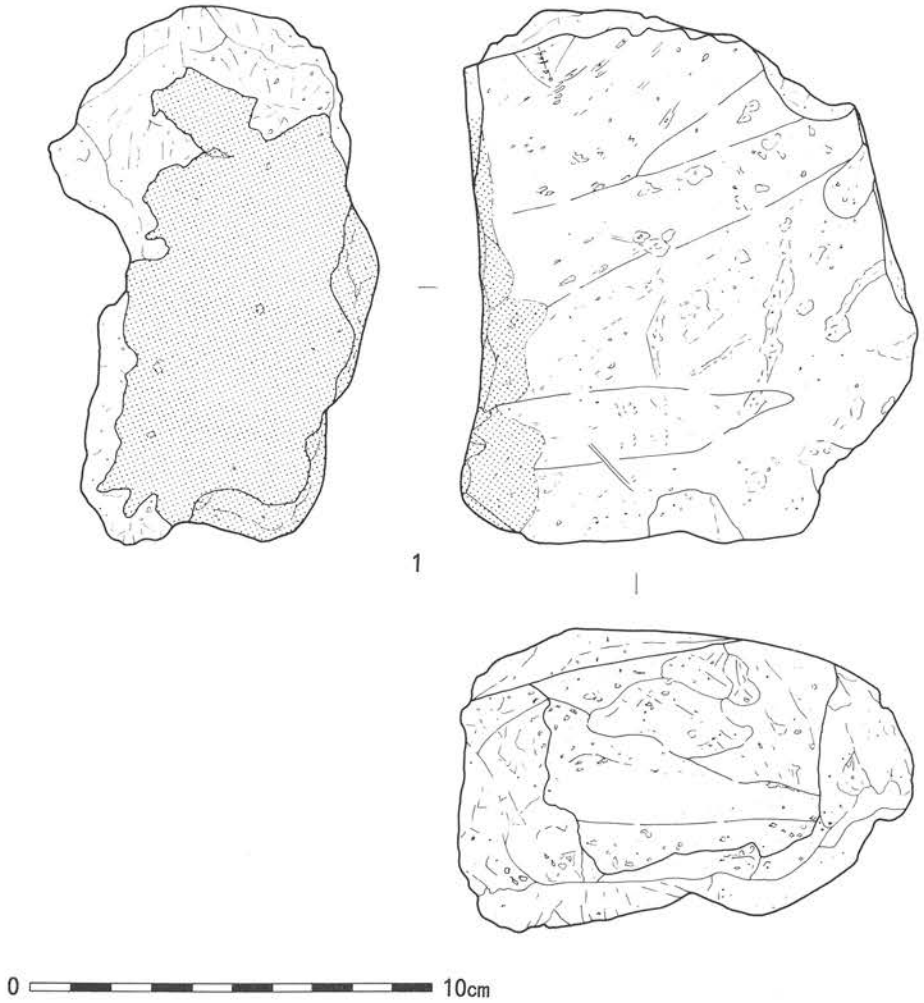
第57図（PL. 48）西表島採集の羽口　砂岩製羽口表採資料1・2（上村遺跡）、
3（インガー）、4（高那村跡）

リ．炉壁

第58図１は第Ⅰ地区B－３第４層から出土した炉壁をみられる資料で、素材は軽石製である。上面と下面には溝状に削り出した箇所が認められる。また、左側面にはガラス質鉄滓が多量に付着し、平坦な面となっている。重量479ｇ。

県内に於いて軽石製の炉壁が検出されたのは初めてであり、また、炉壁の資料については八重山では初めてであり、今後の類例がない為、今後の発見や資料の増加に期待したいところである。この炉壁が鍛冶炉内のどの位置にあったか特定は出来ないが、ガラス質鉄滓の付着状況から羽口を固定する為の炉壁とも考えられる。

尚、本資料は脱校後に確認された為、編集上、第Ⅱ地区で紹介した。



第58図（PL.47）炉壁　軽石製１、（点描はガラス質鉄滓付着部分）

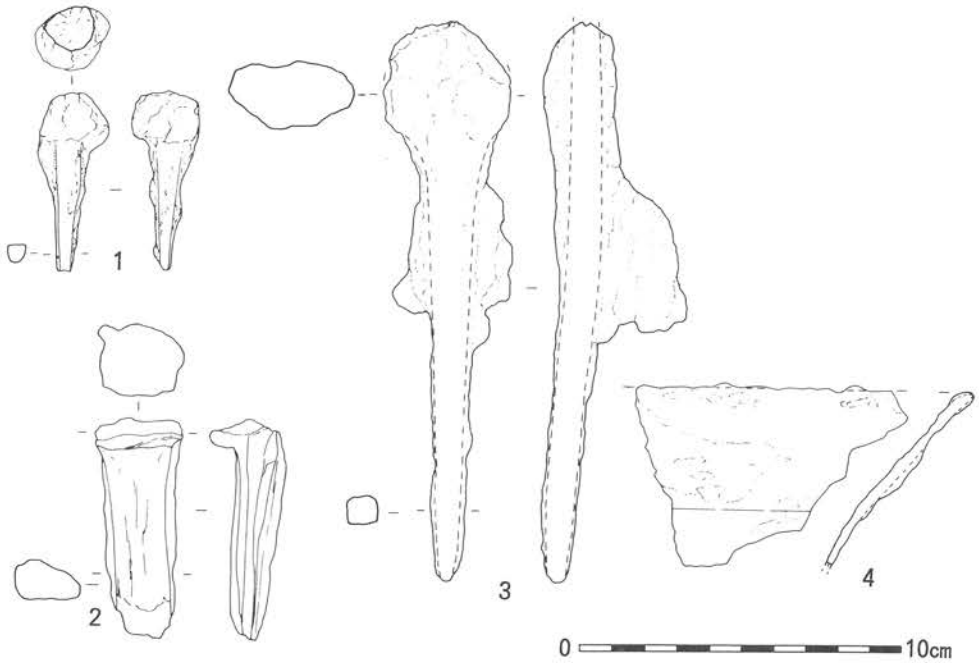
ヌ．鉄製品

鉄　釘

第59図１・２は頭部が角状に折り曲げられたものである。１・２の資料とも断面は方形状を呈する。１は先端部が欠損し頭部に丸く錆膨れが出来ている。頭部の折り曲げた箇所に錆が付着した状態となっている。２は頭部が逆Ｌ形に成形してあるが、叩打で剥離している。先端部が欠損している。2.1㎝の幅広形の釘となっている。頭部から先端部にかけて縦に大きなクラックが入り、板状に膨れている。１の現存長5.5㎝、２は6.7㎝。

鉄　銛（フク）

第59図３は先端部が欠損し柄の部分にかけて残った資料である。柄の部分は方形状に成形され、端部が細く尖る。先端部分は偏平に叩打仕上げられている。全体に厚く錆が取り巻いている為、柄と先端部への接続部にかけて大きく錆の塊ができ全形が判然としない。裏面から見ると柄の部分から左右がえぐれ、先端に細長く尖る。ほぼ平坦に形成されている。表部分はやや稜面をもった仕上げかたになっている。柄の装着部の長さが約11.5㎝、厚さ約1.0㎝。



第59図（PL.49）鉄製品　釘：１～２，銛：３，鉄鍋：４

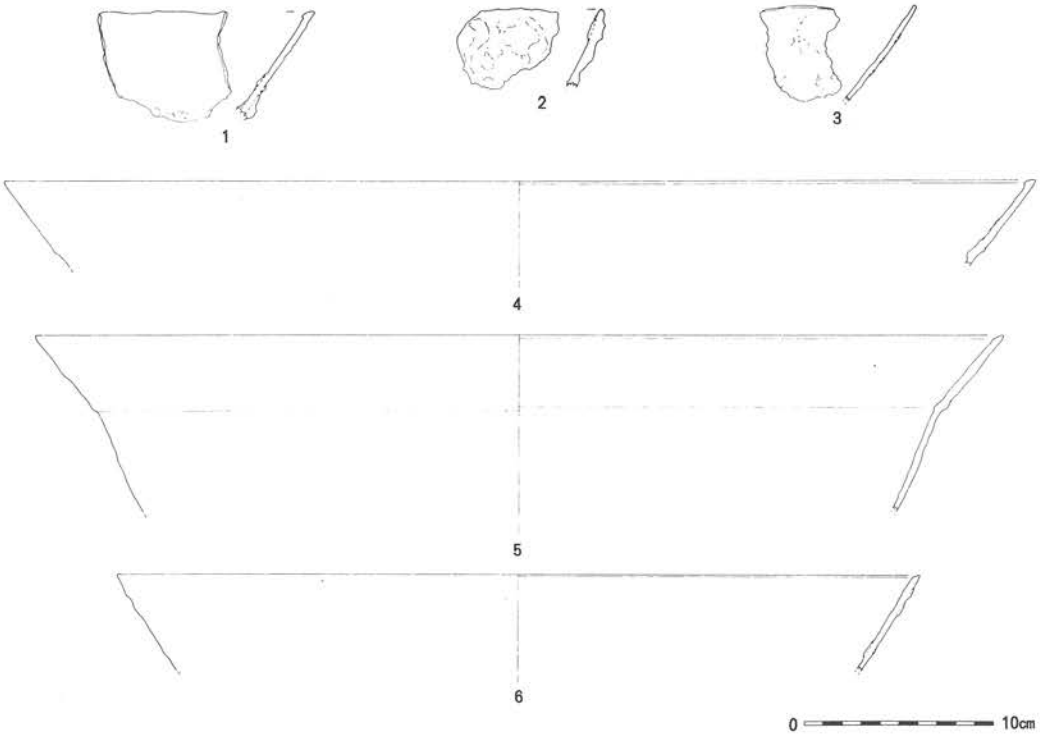
鉄　鍋

第59図４は鉄鍋の口縁部の資料である。口唇部はやや内側に斜めに成形し、口縁部は胴部から立ち上がって、そのまま外側へ開いていく形である。表裏面ともに淡黄色や茶褐色の小さな錆が出来ており、裏面は錆汁が発生している。厚さ3.0㎜。

第Ⅰ地区•第Ⅱ地区外の表採品

鉄　鍋

第60図１～６は第Ⅰ地区、第Ⅱ地区の調査区外（トレンチ）外から表採された資料を掲載した。１から６の資料とも鉄鍋の口縁部破片である。いずれも２～３㎜の薄さで全体に小さな錆が付着している。口唇部を内側に小さく0.3～0.4㎜前後でななめに成形し口縁部は外側へ開いていくタイプである。４・５・６は口縁部の復元図である。４の口径が42.6㎝で、やや立ちぎみになる。５は口径が51.4㎝で口縁下３㎝で若干くの字形に曲する。６は口径が54.8㎝で今回の表採品の中で最も大きい鍋となっている。口径や口縁部の外側への開きから胴部へのびる浅鉢形の器形をなす。掲載した資料は錆の付着と錆汁、小さなクラックが生じているが全体的には残存状態が良い部類に入る。



第60図（PL. 50）鉄製品　鉄鍋: １～６

ル．Ⅰ・Ⅱ地区出土の鉄滓

今回の調査で鉄滓の分類を試みた。分類概念を記述し結果を第23〜25表に呈示した。

鉄滓の種類として椀形鉄滓・ガラス質椀形滓・不定形滓・滴下滓・含鉄鉄滓の５種に大別した。他に羽口が炉内部分でガラス質鉄滓が付着した羽口破片などについても取り込んだ。

以下、椀形鉄滓・ガラス質椀形滓などの順に分類概念を記す。

ィ．椀形鉄滓

椀形鉄滓は大型滓（精錬鍛冶滓）と 小型滓（鍛練鍛冶滓）の２種に分類し、サイズは直径が、10cmを基準とし、それ以上を大型滓、10cm以下を小型滓とした。炉底に溜まって固まった鉄滓である為、底が丸みを帯びるのが特徴である。基本的に１回の鍛冶で１個の鉄滓が出来る為、鍛冶の回数等がある程度まで推定が可能である（大澤正己氏教示)。

ロ．ガラス質椀形鉄滓

形状は椀形鉄滓と異なり、平坦である。外観の特徴はガラス質を帯びている。羽口および炉内壁などに付着する。

ハ．不定形滓

形状が一定しないもので鉄分の多い鉄滓である。今回、最も多く出土した資料である。

ニ．滴下滓

外観の形状が雫や氷柱状になって凝固したものである。

ホ．含鉄鉄滓

外観からの観察で細かい割れがあり、磁着性を帯びる鉄滓である。

第Ⅱ地区拝所内からは小型の椀形滓が出土していて小鍛冶のみが考えられ、大型椀形滓が１点も検出されていないのが注目される。例えば14世紀中頃から15世紀前半の鍛練鍛冶（小鍛冶）から次の15世紀〜17世紀までの精錬鍛冶（大鍛冶）への推移も考えられ、第Ⅰ地区では両方の鍛冶技術が存在することになるが具体的な検証等は、今後の発掘調査などに期待されるところである。

第23表　鉄滓出土状況（第Ⅰ地区）

タイプ／出土層	碗形鉄滓 大型	碗形鉄滓 小型	ガラス質碗形滓	不定形滓	滴下滓	含鉄鉄滓	羽口破片	合計
表採	4個 / 1.48kg	9個 / 2.27kg	5個 / 3.5kg	71＋χ個 / 6.76kg	7個 / 0.14kg	15個 / 0.47kg	8＋χ個 / 0.47kg	119＋χ個 / 15.09kg
Ⅰ層	14 / 5.98	78 / 13.3	29 / 1.56	288＋χ / 46.12	48 / 0.72	36 / 2.5	78＋χ / 4.57	571＋χ個 / 74.75kg
Ⅱ層	19 / 6.69	58 / 13.65	46 / 0.8	482＋χ / 52.23	25 / 0.27	3 / 0.2	227＋χ / 16.51	860＋χ個 / 90.35kg
Ⅲ層	6 / 1.73	16 / 3.26	10 / 0.11	145＋χ / 14.06	14 / 0.19		165＋χ / 15.91	356＋χ個 / 35.26kg
Ⅳ層		5 / 1.0		37＋χ / 4.37	5 / 0.05		53＋χ / 5.6	100＋χ個 / 11.02kg
Ⅴ層		1 / 0.26		1 / 0.03				2個 / 0.29kg
合計	43 / 15.88	167 / 33.74	90 / 5.97	1024＋χ / 123.57	99 / 1.37	54 / 3.17	531＋χ / 43.06	2008＋χ個 / 226.76kg

（注）、xとしたものは、細片化したものや非常に小さい破片（1㎝四方以下のもの）である。

第24表　鉄滓出土状況（第Ⅱ地区）

タイプ／出土層	碗形鉄滓 大型	碗形鉄滓 小型	ガラス質碗形滓	不定形滓	滴下滓	含鉄鉄滓	羽口破片	合計
表採	7 / 3.73	17 / 12.33		57＋χ / 9.43	12 / 1.5	2 / 0.43	26＋χ / 0.33	121＋χ個 / 27.75kg
Ⅰ層	9 / 4.96	90 / 16.9	67 / 1.56	250＋χ / 31.95		23 / 1.4	43＋χ / 2.75	482＋χ個 / 59.52kg
Ⅱ層	1 / 0.3	11 / 2.66		55＋χ / 4.39	2 / 0.02		11＋χ / 3.74	80＋χ個 / 11.11kg
Ⅲ層							1＋χ / 0.02	1＋χ個 / 0.02kg
合計	17 / 8.99	118 / 31.89	67 / 1.56	362＋χ / 45.77	14 / 1.52	25 / 1.83	81＋χ / 6.84	684＋χ個 / 98.4kg

（注）xとしたものは、細片化したものや非常に小さい破片（1㎝四方以下のもの）である。

第25表　鉄滓出土状況（第Ⅱ地区拝所内）

タイプ／出土層	碗形鉄滓 大型	碗形鉄滓 小型	ガラス質碗形滓	不定形滓	滴下滓	含鉄滓	羽口破片	合計
Ⅱ層		19 / 1.84		2 / 0.04			2＋χ / 0.18	23＋χ個 / 2.06kg
合計		19 / 1.84		2 / 0.04			2＋χ / 0.18	23＋χ個 / 2.06kg

（注）xとしたものは、細片化したものや非常に小さい破片（1㎝四方以下のもの）である。

4．自然遺物

(1)貝　類

本遺跡から出土した貝類では、巻貝が多い。中でも外洋－サンゴ礁域潮間帯中・下部のマガキガイ・クモガイ、同じく干潮のオニコブシ・アカイガレイシが優先して出土している。二枚貝では外洋－サンゴ礁域潮間上部（ノッチ）のイソハマグリが目立つ、他に河口干潟－マングローブ域のシレナシジミガイが続く。

これらの生息場所は遺跡の北側にある西泊の浜、西側にあるウカリカマ（浜）・アダチカマ（浜）そして南側にある前泊の浜を中心として採集されたと考えられ、これらの場所は外洋－サンゴ礁域である。

祖納では主に前泊の浜から南側一帯が漁りの場所として現在も利用されている。

シレナシジミガイは祖納と星立の間を流れる与那田川があり、その川のマングローブ林一帯（俗名：ピナイミナト）から浦内川下流（俗名：ウブミナト）にあるマングローブ林一帯に生息し、西表では一般的に見られる貝である。上村遺跡出土のシレナシジミガイは主に与那田川から浦内川一帯のマングローブ林が採集場所であったと考えられる。

第26表の説明　生息場所は以下の類系によって表わした。

Ⅰ：外洋・サンゴ礁域	0：潮間帯上部（Ⅰではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a：岩盤
Ⅱ：内湾・転石域	1：潮間帯中・下部	b：転石
Ⅲ：河口干潟・マングローブ域	2：亜潮間帯上縁部（イノー）	c：泥、砂、礫底
	3：干潮（Ⅰにのみ適用）	d：マングローブ植物上
	4：礁斜面	e：河川礫底
Ⅳ：淡水域	5：止　水	
	6：流　水	
Ⅴ：陸　域	7：林　内	
	8：林内・林縁部	
	9：林縁部	
	10：海浜部	

注，資料の追加。二枚貝……キクザル科不明B－1第1層1個。リュウキュウナミノコB－2第2層・B－1　第2層から各1点出土。スダレハマグリB－1第1層1個。巻貝…ムラサキウズB－1第2層1個。ヒザラガイB－3第2層1個。オオベッコウガサガイB－3第3層1個。トミガイE－1第2層1個。コマダライモB－3第3層1個。

第26表　貝類遺存体出土状況

貝種 ＼ 出土地点			B トレンチ													Cトレ	
			B－0			B－1		B－2		B－3							
番号	科名	種目	表採	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	小計	Ⅰ	小計
1	カラマツガイ	コウダカカラマツ					4								4		
2	ユキノカサ	ウノアシ					4								4		
3		リュウキュウウノアシ		1											1		
4	ニシキウズ	ニシキウズ		2 B－2	1	2	2	2		2		2	1		14 B－2		
5		ギンタカハマ					2				1				3		
6		サラサバティ	2	6		4	3	11 (B－1)	1 (B－1)	8 (B－1)	2 (B－3)	5 (B－1)	1 (B－1)		43 (B－8)		
7		ハナダタミ															
8	カタベガイ	リュウキュウカタベ															
9	リュウテン	ヤコウガイ		1							1				2		
10		ふた								1					1		
11		チョウセンサザエ	1	1		4	1				1	1			9		
12		ふた										1			1		
13		オオベソスガイ						1		1					2		
14	アマオブネ	ニシキアマオブネ	1				1								2		
15		アマオブネ	1	1			1			1		1			5		
16		キバアマガイ															
17		不明															
18	ウミニナ	ウミニナ								B－2					B－2		
19		イボウミニナ				1									1		
20		センニンガイ	1 B－1	B－1						B－1					1 B－3		
21	オニノツノガイ	オニノツノガイ		1 B－2		3	1	3 B－5		1	4	9	2 B－3		24 (B－10)	3 B－3	3 (B－3)
22		トウガタカニモリ										1			1		
23		タケノコカニモリ					4								4		
24	ソデガイ	マガキガイ		5		2	1	1	1	1	5	3	7		26	4	4
25		ネジマガキ					1				1				2		
26		クモガイ	3 B－1	6 B－1		6	2	B－2		3	3 B－1	4 B－5	4		31 (B－10)		
27		ラクダガイ															
28		スイジガイ	2	1		1	1	1 B－1							6 (B－1)		
29		イボソデ						1							1		
30		スイショウガイ		1				B－1		1		2 B－1			4 (B－2)	2 (B－2)	2 (B－2)
31	タカラガイ	ハナビラダカラ															
32		ハナマルユキ															
33		ヤクシマダカラ				1									1		
34		ハチジョウダカラ		B－1								1			1 B－1		
35		ホシダカラ			B－1										B－1		
36	アッキガイ	アカイガレイシ				2 B－1	1	2 B－1		3	5	15	4		32 (B－2)		
37		シラクモガイ		1							6	1	1		9		
38		ガンゼキボラ									1				1		
39		ホソスジテツボラ	1												1		
40		ツノレイシ						1				3			4	8 B－2	8 (B－2)
41		ツノテツレイシ															
42		レイシガイダマシ					1								1		

Dトレンチ						Eトレンチ									小計	不明	小計	合計	生息地
D−2	D−3	D−4					E−1			E−2	E−3								
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	小計	フラット内	Ⅰ	Ⅱ	表土	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ					
																		4	
																		4	
																		1	
		1			1		2 B−1	2 B−1			1				5 (B−2)			20 (B−4)	Ⅰ・2・a
																		3	Ⅰ・4・a
2	5 B−1	3			10 (B−1)		3	2		2	1	2			10	2	2	65 B−9	Ⅰ・4・a
							1								1			1	
							1	B−1							1 (B−1)			1 B−1	Ⅰ・2・a
	2				2								1		1			5	Ⅰ・4・a
	1		1		2							1			1			4	−
	6	4			10			3		2 B−2					5 (B−2)			24 (B−2)	Ⅰ・3・a
																		1	−
										1			1		2			4	
								1		1					2			4	Ⅰ・1・c
	B−1				B−1													5 B−1	Ⅰ・1・b
	1				1					2					2			3	
	1				1			B−1							B−1			1 B−1	−
																		B−2	Ⅲ・1・c
																		1	Ⅲ・1・c
								1 B−1							1 (B−1)			2 B−4	Ⅲ・0・c
	5 B−2	9 B−1			14 (B−3)			B−2		1	1	1	B−4		3 (B−6)			44 B−22	Ⅰ・2・c
																		1	
							1	1							2			6	
	6	1			7	1	1	17	1	16	3	4	1	1	45			82	Ⅰ・2・c
								3							3			5	Ⅰ・2・c
2		B−4			2 (B−4)		1 B−3	2 B−5	1	2 B−5	10 B−1	B−2	1		17 (B−16)			50 B−30	Ⅰ・2・c
												1			1			1	Ⅰ・4・c
																		6 B−1	Ⅰ・2・c
								2							2			3	Ⅰ・2・c
									1						1			7 B−4	
								2							2			2	Ⅰ・1・a
								1							1			1	Ⅰ・3・a
								1							1			2	Ⅰ・2・a
								2							2			3 B−1	Ⅰ・1・a
																		B−1	Ⅰ・2・c
	B−2	6 B−2			6 (B−4)	1	3	19 B−2		5 B−1	3	B−1			31 (B−4)			69 (B−10)	Ⅰ・3・a
		1			1			8 B−1		1		2 B−1			11 (B−2)			21 (B−2)	Ⅰ・3・a
																		1	Ⅰ・2・a
																		1	
																		12 B−2	Ⅰ・3・a
	1				1													1	Ⅰ・1・a
																		1	

番号	科名	種目	表採	B－0 I	B－0 II	B－1 I	B－1 II	B－2 I	B－2 II	B－3 I	B－3 II	B－3 III	B－3 IV	B－3 V	小計	Cトレ I	小計
43	イトマキボラ	マルニシ									1	3			4		
44		リュウキュウツノマタ	1	1		1 B－1		3 B－1		1	B－1				7 B－3	1 B－1	1 B－1
45		イトマキボラ				B－1	1								1 B－1		
46	オニコブシ	オニコブシ	1	1			1 B－1	4 B－3		2	2	3 B－1	1		15 (B－5)		
47		コオニコブシ	1	17			1	5 B－2	1	20 B－2	27 B－1	20	7	1	100 B－5		
48	イモガイ	サヤガタイモ	1							1		3	1		6		
49		ヤナギシボリイモ		1				B－1	B－1	3					4 B－2		
50		キヌカツギ		3											3		
51		オトメイモ	1												1		
52		ゴマフイモ								1					1		
53		クロザメモドキ										1	1		2		
54		アンボンクロザメ			1	1		B－1			B－3	1 B－2	2		5 (B－6)		
55		クロフモドキ		1		B－1		1							2 B－1		
56		不明										4 1			4 1		
57	オキニシ	オキニシ										1			1		
58	フデガイ	チョウセンフデ									B－2	1			1 (B－2)		
59	タマガイ	リスガイ					1								1		
60	タケノコガイ	タケノコガイ															
61		リュウキュウタケ										1			1		
	巻貝	小計	17 (B－2)	51 (B－7)	2 (B－1)	28 (B－4)	34 (B－1)	36 (B－19)	3 (B－2)	50 (B－6)	60 (B－11)	88 (B－10)	32 (B－4)	1	402 (B－67)	18 (B－8)	18 (B－8)
62	ヤマタニシ	オニナワヤマタニシ			•												
63	タニシ	マルタニシ				1									1		
	陸産貝	小計			•	1									1		
64	フネガイ	エガイ					1/2								1/2		
65		リュウキュウサルボウ															
66	ウミギク	メンガイ				1/									1/		
67	シジミガイ	シレナシジミ	6/7 3/8	20/31 13/31	5/2 4/3	2/23 1/21	7/7 6/9	1/9 1/8	1/1	1/9 1/9	1/1 1/6	1/13 1/16	1/3 1/3		43/106 27/114	1/2 1/1	1/2 1/1
68	シャコガイ	シラナミ					1/1			1/1	1/2 1/1	1/4 1/3			2/6 1/6	1/2	1/2
69		ヒメジャコ	1/1	1/2 3/4		1/1 1/2	2/ 1/	1/2			1/3 1/2	1/2 1/1			5/11 5/9		
70		シャゴウ					1/	1/1		1/1 1/2					1/2 2/2		
71	シャコガイ	不明										1/2			1/2		
72	ザルガイ	カワラガイ		1/1											1/1		
73		リュウキュウザルガイ											1/		1/		
74	マルスダレ	アラスジケマンガイ															
75		ホソスジイナミ		1/1 1/2											1/	1/	1/1
76	チドリマスオ	イソハマグリ		2/4 5/5	2/3 3/2	6/3 6/8	18/9 26/13				1/5 1/2	1/7 1/3			29/31 41/33		
77	ニッコウガイ	リュウキュウシラトリ															
78	リュウキュウマスオ	リュウキュウマスオ			1/								1/		1/ 1/		
79		マスオガイ											1/1		1/1		
80	ナミノコガイ	ナミノコガイ															
81	二枚貝	不明															
		小計	6/8 3/8	23/38 22/40	8/5 7/5	9/27 8/31	28/16 37/23	1/12 1/8	1/1	1/10 1/12	3/14 1/11	2/28 1/23	2/4 2/3		82/160 81/164	1/3 1/3	1/3 1/3

※注、R／L 。Bは殻頂が残存するものの個数。　巻貝・→破片　二枚貝

実形 破損
R／L R／L

D トレンチ						E トレンチ									小計	不明	小計	合計	生息地
D−2	D−3	D−4				E−1			E−2		E−3								
I	I	I	II	III	小計	フラット内	I	II	表土	II	I	II	III	IV					
																		4	
	B−1	B−1	B−1/3		B−1/5			3		4		B−2			(B−7/2)			(B−16/11)	I・2・a
																		(B−1/1)	I・2・a
		4	4		8	3	4	B−18/4		8	1	B−2	2	2	(B−38/6)			(B−61/11)	I・3・a
	1	3	4	1	9		1	B−17/4		1	5		B−1		B−24/5			B−133/10	I・2・a
																		6	I・2・a
								B−3/2							B−3/2			(B−7/4)	I・3・a
								2							2			5	I・2・a
																		1	
										1					1			2	
																		2	I・2・c
	B−1/1		B−1/1		B−2/2		B−1		1	B−2		B−2			B−1/5			B−8/13	I・2・c
B−1	1		B−1/1		B−2/2													B−4/3	I・2・c
								B−1/1		1/2	B−1/1		B−1		B−5/3			(B−10/3)	—
								1							1			2	I・3・a
																		(B−1/2)	
																		1	
																	1	1	I・2・c
																		1	
(B−4/1)	(B−31/8)	(B−32/8)	(B−12/5)	1	(B−80/22)	5	(B−18/5)	(B−112/25)	4	(B−50/10)	(B−26/2)	(B−11/10)	(B−6/6)	3	(B−235/58)	1	2	(B−727/155)	
																		・	V・8
																		1	
																		1	
																		1/2	I・2・a
								1/1							1/1			1/1	II・2・c
							1/1	1/1							1/2			1/2	I・2・a
1/15	1/9	1/14	7/7	6	2/1		2/8	12/51	14/28	3/1	2/7	4	32/13	23/9	2/48	40/85	60	100/224	74/192	III・0・c
1/2	1/1				1/2								1/1	1/1	1/1			4/8	3/9	I・2・a
	1/1	1/1	2/1	1/1	1/2		1/1	3/3	1/2		1/2	3/3	1/1	1/1	2/6	3/6		8/19	8/19	I・2・a
	2/1				2/1			1/1			1/1			1/1	1/3	3/1		3/6	5/3	I・2・c
																		2/2	—
							1/1	1/2	2/2		1/1				1/2	1/3		1/3	1/3	II・2・c
					1/1													1/1	II・2・c
					1/1													1/1	III・1・c
1/1	3/2	1/3			3/2	1/3												3/3	2/3	II・1・c
		1/1				1/1	63/6	65/10	12/15	9/10	2/1	11/19	1/4	1/1	89/40	76/25		118/71	117/58	I・1・c
									1/1	1/1					1/1	1/1		1/1	1/1	II・1・c
																		1/1	II・1・c
																		1/1	II・1・c
										1/1	1/1				0/1	0/1		0/1	0/1	
			1/1		1/1		1/1									1/1		1/1	—
2/17	2/11	7/19	1/13	8/1	6/1	2/2	1/1	17/39	10/25	1/1	1/8	65/14	68/24	24/74	26/43	2/3	1/1	1/9	1/12	33/13	25/9	2/1	1/4	2/4	6/4	142/139	126/99	241/341	217/291	

(2)上村遺跡出土の脊椎動物遺体

金　子　浩　昌
（早稲田大学考古学研究室）

上村遺跡は西表島・祖納にある遺跡で、島内の重要遺跡確認調査が行われ、その際出土した動物遺体中特に脊椎動物についての報告が以下にのべるものである。発掘はA～C、Eの各トレンチによって行われ、第Ⅰ層の表土には各種の遺物が混在したが、第Ⅱ層以下は後世の攪乱のみられない層であるらしい。包含層はA～C、Eで1mに及び、Dトレンチでは60cmがあった。シレナシジミガイのブロックを点々とみることが出来る層であるが、その形成年代は14世紀中頃から18世紀と考えられている。

1．出土した動物遺体種名表

節足動物門	Phylum ARTHROPODA
甲殻綱	Class Crustacea
軟甲亜綱	Subclass Malacostracea
十脚目	Order Depatoda
短尾亜目	Suborder Brachyura
ワタリガニ科	Family Portunidae
ノコギリガザミ	*Scylla Serrate*
脊椎動物門	Phylum VERTEBRATA
Ⅰ.軟骨魚綱	Ⅰ.Class Chondrichthyes
サメ目	Order Lamniformes
メジロザメ科	Family Carcharhinidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
Ⅱ.硬骨魚綱	Ⅱ.Class Osteichthyes
ウナギ目	Order Anguilliformes
アナゴ科	Family Congridae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ウツボ科	Family Muraenidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ボラ目	Order Mugiliformes
カマス科	Family Sphyraenidae
カマス類	Sphyraena sp.
スズキ目	Order Serranidae
スズキ科	Family Serranidae

属・種不明	Gen. et sp. indet.
タイ科	Family Sparidae
ミナミクロダイ	*Acanthopagrus sivicolus*
フエフキダイ科	Family Ltjanidae
属・種不明	Gen. et sp. endet.
フエフキダイ科	Family Lethrinidae
ヨコシマクロダイ	*Monotaxis grandoculis*
ハマフエフキ	*Lethrinus choerorhynchus*
サバ科	Family Scombridae
サワラ	*Scomberomoris niphonicus*
ベラ科	Family Labridae
コブダイ	*Semicossyphus reticulatus*
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ブダイ科	Family Scaridae
ナガブダイ	*Scarops rubroviolaceus*
属・種不明	Gen. et sp. indet.
フグ目	Order Tetraodontiformes
モンガラカワハギ科	Family Balistidae
モンガラカワハギ類	Balistes sp.
カサゴ目	Order Scorpaeniformes
コチ科	Family platy cephalidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
Ⅲ. 爬虫網	Ⅲ. Class Reptilia
カメ目	Order chelania
リクガメ科	Family Testudinidae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
ウミガメ科	Family Chelonidae
アオウミガメ	*Chelonia mydas*
Ⅳ. 鳥 綱	Ⅳ. Class Aves
ミズナギドリ目	Order Procellariiformes
ミズナギドリ科	Family procellariidae
オオミズナギドリ	*Calonectris leucomelas*
ワシタカ目	Order Falconiformes
ワシタカ科	Family Accipitridae

ノスリ	*Buteo buteo*
ツル目	Order Gvuiformes
クイナ科	Family Rallidae
オオバン	*Fulica atra*
V. 哺乳網	V. Class Mammalia
齧歯目	Order Rodentia
ネズミ科	Family Muridae
クマネズミ属の一種	Rattus sp.
食肉目	Order Canivova
イヌ科	Family Canidae
イヌ	*Canis familiaris*
ネコ科	Family Felidae
ネコ	*Felis catus*
海牛目	Order Sirennia
ジュゴン科	Family Dugongidae
ジュゴン	*Dugong dugong*
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
リウキュウイノシシ	*Sus leucomystax riukuanus*
ウシ科	Family Bovidae
ヤギ	*Capra hircus*

I　節足動物

ノコギリガザミ

僅かに1点に標本をのこしたのみである。左側の指節で近位部の½を失っているものと思われる。雌の個体のハサミ脚の一部である。

Table.1　ノコギリガザミ出土状況

グリット	部　位	個数
B－2　II層	指節片	1

II　脊椎動物

a. 魚　類

今回の調査で得られた魚類遺体は特に多いものではなかったが、遺跡の魚類相を知るには充分であった。軟骨魚類ではサメ類の椎体があったが、僅かに1点であった。

硬骨魚網で最多数の骨を出土したのはブダイ類であったが、その大部分が前上顎骨及び歯骨であったために種名の明らかに出来たのはナガブダイのみで、その他の標本は少なく種名を明らかに出来なかった。ハマフエフキも多い魚種であった。ブダイ類の半数位の個体数を占めるようである。その他の魚では、サンゴ礁の魚であるハタ類がやや目立つ外は、ヨコシマクロダイ、ベラ類、モンガラカワハギなどほぼ同程度の埋存であった。

比較的出土標本の少ない魚ではあったが、ウツボ、アナゴ類、サワラのあったことなどは本遺跡の特徴といえよう。

b．爬虫類

ウミガメ類（アオウミガメ）

骨の出土は比較的多かった。アオウミガメと同定される骨が多くあり、不明の骨もおそらく同じ種類ではないかと考えている。大・小の個体があり、一点だけ検出された上腕骨は小さな幼体のものであった。

リクガメ類は甲板骨の断片があったのみである。

Table. 2　リクガメ出土状況

グリット		個　数
B－0	Ⅰ　層	1
B－2	Ⅰ　〃	2
B－3	Ⅰ　〃	1
合　計		4

c．鳥　網

検出された量は稀めて少なかった。しかし、比較的保存の良好な標本がのこされていたので3種類が明らかになった。

オオミズナギドリ

Ⅰ区E－2、2層　右脛骨、骨体部分の全長（内外頸骨稜の先を小欠）76.15。

大きさと形態はオオミズナギドリに一致した。

Table. 3　トリ出土状況

種名 / グリット / 層序 / 部位	ノスリ			オオバン			オオミズナギトリ			合　計		
	B－3			B－3			E－2					
	Ⅳ			Ⅲ			Ⅱ					
	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
上腕骨	1	1								1	1	
尺骨（dis）	1	1			1					1	2	
中手骨		1									1	
大腿骨	1	1								1	1	
脛骨	1						1			2		
不明									2			2
合計	4	4			1		1		2	5	5	2

Table. 4　魚骨出土状況

種類 ＼ 出土地点			I 地区																		II 地区			不明	不明	最小個体数
			B		B−0	B−1		B−2		B−3				E−1	E−2	E−3				D−3	東側				
				II	I	I	II	I	II	I	II	III	IV	I	II	I	II	III	IV	I					
サメ科	サメ	脊椎						1																1	1
ウナギ目	ウツボ科	R−L										1					1							1 1	1
	アナゴ科	R−L											1											1	1
スズキ目	フエダイ科	R−L											1											1	1
	タイ科 クロダイ	R−L						1 1				1	1		1 1									3 3	3
	フエフキダイ科 ヨコシマクロダイ	R−L				1		1		1	2													1 1 / 1 2	2
	ハマフエフキ	R−L	1	1			1			1 1	1 1	1	1	1	1				1	2	1			6 3 / 7 3	7
	サワラ	R−L											1											1	1
	ベラ科 コブダイ	R−L				1							1											2	2
	種不明	R−L											1 1											1 1	1
	ブダイ科 ナガブダイ	R−L										1			1		1							3	3
	種不明	R−L					1	2 2		1	1 1	1 1	2 1 2	1 3	1 1	1	3	2		1			1 2 1 1	12 7 8 6	12
	種不明	R−L										1	1				2	1						3 2	3
	ハタ科 種不明	R−L							1								2 1 2			1			1	2 1 1 4	4
	種不明	R−L										1	1				2	1		1			1	3 2	3
カサゴ目	コチ科 種不明	前鰓蓋骨				1																		1	1
フグ目	モンガラカワハギ科	R−L				1					1	1	1				1							2 1 2	2
種不明		R−L												1										1	
種不明	上顎骨（右）				1	1																		2	
	上顎骨	破片				1																		1	
	前鰓蓋骨	破片				1																		1	
	脊椎		1		1	1						7	4	2	3		8	3	2	1				33	

<凡例>

左右不明上顎骨破片

右前上顎骨 | 左前上顎骨

右歯骨 | 左歯骨

左右不明歯骨破片

左右不明上咽頭骨破片

右上咽頭骨 | 左上咽頭骨

下咽頭骨破片

Table. 5　ウミガメ出土状況

種名 ＼ グリット 部位 ＼ 層序	アオウミガメ									ウミガメ							小計	合計
	I 区							II区	小計	I 区								
	B−2		B−3		E−1	E−3		D−4		B−1	B−2		E−1		E−2	E−3		
	I	II	II	III	I	II	III	I		II	I	II	I	II	II	II		
右上腕骨（小）			1						1									1
右肩甲、烏口骨		1							1									1
縁骨板							1		1									1
腹甲板（中・下腹板）						1			1									1
〃（下腹板）					1				1									1
中腹板	1							2	3									3
肢骨片											1						1	1
腹甲板片										1				1			2	2
背甲板片										1				1	3	1	6	6
甲板片										1			1			1	3	3
烏口												1					1	1
指骨	1	2				1			4									4
末節骨				1					1				1				1	2
破片													1		2		3	3
合計	2	3	1	1	1	2	1	2	13	3	1	1	3	2	5	2	17	30

ノスリ

上腕骨R・L、尺骨L、中手骨L、大腿骨R・L、脛骨R

実存する骨はなかったが、部分的にはノスリの大きさにほぼ一致した。

オオバン？

左尺骨　全長　65.30

実存する。大型の尺骨でオオバンの雄より僅かに小さい位であるが、オオクイナの可能性もある。因にオオバンは石垣島で繁殖例のある冬鳥（3ケ月程度滞在）である。

d．哺乳綱

リュウキュウイノシシの遺骸を除くと、他の種類の標本はイヌがやや目立つのみであった。イヌもまた断片的であって、上顎骨と下顎骨片があったにも拘らず、四肢骨は1個の踵骨があったのみであった。また上・下顎骨の歯はいずれもほとんど咬耗のみられない若い個体のものであった。小型犬である。

これを除くネコ、ネズミ、ジュゴン、ヤギなどはいずれも1～2点の標本があるのみである。

Table. 6　イヌ出土状況

グリット／層序／部位	B－3									E－1			E－3						不明			合計
	Ⅰ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ						
	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	
上顎骨（PM）		1																				1
下顎骨（M1）	1																					1
下顎骨																					1	1
下顎骨P_4 萌出途中	1																					1
肋骨						1			1			5			2			1				10
踵骨（完形）				1																		1
合計	2	1		1		1			1			5			2			1			1	15

Table. 7　ネコ出土状況

グリット	部位	個数
E－3　Ⅱ層	下顎骨（右）犬歯M_1	1

Table. 8　ネズミ出土状況

グリット	部位	個数
B－2　Ⅱ層	下顎骨（左）	1

Table. 9　ジュゴン出土状況

グリット	部位	個数
D－2　Ⅰ層	肋骨	1

Table.10　ヤギ出土状況

グリット	部位	個数
D－3　Ⅰ層	橈骨（右）近位部	1

Table.11　ウシ・ウマ出土状況

グリット		肋骨の個数
B－1	Ⅰ層	2
	Ⅱ層	1
B－2	Ⅰ層	1
E－2	Ⅱ層	1
不明		2
合計		7

Table.12　種不明

グリット		個数
B－0	Ⅰ	1
	Ⅱ	2
E－2	Ⅱ	1
合計		4

リュウキュウイノシシ

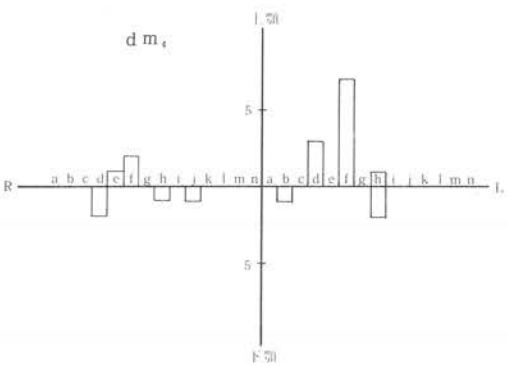
動物遺体中最も多くの骨を検出している。上腕骨の検出量が最も多く、最少個体数25個体が推定される。他の部位では大腿骨、脛骨がそれぞれ10数個体分があった。骨体部分あるいは骨端部分だけの一部をのこす標本が多く、破損度は高い。これらは解体や骨を調理してまで使った結果であろうか。無意識的な自然破壊もあったかも知れない。

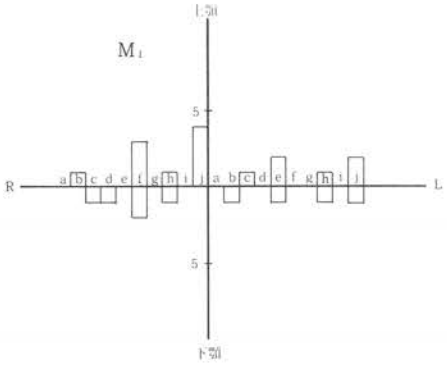
Table.13　イノシシの歯骨咬耗度分布

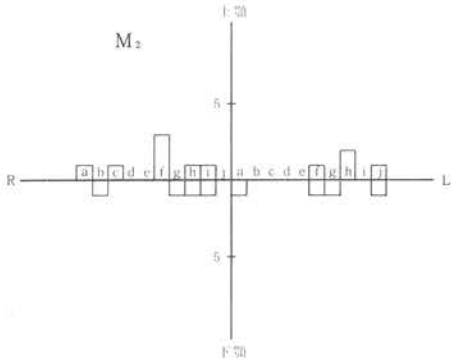
歯の磨耗状況
＜＞：未明出
＋：エナメル質咬耗
＋＋：小窩独立
＋＋＋：同連絡
⊕：全面窩

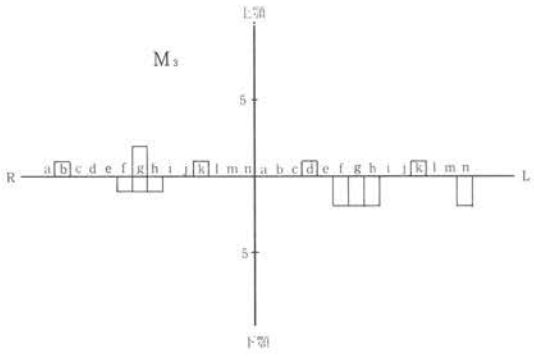
dm^4（上顎）、M_1、M_2の場合
a：＜＞
b：－、－
c：＋、－
d：＋、＋
e：＋＋、＋
f：＋＋、＋＋
g：＋＋＋、＋＋
h：＋＋＋、＋＋＋
i：⊕、＋＋＋
j：⊕、⊕

dm_4（下顎）、M_3の場合
a：＜＞
b：－、－、－
c：＋、－、－
d：＋、＋、－
e：＋、＋、＋
f：＋＋、＋、＋
g：＋＋、＋＋、＋
h：＋＋、＋＋、＋＋
i：＋＋＋、＋＋、＋＋
j：＋＋＋、＋＋＋、＋＋
k：＋＋＋、＋＋＋、＋＋＋
l：⊕、＋＋＋、＋＋＋
m：⊕、⊕、＋＋＋
n：⊕、⊕、⊕









四肢骨のこの量の割には頭骨の部位の少なかったことで僅かに6片があったのみで、そのうち4片は側頭骨鱗突起片であった。これもむしろ無意識的な自然破壊のためではないかと考えている。

歯牙は四肢骨に比べて検出が少なく、約半数の量である。また乳臼歯の数が目立ち、上顎骨の場合$dm^{\underline{4}}$が12、$M^{\underline{1}}$が9個、若い個体の多いことが推測される。

上村遺跡出土の動物遺体の特徴

魚類：本遺跡の魚骨はブダイ類を主としてハマフエフキダイがそれに次ぐような割合で出るサンゴ礁ラグーン内での漁撈の型をよく示すものであった。筆者は以前に同じ西表島の船浦貝塚の魚骨を調査したが、そこではクロダイがブダイよりも多くの割合を占め、河口的な漁撈の環境を示していた。なお、上村遺跡の魚骨にはサワラのような外海の魚類が僅かでもあったのが注目された。しかし、サメなどは船浦例と同様に少ない。

ウミガメ類も特に目立つ量ではなかった。鳥骨の検出は少なかったが、オオミズナギドリ（仲の御神島が繁殖地として考えられ、地元ではこのトリを同島から捕獲し、薫製にして保存食とした伝承がある）、ノスリ（冬鳥であるが、近年はほとんどみない）、オオバンは奄美大島や石垣島で生息例があるが、西表島では記録がない為、本遺跡出土のものはリュウキュウオオクイナの可能性も考えられる。ただし、標本はオオバンの大きさと変わりない。

獣骨のリュウキュウイノシシは船浦貝塚の例に比べて乳臼歯の埋存率が高いように思われる。形質的な変化はなさそうであるが、今後比較調査が課題となろう。

Table.14　イノシシ歯牙出土状況

地区	部位 / グリット / 層序	上顎 R													
		I 1	2	3	C				P 1	2	3	4	M 1	2	3
		i 1	2	3	C	m 2	3	4							
I 区	B														
	B　表採														
	B－0　I								1♂	1♂	1♂	1	1		
	B－1　I				1(欠)					1					
	B－2　I														
	〃　II														
	B－3　表採														
	〃　I														
	〃　II											1	1	<1>	
	〃　III				2♂		1	1	1	2	2	5	5	4	4(2欠)
	〃　IV	1													
	E－1														
	〃　I				1♀				1	1	1	1	1	1	2
	E－2　表土														
	〃　II														
	E－3　I														
	〃　II				1♀		2	2			1	1	1	1	
	〃　III	1													
II 区	D－2　I	1													
不明															
合計		3			5		3	3	3	5	5	9	9		6

<凡例>　①I→切歯　C→犬歯　P→前臼歯　M→後臼歯　i→乳切歯　m→乳臼歯　②1→第1　2→第2　3→第3　③<　>未崩出

上顎														下顎		
L														R		
I 1	2	3	C				P 1	2	3	4	M 1	2	3	I 1	2	3
i 1	2	3	C	m 2	3	4								i 1	2	3
			1♂													
										1						
			1♂													
			1♂													
			1♀				1♀	1♀	1♀	1♀	1♀	1♀				
													1			
									1	2	2	1	1			
				1	1	1										
			3 (1♂ 2欠)					3(1欠)	3(1欠)	2	2	1				
					2	2										
					1	1										
											1			1		
						1										
			1♂							1	1	1			1	
					5	5										
1				1	2	2										
1			8	2	11	12	1	4	5	7	7	4	2	1	1	

地区 グリット 層序	部位	下顎												
		R											L	
		C				P_1	2	3	4	M_1	2	3	I_1	2
		C	m_2	3	4								i_1	2
I 区	B													
	B 表採													
	B－0 I													
	B－1 I													
	B－2 I				1					1				
	〃 II													
	B－3 表採	1♂												
	〃 I							1	1	2	1	1		
	〃 II			2	2					1				
	〃 III													
	〃 IV													
	E－1		1											
	〃 I				1									
	E－2 表土													
	〃 II													
	E－3 I							1						
	〃 II								1	1	1	2		
	〃 III													
II 区	D－2 I													
不明											1			
合計		1	1	2	4			2	2	5	3	3		

下顎												上顎		不明	下顎	合計
L												切歯		切歯	犬歯	
3	C				P_1	2	3	4	M_1	2	3					
3	C	m_2	3	4								右	左	右	不明	
																1
																1
																5
																3
											1					4
																7
																1
								1	1	1	1		1			12
		1										1(幼)				20
	1♂								1	<1>	1	1	2			56
		1	1	2												
												2	1	1		5
																1
																12
															1♂	1
																3
							1	1	1	1	1					6
										1	3		1(幼)			36
			1	1												
																7
																1
									1							2
	1	2	2	3			1	2	4	4	7	4	5	1	1	184

Table.15　イノシシ出土状況

地区		I 区																
グリット		A			B									B－0				
層序		表土層			表土層			I			Ⅲ			I			II	
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左
前頭骨																		
後頭骨																		
後頭顆																		
後頭鱗	（幼）																	
側頭骨	頬骨																	
〃	〃　突起																	
上顎骨	〃　〃																	
〃	（幼）																	
〃	棘　突起																	
下顎骨	歯（脱）																	
〃	幼体（歯欠）																	
〃	角																	
〃	骨体のみ																	
〃																		
椎体	環　椎																	
〃	胸　椎																	
〃	腰　椎																	
〃	軸　椎																	
〃																		
肋骨																		
肩甲骨	（幼）													1				
〃	骨端																	
〃	〃（幼）																	
〃	〃（欠）																	
〃	骨端欠（幼）																	
〃	遠位部破片（幼）																	
〃	破　片																	
〃																		
上腕骨	骨　体													1				
〃	〃（若）																	
〃	〃（幼）																	
〃	遠位部骨端（幼）																	
〃	〃　（のみ）																	
〃	～　遠位部																	
〃	遠位部																	
尺骨	完　形																	
〃	骨　体																	
〃	〃　（幼）																	
〃	近位部骨端 はずれ	1																
〃	〃　（欠）				1													
〃	近位遠位部骨端はずれ																	
〃																		
橈骨	完　形																	
〃	骨　体																	
〃	〃　（幼）																	
〃	近位部～																	
〃	遠位部（欠）																	
〃	遠位部骨端のみ																	
中手骨	完形 Ⅲ																	

Ⅰ 区																								
B-0	B－1			B－2									B－3											
Ⅱ	Ⅰ			Ⅰ			Ⅱ			貝 層			Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ		
不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
						1																		
																	1							
																						1		
																						1		
																		1						
																							1	
																		1						
														1										
															1						1			
						1															1			
																		3			12			
																			1					
																						1		
																						1		
																		1						
	1			1	1								1				2			3	1		1	
																			1			1	1	
																1	1		1			2	1	
					1		1																	
																						1		
				1																				
																						1		
					1									1		1			1	1		1	1	
	1																							
	1																							
																						1		
																					1			
																1								
																							1	

地区		I 区																
グリット		B－3			E			E－1			E－2			E－3				
層序		V			I			I			II			I			II	
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左
前頭骨																		
後頭骨																		
後頭顆																		1
後頭鱗	（幼）																	
側頭骨	頬骨																	
〃	〃 突起																	1
上顎骨	〃 〃																	
〃	（幼）																	
〃	棘 突起									1								
下顎骨	歯（脱）																	1
〃	幼体（歯欠）																	
〃	角																	
〃	骨体のみ																	
〃																	1	
椎体	環椎						1			1								
〃	胸椎									2								
〃	腰椎																	
〃	軸椎																	
〃																		
肋骨										1			10					
肩甲骨	（幼）																1	1
〃	骨端																1	
〃	〃（幼）							1									1	
〃	〃（欠）							1										
〃	骨端欠（幼）																1	2
〃	遠位部破片（幼）																	
〃	破片																	
〃		1															4	
上腕骨	骨体																	1
〃	〃（若）																2	
〃	〃（幼）										1						1	2
〃	遠位部骨端（幼）																	
〃	〃（のみ）																	
〃	～ 遠位部																	
〃	遠位部																	
尺骨	完形																	
〃	骨体								1									1
〃	〃（幼）							1									1	
〃	近位部骨端 はずれ																	
〃	〃（欠）																	
〃	近位遠位部骨端 はずれ																	
〃																		
橈骨	完形																	
〃	骨体												1					
〃	〃（幼）										2							
〃	近位部～																	
〃	遠位部（欠）																1	
〃	遠位部骨端のみ																1	
中手骨	完形 III																	

Ⅰ区							Ⅱ区														
E−3							D−3						D−4			不明			合計		
Ⅱ	Ⅲ			不明			Ⅰ			Ⅱ			Ⅰ								
不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
											1									1	
1																					1
																				1	
																					1
																				1	
							1	1											1	2	
																			1		
																			1		
																					2
																				1	
																				1	
																					1
																				1	
																		1	1		1
1																					5
1																					5
4																					4
1																					1
									1												1
									4												30
																			2	1	
																			2		
																			2		
																			2		
																			2	2	
																1			1		
																					1
							3									1			15	5	
																1			4	2	
																			6	2	
																			3	3	
							1												1		
																			1		
																			1		
							1												1		
																			1		
																			3	6	
																			2		
																			1		
																			2		
																			1		
																1			1		
																1			2		
3																					5
																			2		
																			1		
																			1		
																			1		
																				1	

地区		I																
グリット		A			B									B－0				
層序		表土層			表土層			I			Ⅲ			I			Ⅱ	
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左
中手骨	Ⅲ																	
〃	完　形 Ⅳ														1			
〃	Ⅳ																	
〃	近位部 Ⅲ														1			
〃	近位部																	
〃																		
寛骨	上部																	
〃	臼部																	
〃	〃 完形													1				
〃	〃 上部										1							
〃	〃 下部													1				
〃	骨体																	
〃																		
大腿骨	骨体								1									
〃	〃 (若)																	
〃	〃 (幼)																	
〃	若																	
〃	近位部(欠)																	
〃	遠位部骨端のみ																	
〃	〃 はずれ																	
脛骨	骨体																	
〃	〃 (若)																	
〃	〃 (幼)																	
〃	遠位部(焼ける)																1	
〃	～ 遠位部																	
〃	遠位部骨端																	
〃																		
腓骨	若																	
〃																		
踵骨	完形																	
〃																		
距骨	完形																	
中手中足骨	〃 (ⅢⅣ)																	
〃	ⅢⅣ																	
〃	近位部 ～																	
〃	近位部～遠位部骨端はずれ																	
〃																		
中足骨	完形(Ⅲ)																	
〃	Ⅲ																	
〃	完形(Ⅳ)																	
〃	Ⅳ																	
〃	第4足根骨																	
〃	中心 〃																	
指骨	基節骨																	
〃	中節骨																	
〃	末節骨																	
不明	骨体 キズあり																	
合計		1			1				1		1			4	2		1	

I 区																								
B-0	B－1			B－2									B－3											
Ⅱ	Ⅰ			Ⅰ			Ⅱ			貝 層			Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ		
不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
																1							1	
																							1	
																	1							
																		1						
													1							2			1	
																							1	
													1				1			1		1		
																1								
																			1					
																			1					
																	1							
										1														
														1		1			1	2		1	2	
																				2			1	
																1	1		1			1	1	
																1						2	1	
		1			1								1							1				
																							1	
																		1			4			2
																					2			4
						2																		
						1																		
																						1	2	
					1														1					
													1						1			2		
																						1		
																						1		
					1																			
						2												1			3			3
																		1						2
																					1			2
	3	1		2	6	7	1			1			5	3	1	8	8	10	13	10	25	21	18	13

地区		I 区																
グリット		B－3			E			E－1			E－2			E－3				
層序		V			I			I			II			I			II	
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左
中手骨	III																	2
〃	完　形 IV																	
〃	IV														1			
〃	近位部 III																	
〃	近位部																	
〃																		
寛骨	上部																1	
〃	臼部	1							1			1					1	
〃	〃 完形																	
〃	〃 上部																	
〃	〃 下部																	
〃	骨体																	
〃																	1	
大腿骨	骨体							1	1					1			2	2
〃	〃 (若)																1	
〃	〃 (幼)							2										2
〃	若																	
〃	近位部(欠)																	
〃	遠位部骨端のみ													1				
〃	〃 はずれ													1				
脛骨	骨体																1	
〃	〃 (若)																1	
〃	〃 (幼)																1	
〃	遠位部(焼ける)																	
〃	～ 遠位部																	
〃	遠位部骨端													1				
〃									1						2		1	2
腓骨	若																	
〃									1								1	1
踵骨	完形																	
〃								1									1	
距骨	完形											1		1			1	
中手中足骨	〃 (IIIIV)												2					
〃	IIIIV									1								
〃	近位部 ～												1					
〃	近位部～遠位部骨端はずれ																	
〃													1					
中足骨	完形(III)																	
〃	III											1		1			2	1
〃	完形(IV)																	
〃	IV																2	1
〃	第4足根骨																	1
〃	中心 〃																	
指骨	基節骨																	
〃	中節骨																	
〃	末節骨																	
不明	骨体 キズあり																	
合計		2					1	7	5	6	3	3	15	6	3		32	22

Ⅰ区							Ⅱ区														
E−3							D−3						D−4			不明			合計		
Ⅱ	Ⅲ			不明			Ⅰ			Ⅱ			Ⅰ								
不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
																			1	3	
							3												3	2	
																				1	
								1												2	
					1															1	
																				1	
																			1		1
																			3	5	
																			1		
																			1		
																			1		
							1												1		
																1			2	1	
																			6	6	
																			1		
		1																	3	3	
	1																		2		
																			1		
		1																	1	1	
														1					1	1	
							1											2	2	1	2
																			1		
																			1		
																			1		
							1									1			3		
													1	2					2	2	
																			4	10	
		1																		4	
																			4	4	
																			3	1	
													1						4	3	
																			2	2	
3																					12
3																					10
																					1
																					2
									1												3
																			1	2	
							1	1											5	4	
																			4		
							1										1		4	2	
																			1	1	
																				1	
																					9
1																					4
1																					4
									1												1
19	1	3			1		14	3	7		1		2	3		7	1	3	136	94	107

第Ⅶ章　西表島採集の羽口

鍛冶や製鉄の際、その炉の付属品として必要欠かせないものに羽口がある。炉の側壁に装着して吹子から炉内へ空気を送り込む、いわゆる送風孔に接続する先端部である。大半の場合が炉壁貫通して燃焼部分に直接接触するものであるとされている。その用途は製錬、鍛冶、鋳物など多岐にわたって用いられる。鍛冶の場合だと一側面からの送風で足りるが、製鉄の場合になると、左右からの数本の送風孔が設けられる。特に、タタラ操業を向かえるようになると、製鉄炉が大きくなり炉内の温度調整の微妙な変化が羽口の装着にかかわってくる。

羽口の材質は土製、陶製がほとんどで、材質と加工性から肉厚で太径となっている。沖縄グスク時代の遺跡から出土するものも土製品で全体に小さい。（現在では鉄製のパイプを使っているところもある）いずれも完形品で出土してくるものはなく、破損品が多いため全形が把握出来ない。外形は４～５㎝前後の直径で円筒状をなすが、片方の孔径がやや広がる。送風孔は２～３㎝となっている。

今回、西表島から採集された羽口は、石垣金星氏によって、これまで数ヵ所から採集されており必ずしも遺跡からだけの採集にとどまっていない。それ以外の場所からの資料も含まれている。今回ここに報告する資料は全部で３点である。上村遺跡から出土した資料と合わせて、西表島における羽口の形状について概観して見たい。沖縄本島で確認されているものに比べると形状的にあるいは材質的に大きな違いが見られる。まず、材質は砂岩製である。これは時期的なものとして判断されるものとして、比較的新しい時代に使われていた羽口と思っていたが、上村遺跡の中からも同様な材質のものが出土した。円筒状のものや、方形状、あるいは、半月状（蒲鉾状）に成形してあるものである。砂岩製（硬質砂岩）で、円筒状になるものは、長さ15㎝、直径20㎝、孔径３㎝と太形肉厚である。半月形になるものは、長さ17㎝、半径10㎝、孔径２㎝である。孔径はいずれも円形で片側にやや広くなっている。炉内、燃焼部へ直接火力を受けた孔径部は、ガラス状の鉄滓が溶解して付着している。上村遺跡から出土した羽口も同様な円筒状になるもので類似する。石製の羽口（砂岩製）はグスク時代に形成された遺跡の中でも八重山の西表島や石垣島のヤマバレー遺跡、仲筋貝塚、与那国島の与那原遺跡など南の地域に出土しており形態の差異が窺われる。与那原遺跡から出土した羽口は直径17㎝～20㎝の大型と直径8.4㎝の小型とに分類しているが、円筒状で出土した資料６点全て砂岩製となっている。砂岩を用いた理由の一つには、周辺に砂岩で構成される地質構造であるとともに、加工が容易であるということと、火力に強いことを熟知した材質の選択であったと考えられる。沖縄本島のグスク時代の遺跡から出土してくるものは、直径４～５㎝前後で、孔径が３㎝～４㎝の細形肉薄の表面が灰色を呈したものや、淡赤褐色を呈したものである。破損した資料が多いため両端の状況、形状が残されたものは少ないが、中にスラグの粘着とともに、ガラス質の鉄滓を帯びて光沢が出来ているものもある。これまでに確認されたものは、その全てが鍛冶跡からのものであった。

第Ⅷ章　調査の成果と今後の課題

西表島に関する古い記録は15世紀後半に書かれた『李朝実録』で、その中に記録された朝鮮人漂流記とされている。それ以後の記録をとどめるのはなく近世の時期を向かえる間、口碑伝説の時代とされている。この地が西表島の歴史の流れの中に深く関与してくる時期は口碑伝説の中でも不確かな部分が多く、古文献の欠如とも合わせて、その実体は長く深いベールに包まれた状況にあった。あまりにも空白が大きすぎ、いつの時期に最初の集落が営まれるようになったのかも明確ではない。

このような中で口碑伝説の中に登場してくる人物が二人いる。そのうちの一人は村建ての中心となった大竹祖納同儀佐という人物であり、あと一人が慶来慶田城用緒である。

大竹祖納堂儀佐がいつの頃の時代に生きた人物であったのか、それを詳細に検討した記事は皆無に近い。この二人の人物が登場する時期は、おぼろげながらも、ちょうど中世から近世の時期に対応出来ると思う。時代は移り変わりながらも、この両者が祖納半島のこの上村の地を生活の拠点として活動したことに興味を注がれる。何故に、この地が西表島の歴史の中心舞台になりえたのか、その要素は何であったのか、あるいは因果関係が何であったのかは、文献が介在しない今日においては、その全てを知るよしもない。

ただ上村遺跡の発掘調査の中から、そこに存在した生産技術の実態をある程度浮き彫りにすることが出来たと考える。特に大竹祖納堂儀佐の屋敷跡と言われている場所や大竹の根所（拝所）周辺から南西側斜面地一帯にかけて無数の鉄滓と日常生活品が散在している状況に圧倒されると同時に、鉄器生産地でもあった可能性がある。そこが、鉄器を作りだす鍛冶場であり、また供給の地であった可能性を秘めている。

どのような技術を持った集団が鍛冶に従事していたのか、あるいはその中心となった人物は誰であったのか。当時の上村に住んでいた人々にとって、そのインパクトは、はかり知れない程の強力なものが動いたと想像される。今回、調査を入れた場所は、上村遺跡全体の中のほんの一部分にすぎない。出土してきた遺物から一帯に鍛冶場が存在したことは確実と判断される。

出土した鉄滓を見ると、やはり鍛錬鍛冶（小鍛冶）を中心とした技術レベルである。

いつの頃の時期に、どのような炉の構造をもち、どのような鉄材を用いて、製品を作っていたのか。あるいは鉄材の輸入の問題など、将来における研究課題は多く残されている。材料鉄の場合は、西表島や石垣島あるいは、沖縄本島を含める県内において自前で自給できたとは考え難い。ましてや製鉄となると、さらに困難をきわめ、成立しえなかった様相が強い。『参遣状』[註1]の中で次のような記事が見える。「鉄砂吹き稽古したる云々……」とあり、これは自前で製鉄を試みたことを示したものであろう。しかしながら、それが生産ベースにのせて成功したのかどうかのその後の記事の解釈がわからない。

大澤正己氏は、沖縄県下での製鉄操業の遅れをトータルな問題として「鉄生産の精錬操業に

おいては砂鉄、鉄鉱石以外の原料としての良質の木炭、炉材粘土、それに技術が伴いかつ経済性が加味されて成立するもので、これらの条件のいずれかが欠けた為、開始が遅れたもの[註2]」とみなしている。製鉄の試みはあったにせよ、問題は生産ベースにのせて、需要と供給のバランスが一貫した操業の中でとられたかどうかであろう。あるいは製鉄の技術が定着しないままに鍛冶技術が広く発達していったとも考えられる。そこで問題になるのが鉄材である。

材料鉄の確保が鍛冶技術の発達を促したことは言うまでもないことである。板状の破片や棒状品が鉄材に用いられ、さらに鉄鍋が材料鉄に移行していったとも考えられる。鍋の破片の再生ならば、鋳鉄脱炭法という技術で、炭素分を調整して可鍛鉄にする技術や、あるいは、わかし付けなどの加工技術が存在したことも十分考えられる。ただ鉄材のルートやその入手の方法においては、資料の不足から判然としない。しかし祖納の位置する地理的要因や自然環境を考慮するならば、日本本土はもちろんであるが、東シナ海を中心とした大陸側からの影響も十分に留意しておくべきであろう。陶磁器の動きとともに半鉄になった状態で一緒に入ってきた可能性もある。さらに、鉄素材の問題と切り離して考えることの出来ないものに燃料の問題がある。

鍛冶、製鉄ともに燃料は、主として木炭（鍛冶炭）を利用して生産していくが、上村遺跡からは石炭も出土している。木炭と同様、直接的に燃料として使えたかどうかである。使えたとしても常時石炭のみで可能であったか。また石炭を燃料として使用した時期が問題である。

冶金学の方からは、石炭の場合は製錬でも、鍛冶のいずれにおいても還元材として使用することはないと言われている。その理由の一つとして、「石炭に含有されているイオウ分が流出して鉄に浸透していくことによって、もろくなって鉄の品位をさげる化学変化が認められるとしている。但し、石炭をストレートに燃料として使用する前にコークスに再加工して利用したことは考えられる[註3]」とされている。いずれにおいても、今後の追加調査や冶金学的分析が進展していく中で、これらの諸問題が解決されていく道があると考える。

土器は鍋形Ⅰ類ａと鍋形Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類の出現時期がある程度把握できた。鍋形Ⅰ類ａは14世紀中頃から15世紀前半、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類が15世紀中頃～17世紀とが考えられる。これは口縁の傾き具合や耳（把手）の形態などからも裏付けられるようである。

パナリ焼についての詳細な報告等がない為、今回これに着手した。一応、17世紀前半頃から登場してくるものかと考えられた。

白磁・青磁の資料からは、本遺跡は今のところ14世紀中頃までしか遡ぼれないが将来の調査によってはその時期を遡ぼる可能性もある。

褐釉の瓶の資料は、文様構成から今帰仁城跡[註4]出土の緑釉陶器と類似する。相違点は釉のみである。生産地に於いて製作者の事由で褐釉を施したとも考えられる。

天目茶碗や茶入れ壺の資料も得られた。この天目茶碗や茶入れ壺の出土例は宮古・八重山地域では少ない。

八重山地域では報告例のないタイ陶器・瑠璃釉・青白磁・赤絵が注目される。

沖縄製陶器の大部分が八重山産の荒焼であった。反面、上焼は沖縄産のものが主流を占めていることが判明した。

以上の状況から第Ⅰ地区A～C・F地点は15世紀終末から17～18世紀に位置づけられ、第Ⅱ地区の拝所内が本遺跡で最も古い箇所で染付の出土はなく14世紀中頃～15世紀前半に位置付けられる。また、第Ⅱ地区Dトレンチでは青磁碗Ⅰ類aと稜花皿が各1点ずつ第Ⅱ層から出土している為、古く見ても15世紀前半の時期が考えられる。新しいものは17世紀・18世紀の染付が出土している。

今回の発掘調査地区は、屋敷内側の道とその東側斜面（第Ⅰ地区）と大竹の拝所とその西側斜面（第Ⅱ地区）のみに都合上限定されたが、将来は、各屋敷内の発掘調査が必要であろう。屋敷内の発掘によって初めて、上村（アダティ村・ウフダティ村・ウカリ村）遺跡の詳細な状況を把握することが出来るのではないだろうか。

註

イキル

註1．西表をほりおこす会「参遺状雍正9年(1731年)11月20日」『SUNDSIMA』第26号　1987年。

註2．大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』沖縄県渡名喜村教育委員会 1979年3月。

註3．大澤正己氏からの御教示による。

註4．金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会　1983年。

参考・引用文献

調査報告書

1．沖縄県・与那国町教育委員会『与那原(ドナンバラ)遺跡－個人農家の畑地改良等に伴う緊急発掘調査報告－』1988年3月

2．与那国町教育委員会『慶田崎遺跡』1986年

3．沖縄県教育委員会『竹富町・与那国町の遺跡』1980年

4．ヤマバレー遺跡調査団『ヤマバレー遺跡第2次発掘調査概報』1980年

5．青山学院大学成屋遺跡調査団「西表・成屋遺跡発掘調査概報」『青山史学9号』1987年

6．多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」文化財要覧　1956年版　琉球政府文化財保護委員会

7．多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」文化財要覧　1960年版
琉球政府文化財保護委員会『沖縄文化財調査報告』(1956～1962年)
沖縄県教育委員会監修　那覇出版社　1978年

8．滝口宏編『沖縄・八重山』校倉書房　1960年

9．沖縄・西原町教育委員会『我謝遺跡』1983年

10．沖縄県教育委員会『御嶽、御嶽信仰習俗分布調査(Ⅱ)－宮古諸島及び八重山諸島』昭和60年3月

論文・研究報告

11．ニュー・サイエンス社『製鉄遺跡』考古学ライブラリー 15　1983年

12．東恩納寛惇『南島風土記』昭和25年3月

13．ひるぎ社『地域と文化』第53・54合併号 1986．6．15

14．阿利直治「八重山諸島の考古学研究史」『八重山文化論叢珣喜舎場永珣生誕100周年記念論文集』1987年

15．『鉄の考古学』窪田蔵郎・雄山閣考古学選書9　昭和54年

16．沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』1983年

西表・上村遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大　澤　正　己

概　要

14世紀代及び15〜17・18世紀代に鍛冶操業のあった上村遺跡の鍛冶関連遺物（鉄滓、鍛造白片、鉄鍋、釘、木炭）を調査して、次の事が明らかになった。

(1) 上村遺跡は、鉄器製作の大規模な鍛冶工房跡と認定できる。出土鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積生成した椀形滓が大半であった。

(2) 鍛冶に供された鉄素材の製鉄原料は、銅（cu）分の高い含銅磁鉄鉱系が発想できる。鍛冶作業は、鉄素材の成分調整の精錬鍛冶（大鍛冶）から、鉄器鍛造製作の鍛錬鍛冶（小鍛冶）までがなされていた。

(3) 鍛冶に際して、赤熱鉄素材を鉄床石上で連続鍛打を加える時、鉄表面から剥落散分する酸化被膜の鍛冶剥片が多量採取された。鍛冶作業を証明する考古遺物であるが、当遺跡においては、銑鉄（せんてつ）の脱炭（左下げ）剤としての再利用を考慮すべく細粉化状態で出土している。

(4) 鉄製品として鉄鍋破片が出土した。片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄（Grdy cast iron）である。左下げ（脱炭）の素材として鍛錬鉄の原料とするのか、逆に滲炭材とするのか興味を呼ぶところである。

(5) 釘は金属鉄が酸化され、熱処理技術までの追求は出来なかった。該品は鍛造品で芯部にヴスタイト（Wustite : FeO）からなる大きな非金属介在物を捲込んでいる。量産化作業の表われと読みとれる。

(6) 鍛冶用木炭（小炭）の組成分析も行なった。固定炭素（C）40.80%、揮発分40.11%、発熱量4370cal／gである。灰分が19.09%と高目は土壌による汚染の影響と考えられる。

1．いきさつ

上村遺跡は、沖縄県八重山西表島祖納上村に所在する。遺跡の発掘調査は、1989年8月1日から16日迄の2週間と、1990年7月2日から20日迄の日程でとり行なわれた。

調査区は大竹祖納堂の屋敷跡及び東側を第Ⅰ地区B・Eトレンチ（15〜17・18世紀）、大竹根所（拝所）及びその周辺に設定したDトレンチが第Ⅱ地区（14世紀中〜17・18世紀）である。

発掘調査では、直接鍛冶炉の検出はなかったが、鍛冶作業を裏付ける遺物として、鍛冶炉の炉底に堆積生成された大小の椀形状鍛冶滓、砂岩製羽口（大型で外径20〜25cm前後、通風孔2〜3cm）、砥石多量の鍛造剥片、鉄製品として、山刀（ヤンガラシ）、刀子、鉄鍋破片、釘、棒状製品、板状製品が検出された。

遺跡の性格解明を目的として、沖縄県教育委員会より、これら出土遺物の調査依頼を要請されたので、科学的手法にもとずく解析を行なった。

なお、筆者も1989年８月23日・24日の両日現地に赴き、遺跡南西斜面に夥しい量で流積している鉄滓と黒色土（木炭、石炭、八重山式土器、陶磁器、自然遺物：獣骨、魚骨、貝類）に目を見張った。

このうち、石炭は、硫黄（Ｓ）や燐（Ｐ）を含有するので鍛冶に用いると鉄素材を劣化されるので、使用できない。その用途については結論をだしかねている。

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目			
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	投影機撮影	化学組成
UEM－1	鍛造剥片	第Ⅱ地区Ｄトレンチ第２層(黒色土層)	15C			○		○	○
2	〃	〃　〃 拝所内第２層（灰黒色土層）	14C中～15C前半			○	○	○	○
3	〃	第Ⅰ地区　第２層（黒色土層）	16～17・18C			○		○	○
4	〃	〃　Ｅトレンチ第２層（黒色土層）	16～17・18C			○		○	○
5	〃	第Ⅱ地区Ｄトレンチ第２層（黒色土層）15～30cm	14C中～15C前半			○		○	○
6	鉄　滓	第Ⅰ地区Ｂトレンチ－３第４層	16～17・18C	115×75×25	280	○			○
7	木　炭	〃　Ｅトレンチ第２層（黒色土層）	16～17・18C			－			○
2Ⅰ－881	鉄　滓	第Ⅰ地区Ｂトレンチ－１第１層(0－20)	16～17・18C	70×55×20	105	○			○
2	〃	同　上	〃	40×30×25	88	○			○
3	〃	同　上	〃	50×40×15	35	○			○
4	〃	同　上	〃	55×32×12	45	○	○		○
5	鉄　鍋	第Ⅰ地区　Ｂ－０　第１層	〃	32×28×３	10	○	○		－
6	鉄　釘	第Ⅱ地区　Ｄ－３　第１層	15～17・18C	50×10×10	13	○			－
7	鉄　滓	第Ⅰ地区　Ｂトレンチ　表面採取	16～17・18C	30×20×20	35	○			○
X－890	〃	第Ⅱ地区　Ｄトレンチ　Ｄ－２第１層	15C	75×80×25	285	○			○

２．調査方法

２－１　供試材

Table. 1 に示す、調査試料は鍛造剥片５点、鉄滓７点、鉄鍋１点、釘１本、木炭１点である。

２－２　調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

(3)　ビッカース断面硬度

(4)　化学組成

3．調査結果と考察

(1) 調査Ⅰ区（15世紀～17・18世紀）

該地は大竹祖納堂儀佐の屋敷跡及び東側でB・Eトレンチ出土遺物で鍛造剥片、鉄滓、鉄鍋、木炭を分析対象とする。

① 鍛造剥片：UEM－3、UEM－4、

肉眼観察：UEM－3は試料準備過程では微粉状であったので砂鉄と間違えられていた。UEM－4は青黒色で剥片状の形状が認められたので鍛造剥片（スケール）となっていた。

実体顕微鏡及び顕微鏡組織：UEM－3をPhoto.3の⑥～⑪に示す。外観は⑥⑦⑧の実体顕微鏡で示す様に砂鉄と見違うように微細化され、鍛造剥片と湯玉（鍛造剥片が鍛冶炉内で溶解され、表面張力の関係から球状化したもの）、それに鉄滓の屑、鉄片酸化物らの集合体と判る。⑨～⑪は顕微鏡組織である。白色球状が湯玉、白色板状片が鍛造剥片、不定形は鉄滓屑である。いずれも鉱物組成は、ヴスタイト（Wüstite：FeO）である。

UEM－4はPhoto.4の①～⑥に示す。④の上の大きな塊は鉄滓屑、その下の白色板状が鍛造剥片、⑤も上下関係は④と同じ、⑥は鉄滓屑で、こちらも鉱物組成はヴスタイトである。

Photo.7に顕微鏡試料として各試料をベークライト樹脂に埋込んだ5倍の断面を投影機で撮影した写真を示す。

化学組成：Table.2に示す。UEM－3、4は近似した成分系であるが、前者が微粉化されて、鉄滓粉や二次汚染物の含有するもので、鉄分が少なくガラス質成分が多くなる。

両試料の全鉄分（Total Fe）は51.52～63.89%、このうち金属鉄（Metallic Fe）はほとんどなく0.51～0.68%、酸化第1鉄（FeO）28.57～43.26%鉄の酸化物を多く含んでいて酸化第2鉄（Fe_2O_3）は高くて40.94～42.54%となる。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は10.76～19.8%である。

随伴微量元素の二酸化チタン（TiO_2）は0.18～0.23%、バナジウム0.01～0.02%、酸化マンガン（MnO）0.08～0.09%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.04～0.05%、硫黄（S）0.008～0.011%、五酸化燐（P_2O_5）0.58%は高目、銅（Cu）は0.010%であった。

UEM－3が砂鉄であれば、砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）が10%前後、バナジウム（V）0.2～0.3%と出るのであるが、（Table.3に示す沖縄採取砂鉄分析位参照）鍛造剥片や湯玉、鉄滓屑、鉄酸化物なので、この様に低くなる。又、鍛造剥片や湯玉は、鉱物組成がヴスタイト（Wüstite：FeO）主体なので随伴微量元素は少なくなる。

② 鉄滓 UEM－6、2Ⅰ－881、2Ⅰ－882、2Ⅰ－883、2Ⅰ－884、2Ⅰ－887

肉眼観察：UEM－6は、280gの大型椀形滓、外面は赤黒色を呈し、肌の大部分は小波状凹凸を有するが、端部は飴状のなめらかな箇所をもつ、木炭痕あり。裏面も赤黒色で反応痕をも

つ。破面黒色で気泡散在するが緻密質で比重大。

2Ⅰ－881は105ｇの椀形滓、表側は平坦で木炭痕を残す。赤褐色を呈す。裏面反応痕あり。（UEM－６、2Ⅰ－881は精錬鍛冶滓）

2Ⅰ－882は椀形滓の中核部破片、茶黒色を呈し緻密質、局部的に鉄錆が認められる。鍛錬鍛冶滓。

2Ⅰ－883は椀形滓破片。黒色を呈し平坦面を有し気泡がない。精錬鍛冶滓。

2Ⅰ－884は小型椀形滓で重量は45ｇ。表皮側は黒色で木炭痕を有す。裏面は赤黒色である。鍛錬鍛冶滓。

2Ⅰ－887は黒褐色の鉄滓破片である。気泡がなく緻密質、鍛錬鍛冶滓。

顕微鏡組織：UEM－６、2Ⅰ－881、2Ⅰ－883は精錬鍛冶滓の可能性をもつ。Photo. 4の⑦⑧、Photo. 8の①、③に組織写真を示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）と、淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）が晶出する。基地の暗黒色ガラス質スラグは少ない。

2Ⅰ－882、2Ⅰ－884、2Ⅰ－887は鍛練鍛冶滓である。Photo. 8の②、④、Photo. 9の①に鉱物組成を示す。こちらの鉱物組成はヴスタイトが大粒で密となってファイヤライトの量が減少している。鍛練鍛冶滓の典型的な晶癖である。

ビッカース断面硬度：2Ⅰ－884を代表させて測定した。Photo. 8の⑤に圧痕写真を示す。硬度値は447Hvである。ヴスタイトの文献硬度値は450～500Hvであるので妥当な数値と考えられる。硬度値からの組織同定が出来た。

化学組成：Table. 2に示す。精錬鍛冶滓は、不純物が多いのでガラス質成分が高く、鉄分は若干低減される。UEM－６、2Ⅰ－881、2Ⅰ－883らは、全鉄分（Total Fe）50.1～55.7％、このうち、酸化第１鉄（FeO）は52.2～58.63％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）が13.56～13.73％の割合である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は、25.07～31.62％である。二酸化チタン（TiO_2）0.13～0.20％、バナジウム（V）0.004～0.052％のこの２成分から砂鉄原料の鉄素材は否定されて鉱石系となる。随伴微量元素はおしなべて低目であるが、UEM－６を除くと銅（Cu）が0.18～0.27％高目が特徴的である。

2Ⅰ－882、2Ⅰ－884、2Ⅰ－887らは鍛錬鍛冶滓である。精錬鍛冶滓に比べて鉄分は多く、ガラス質成分は減少する。鉄素材は純度の上ったものを加熱しているので溶失する滓は当然純度は上る。全鉄分（Total Fe）55.0～64.1％、酸化第１鉄（FeO）56.8～59.2％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）13.73～27.8％の割合である。ガラス質成分は、12.99～26.43％である。随伴微量元素も低減傾向にあり、二酸化チタン（TiO_2）の0.08～0.16％、バナシウム（V）0.003～0.004％となる。銅（Cu）は精錬鍛冶滓同様高目で、0.11～0.17％を含有する。

③　鉄鍋　2I－885

肉眼観察：外皮は赤褐色の錆に覆われているが強磁性を有して金属鉄の残留を予測させる。32×28×3㎜10ｇの小片なので、顕微鏡組織の調査のみにとどまる。

顕微鏡組織：Photo. 9の②③④に示す。②④は研磨のままで腐食（Etching）なしで観察される組織である。黒い片状は黒鉛が析出しており、該晶はねずみ鋳鉄（Gray Cast Iron）とわかる。その破面がねずみ色をしていることから通常ねずみ鋳鉄と読んでいる。

③はピクリン酸飽和液で腐食した時に表われる組織で黒くなっている素地はパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）である。白い部分はリン共晶であろう。

なお、この組織の一部に黒色球状結晶がある。球状黒鉛鋳鉄（Spheroidal Graphite Cast Iron）の可能性がある。球状黒鉛を造るには鋳鉄溶場にマグネシウム（Mg）または銅（Cu）－マグネシウム（Mg）、ニッケル（Ni）－マグネシウム（Mg）などの母合金を添加する。こうすれば、鋳放し状態で機械的性質が改善される。大陸産の鋳鉄品の輸入が想定できる。他試料からも分析品が採れるもので確認調査が必要となる。後日に期したい。

④　木炭　UEM－7

肉眼観察：軟質小炭。

組成分析：Table. 2に分析結果を示す。遺跡出土の木炭は、土壌による汚染の影響があり、本来の組成からやや離れた数位になりやすい、揮発分が40.11％、固定炭素40.80％は低く、灰分19.09％は高い、土壌のまぎれ込みであろう。発熱量4370cal／ｇも小炭にしては低目である。

Table. 2　木炭の組成

遺跡名＼組成	灰分（％）	揮発分（％）	固定炭素（％）	付着水分（％）	硫黄（S）（％）	燐（P）（％）	発熱量（Cal／g）
UEM－7 上村遺跡木炭	19.09	40.11	40.80	17.72	0.02	2.13	4370
白須たたら（軟炭）	3.23	36.01	60.76	11.46	0.02	－	6410
樫ノ木消炭	1.54	10.86	87.60	0.63	0.033	－	6819
工業用木炭	1.66	24.75	68.77	4.82	－	－	7155

また、上村木炭は、燐（P）が2.13％と高い。本来、木炭中の燐（P）は0.1％前後である。木炭中の燐（P）が高いと、鉄中へ燐（P）が侵入し鉄材質を劣化させる。木炭中の燐（P）は樹種によっても変動があるので、樹種の同定も必要となってくる。

(2) 調査Ⅱ区（14世紀中～15世紀前半・15世紀～16・17世紀）

大竹根所（拝所）周辺のＤトレンチと同拝所内出土遺物（鍛造剥片、鉄滓、鉄釘）の調査結果である。

① 鍛造剥片：UEM－１、UEM－２、UEM－５。

肉眼観察：UEM－１、UEM－２も砂鉄として採取された鍛造剥片である。UEM－１は微細化鍛造剥片であり、Photo.１の①は1.4倍の拡大写真、②は８倍、③は20倍の実体顕微鏡写真で示す。

UEM－２は、種々なものが混在するので、湯玉を２Ａ、鉄滓屑を２Ｂ、鍛造剥片を２Ｃとして選別した。

UEM－５は、鍛造剥片として採取されたもので、これにも湯玉や鉄滓屑がまぎれ込んでいる。

実体顕微鏡と顕微鏡組織：UEM－１をPhoto.１に示す。④～⑩の顕微鏡組織である。④⑤は鉄滓屑で鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）、⑥⑦⑨⑩は鍛造剥片と湯玉が混在する。湯玉は小さいものは直径が0.05㎜、大きものは0.4㎜まで存在する。鍛造剥片は薄手で0.02㎜、厚手で0.6㎜である。鉱物組成は、湯玉、鍛造剥片ともにヴスタイト（Wüstite：FeO）である。

Photo.６には、このUEM－１の顕微鏡試料として埋込んだ微細化試料の断面写真を示している。微細化試料なので、肉眼観察で砂鉄と見違えるのも無理のないところである。

Photo.２の①～⑥はUEM－２Ａの湯玉の実体顕微鏡と顕微鏡組織を示す。湯玉は鍛造剥片の球状化したものであり、青味を帯びている。茶褐色を呈する球体は鉄の酸化物が含まれる事もある。鍛造剥片の球状化した湯玉の鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）の凝集物である。Photo.６には、湯玉の埋込み試料を示している。研磨過程で磨き過ぎたり、剥落するものもあり、完全な円形を留めるものは少ない。

次にUEM－２Ｂは、鉄滓屑を選び出した。鉱物組成は、鍛冶滓の屑なのでやはりヴスタイト（Wüstite：FeO）の凝集組織である。Photo.６には、埋込み試料の断面を提示してある。

UEM－２Ｃは、形の明確な鍛造剥片を選び出した。青味を帯びた剥片は鍛造剥片でヴスタイト（Wüstite：FeO）の凝集組織（Photo.３の④）となるが、時には鉄片の混入もある。Photo.３の⑤は、この鉄片屑でゲーサイト（Goethite：α（アルファー）－FeO・OH）を呈するものである。Photo.６には、埋込み試料の断面を示す。

UEM－５は、鍛造剥片として準備された試料である。鍛造剥片に湯玉はまぎれ込む。顕微鏡組織をPhoto.５の④～⑥に示す。両方共鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）の凝集組織である。Photo.７には埋込み断面の５倍写真を提示した。

ビッカース断面硬度：Photo.５の⑦⑧にUEM－２Ｂの鉄滓屑でみられたヴスタイト結晶の硬度圧痕と、UEM－２Ｃの鍛造剥片のヴスタイト凝集部分の硬度圧痕写真を示す。前者の硬度値

は、487Hvと490Hv、後者で460Hvと487Hvである。ヴスタイトの文献硬度は450〜500Hvであり、これに見合った数値と考える。

化学組成：Table. 2 に示す。UEM－1、UEM－2A、UEM－2Cらは、夾雑物が混入しており、前述した第Ⅰ地区出土のUEM－3、UEM－4と同成分傾向である。鍛造剥片の純粋な成分値はUEM－2Bに表われている。鍛造剥片は、鉄素材の表皮酸化物である。全鉄分（Total：Fe）は70.30%、そのうち、金属鉄（Metallic Fe）はほとんど含有されず0.04%、酸化第1鉄（FeO）62.50%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）31.00%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）はほとんどなく5.56%、他の随伴微量元素も僅かで、二酸化チタン（TiO_2）0.10%、バナジウム（V）0.01%、酸化マンガン（MnO）0.07%、酸化クロム（Cr_2O_3）0.05%、五酸化燐（P_2O_5）0.19%である。銅（Cu）の0.022%は高目で含銅磁鉄鉱鉄素材の流れを汲むものと考える。

② 鉄滓　X－890

肉眼観察：椀形鍛冶滓の完形品である。表裏共に黒色を呈し、木炭痕を残す。破面も黒色で気泡するが緻密質である。75×80×25㎜の中型で重量は285ｇを測る。

顕微鏡組織：Photo.10の①②に示す。鉱物組成は、大きく成長した白色粒状のヴスタイト（Wüstite：FeO）が大量に晶出して、鍛錬鍛冶滓の晶癖を呈す。

化学組成：Table 2．に示す。全鉄分（Total Fe）が63.9%と多く、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は少ない鍛錬鍛冶滓の成分系である。随伴微量元素もおしなべて少なく二酸化チタン（TiO_2）は0.10%、バナジウム（V）0.006%である。銅（Cu）は高くて0.53%と分析された。第Ⅰ地区の鍛錬鍛冶滓と同系鉄素材の排出鍛冶滓に分類できる。また、鍛造剥片の成分系とも関係ずけられる。

③ 釘　2Ⅰ－886

肉眼観察：基部が湾曲した角釘である。現在長50㎜で10×10㎜角を測る。磁性を有するが金属鉄の残留まではおぼつかない。

顕微鏡組織：Photo. 9 の⑤⑥に示す。金属鉄は酸化されて残留せず、ゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）となっている。⑤の組織は、釘断面中心に捲き込まれた非金属介在物である。その部分の拡大が⑥である。介在物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO）と淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）である。今までの既述した鉄滓の組成と同系である。釘製造はマスプロ生産で、質より量産といった作業だったと推定される。

4．まとめ

(1)　上村遺跡の鍛冶操業期は、14世紀中頃から15世紀前半と15世紀後半～17・18世紀の２時期がある。この両期の鍛冶に供された鉄素材は、鉄滓の科学組成から、銅（Cu）分の高い含鋼磁鉄鉱系鉄素材が供された可能性が強い。

鉄素材産地は、揚子江流域の鉱山が１つの候補に挙げられる。しかし、これは文献その他の傍証資料も必要となる。

(2)　上村遺跡の鍛冶作業は、鉄素材の成分調整の精錬鍛冶（大鍛冶）から鉄器製作の鍛錬鍛冶（小鍛冶）までがなされたと想定される。

この時の鉄滓組成は、前者はファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が多く晶出し、後者になるとヴスタイト（Wüstite：FeO）主体となる。化学組成は当然鉄分とガラス質成分に反映される。精錬鍛冶滓は全鉄分（Total Fe）が50～55％代、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+MgO$）20％代、鍛錬鍛冶滓は全鉄分（Total Fe）55～64％ガラス質成分10％代となる。

(3)　沖縄県の鍛冶関連遺跡において、鍛造剥片や湯玉の検出は、今回調査の上村遺跡が初例である。（続いて同じく西表島の船浦スラ所でも検出されている）。

この鍛造剥片の一部は、微細化状態で検出されて、当初は、砂鉄と見違える程であった。鍛造剥離片は、鍛冶作業において派生した産物で鍛冶を証明する重要遺物であるが、微細化が人工的であるならば、二次活用の可能性を示唆するものと考える。

鍛造剥片は酸化スケールで酸化第１鉄（FeO）主成分である。これだと脱炭剤として活用できる。すなわち、鉄素材の成分調整において、銑鉄（せんてつ）を左下（脱炭）げて鍛鉄とする場合、鍛冶炉の炉底に鍛造剥片を敷き込んで脱炭剤とする。

鋳鉄は炭素をセメンタイト（Cementite：Fe_3C）として析出する。一方、鍛造剥片の鉱物組成はヴスタイト（Wustite：FeO）である。これを鍛冶で反応させると下式が想定できる。

$$Fe_3C \longrightarrow Fe+C$$

（鋳鉄中のセメンタイト）

$$C+FeO \longrightarrow Fe+CO\uparrow$$

（鍛造剥片）

上村遺跡において、この様な精錬鍛冶（大鍛冶作業の左下げ）がなされてたか否かの検討は、今後の研究課題となってくる。

（大澤正己（たたら研究会会員）

註

①　日刊工業新聞『焼結鉱組織写真および識別法』　1968年。

Table. 3 鍛造

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄粉 (Total. Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)
UEM－1	上村	第Ⅱ地区Dトレンチ第2層	鍛冶剥片	15C	59.64	0.25	35.65	45.29	9.58
UEM－2A	〃	第Ⅱ地区Dトレンチ拝所内第2層	湯玉	14C・15C	53.43	6.46	11 64	54.22	15.71
UEM－2B	〃	同上	厚手鍛造剥片	15C	70.30	0.04	62.50	31.00	3.85
UEM－2C	〃	同上	薄手鍛造剥片	15C	63.36	0.06	28.49	58.84	5.78
UEM－3	〃	第Ⅰ地区 第2層	鍛造剥片	16～17・18C	51.52	0.68	28.57	40.94	15.19
UEM－4	〃	第Ⅰ地区Eトレンチ第2層	〃	16～17・18C	63.89	0.51	43.26	42.54	7.68
UEM－5	〃	第Ⅱ地区Dトレンチ第2層	〃	14C・15C	60.68	0.13	38.34	43.96	9.07
UEM－6	〃	第Ⅰ地区Bトレンチ B－3第4層	精錬鍛冶滓	16～17・18C	55.07	0.01	58.63	13.56	18.81
2I－881	〃	第Ⅰ地区Bトレンチ B－1第1層	〃	16～17・18C	53.7	—	56.8	13.73	20.10
2I－882	〃	同上	鍛錬鍛冶滓	16～17・18C	58.4	—	59.2	17.66	15.40
2I－883	〃	同上	精錬鍛冶滓	16～17・18C	50.1	—	52.2	13.61	23.82
2I－884	〃	同上	鍛錬鍛冶滓	16～17・18C	55.0	—	51.4	21.51	18.34
2I－887	〃	第Ⅰ地区Bトレンチ表面採取	〃	16～17・18C	64.1	—	57. 4	27. 8	8.56
X－890	〃	第Ⅱ地区Dトレンチ D－2第1層	〃	14・15C	63.9	—	61.5	23.01	9.10
UEM－8	船浦スラ所	C－3第3層 30～40cm	精錬鍛冶滓	18C	51.36	0.01	45.20	23.19	19.47
UEM－9	〃	同上	鍛造剥片	18C	71.14	0.01	60.71	34.23	2.81
UEM－10	〃	第3層	〃	〃	69.68	0.01	43.71	51.04	1.60
X－891	〃	表面採取	鍛錬鍛冶滓	〃	53.3	—	57.0	12.86	17.00
X－892	〃	〃	〃	〃	60.0	—	61.5	17.44	14.74
Y－873	古見	表面採取	鍛錬鍛冶滓	〃	49.3	—	53.7	10.77	20.62
W－891	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	43.9	—	24.86	35. 2	26.04
W－892	〃	〃	〃	〃	44.5	—	43.0	15.87	28. 9
W－893	〃	〃	水酸化鉄	〃	35.1	—	5.73	43.8	31.0
UEM－11	住屋遺跡	B－7第2層	精錬鍛冶滓	15C	57.36	0.03	59.97	15.32	6.00
UEM－12	東原貝塚	ム－53第2層	鍛錬鍛冶滓	近世・近代	53.33	0.01	49.00	21.78	21.19
G－901	与那原遺跡	J－20第2号土壌	小鉄塊	14C初～16C	48.9	—	1.72	68.0	15.58
G－902	〃	K－22 黒土層	鍛錬鍛冶滓	〃	63.6	—	60.8	23.36	8.54

注. ①上村遺跡発掘調査資料 沖縄県教育委員会 1987年～1990年. ②船浦スラ所跡 沖縄県教育委員会1989年。
⑤『東原貝塚ほか発掘調査報告』伊平屋村教育委員会 1986年。⑥・⑦『与那原遺跡』与那原町教育委員会 1988年。

剥片、鉄滓の化学組織

酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (PO)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO / Total Fe	注
2.85	0.51	0.41	0.370	0.122	0.09	0.20	0.03	0.011	0.20	1.23	0.01	0.018	13.842	0.232	0.003	①
1.87	0.91	0.36	0.458	0.212	0.08	0.10	0.05	0.056	0.90	1.41	0.04	0.014	19.52	0.365	0.002	
0.85	0.39	0.22	0.136	0.116	0.07	0.10	0.05	—	0.19	—	0.01	0.022	5.562	0.079	0.001	
1.04	1.01	0.37	0.284	0.196	0.18	0.23	0.05	0.030	0.44	0.99	0.05	0.012	8.68	0.137	0.004	
2.14	1.43	0.53	0.346	0.170	0.09	0.18	0.05	0.011	0.58	2.63	0.01	0.010	19.806	0.384	0.004	
1.21	0.95	0.43	0.276	0.214	0.08	0.23	0.04	0.008	0.58	0.56	0.02	0.010	10.76	0.168	0.004	
2.42	0.60	0.40	0.324	0.142	0.10	0.21	0.03	0.012	0.26	1.20	0.01	0.020	12.956	0.214	0.004	
2.96	1.59	0.89	0.616	0.204	0.06	0.20	0.03	0.032	0.30	0.05	0.01	0.002	25.07	0.455	0.004	
2.96	4.96	0.50	—	—	0.05	0.13	0.01	0.023	0.17	0.15	0.004	0.18	28.52	0.531	0.002	
1.97	3.65	0.97	—	—	0.11	0.09	0.01	0.022	0.24	0.16	0.003	0.17	21.99	0.377	0.002	
3.85	2.78	1.17	—	—	0.30	0.17	0.03	0.024	0.68	0.14	0.052	0.27	31.62	0.631	0.003	
3.21	4.06	0.82	—	—	0.06	0.16	0.02	0.014	0.18	0.11	0.005	0.11	26.43	0.481	0.003	
1.33	2.26	0.84	—	—	0.34	0.08	0.02	0.009	0.16	0.07	0.004	0.13	12.99	0.203	0.001	
1.51	2.48	0.53	—	—	0.09	0.10	0.03	0.054	0.48	0.18	0.006	0.53	13.62	0.213	0.002	
2.33	2.23	0.54	0.804	0.194	0.12	0.32	0.04	0.036	0.28	0.41	0.01	0.002	23.338	0.454	0.006	②
0.62	0.44	0.28	0.068	0.060	0.04	0.25	0.03	0.005	0.10	0.19	0.01	0.002	4.278	0.060	0.004	
0.63	0.86	0.28	0.070	0.104	0.07	0.14	0.03	0.006	0.09	0.39	0.01	0.010	3.544	0.051	0.002	
2.34	7.30	1.64	—	—	0.07	0.49	0.03	0.063	0.28	0.19	0.014	0.096	28.58	0.536	0.009	
2.14	1.48	0.48	—	—	0.04	0.37	0.03	0.026	0.20	0.30	0.010	0.075	18.84	0.314	0.006	
2.38	4.30	0.92	—	—	0.07	0.50	0.051	0.017	0.27	0.43	0.010	0.009	28.22	0.572	0.010	③
4.25	3.80	1.07	—	—	0.08	0.29	0.02	0.17	0.31	0.04	0.008	0.088	35.16	0.750	0.007	
3.67	5.34	1.24	—	—	0.12	0.21	0.04	0.049	0.38	0.08	0.067	0.17	39.15	0.880	0.005	
7.33	0.46	0.46	—	—	0.22	0.34	0.03	0.023	1.14	0.20	0.011	0.14	39.25	1.118	0.010	
2.39	0.53	1.54	0.594	0.310	0.31	3.53	0.04	0.024	1.65	0.29	0.13	0.004	16.134	0.281	0.062	④
1.50	1.67	0.36	0.234	0.054	0.04	0.13	0.03	0.024	0.28	0.41	0.01	0.020	25.008	0.469	0.002	⑤
3.53	0.33	0.26	—	—	0.13	0.26	0.05	0.042	1.66	1.42	0.080	0.14	19.70	0.403	0.005	⑥
2.25	0.77	0.38	—	—	0.19	0.26	0.15	0.053	0.34	0.27	0.25	0.023	11.94	0.188	0.004	⑦

③西表をほりおこす会採取資料　④住屋遺跡 平良市教育委員会 1990年

Table. 4　鉄滓、砂鉄、鉱石の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	試料分類	推定年代	地区	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)
Y−871	屋慶名	海中道路沿海岸	砂鉄	現代	本島中部	55.6	31.5	44.5	0.66	1.86	1.07
Y−872	薮地島	勝連町	〃	〃	本島中部	58.9	32.2	48.4	0.78	2.09	0.60
OKG−1	我謝	E地点 C−4	砂鉄製錬滓	13〜16C	本島中部	25.5	30.0	3.12	26.2	7.56	12.42
2	〃	I地点 F−7	鍛錬鍛冶滓	〃	〃	53.3	55.3	14.75	7.96	2.14	5.15
3	〃	I地点 I−9	精錬鍛冶滓	〃	〃	50.5	51.0	15.52	10.94	3.84	8.26
OKUR−1	浦添城跡	カンジャー地区	鍛錬鍛冶滓	14〜15C	〃	57.9	57.7	18.59	16.12	2.55	2.17
2	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	〃	59.0	63.9	13.34	8.30	2.93	4.59
3	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	〃	〃	52.5	59.4	9.05	19.98	3.93	4.34
4	〃	〃	〃	〃	〃	50.2	54.0	11.73	24.44	4.16	2.59
5	〃	〃	〃	〃	〃	52.5	55.3	13.60	21.48	4.35	1.20
OKH−1	フルカツ山	表面採取	〃	不明		59.3	59.5	18.66	7.72	1.61	9.37
A−841	牧港貝塚	第I地区 JI2〜KI2 第II層灰白砂	砂鉄	沖縄貝塚時代後期	本島中部	56.8	18.14	61.0	2.32	2.61	1.68
A−842	〃	第I地区 JI2 白砂中	〃	〃	〃	56.2	12.79	66.2	1.42	2.42	1.12
D−851	〃	第二地区岩陰部0〜33 第I層耕土中	鍛錬鍛冶滓	グスク時代	〃	47.4	46.6	15.98	24.76	4.35	6.51
B−84	渡口	表面採取	砂鉄	沖縄貝塚時代後期	〃	−	−	−	−	−	−
2D−841	具志原	G−6グリット 第7層落ち込み内	赤鉄鉱石	沖縄貝塚時代後期の層	本島北部	65.6	0.43	93.3	2.71	0.94	0.84
G−90	渡名喜島		磁鉄鋼石	現代	本島南部	63.55	16.11	69.72	5.38	2.38	0.78
F−842	勝連城跡	KC−1078	鍛錬鍛冶滓	グスク時代	本島中部	42.9	47.3	8.77	35.4	3.59	2.80
D−841	漢那	表面採取	〃	不詳	本島北部	56.4	59.5	14.51	18.00	2.88	3.60
B−901	宮国元島	仲子盛拝所西側	〃	15C〜16C	宮古	55.36	52.53	20.36	12.2	3.1	4.3
C−901	〃	17地区	〃	15C〜16C	〃	67.42	39.29	52.73	3.35	0.78	1.79
E−901	伊原		〃	14C〜15C	本島南部	51.45	56.79	10.45	20.1	4.1	2.9
F−90	内間グスク		〃	15C〜16C	本島中部	45.73	49.56	9.11	10.1	3.4	8.6
−	新城寺田	鹿児島垂水坂元地区	砂鉄	現代	鹿児島	51.10	27.66	−	12.52	2.10	0.53
−	谷山	〃 谷山生見地区	〃	〃	〃	51.62	28.12	−	10.20	0.68	0.90
2E−8401	頴娃町	〃 指宿郡	〃	〃	〃	57.76	22.57	57.5	3.04	2.93	1.54
−	種子島	東邦金属KK普通砂鉄	〃	〃	種子島	58.54	33.01	43.18	1.16	2.98	0.15
2J−881	現和	製鉄炉横田	砂鉄製錬滓	〃	種子島	33.0	37.8	5.17	22.02	6.09	1.89
2J−882	〃	製鉄炉辺	〃	〃	〃	13.90	14.51	3.75	56.7	11.75	1.73
2J−883	石寺	浜砂鉄	砂鉄	〃	〃	45.8	16.60	47.0	8.82	1.25	0.89

（沖縄・種子島を中心に）

酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total−Fe	TiO_2 / Total−Fe	注
1.54	0.46	14.27	0.078	0.021	0.23	0.19	0.33	0.006	—	—	0.257	〃
1.44	0.41	10.32	0.072	0.017	0.19	0.14	0.27	0.005	—	—	0.175	〃
2.27	0.50	16.26	0.013	0.024	0.24	0.09	0.080	0.005	48.45	1.900	0.638	3
0.56	0.11	2.84	0.029	0.011	0.47	0.07	0.23	Nil	30.56	0.573	0.221	〃
1.07	0.22	5.92	0.031	0.024	0.24	0.07	0.19	0.004	24.11	0.477	0.117	〃
0.95	0.07	0.75	0.013	0.013	0.56	Nil	0.036	0.004	21.79	0.376	0.013	4
1.29	0.24	4.14	0.013	0.009	0.41	0.03	0.17	0.004	17.11	0.290	0.070	〃
0.80	0.13	0.83	0.015	0.016	0.44	0.05	0.034	Nil	29.05	0.553	0.016	〃
0.76	0.087	0.92	0.013	0.018	0.48	0.07	0.032	0.005	31.95	0.637	0.018	〃
0.67	1.01	1.13	0.010	0.022	0.45	0.17	0.056	0.005	27.70	0.528	0.022	〃
0.53	0.049	0.11	Nil	0.011	0.22	0.02	0.005	0.034	19.23	0.324	0.002	5
1.81	0.50	10.11	0.047	0.056	0.20	0.24	0.24	0.003	—	—	0.178	6
1.87	0.52	10.98	0.053	0.016	0.19	0.15	0.25	0.003	—	—	0.195	〃
0.55	0.17	0.27	Nil	0.010	0.29	0.04	Nil	Nil	36.17	0.763	0.0057	〃
—	—	9.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
0.39	0.085	0.018	Nil	0.032	0.22	0.22	0.010	Nil	—	—	0.0003	〃
0.24	0.27	0.29	0.005	0.531	1.590	0.17	0.010	0.0039	—	—	0.0046	7
0.49	0.19	0.24	Nil	0.008	0.15	Nil	0.003	0.004	42.28	0.986	0.0056	8
0.41	0.055	0.15	Nil	0.019	0.53	0.14	0.004	0.013	24.89	0.441	0.0027	〃
1.4	0.1	0.1	0.017	0.041	0.95	0.159	0.014	0.0076	21.00	0.379	0.0018	9
0.46	Trace	0.07	0.004	0.037	0.322	0.78	0.006	0.0072	6.38	0.095	0.0010	〃
1.1	0.2	0.2	0.061	0.023	0.19	0.192	0.174	0.0042	28.20	0.548	0.0038	10
6.9	8.7	0.2	1.257	0.078	0.16	0.088	0.033	0.0220	29.00	0.634	0.0044	〃
4.40	0.43	9.14	—	—	0.27	—	0.33	—	—	—	0.179	11
4.16	0.65	9.14	—	—	0.20	—	0.29	—	—	—	0.177	〃
2.12	0.73	7.63	Nil	0.017	0.997	0.06	0.30	Nil	—	—	0.132	12
2.87	0.73	12.26	—	0.018	0.24	—	—	—	—	—	0.209	13
3.31	0.93	22.15	0.03	0.062	0.087	0.08	0.25	0.049	33.31	1.009	0.671	14
1.62	0.25	6.43	0.02	0.011	0.10	0.09	0.103	0.068	71.79	5.165	0.463	〃
5.02	0.77	18.10	0.02	0.021	0.16	0.03	0.19	0.033	—	—	0.395	15

(1)UEM－I
上村遺跡
（第Ⅱ地区Dトレンチ出土）
鍛造剥片・湯玉
①×1.4　②×8
③×20
④～⑩×100

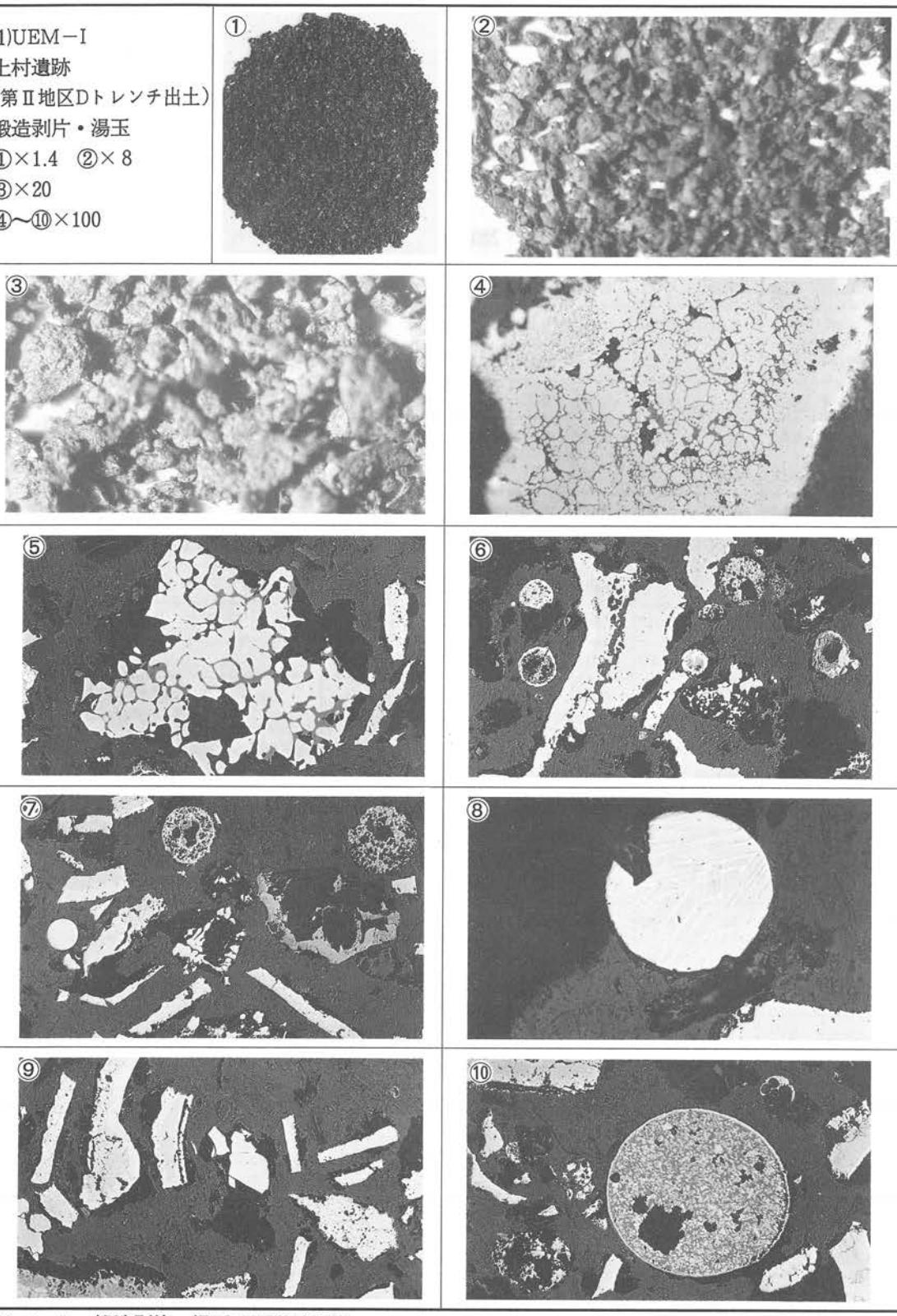
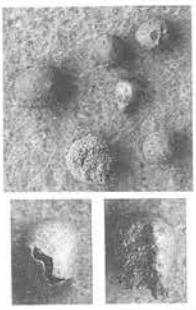
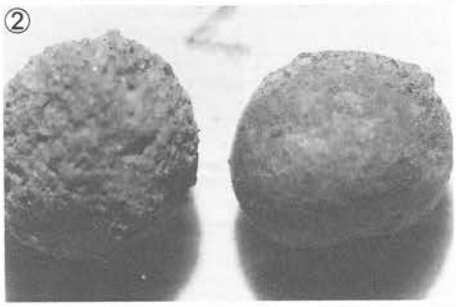
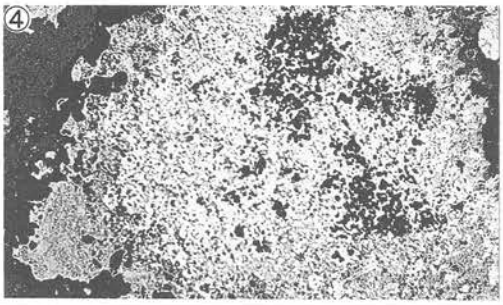


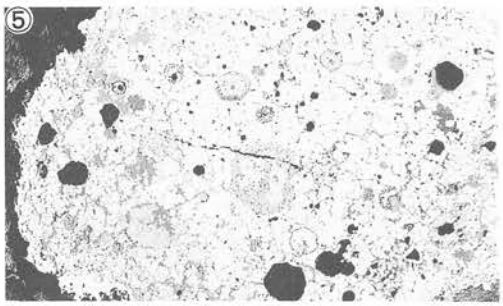
Photo. 1　鍛造剥片・湯玉の顕微鏡組織

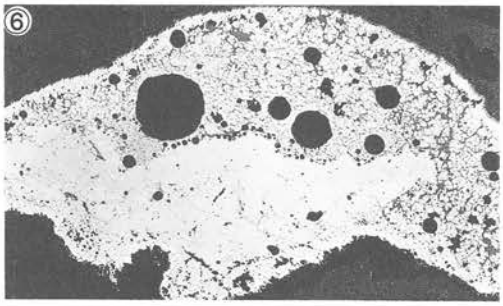
(2) UEM－2A
上村遺跡
(第Ⅱ地区 Dトレンチ出土)
湯玉
①×1.4 ②③×8
④⑤⑥×100











(3) UEM－2B
上村遺跡
(第Ⅱ地区 Dトレンチ出土)
鉄滓屑
(鍛錬鍛冶滓)
⑦×1.4 ⑧×8

⑦

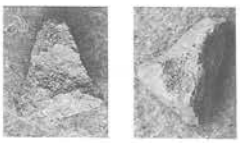
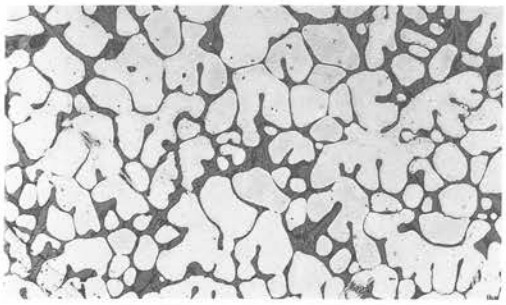


表 側 ⑨×100　　裏 側 ⑩×50



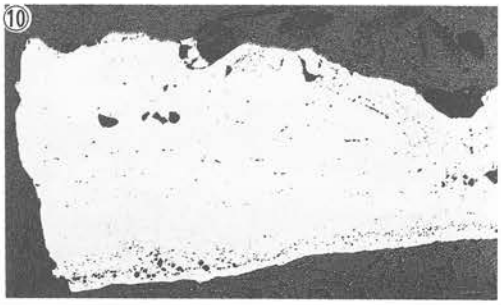
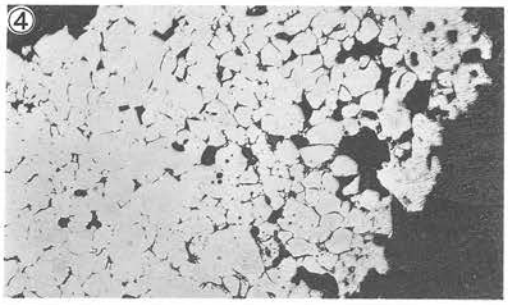
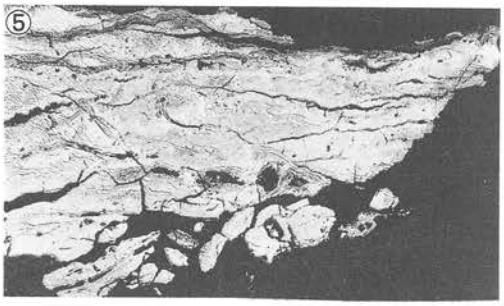


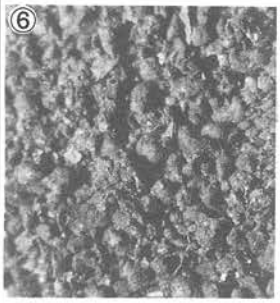
Photo. 2　湯玉・鉄滓屑の顕微鏡組織

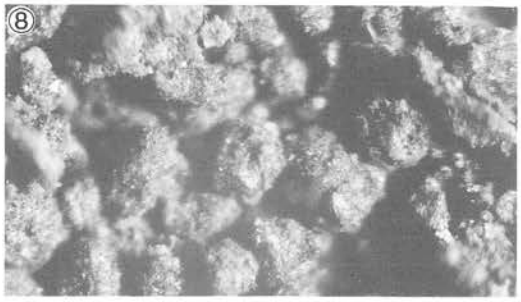
(4) UEM－2C
上村遺跡
(第Ⅱ地区 Dトレンチ出土)
鍛造剥片
①×1.4 ②③×8
④⑤×100

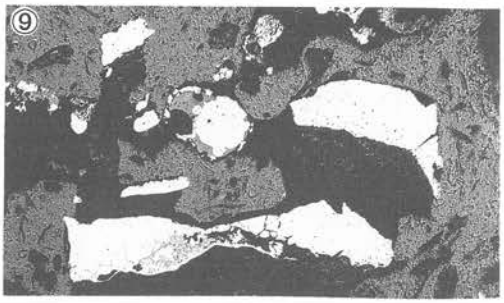


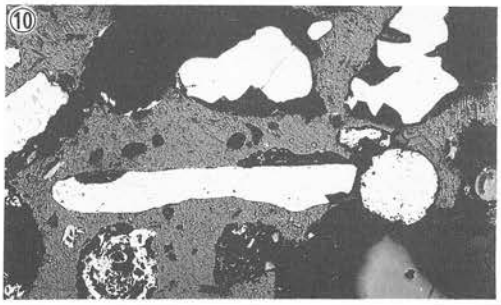


(5) UEM－3
上村遺跡
(第Ⅰ地区 第2層出土)
鍛造剥片と湯玉
⑥×8 ⑦×20
⑧×30
⑨～⑪×100









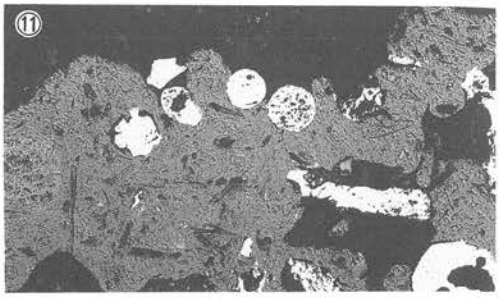


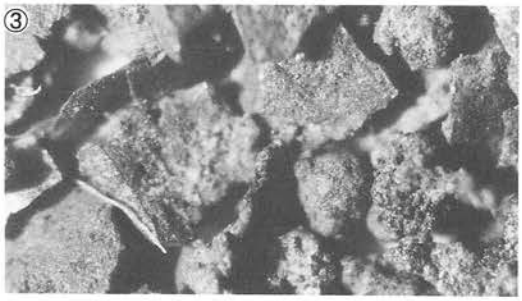
Photo. 3 鍛造剥片・鉄酸化物・湯玉の顕微鏡組織

(6) UEM－4
上村遺跡
(第Ⅰ地区 Eトレンチ出土)
鍛造剥片と
鉄滓層

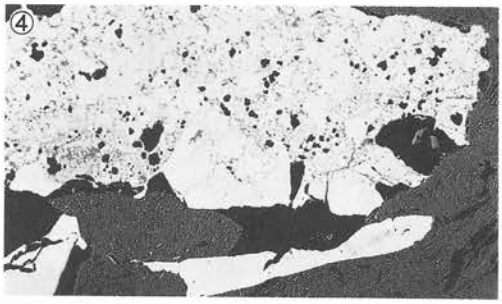
①

②

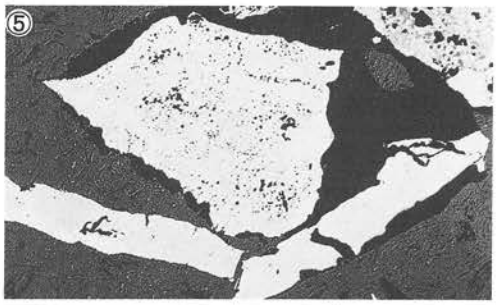
③



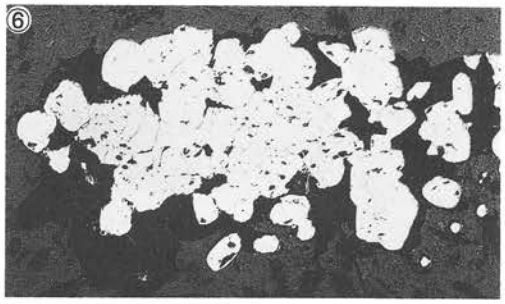
④



⑤



⑥

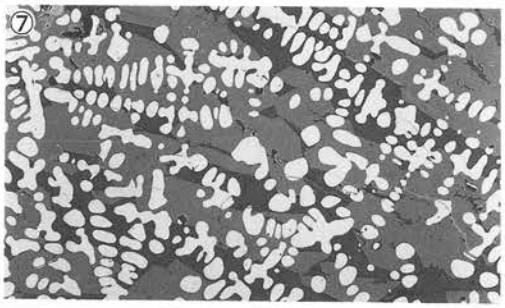


(7) UEM－6
上村遺跡
(第Ⅰ地区 Bトレンチ出土)
精錬鍛冶滓
×100

外観写真1／2.9

表　　側

⑦



同　　上

裏　　側

⑧

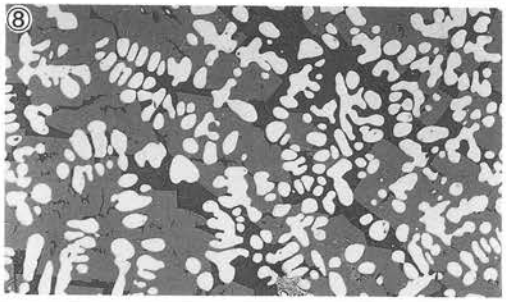
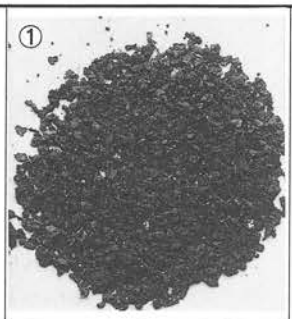
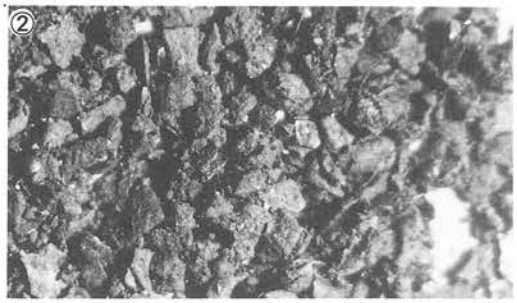
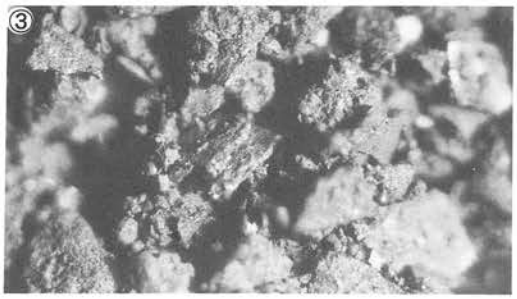


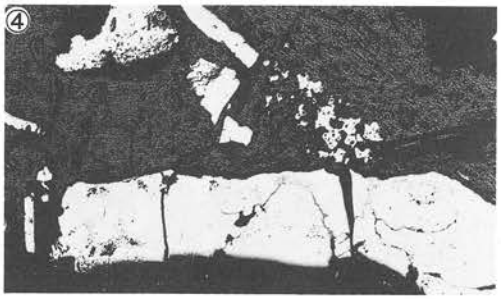
Photo. 4　鍛造剥片と鉄滓の顕微鏡組織

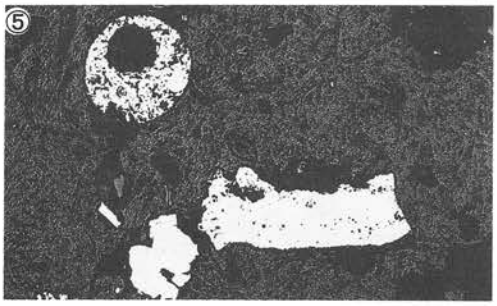
(8) UEM－5
上村遺跡
(第Ⅱ地区 Dトレンチ出土)
鍛造剥片と湯玉
①×1.4 ②×8
③×20
④～⑥×100

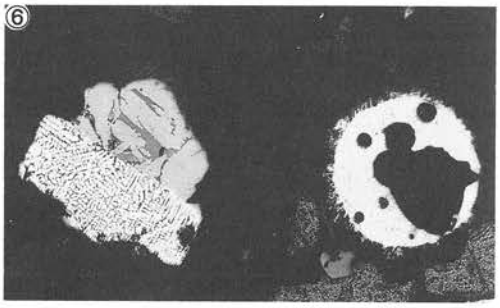












UEM－2B

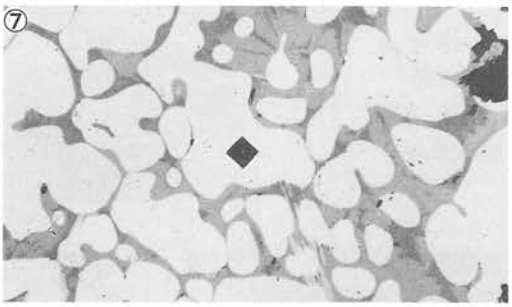
硬度圧痕

Wüstite
(FeO)

ビッカース断面
硬度

487 Hv
490 Hv、

荷重 200 g ×200



UEM－2C

硬度圧痕

Wüstite
(FeO)

ビッカース断面
硬度

487 Hv
460 Hv

荷重 200 g ×200

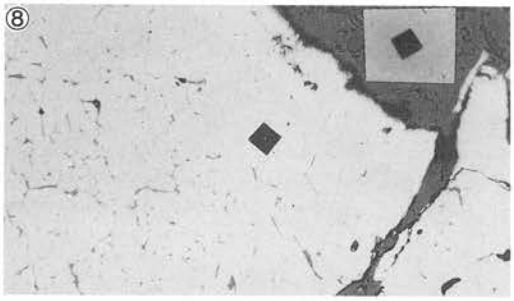


Photo. 5 鍛造剥片・湯玉の顕微鏡組織と硬度圧痕

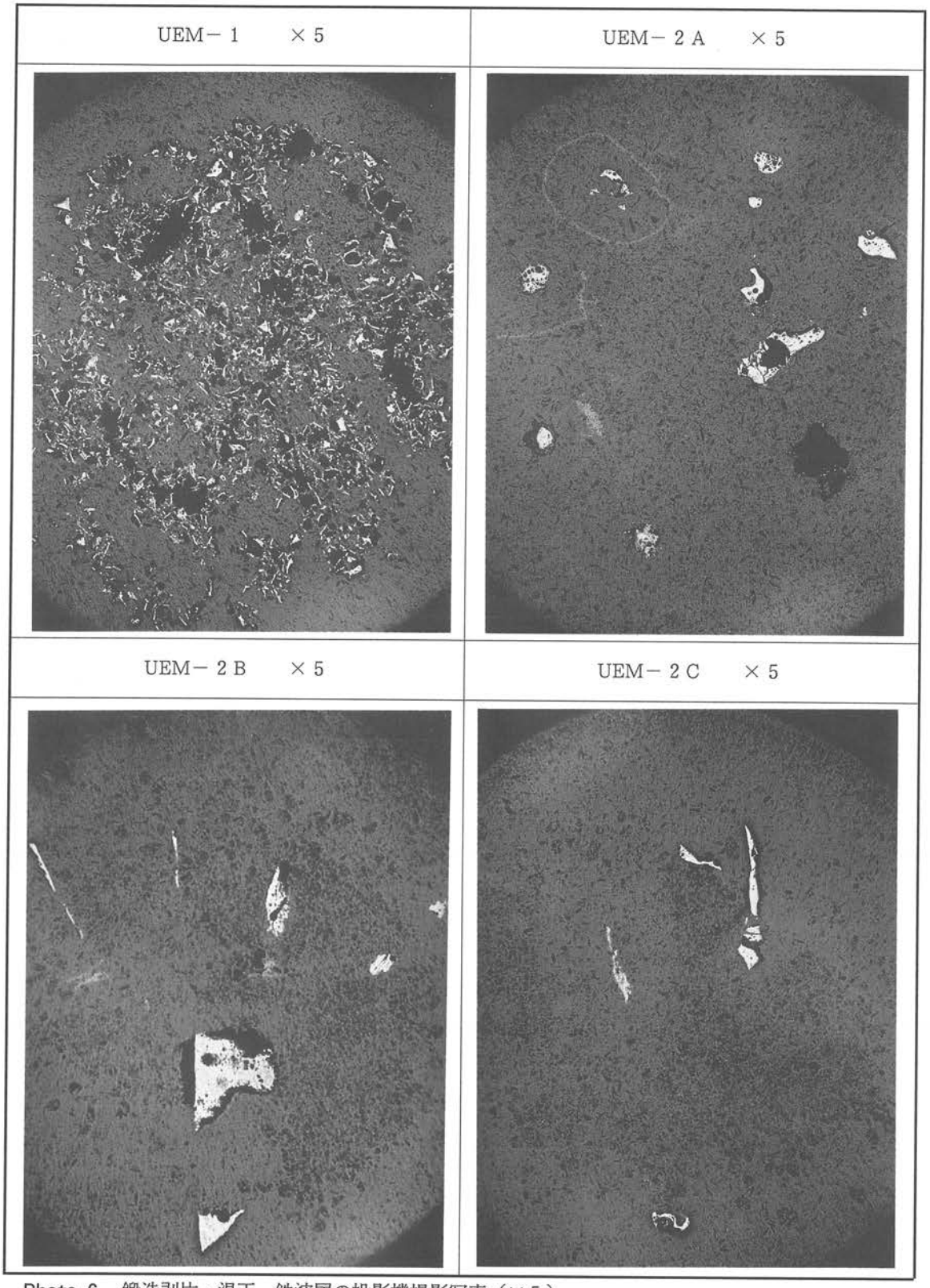


Photo. 6　鍛造剥片・湯玉、鉄滓屑の投影機撮影写真（×5）

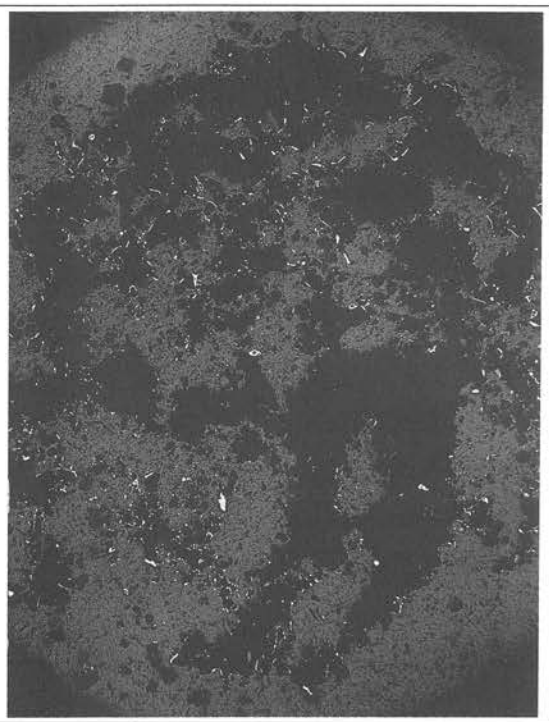
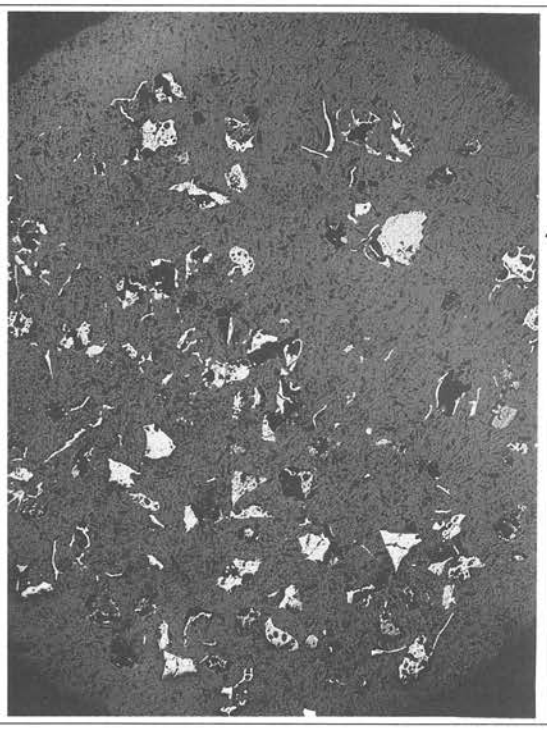
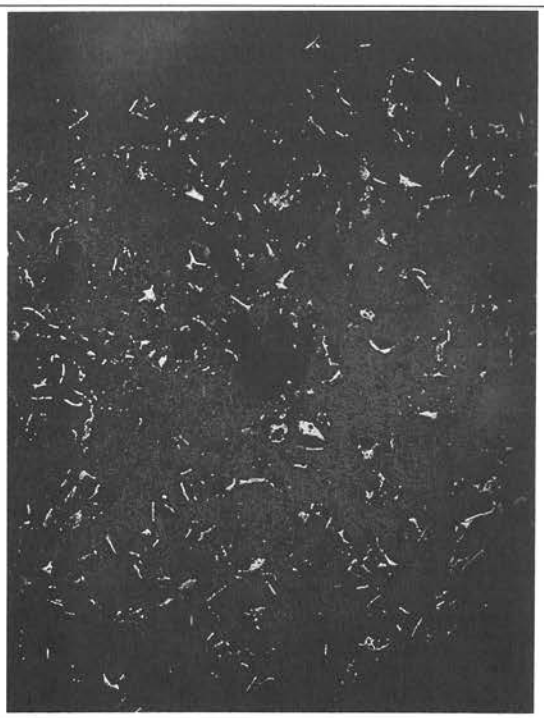
UEM－3　　×5	UEM－4　　×5
	
UEM－5　　×5	
	

Photo. 7　鍛造剥離片・湯玉、鉄滓屑の投影機撮影写真（×5）

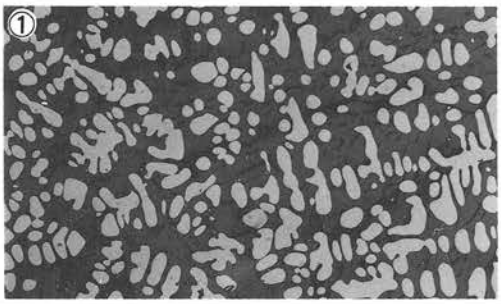
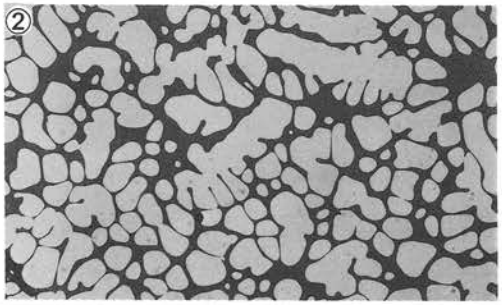
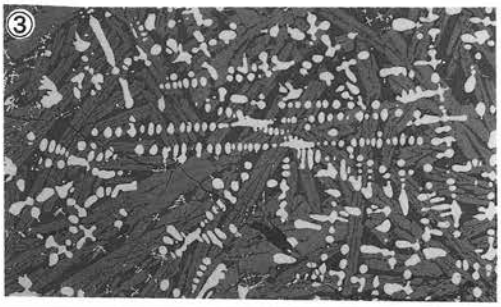
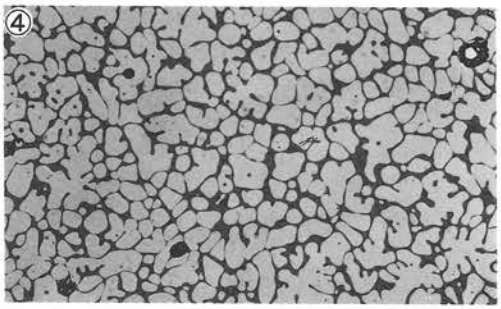
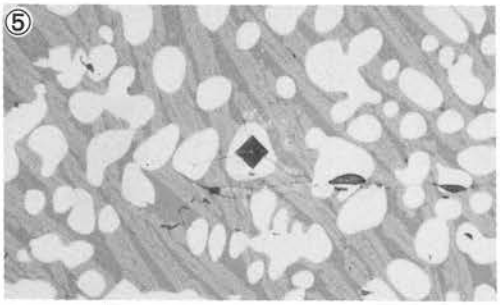
(1)　2I−881 上村遺跡 (Bトレンチ　B−1 第1層出土) 精錬鍛冶滓 ×100 外観写真1／2.7		
(2)　2I−882 上村遺跡 (Bトレンチ　B−1 第1層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1／2.7		
(3)　2I−883 上村遺跡 (Bトレンチ　B−1 第1層出土) 精錬鍛冶滓 ×100 外観写真1／2.7		
(4)　2I−884 上村遺跡 (Bトレンチ　B−1 第1層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1／2.7		
同　上 ビッカース断面 硬度圧痕 Hv＝447 荷重200g ×200		

Photo. 8　鉄滓の顕微鏡組織

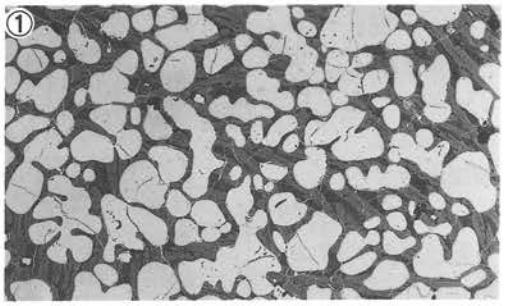
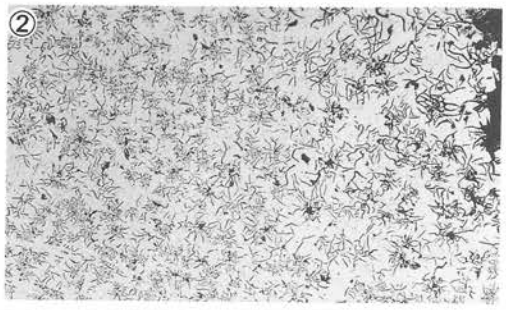
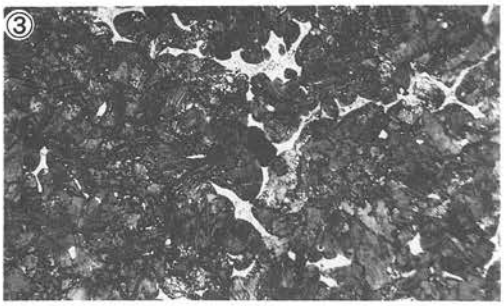
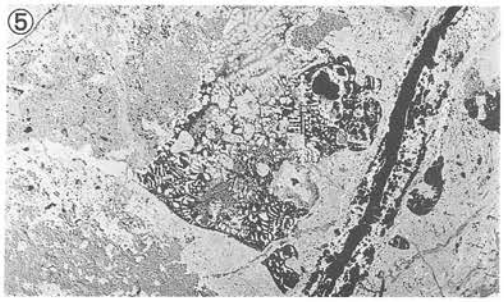
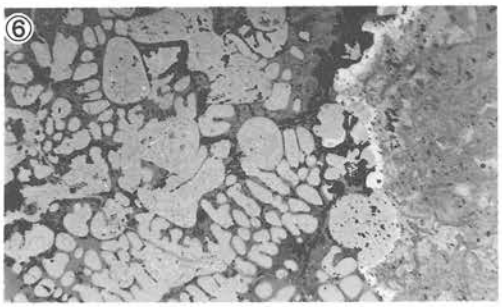
(1)　2Ⅰ−887 上村遺跡 （Bトレンチ表面採取） 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真１／2.7		① 
(6)　2Ⅰ−885 上村遺跡 （B−01第１層出土） 鉄鍋（ねずみ鋳鉄） 研磨まま ×100 ビクラルetch ×400 ／ 研磨まま ×100 外観写真１／2.7		② 
③ 		④
(7)　2Ⅰ−886 上村遺跡 （第Ⅱ地区　D−３ 第１層出土） 鉄　釘 ×100 外観写真１／2.7		⑤ 
同　　上 × 400		⑥ 

Photo. 9　鉄滓、鉄鍋（ねずみ鋳鉄）、鉄釘の顕微鏡組織

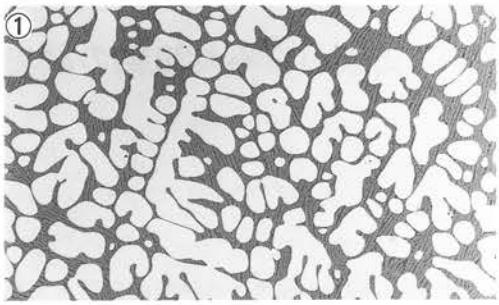
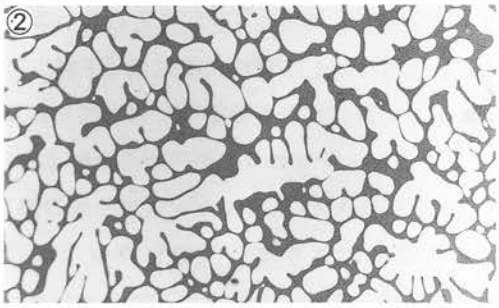
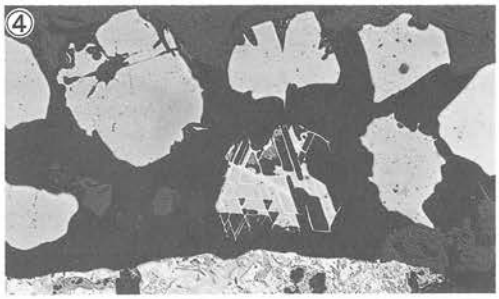
X－890 上村遺跡 （第Ⅱ地区　Dトレンチ出土） 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真 1／2.9	 表　　側	① 
同　　上 ×100	 裏　　側	② 
Y－872 藪地島海岸 砂鉄粒子 ×100		③
同　　上		④ 

Photo.10　鉄滓と砂鉄の顕微鏡組織

文献からみた祖納の歴史 －上村遺跡を中心として－

石 垣 金 星

(1) はじめに

これは、上村の時代についての伝承と文献資料等に関する報告である。西表島の歴史ドラマのメイン舞台となった「上村（ウイムラ）」とは西表島の古村の一つ祖納集落の西側の小高い半島全体を称する。上村に対して現在の集落は「下村」とも称される。明治30年代に実施された土地整理事業によって作成された地籍図では上村を西祖納、下村を東祖納としている。上村は「アダティ」・「ウフダティ」・「ウカリ」の三つの小村よりなり、アダティウガン（クシムリ御嶽）、大竹（オオダケ）ウガン（大竹根所）、ヌスクウガン（慶田城（キシダケ）御嶽）がある。下村は「スンバレ」・「マヤマ」・「ウティンチ」の小村よりなり前泊ウガン（現在ナリヤウガンが同居する）、ニシドウガン、西泊大御嶽（ニシドマリクブウガン）、離御嶽（パナリウガン）がある。下村のニシドンの浜に面してユヌンフチ（与那国口）が開けている場所に西表村番所と慶田城村番所が置かれ、かつての西部地域の政治行政の主舞台であった。番所跡には現在祖納公民館が建っている。

大正年代になり通称「ピサダ」と称される下村の水田地帯はマラリヤ蚊の発生源との事から埋め立てられた事によって、これまでに水に不自由をしていた上村の人々は次第に埋め立て地へと移動しはじめ昭和10年頃には上村は完全に空屋敷となり、現在の祖納の集落が形成された。その後空屋敷となった上村の一部は畑地として耕され続け現在に至っているが、去る大平洋戦争勃発と同時に昭和16年日本軍（陸軍省）によって上村全域に及んで強制的に土地接収され要塞が築かれた。西表の歴史の発祥の地である上村はその主役として活躍した大竹祖納堂儀佐の居城であった家敷をはじめとして実に二万坪に及ぶ（上村全面積の半分以上）土地は返還されず今だに「軍用地」のままにある。

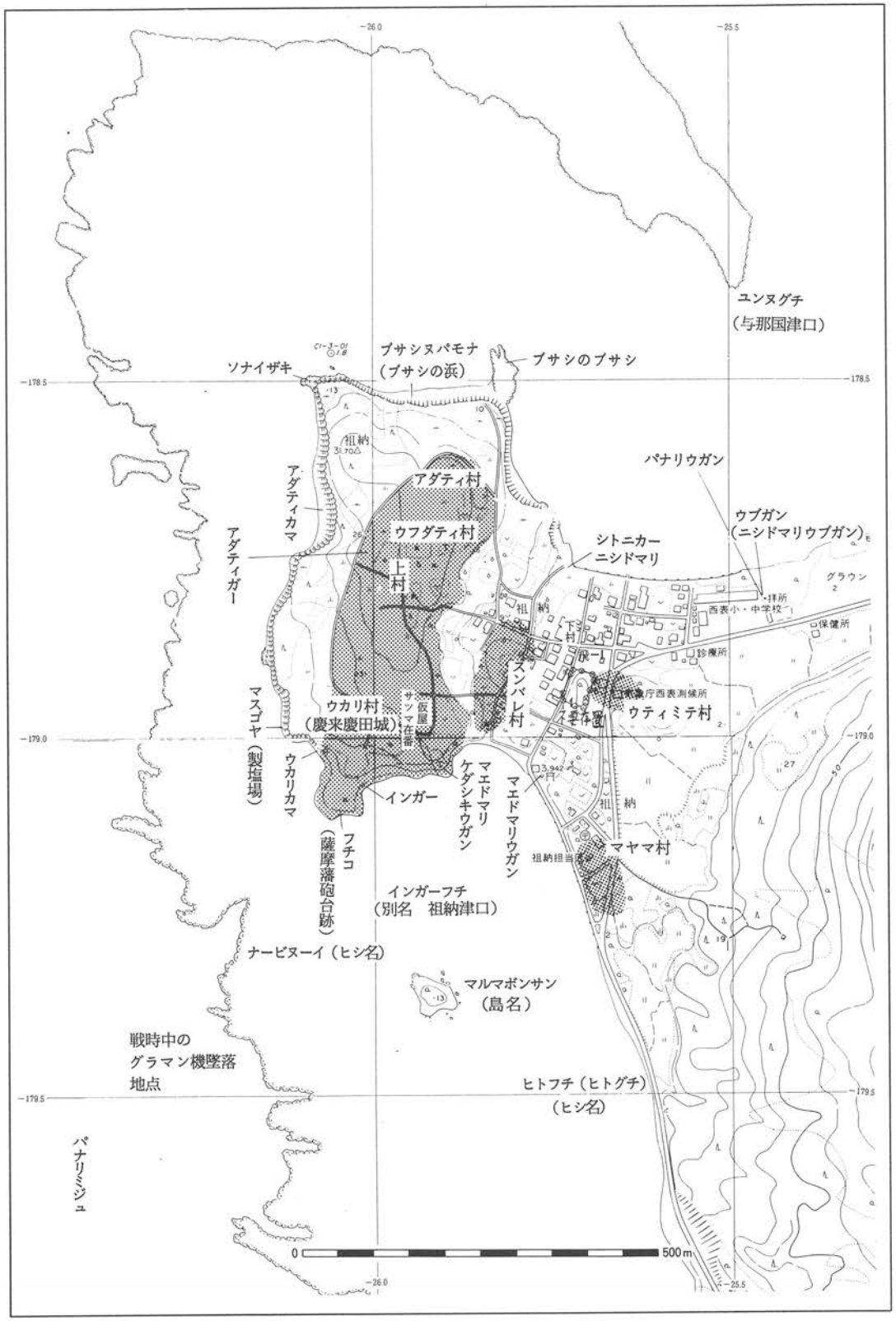
(2) 大竹祖納堂儀佐（オオタケソノドウギサ）についての伝承

大竹は家敷のある場所の地名で、祖納堂は集落の名称で儀佐が名前である。1700年代初期に書かれた八重嶋由来記（南島第一輯）では次の様に紹介されているのが唯一の記録である。当時すでに伝説上の人物であるが、大竹祖納堂なる人物像を知ることが出来る。

をはたげ　根所神名なし

との神名をたいかねませと神　　慶田城村

右由来は上代當島西表村 祖納堂と云ふ人あり其高六尺餘高にして勇力人に勝たる人にてをはけたと云所に家を作りける或時晴天森に登四方の景気を見渡すに西の方に島蔭幽に相見得けれは兵船用意にて勇力の者敷十人相語ひ順風に帆を揚け與那國島に渡り相戦ひ討勝島酋長の者二三人生捕り降参させ後に悪鬼納かなし御手に入ける時其由奉奏たる由申傳也依之與那國船當島住還の時は西表島に潮掛りいたし彼をはたけ家の火神を拝み申事今迄有来る也


ユンヌグチ
（与那国津口）
ブサシヌパモナ
（ブサシの浜）
ブサシのブサシ
ソナイザキ
パナリウガン
ウブガン
（ニシドマリウブガン）
シトニカー
ニシドマリ
アダティ村
ウフダティ村
上村
アダティカマ
アダティガー
マスゴヤ（製塩場）
ウカリ村
（慶来慶田城）
仮屋
サンバレ村
ウティミテ村
ウカリカマ
インガー
マエドマリ
ケダシキウガン
マエドマリウガン
フチコ
（薩摩藩砲台跡）
マヤマ村
祖納担当
インガーフチ
（別名　祖納津口）
ナービヌーイ（ヒシ名）
マルマボンサン
（島名）
戦時中の
グラマン機墜落
地点
ヒトフチ（ヒトグチ）
（ヒシ名）
パナリミジュ
西表小・中学校
保健所
診療所
祖納
0
500m

大竹祖納堂野子孫にあたる大竹八重雄氏（那覇在）、宅にも記録もなく祖納堂という人物を物語る唯一の資料であるがこれらと関連する次の様な伝承が島で伝えられている。

「昔のことである。祖納のウフダキに祖納堂儀佐という人がいた。夜中になると毎晩のようにこっそりとどこかへ出かけては、翌朝の夜が明ける前にはそうっと帰って来て何知らぬふりをして寝るのであった。不思議に思ってブナリ（姉妹）は儀佐の目をぬすんで寝床をみると海水でぬれていた。これはきっと舟に乗ってどこかへ出かけているに違いない、との思いから、ある夜の事、自分のアマチ（髪の毛）を三本舟の艫にこっそりとくくっておいた。（草麻（ヅー）をくくったと伝承される古老もいる）。ある朝のこといつもの様に夜中に出かけた儀佐は、アマチによって舟足が遅くなり夜が明けて戻ったのでとうとうブナリに知られてしまった。それから儀佐はブナリへ、与那国へ毎夜のように行って来たことを話したという。祖納堂儀佐が使ったヤフ（擢）は六尺余りもあって昭和の初め頃まで大竹家に残されていたが火災にあい焼失してしまったと大竹八重雄氏は話しておられた。

又、祖納堂儀佐が与那国を討ち敗って帰ると殺された与那国の人々の亡霊はチコホウ（コノハズク）となって報復すべく祖納村めざして飛び発った。ところが祖納村と間違えて崎山のヌバン崎の南にある「ピサト村」を襲い全滅させてしまったという伝承がある。大竹祖納堂儀佐とは一人で舟をこいで一夜のうちに与那国へ行って戻ったと伝わる人並はずれた体力の持ち主であった。儀佐の墓はこれまで定かではない。大竹家の屋敷の西側にテーブルサンゴを円形状に積み上げた。「チンマサ」があり「ブナリの墓」と伝えられている。東側には宮古島にある「ミヤーカ」とよく似た型式の墓地があり一枚岩で囲った石棺がみえているが、おそらく祖納堂儀佐が葬られているものと想像される。そしてミヤーカとおぼしき一角には、「チンマサ」式に石が積み上げられ儀佐が遠見台として与那国を見た場所ともいわれ、半島で最も高い位置に当たる。ところがこれらの石積みは日本軍が上村に要塞を築いた時に崩され大砲を運ぶ道路の敷石として使われ現在の様になったものという。与那国の人々が八重山へ住還の時に祈ったとされる大竹の「火又神」はブナリの墓の前に置かれている。与那国船の出入するニシドンの津口には「ユヌンフチ」と今でも呼ばれる。与那国の30代のある女性から「石垣島の高校」へ行っていた時、船で与那国へ帰る時は西表島の前を通過する時は必ず「手を合わせた」と興味深い話をうかがったが、大竹の火又神のいい伝えが与那国でも最近まで残っていた例として興味深いことである。又祖納堂儀佐が港に出入する外来の船のために掘らせたと伝わる「シトニカー」（井戸）がユヌンフチのあるニシドンの海辺にある。

(3) 大竹御嶽（オオタケウガン）と鍛冶遺跡

大竹御嶽は祖納堂儀佐を祖神とした御嶽であるが、鍛冶遺跡は6年前大浜永亘（八重山商工高教諭）によって偶然にも発見された。ところが御嶽の鍛冶についての伝承は一切消えてしまっている大竹御嶽の神司であった稲福峯さん（故人）へも伺ったが、「願い口、神口」にも鍛冶に関する伝承もなく峯さんご自身も鍛冶についてご存知なかった。又、子孫の大竹八重雄さん

も御嶽の鍛冶についてはご存知なく、御嶽の隣の屋敷が鍛冶の跡であったと先代より聞いていた。そして明治の初頃までは鍛冶が行われていたらしい。又鍛冶の技術担当は、上亀家であったらしい。フイゴも昭和の初め頃まで残っていたとの事であったが現在は不明である。大竹祖納堂は上村において農具を作り人々へ農を奨励したと伝わることから農の神とされ大竹御嶽は時代が移り変り人の世の権力構造が変わっても「神事」の世界におけるナンバーワンの地位は変わる事なく現代まで続いて来た。これらは集落の成り立ちを理解する上で興味深いことであろう。

(4) 竹富島の鍛冶神について

大竹御嶽の鍛冶伝承が全く消えているのに対し竹富島では非常に良く伝承されていて、上勢頭享氏（故人）より次の様な興味深い竹富島の鍛冶神についてうかがった事がある。

①波座真御嶽の祖神の根原金殿（ネーレカンドウヌ）は屋久島より渡って来た。②小さい頃から鉄の粉を麦のように食べて成長した。③青年の頃には鉄で作った擢を使って遠い海を渡ってきた。④得の高い人で農業をひろめた。⑤与那国を領地にしたいと考え与那国へ行くが失敗し返り討ちに合い死んだ。⑥一夜のうちに与那国からこぎ戻ったという様に伝わる人物で、祖納の鍛冶神であった大竹祖納堂と共通する点があり興味深い。伝承では根原金殿は屋久島より北の方向を示しているが大竹祖納堂は伝承でも不明である。六尺余の擢と鉄の擢を使い、一夜にして与那国へ行き戻ったとされる二人は人並はずれた文字どおりの鉄人の風格は共通する。共に与那国をめざしたが根原金殿は失敗し討死し、大竹祖納堂は成功し討勝った。鉄を産しない西表と竹富の二人の鍛冶神がめざした与那国とは、果してどんな魅力があったのであろうか。鍛冶神にとっての最大の魅力とは鉄の原料である事は想像できる事だが鉄を産しない与那国であるが、14世紀中頃にはすでに鍛冶屋の存在が認められており、与那国は鉄の原料を果たしてどこから入手したのか関心のあることである。大竹御嶽鍛冶遺跡の鉄滓を分析された大澤正己氏（新日鉄八幡）は一昨年祖納公民館において分析結果について実に興味深い報告をされた。報告によると①大竹御嶽遺跡で使われた鉄の原料である鉄鋼石は日本では産しないものである。②中国大陸の揚子江沿岸一体より産する鉄鋼石とよく似ている（これは新日鉄揚子江沿岸産の鉄鋼石のデーターしかなく、近くの台湾とかの資料のデーターはないとのこと）③つまり日本に産しない鉄鋼石を原料として鍛冶をしていた大竹鍛冶は中国大陸方面から原料が入って来た可能性がある。と指摘していることは誠に興味深いことである。大竹祖納堂の時代の祖納は南の島々と公益があったことを示している。西表・与那国・台湾・中国大陸・南アジアの島々は内眼で見えて島づたいに人々が移動可能なことからも充分うなずけることである。また、与那国で発掘されたドナンバル遺跡の鍛冶の羽口の特徴は大竹鍛冶遺跡の羽口とよく似た特徴をもっていることは両島の関係を示す注目される点である。

(5) 済州島民の見た祖納

1477年嵐にあい漂流した済州島民らは与那国で救助され、しばらく滞在した後西表島へ送ら

れ五ケ月も祖納に滞在し島の暮しぶりをつぶさに見た。『李朝実録』（成宗実録）1479年。

昨年（1990年）夏、漂流記に記された先祖たちの足跡を取材する目的で済州島より高光敬先生（済州大学校博物館・民賊学）一行が実に500年ぶりに来島された。その時高先生より「閏伊」（与那国）と「所乃」（祖納）について閏伊は「ユニ」・所乃は「ソネ」と顕すことをご教示をいただく事ができた。現在では与那国のように字を当てているが、今も島では「ドゥナン」であり、西表では「ユヌン」石垣方面では「ユノーン」などと称しており500年とほとんど変わっていないことがわかる。又「所乃」も今では祖納の字を当て「ソナイ」とも読んでいるが、今でも島では「スネ」が当り前使われている名前である。「ソネ」と「スネ」の「ソとス」は西表の方言では無声音となるので実際にはほとんど同じに聞こえる。これからも500年前も今も祖納（スネ）の名称は変わっていないことがほわかるが語源については不明である。

又、彼らは鍛冶屋の存在をみており、農具を作りカマを使って稲刈りをしているのも見ている。又、稲は初め刈りとり放置しておくと再び初め以上に盛んに実る品種であることからすると、いわゆる在来品種で1970年まで網取にて栽培され続けられた「アハガラシ」に良く似ている。「アハガラシ」とはノギが長くモミが黒く中の玄米は赤い特徴のあることから「赤いカラス」の名前が付けられているが、このアハガラシと同じ種の稲が台湾の山地族の間で現在でも栽培されていることを国分直一先生（梅光女学院大学教授）は指摘されていると、西表の稲作のすぐれた研究を報告している安渓遊地先生（山口大学助教授）により西表の稲作が南アジアの島々へと広がっており、台湾経由で西表へ入って来たことを明らかにしている。

稲に関する習俗に「七八月の収穫前には人々は皆謹慎して大きな声を立てない……。収穫時には「小さな管」吹く…」ことを見ているが、今でも伝わる「シクアーンモーヒ」の「ヤマチ」とほとんど同じで「小さな管」とは「ヤマチ」（謹慎）を解く合図として稲刈り後に吹かれる竹のクダで「ジッチャーン」と称される。ジッチャーンを作るには「ダドー」（ダンチク）が使われるのは霊力などの不思議な力があると考えられていたと思われる。このダドーの生える場所は稲と同じ湿原地帯であり西表では水田地帯以外では生えていない事からすると、稲と同時に入って来た可能性も考えられる。

山には猪（イノシシ）がいて槍を使い猟をするのを見ているが、この伝統の猟は今でも伝えられている。イノシシには「カマイ」と西表では称され、槍は「フク」と称している。イノシシを獲れると隣近所の村人が集まりイノシシ料理を食べるのが今に伝わる習慣であるが「猟人が自分一人で食べる」としたのは何か特別の事情があったようにも考えられる。

漂流記には大竹祖納堂とおぼしき人物の記述はないがそれからわずか20数年後にはもう一人の英雄、慶来慶田城が同じ上村に登場することからすると大竹祖納堂儀佐は当時すでに過去の人物であったであろうと思われる。

祖納での特徴の一つは「婦人が鼻に穴をあけ小黒木を貫いている」のを見ていることであるがそれらに関する伝承はない。

「麻や木綿もなく、蚕も養ない、唯芋を織って布と為す。」……藍青で染めてある、西表では全島各地に自生する野生のヤモ（ノカラムシ）から採った糸も「ブー」と称して布にした事を田盛インツさん（91才）よりうかがった事がある。「藍青で染めて」と藍染めのことをさしているが、八重山ではインド藍（ナンバンコマツナギ）が栽培され続け藍染の伝統は小浜島、竹富島で祭と共に伝えられいる。インド藍は島では「シマ藍」、「トー藍」とも称されており、以前に波照間島の「ブリブチ（下田原城跡）」の庭でインド藍が自生しているのを見た事があるが、かつてこのブリブチに居を構えていた人々が栽培しているものと思われる歴史の証言者に外ならない。波照間の方々へうかがった折「染め草」がブリブチにある「トウアイ」ともお教えていただいた事があるが藍染の技法は伝承されていない。インド藍は今でもインドネシアなど南アジアの島々ではごく普通に栽培され藍染めに使われている。沖縄では八重山諸島にだけ栽培されてきたのも特徴の一つである。インド藍の性質は栽培が非常に容易であることが最大の特徴である。ある程度の野生化でも自生するたくましさがある。一見するとギンネムと良く似た木である。七、八月の真夏の太陽で青々と成長し冬は成長しない性質があり水のないヌング島でも簡単に栽培可能な多年性のカン木で種子は自然落下し発芽成育し成長は早く、半年では藍染用に使用できるというすぐれた性質を持ちかつ年三〜四回も収穫できるのである。人が生活する上での基本である「衣食住」のうち「食と衣」は人の移動と共に常に一緒であり、済州島民の見た「藍青」はインド藍の可能性が高いことは与那国に残される古いミンサーの藍色からもわかる。

(6) 慶来慶田城の時代

済州島民の来島からわずか20数年後に起きたオヤケアカハチ事件（1500年）を機に慶来慶田城用諸は一躍歴史の舞台へデビューし大活躍をして首里王府より「西表首里大屋子」に任ぜられ西部地域全域を勢力下に置いて近世集落の基礎を築いた西表を代表する英雄でもある。18世紀末に書かれた慶来慶田城由来記によると、初代用緒は外離（フガヤナリ）（祖納の真向いの島）の野底頂（ヌスクティチ）に現われ石垣島の平久保加那安払を討ちその後に祖納上村のフチコへ移り居城を構える。伝承によるとフチコ時代の用緒は岬に旗を立て揚げて南蛮貿易をした人物であるとされる。フチコには用緒が旗を立てたと云われる穴が今も残り、カマドと井戸の跡といわれる遺跡が城跡に残っている。その後さらに「東石屋」に居を移し一族を核に上村を拠点とした慶来慶田城の時代を築くのであるが、1640年西表祖納に南蛮船が漂着し「幼女を一人連れ去る」という大事件が発生、その後1648年頃まで「サツマ在番」が上村に置かれた石火矢（大砲）を設置し南蛮船の撃退に備えている。ヨーロッパ列強が琉球を足がかりとして日本をめざした時代に西表島祖納は南の海防の最前線基地でもあった。1600年代中頃に、西表村の中で慶来慶田城の一門を中心として同じ祖納に「慶田城村」が誕生し同じ祖納の同じ敷地に西表・慶田城の二つの番所が隣り合って存在する事になる。そして御嶽も西泊大御嶽と離御嶽は西表村に入り他は慶田城村に入るという奇妙な神事形態が続く。ヤマニンズ（氏子）は祖納の人々は全て前泊御嶽、西泊大御

嶽、離御嶽の三つの御嶽のいずれかに属している。慶田城村の前泊御嶽のヤマニンズは全て綿芳氏慶来慶田城の一門で構成され、西表村に属する。西泊大御嶽と隣り合ってある離御嶽はそれ以外という構成となっている。その後200年足らずで1700年後半に慶田城村は改易される運命となり元の西表村慶田城村へと組み込まれ新たに上原村が創建された事によって事実上、慶来慶田城の時代は終わりを告げる事になる。清明祭の候には錦芳氏の一門はヌンバレ頂の側にある初代用緒の墓前に集まり初代の徳を偲ぶ「シーミー祭」をしている。その後の西部地域では崎山村、西表村、上原村の三つの行政区で明治を迎えることになる。激しく変わり行く時代の中でマラリヤはさらに西表の人々の多くの生命を奪い村落の発展を拒み長く続いた上原村は明治20年代に廃村となり明治40年代には鹿川は廃村、崎山は昭和20年代網取は1971年（昭和46年）復帰を目前にしての廃村であった。そして残ったのはわずかに舟浮、祖納、星立のかつての「西表村」である。「西表」の名称はさらに引きしまり、「祖納と星立」が行政上「西表」として現在歴史に名前をとどめている。

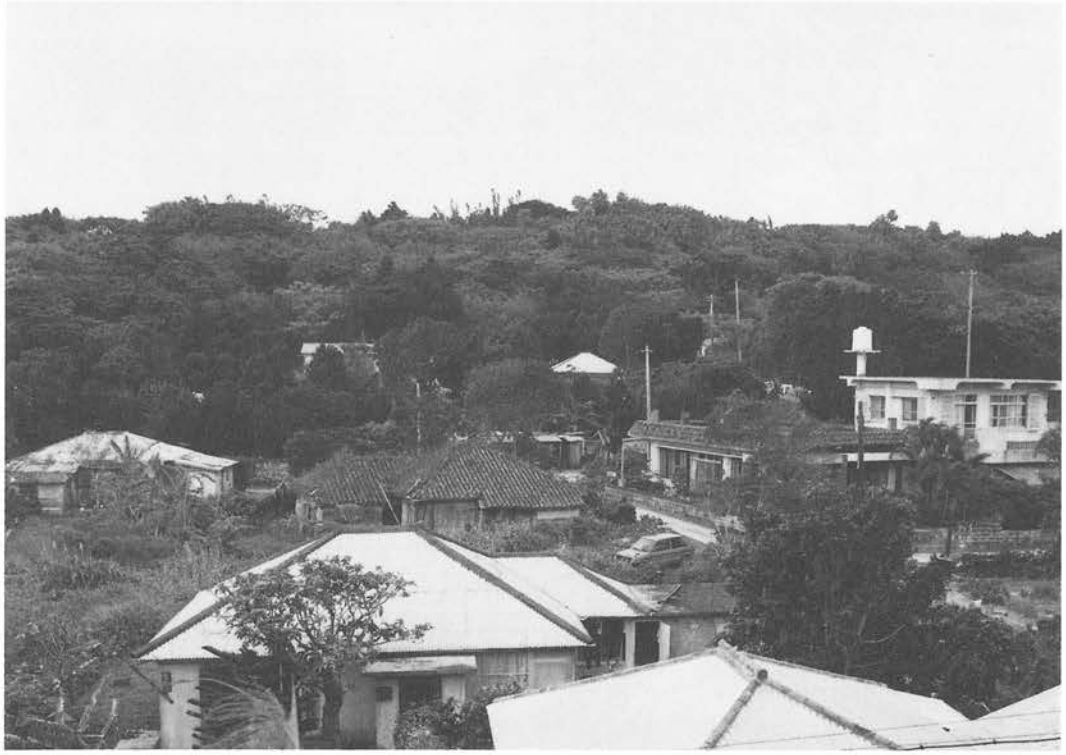
石垣金星（西表をほりおこす会長）

参考・引用文献

1．嘉手納宗徳『第一巻　李朝実録　琉球史料(3)』松涛書店　1982年。

2．比嘉盛章「八重山嶋由来記」・「慶来慶田城由来記」『南島』　第１輯（八重山特輯）
東京・八重山文化研究・再版　三栄社 1976年。

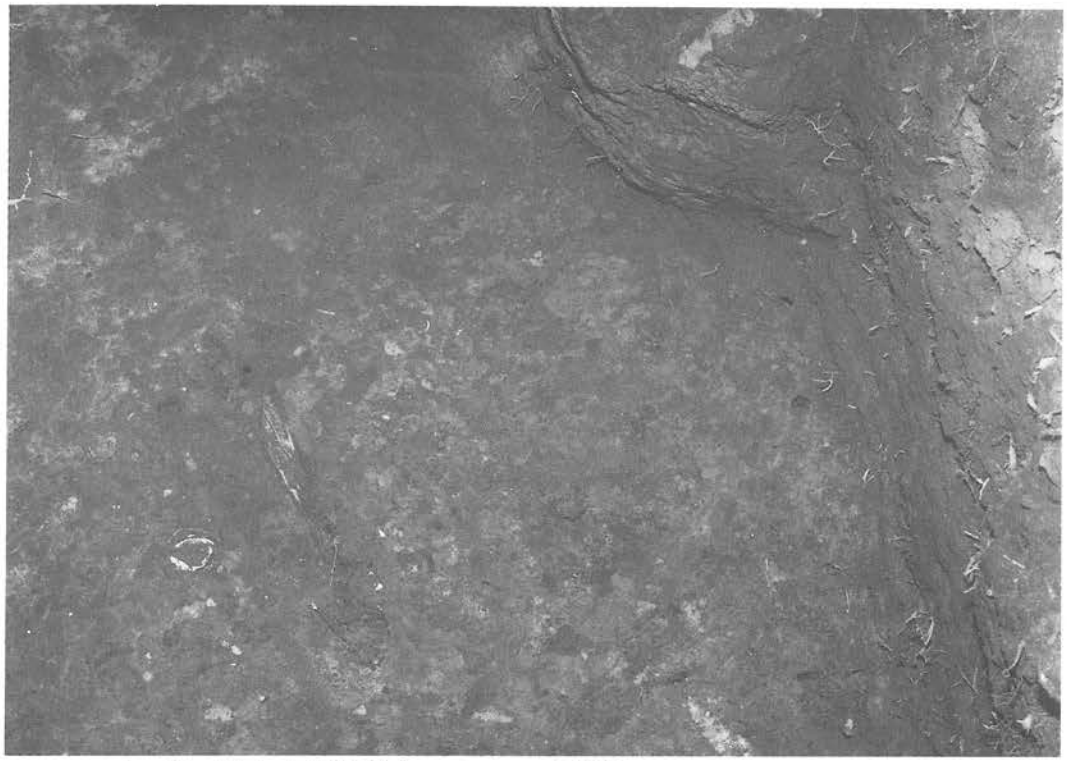
図　　版



PL. 1　上：遺跡遠景（祖納半島）
　　下：遺跡近景（丘陵中央のクバの木が大竹拝所）

PL. 2　上：第Ⅰ地区西側に隣接する大竹祖納堂儀佐の屋敷跡
　　下：第Ⅱ地区に所在する大竹の拝所

PL. 3　上：第Ⅰ地区　発掘風景（Bトレンチ）
　　下：第Ⅰ地区　層序（Eトレンチ 北壁と東壁）

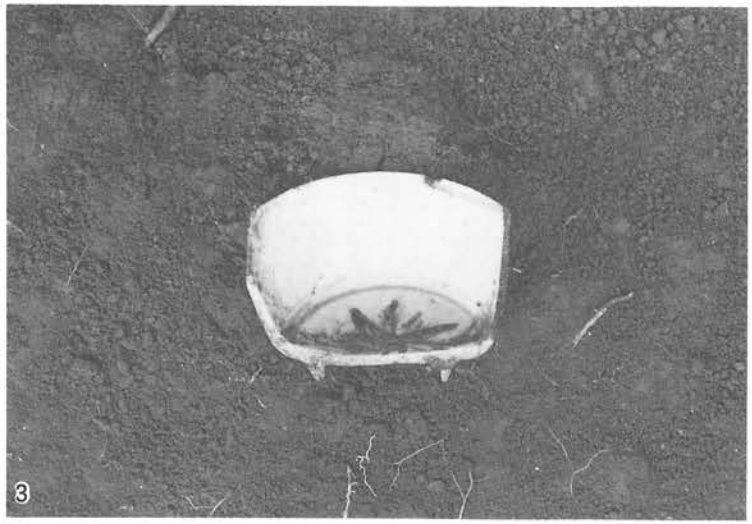


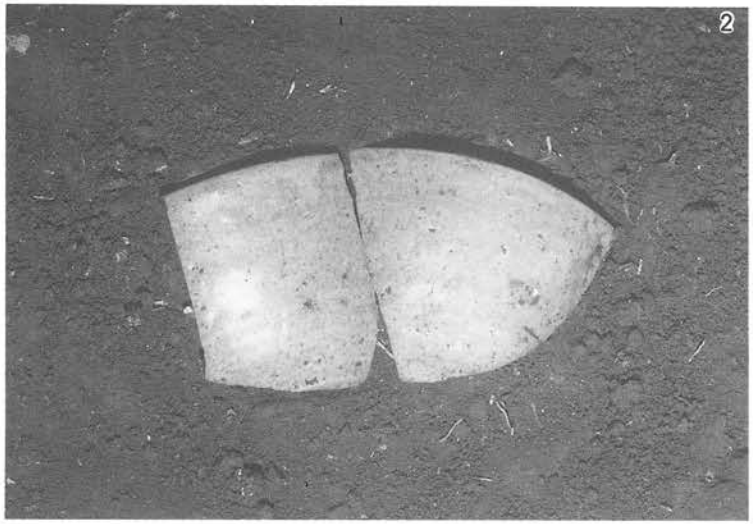
PL. 4　上：第Ⅰ地区　石敷遺構（B・Eトレンチ西側）
　　下：第Ⅰ地区　炉跡（Bトレンチ、中央の灰混りの部分）

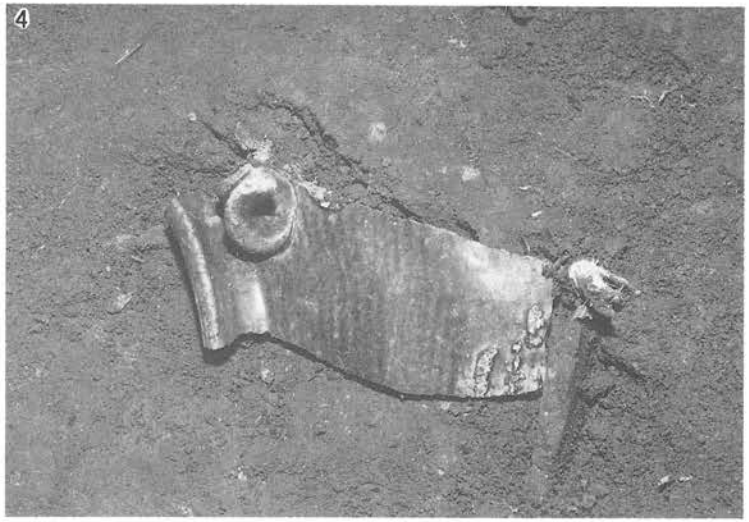
PL. 5　上：第Ⅱ地区　発掘風景
　　下：第Ⅱ地区　層序（Dトレンチ北壁）

PL. 6　上：第Ⅱ地区　大竹拝所内で検出された遺構
　　下：第Ⅱ地区　Dトレンチで検出された柱穴

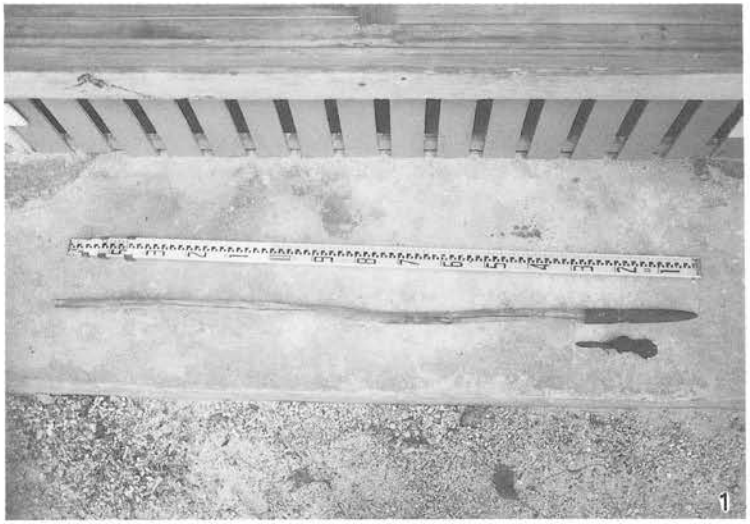
PL. 7　1 :大竹祖納堂儀佐のブナリの墓
2 :第Ⅰ地区内に所在する板石墓
3 :クシモリの御願
4 :屋敷跡の石積みと旧道

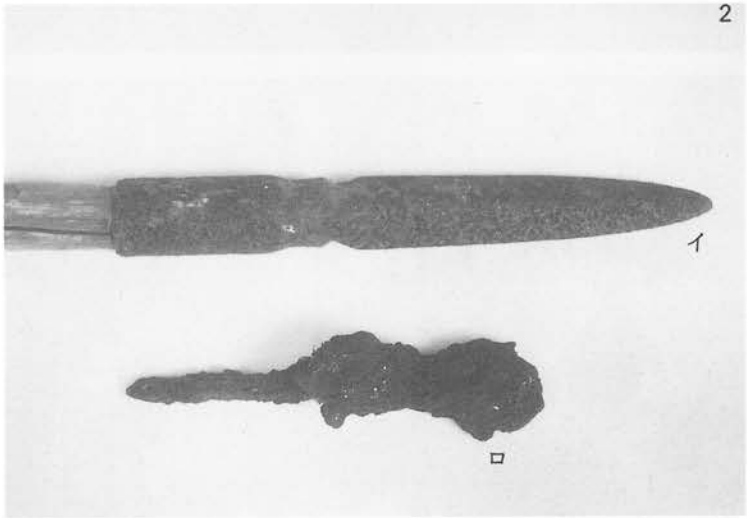






PL. 8　1：第４号屋敷跡入口近くで確認された遺物
2：青磁碗出土状況
3：染付碗出土状況
4：褐釉陶器出土状況

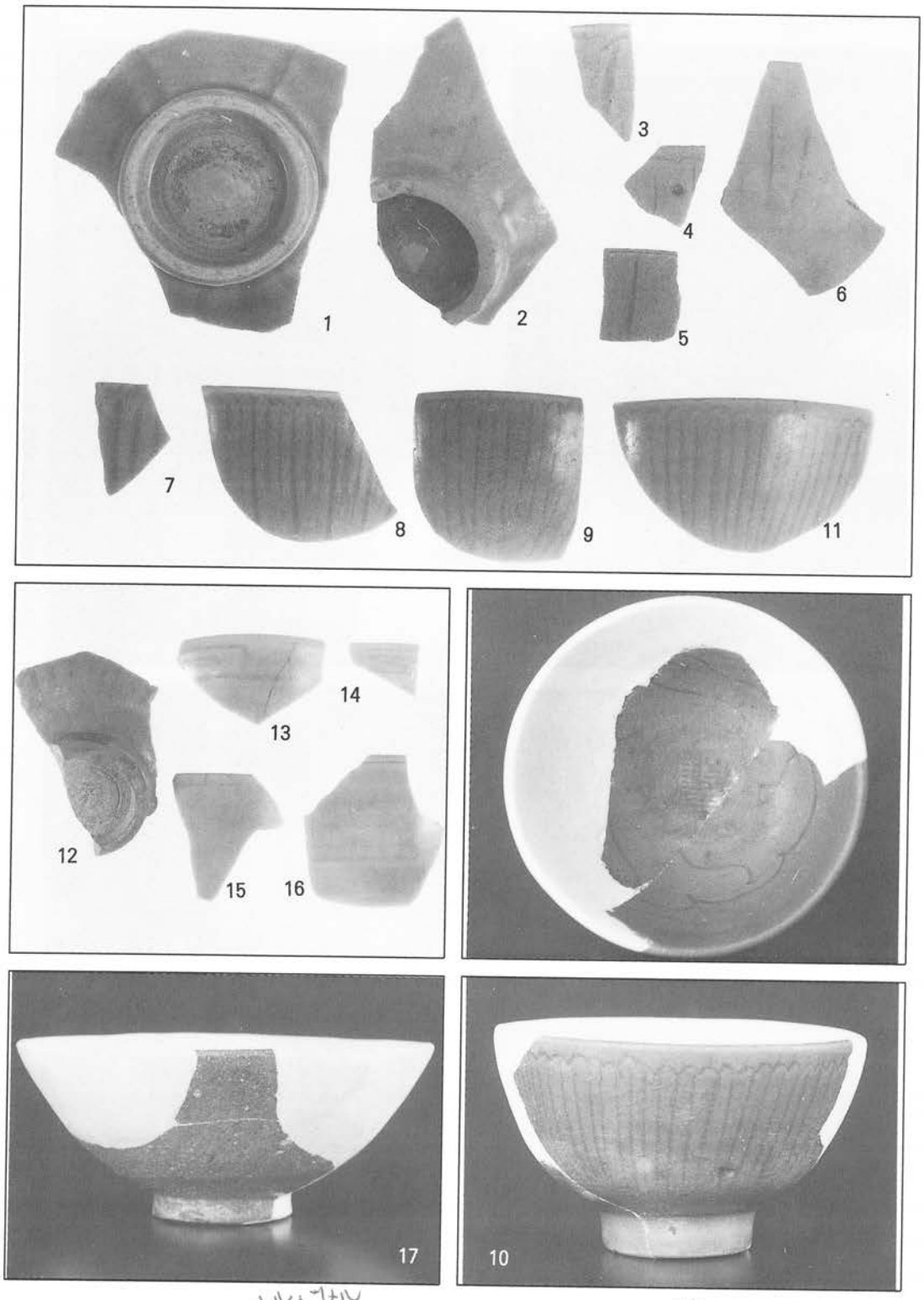




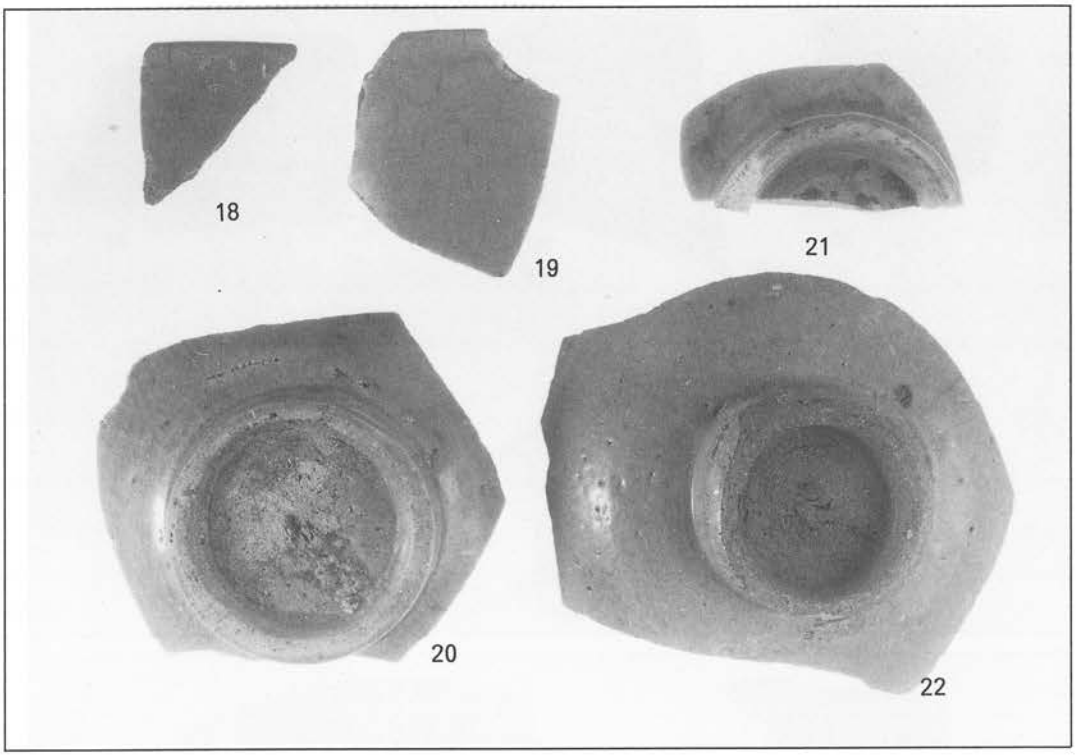
PL. 9　1:狩猟用のフク（鉄製鋸）
2:イ 狩猟用のフク（近代）、ロ 上村出土のフク
3:マエドマリ（前泊）の浜（左寄りの島は外離島）
4:ニシドン（西泊）の浜（対岸は星立集落）

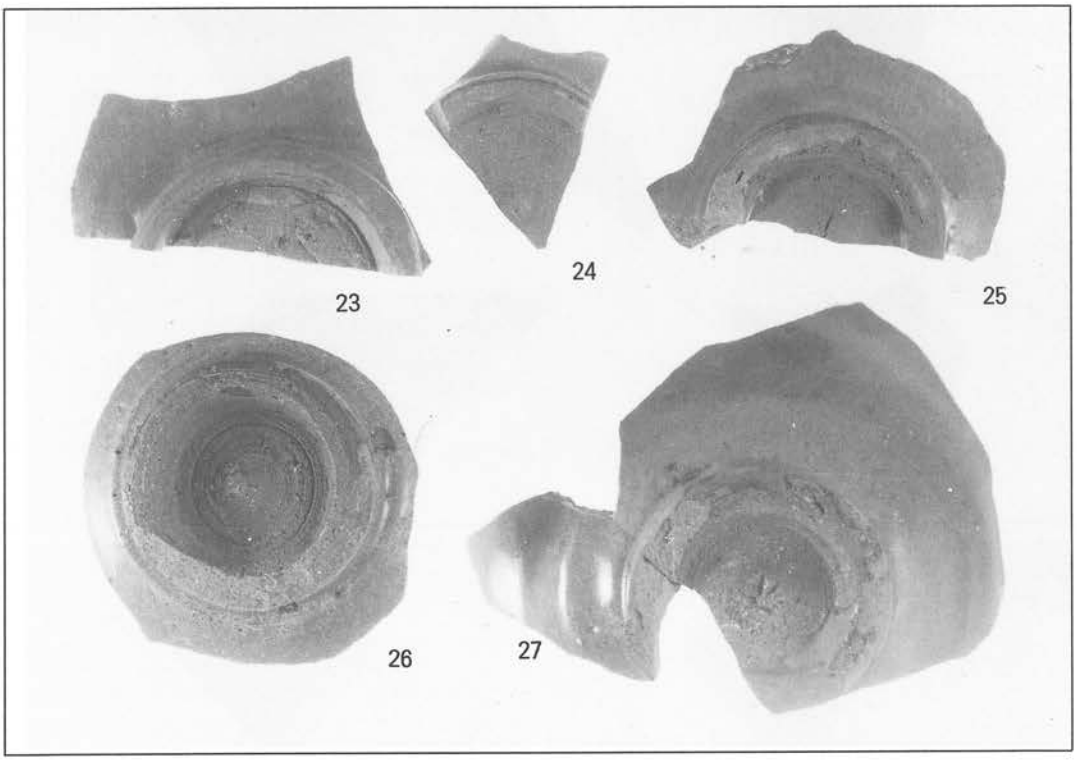
PL. 10　1 :地形測量風景
2 :西表小学校生徒への現場説明
3 :大澤正己氏による地元での講演会
4 :講演会の参加者

PL. 11　1：インガー（井戸）
2：シトニカー（井戸）
3：上村への登るピィサダ道
4：下村にある御願へのカンヌ

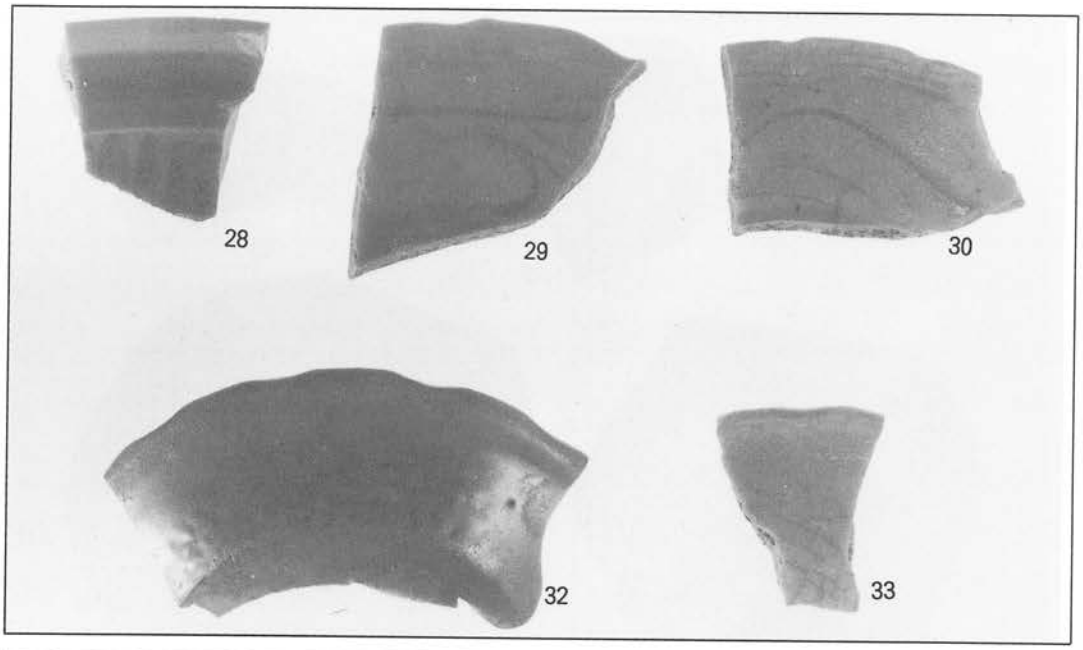


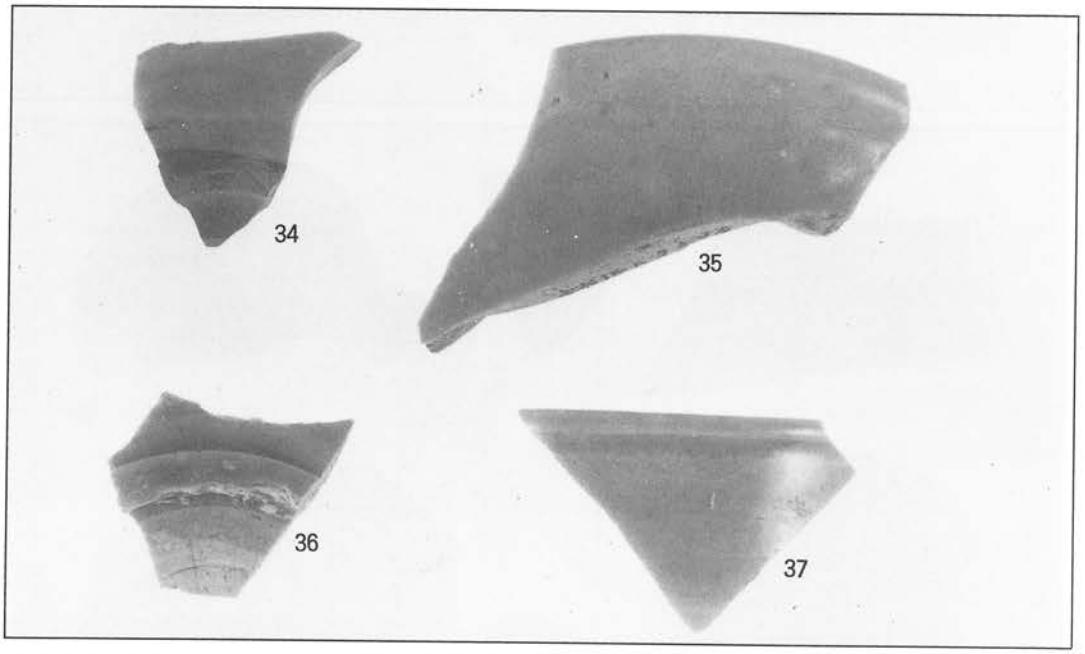
PL. 12　青磁　碗Ⅰ類ｂ類: 1・2　Ⅰ類ｃ: 3・4、Ⅱ類: 5・6、Ⅲ類ａ: 7
Ⅲ類ｂ: 8～12、Ⅳ類:13・14、Ⅴ類ａ:15・16、Ⅴ類ｂ:17





PL. 13　青磁　碗Ⅴ類ｃ:18、Ⅴ類ｄ:19、ｂ種:20•21、ｄ種:22～27





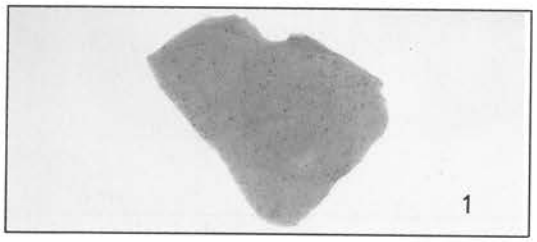
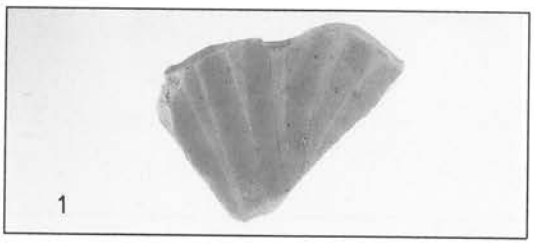
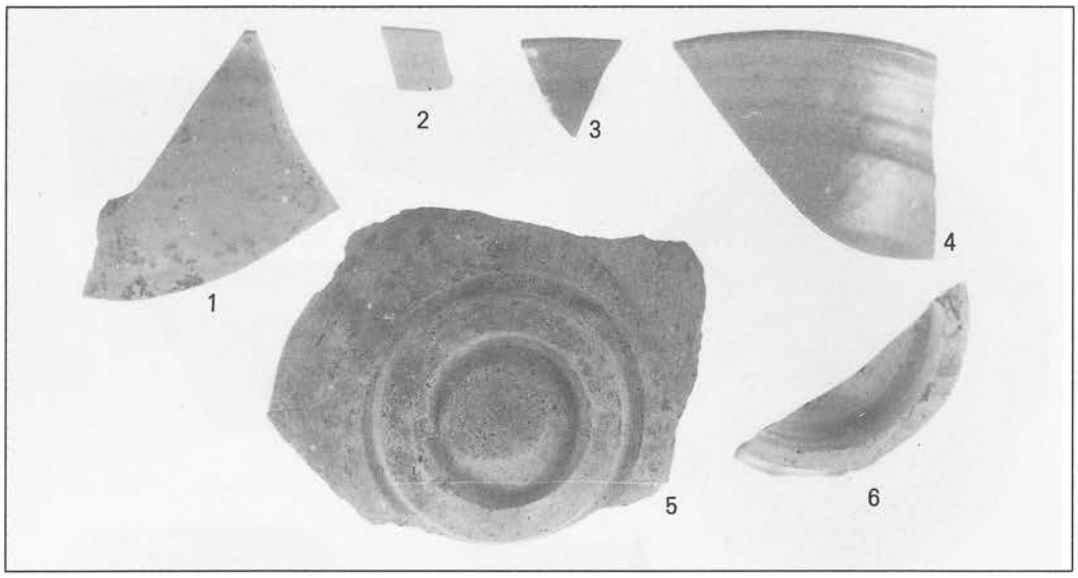


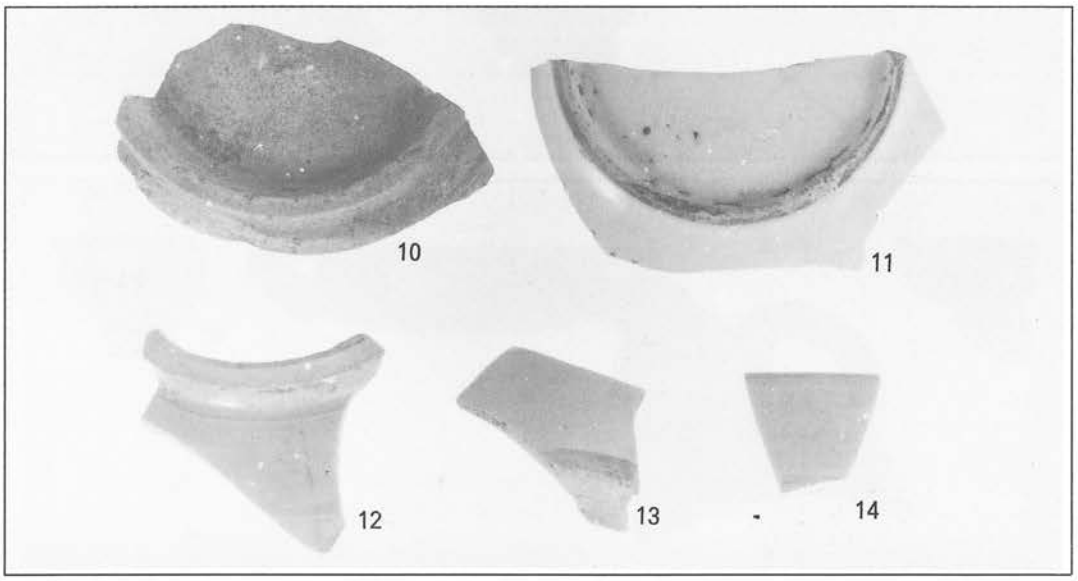
表　　面

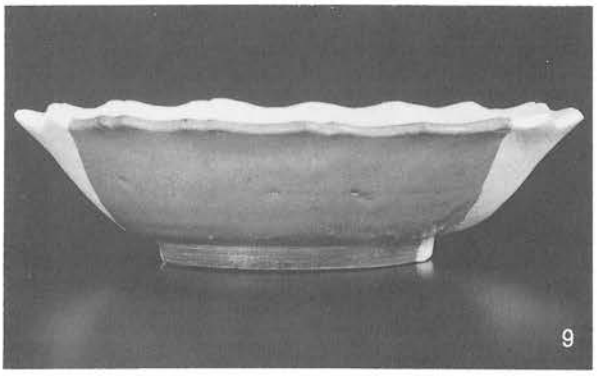


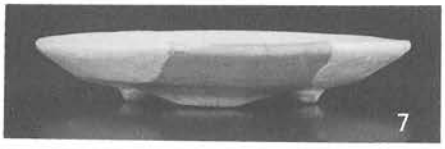
裏　　面

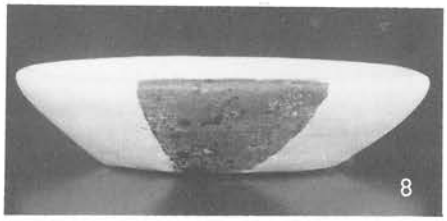
PL. 14　青磁　盤28、稜花皿29・30・32～34、無文外反皿35・36、香炉37、青白磁　1



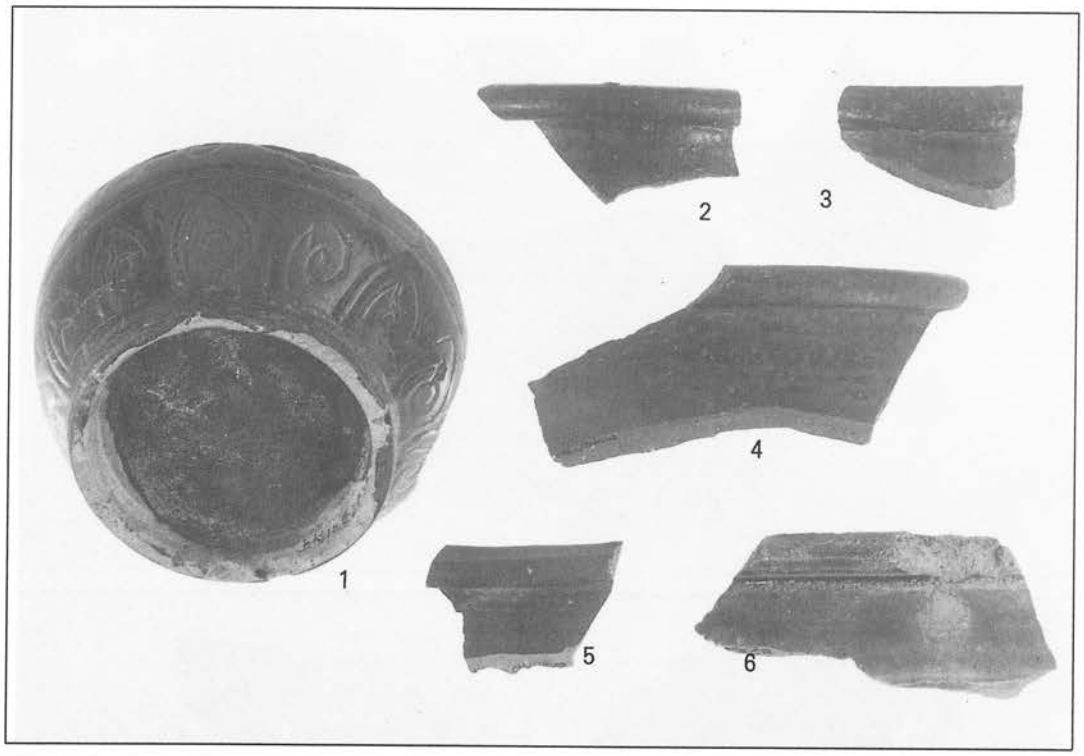


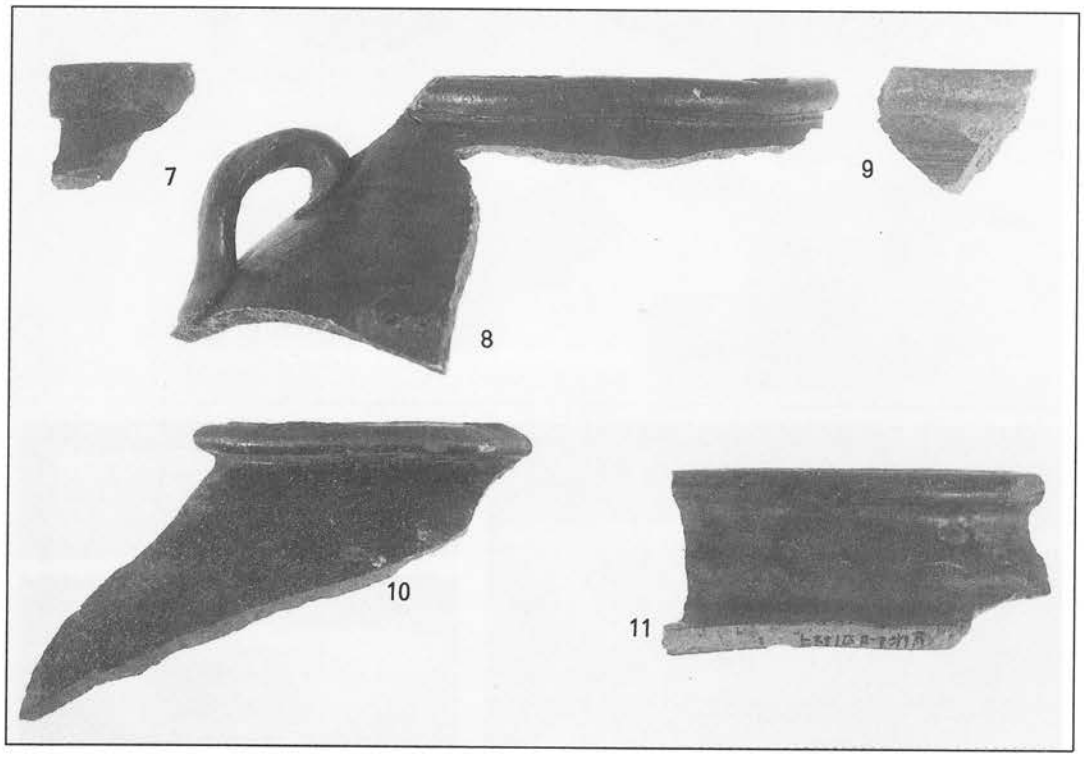




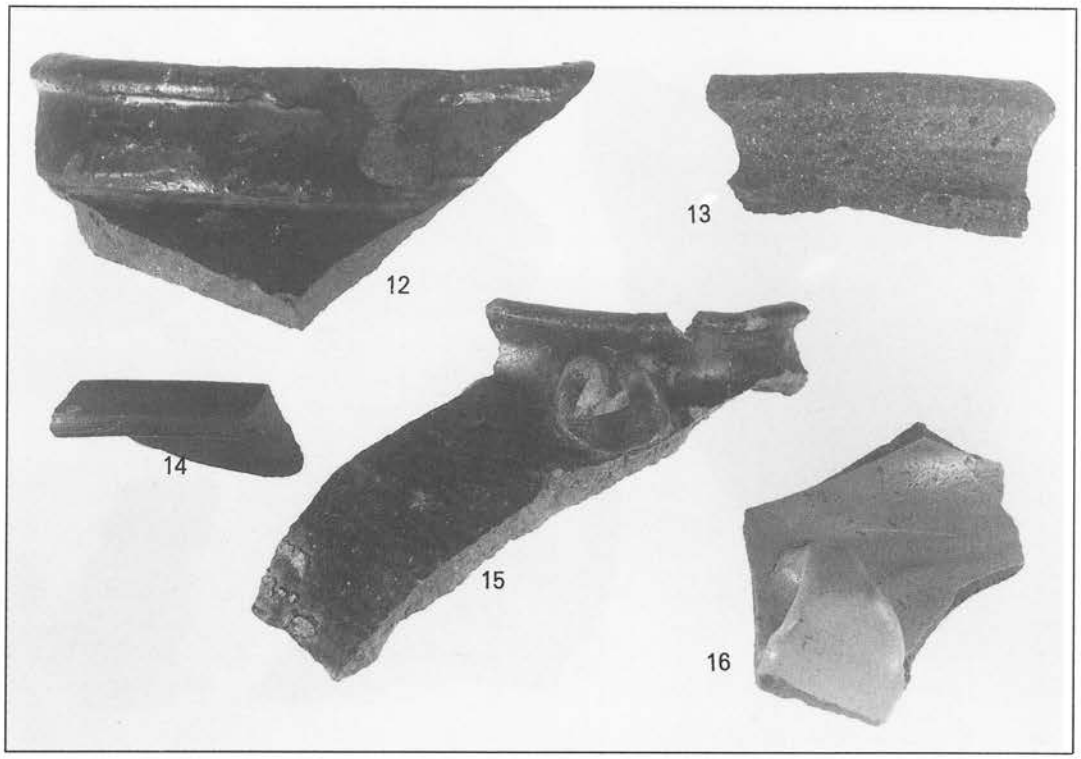


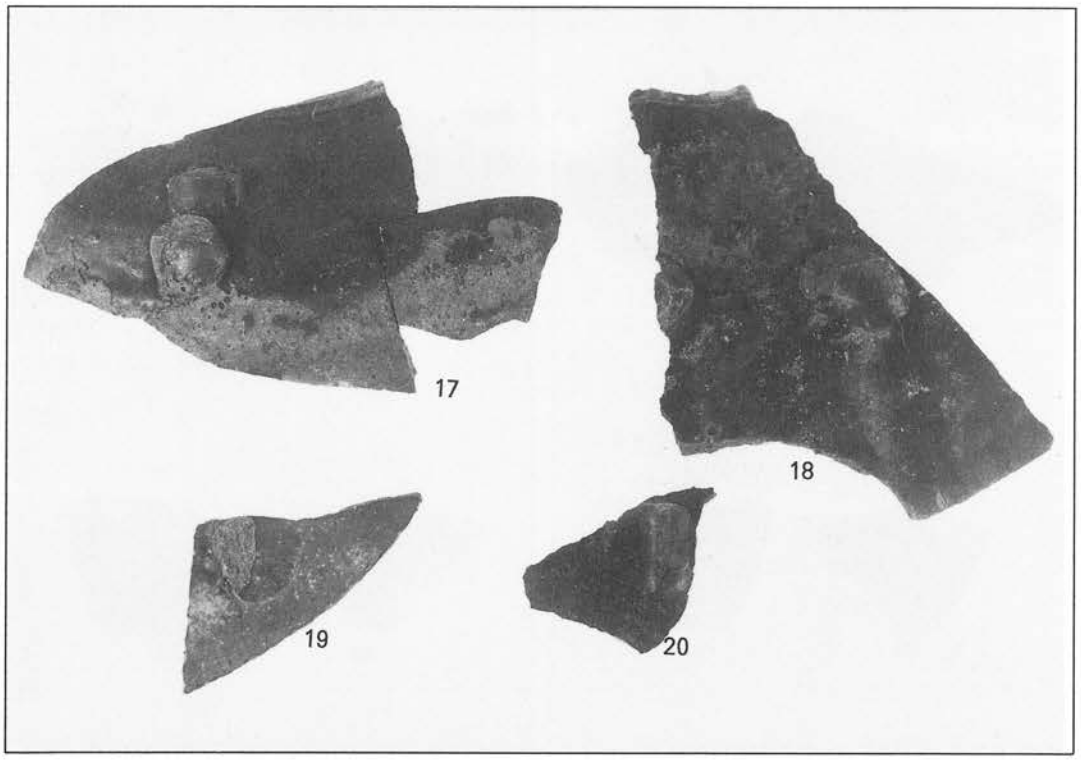
PL. 15　白磁　碗Ⅰ類: 1 、Ⅱ類ａ: 2・3 、Ⅱ類ｂ: 4 、ａ種: 5 、
ｂ種: 6 、抉入高台皿 : 7 、燈明皿: 8 、稜花皿: 9 、皿底部イ類:10
ロ類:11、壺12、器種不明13•14



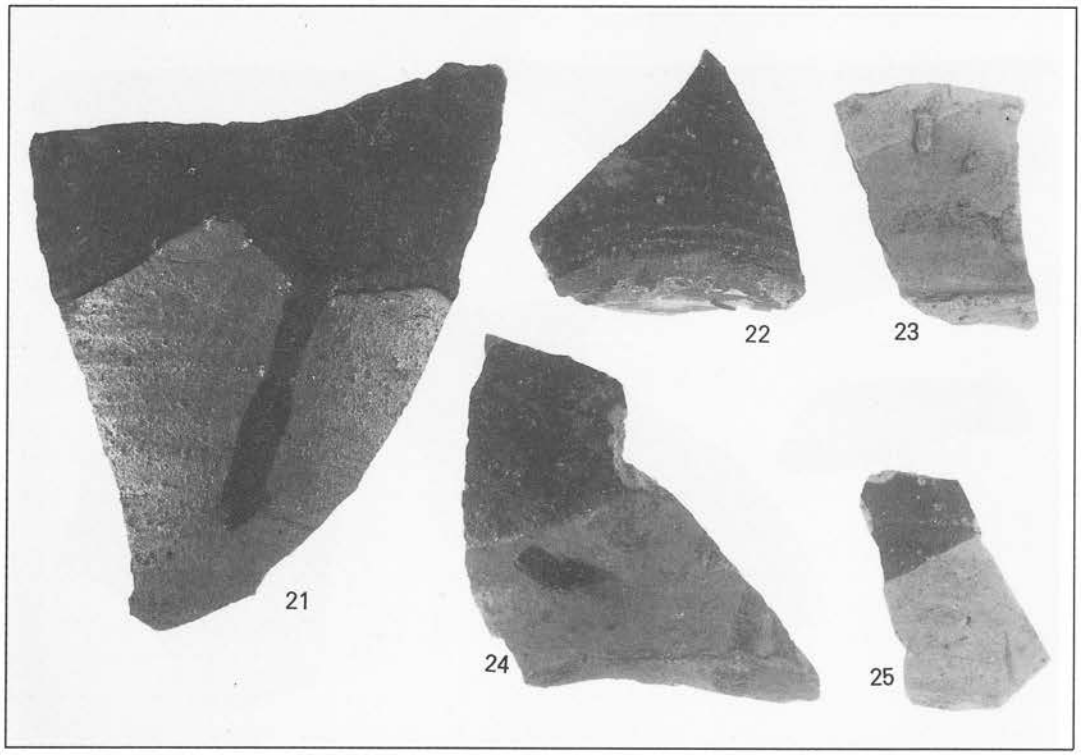


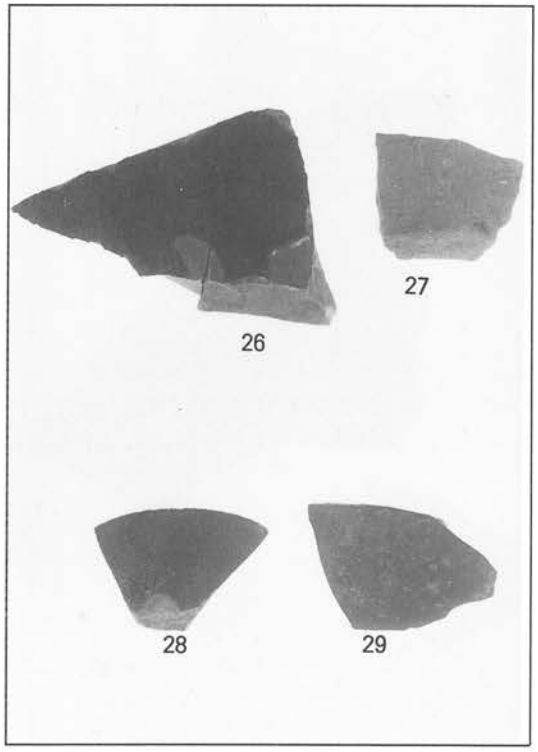
PL. 16　褐釉陶器　瓶1、水注2、壺Ⅰ類a:3、壺Ⅰ類b:4・5、壺Ⅱ類a:6、壺Ⅲ類a:7壺Ⅲ類b:8、壺Ⅳ類a:9、壺Ⅳ類b:10、壺Ⅴ類a:11





PL. 17　褐釉陶器　壺Ⅴ類ｂ:12、壺Ⅵ類:13、壺Ⅶ類:14、壺Ⅷ類:15、イ類:16•17、ロ類:18〜20





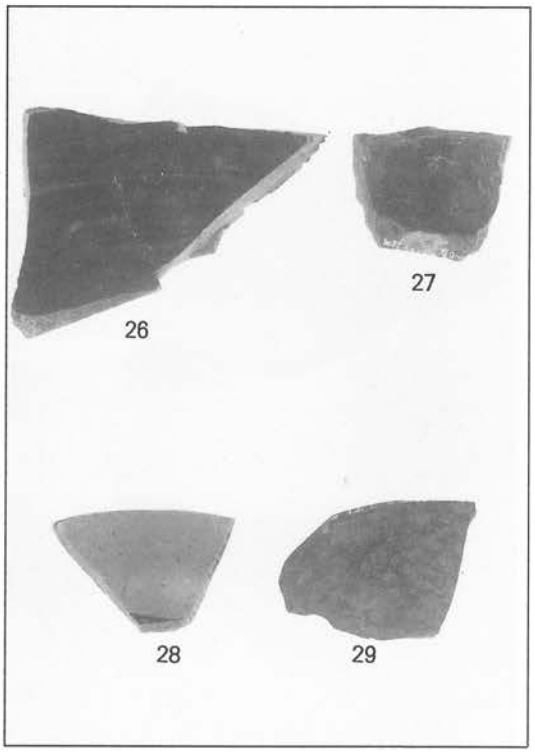
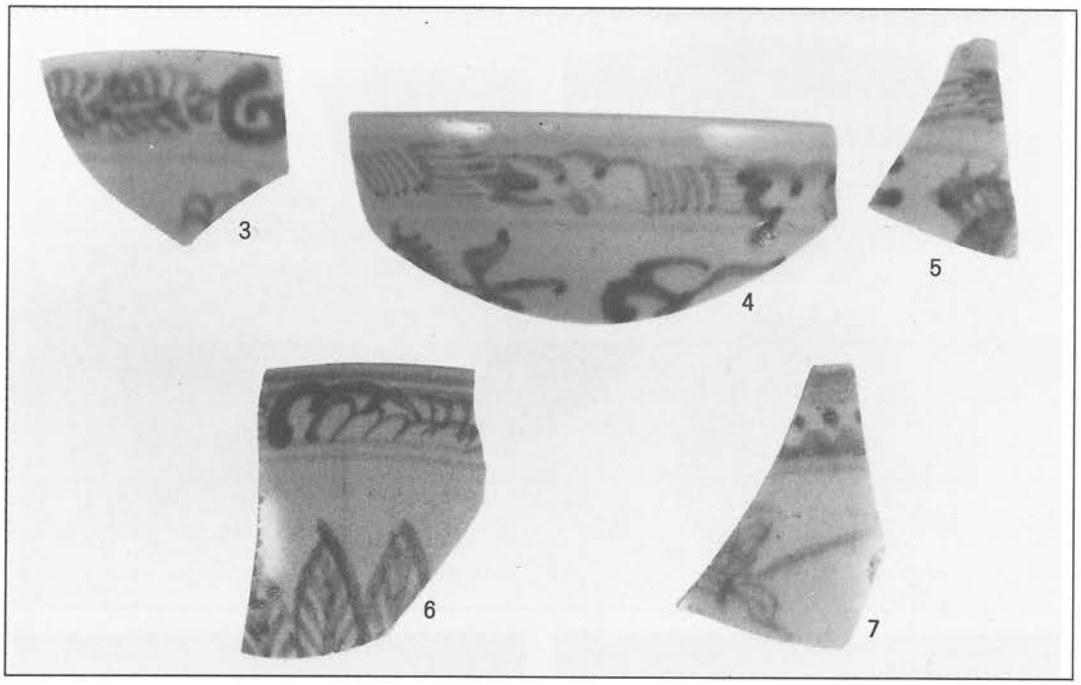
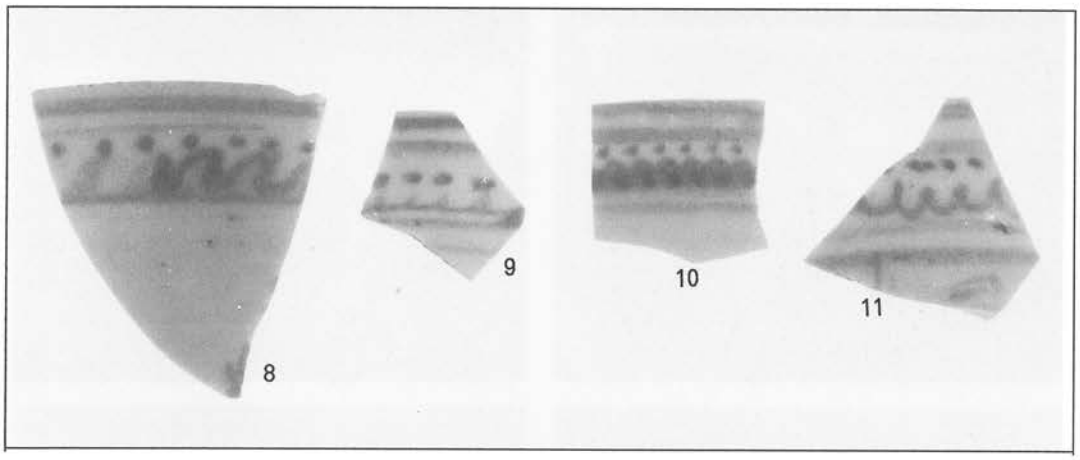


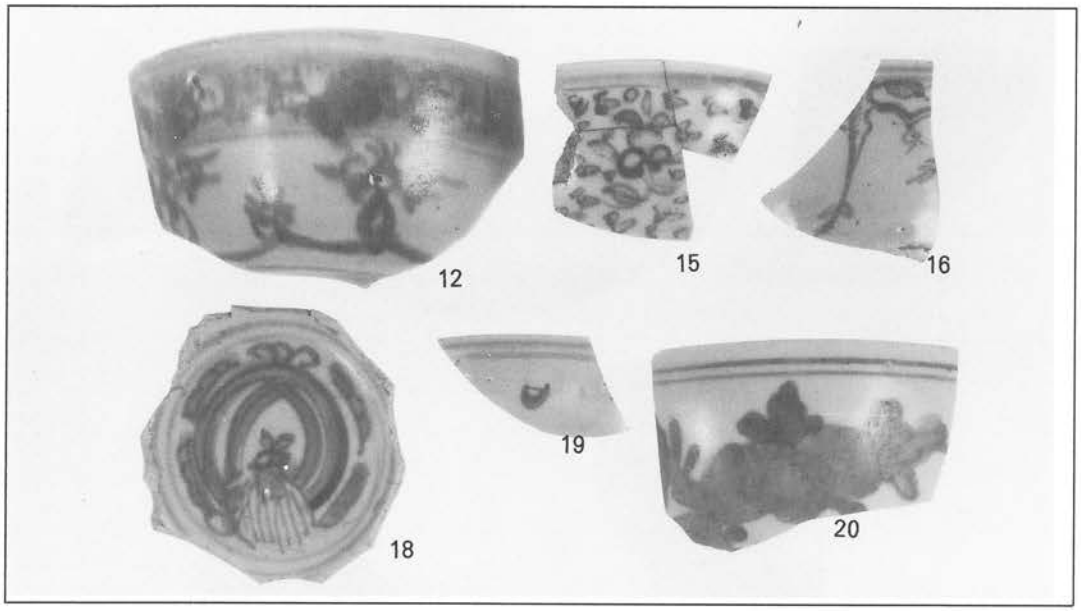
表　　面　　裏　　面

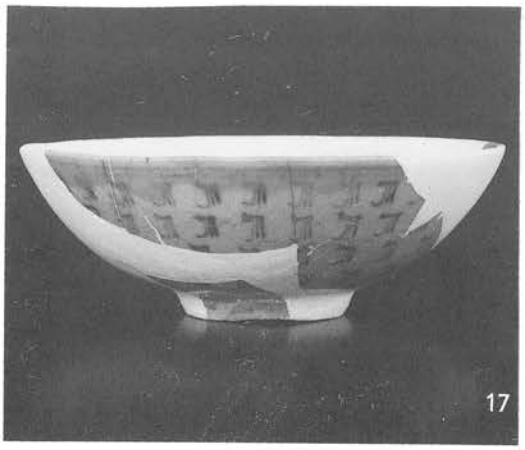
PL. 18　褐釉陶器　壺底部Ⅰ類21•22、壺底部Ⅱ類ａ:23、壺底部Ⅱ類ｂ：24〜26
洗底部:27、茶入れ壺:28•29

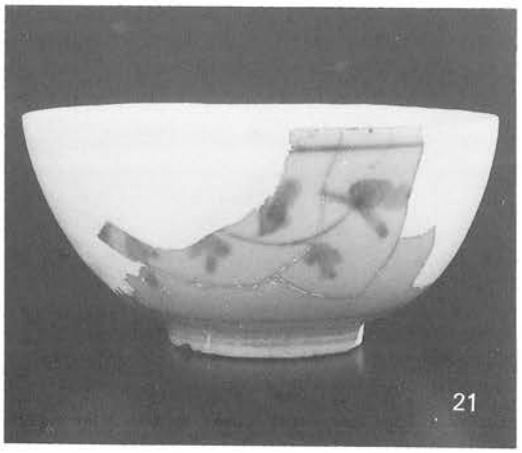




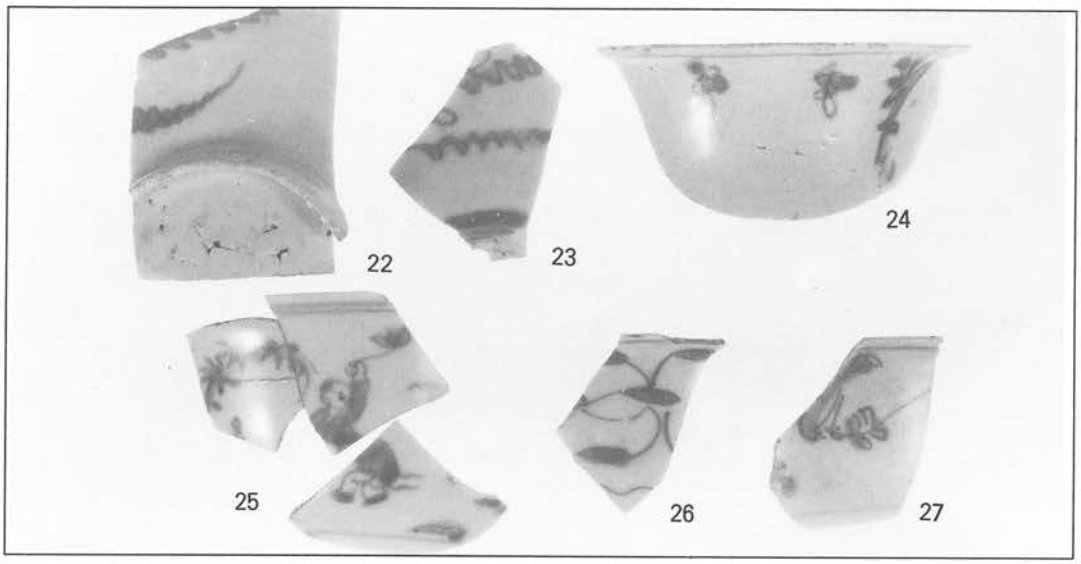
PL. 19　染付　碗Ⅱ類a：1、Ⅱ類b：2～6、Ⅱ類c：7～11

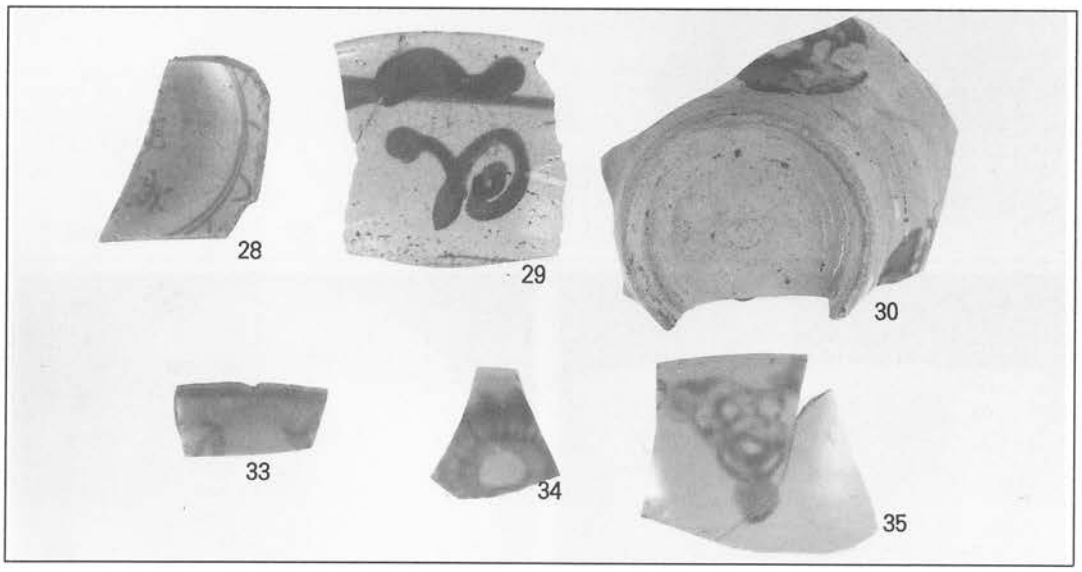


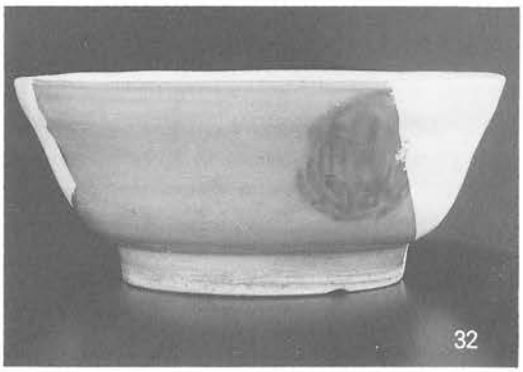




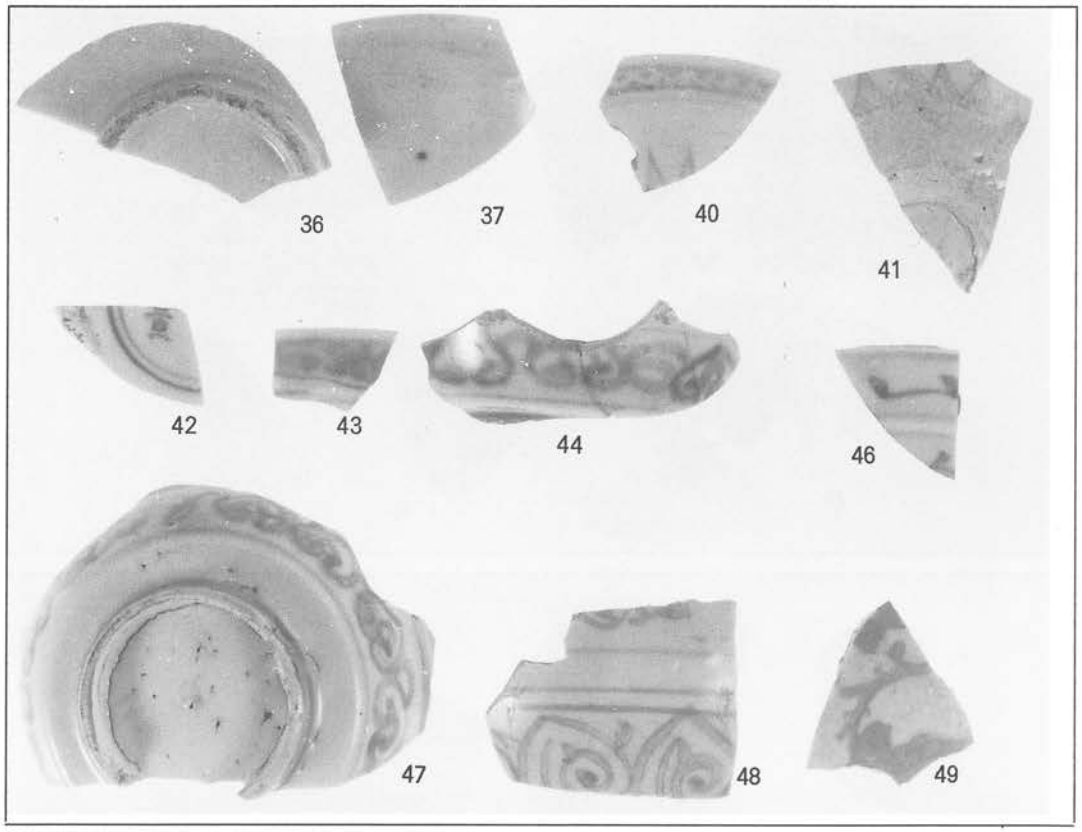
PL. 20　染付　碗Ⅲ類:12•13、Ⅳ類ａ:14〜15、Ⅳ類ｂ:16、Ⅳ類ｃ:17、Ⅳ類ｄ:18•19、Ⅴ類:20•21

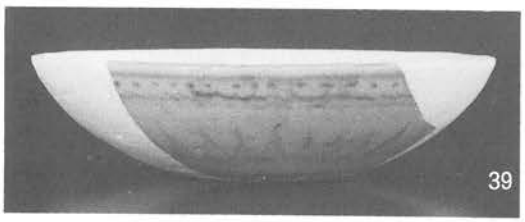




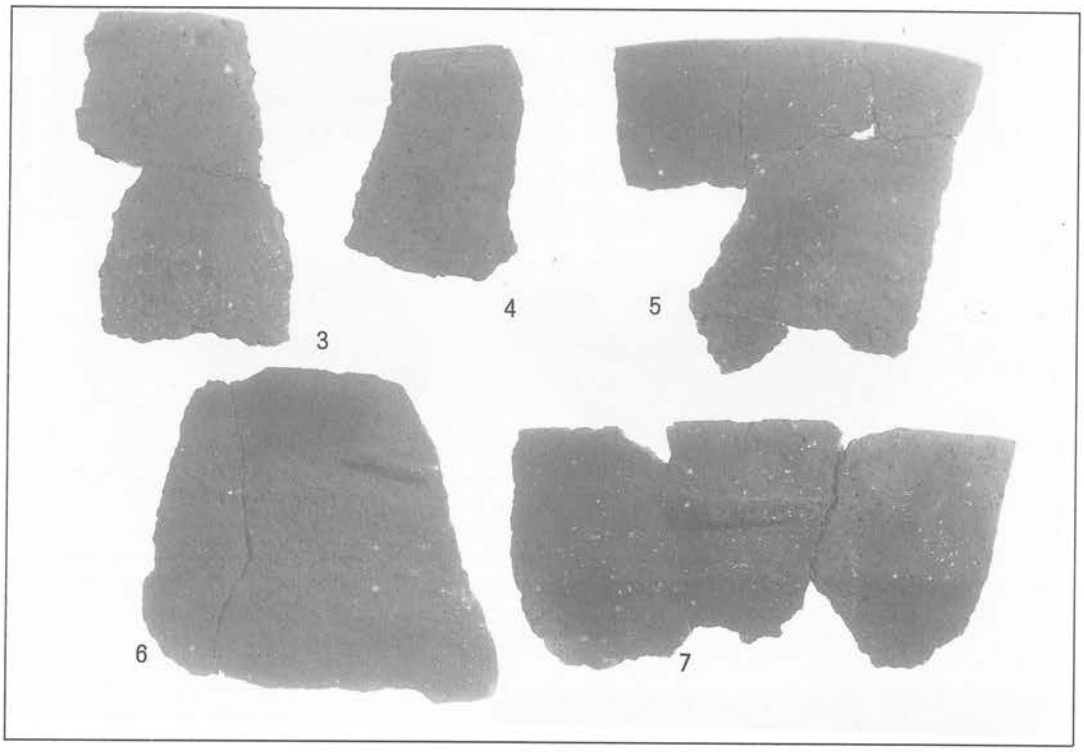


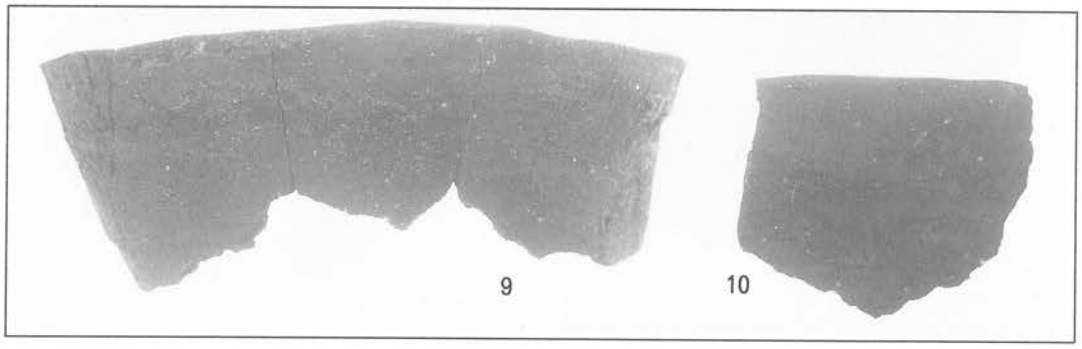
PL. 21　染付　碗Ⅴ類:22・23、Ⅵ類:24～28、Ⅶ類ａ:29～31、Ⅶ類ｂ:32～35

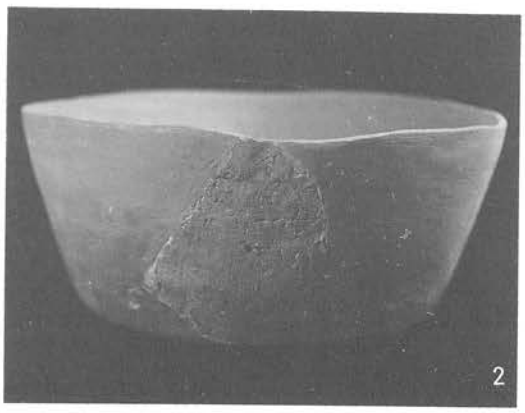




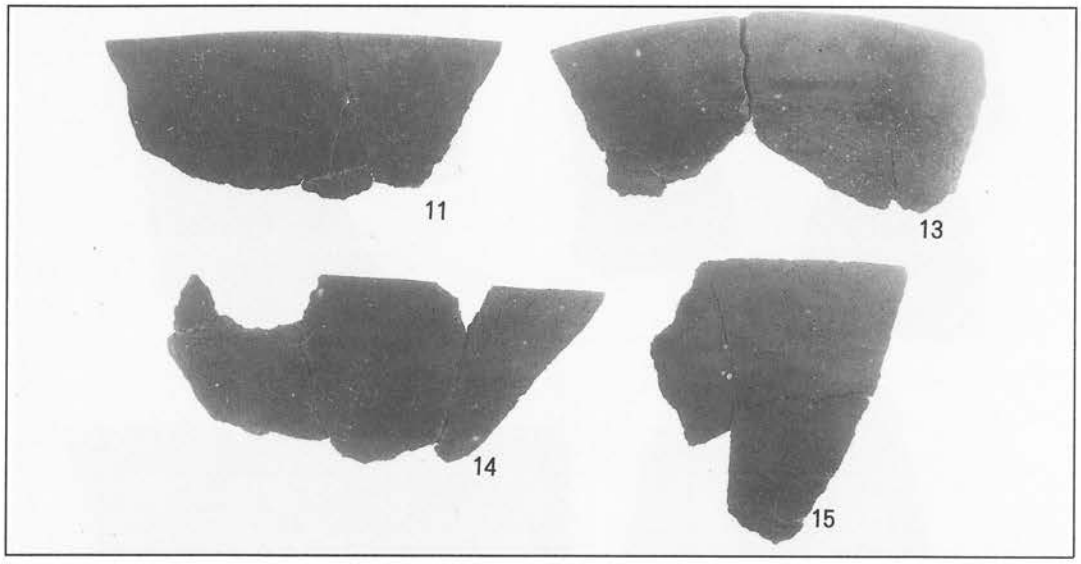
PL. 22　染付　碗Ⅶ類ｂ:36、皿Ⅰ類：37•38、Ⅱ類:39〜41、Ⅲ類:42、杯Ⅰ類:43
杯Ⅱ類ａ:44、杯Ⅱ類ｂ:45〜47、壺ａ類:48、壺ｂ類:49

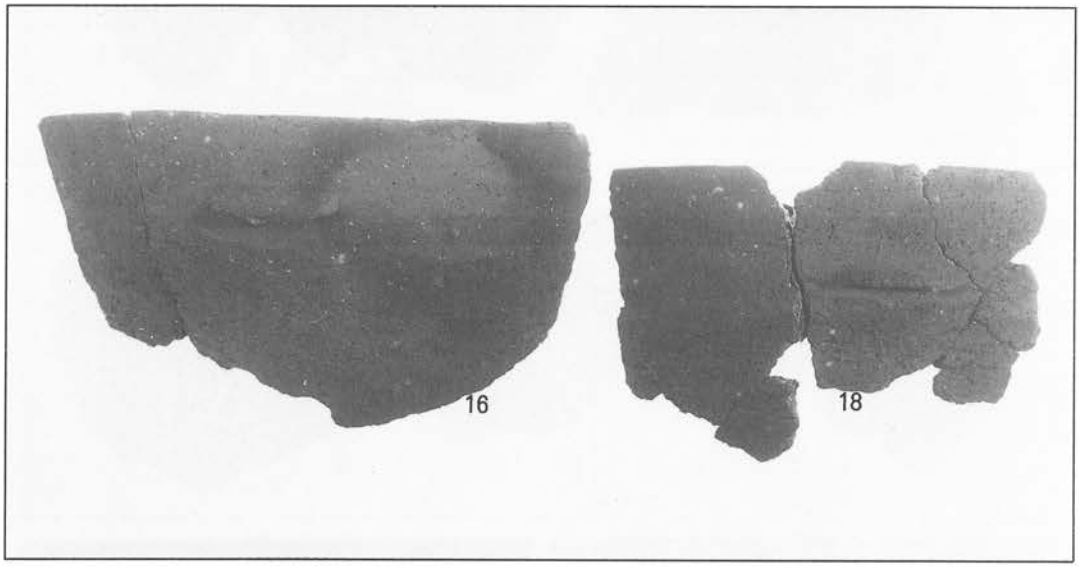


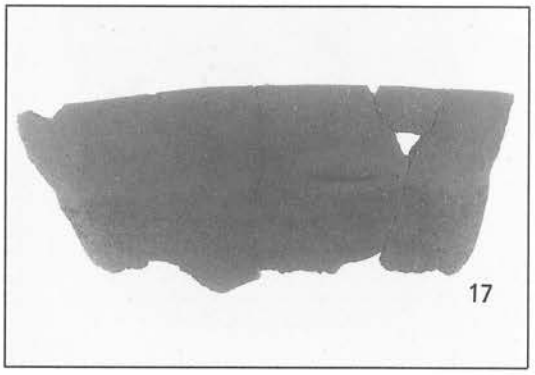




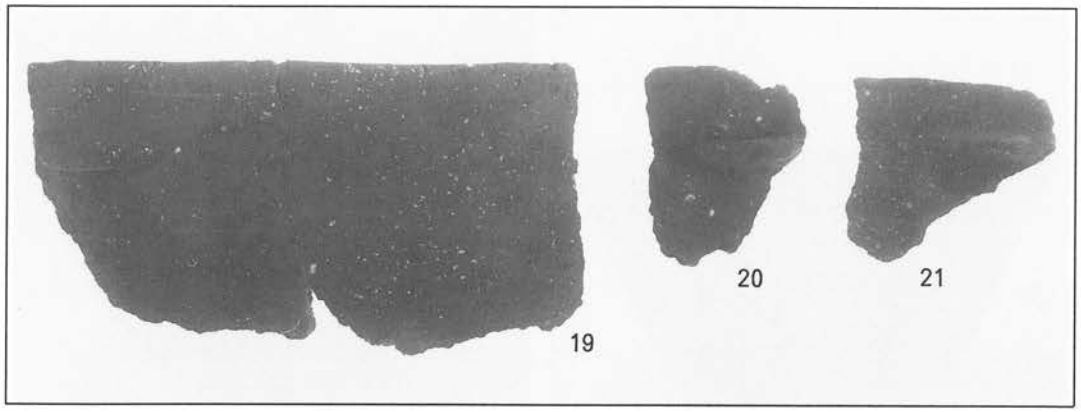
PL. 23　土器　鍋形Ⅰ類a：1～5、Ⅰ類b：6・7、Ⅱ類a：9、Ⅱ類b：10

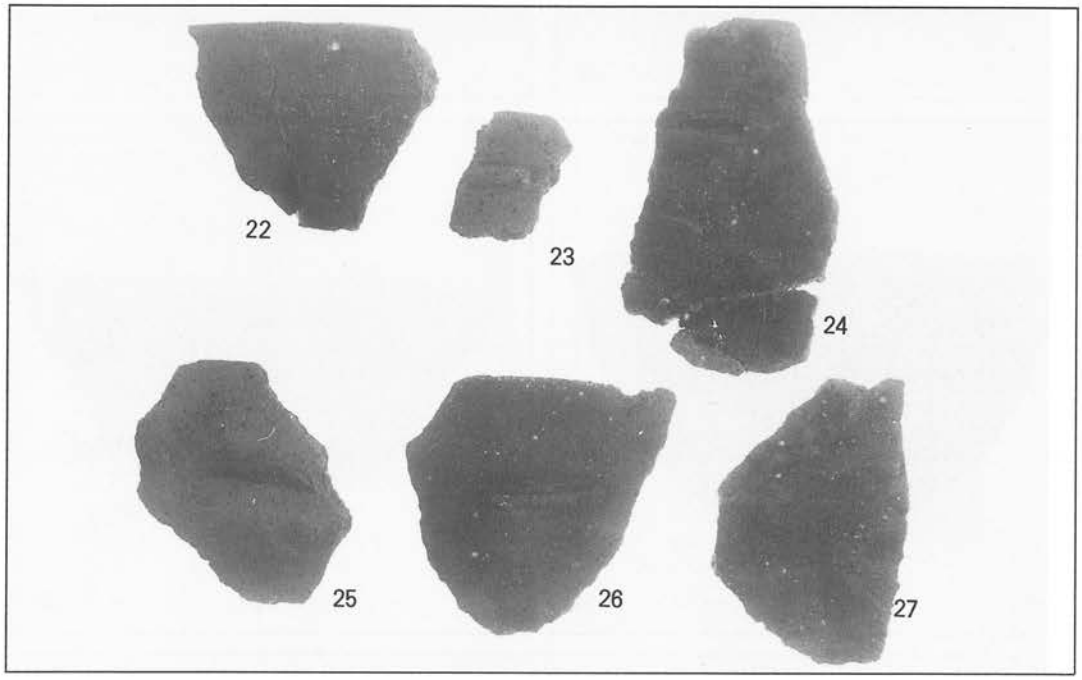


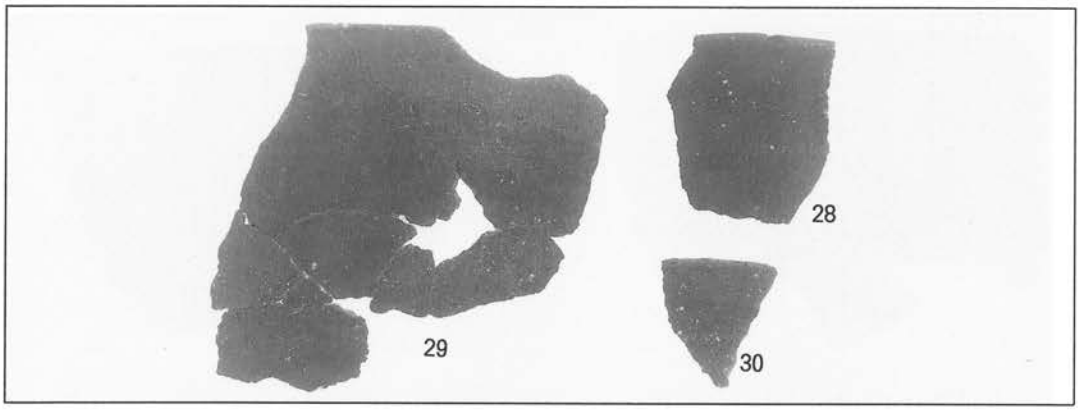




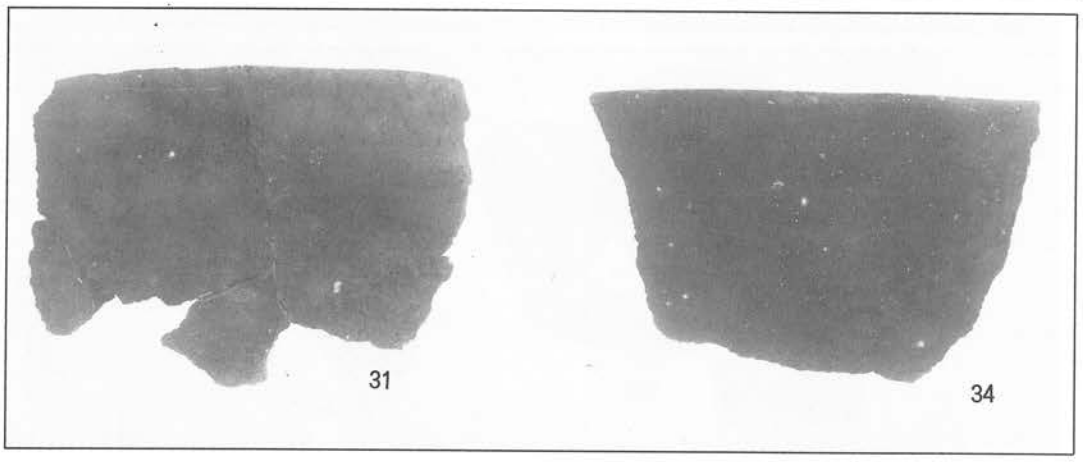
PL. 24　土器　鍋形Ⅱ類ｂ:11～13、Ⅱ類ｃ:14～18



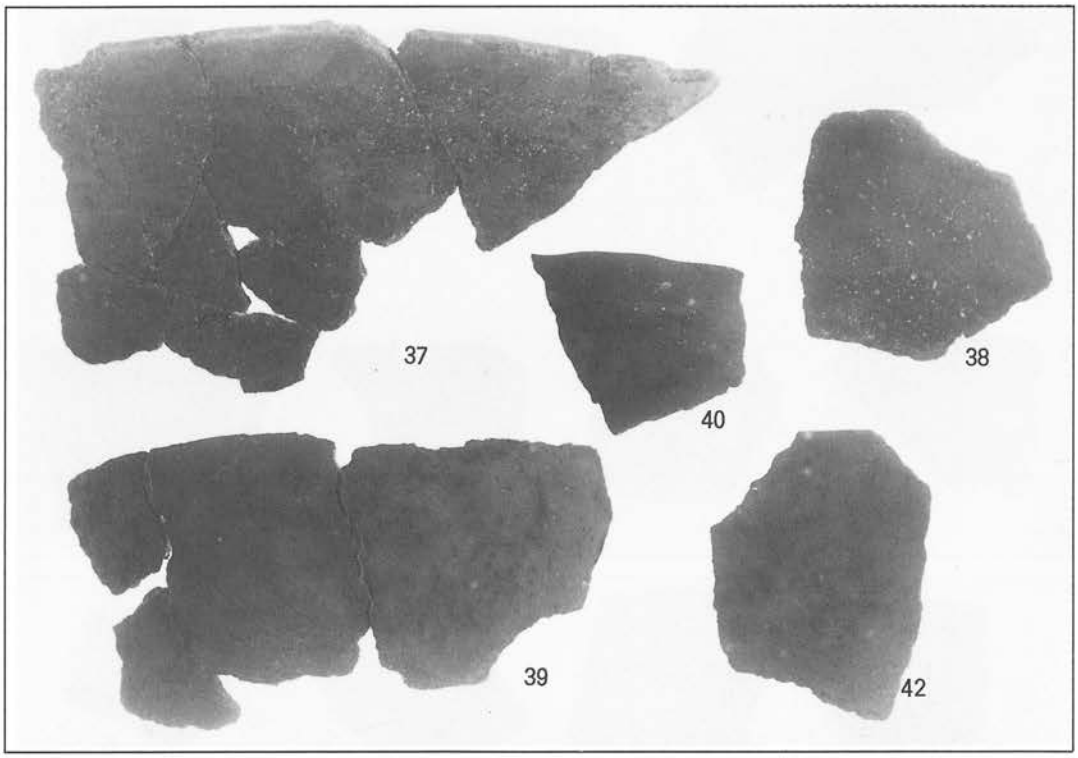


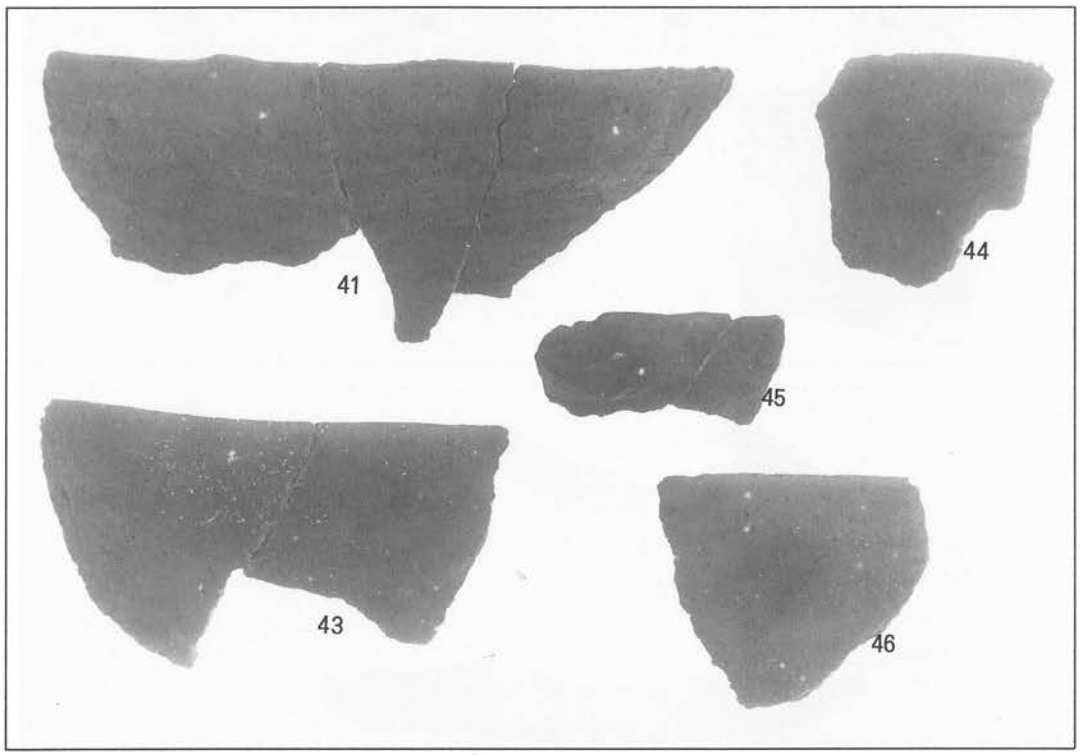


PL. 25　土器　鍋形Ⅱ類ｃ:19、Ⅰ類ａ:20•21、Ⅱ類ａ:22、Ⅱ類ｂ:23、Ⅱ類ｃ:24〜27、
Ⅱ類ａかⅡ類ｃ:28、Ⅲ類ａ:29•30

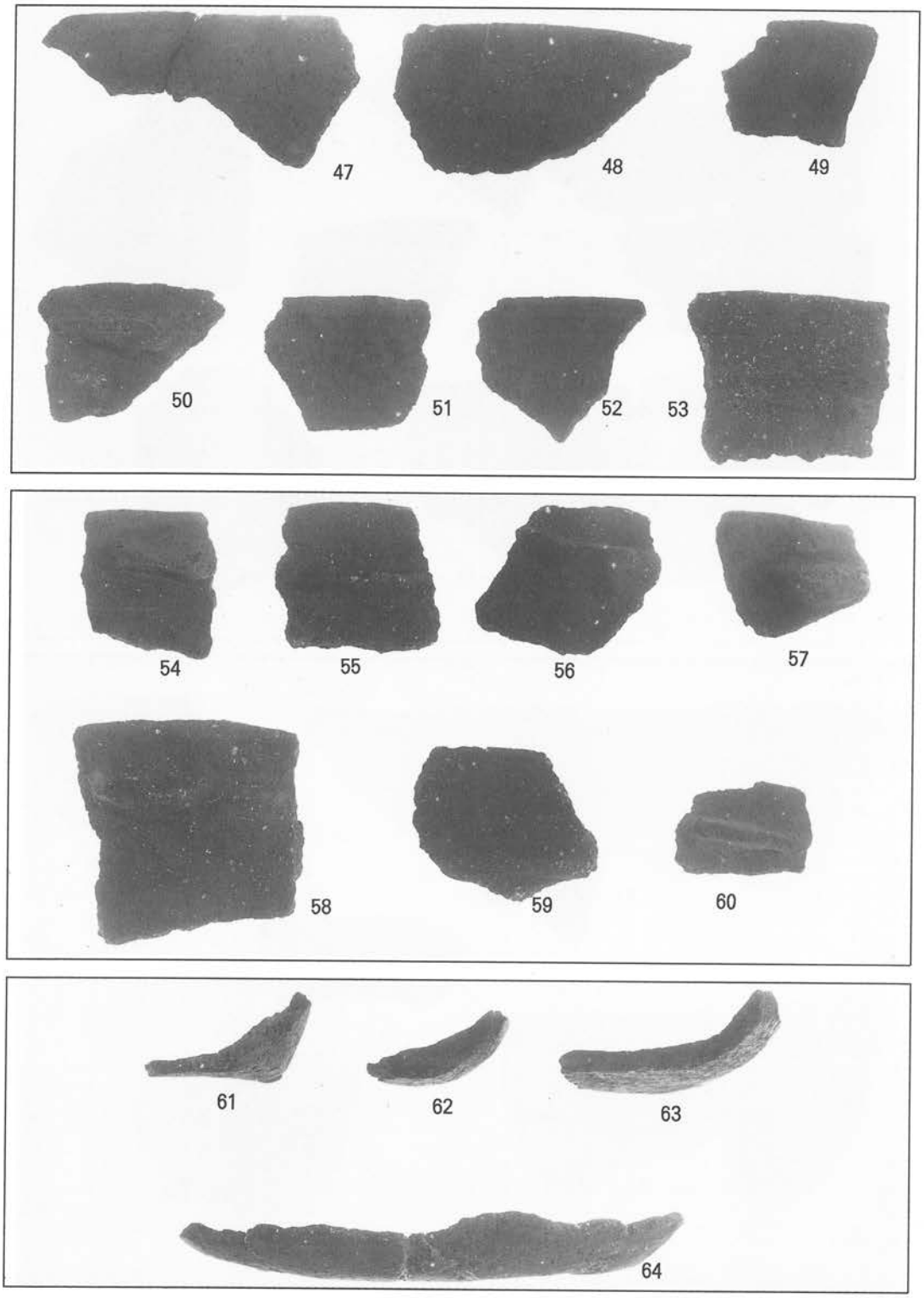


PL. 26　土器　鍋形Ⅲ類ａ:31〜33、Ⅲ類ｂ:34〜36

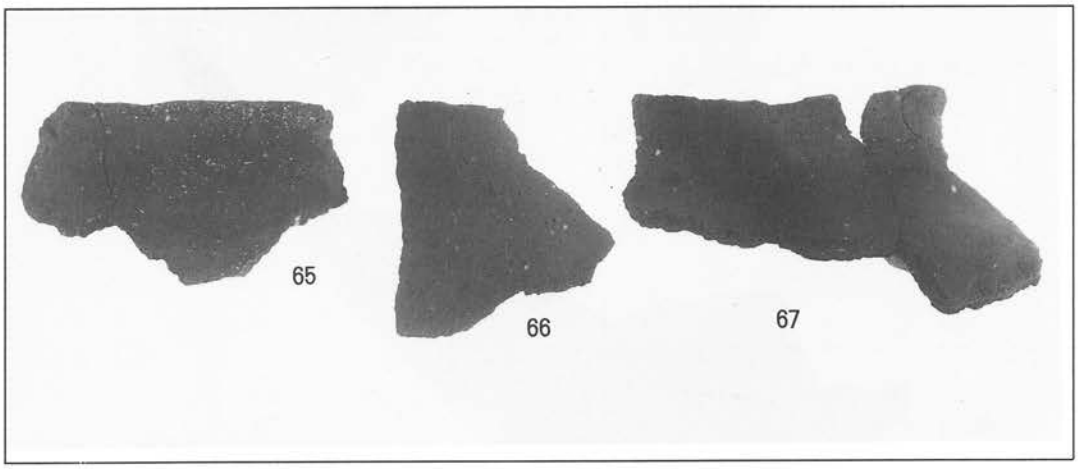


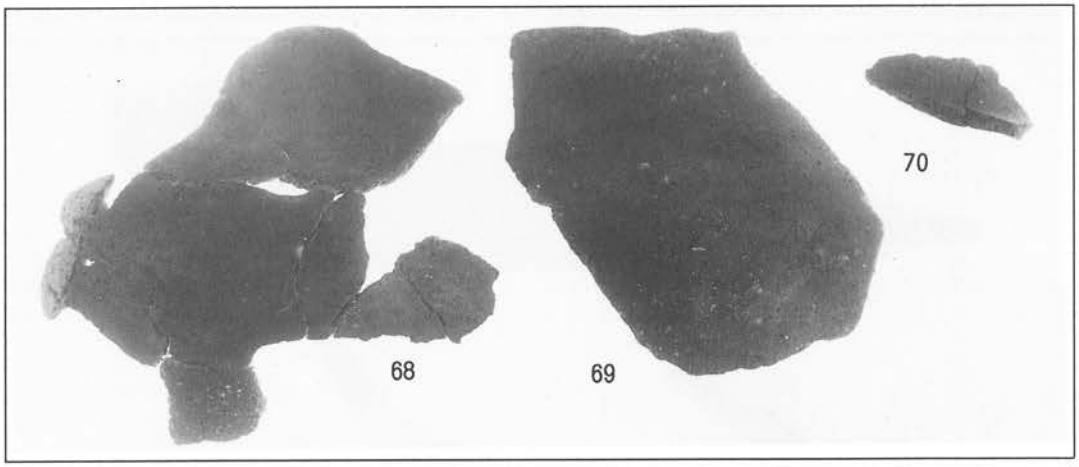


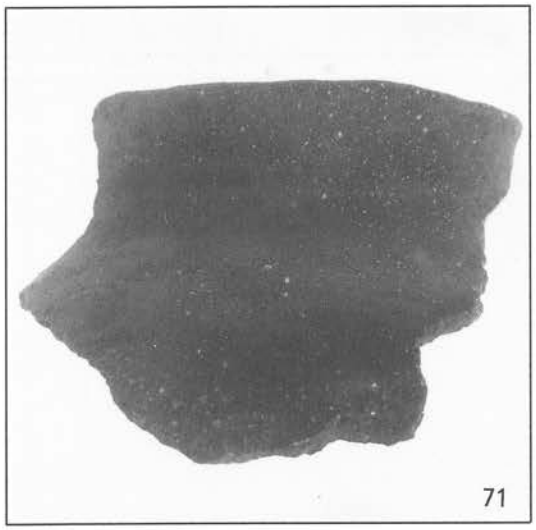
PL. 27　土器　鍋形Ⅲ類ｂ:37•38、Ⅳ類ａ:39•40、Ⅳ類ｂ:41〜45 Ⅳ類ｃ:46



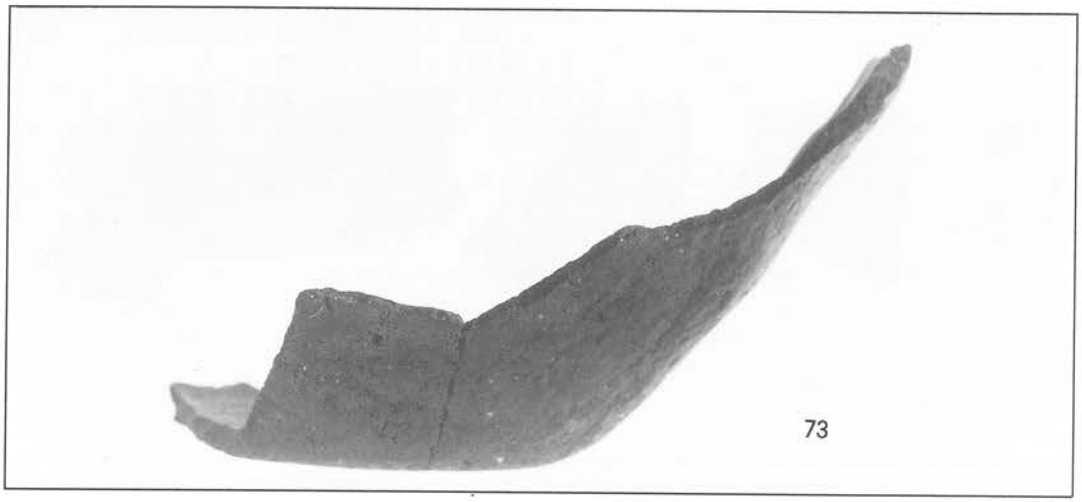
PL. 28　土器　鍋形Ⅳ類ａ:47～49、Ⅳ類ｂ:50、Ⅳ類ｃ:51•52、Ⅴ類:53、Ⅰ類ａ？:54～58、Ⅲ類ｂ？：59、Ⅳ類ｂ？:60、底部Ⅰ類:61、底部Ⅱ～Ⅲ類:62•63、Ⅲ類ｂ：64

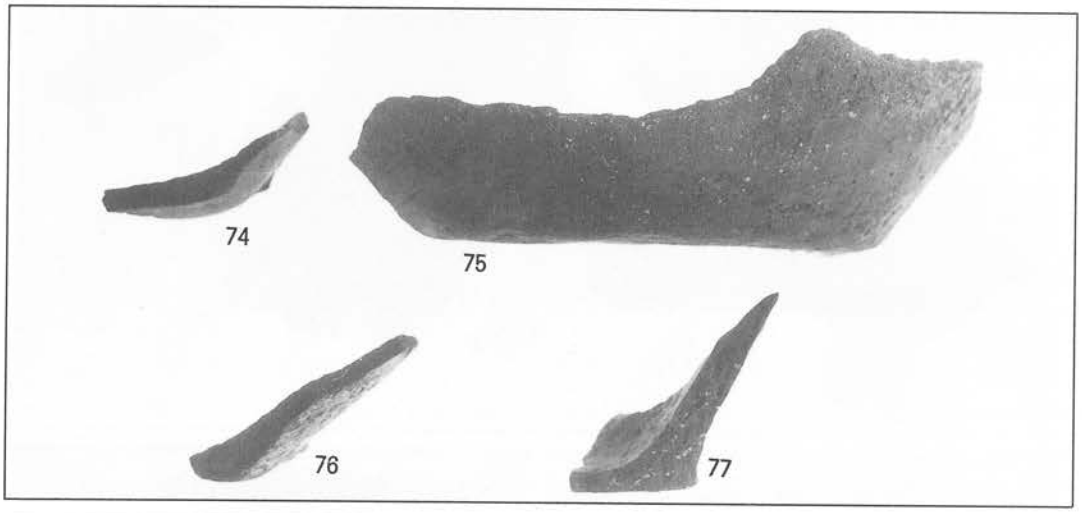


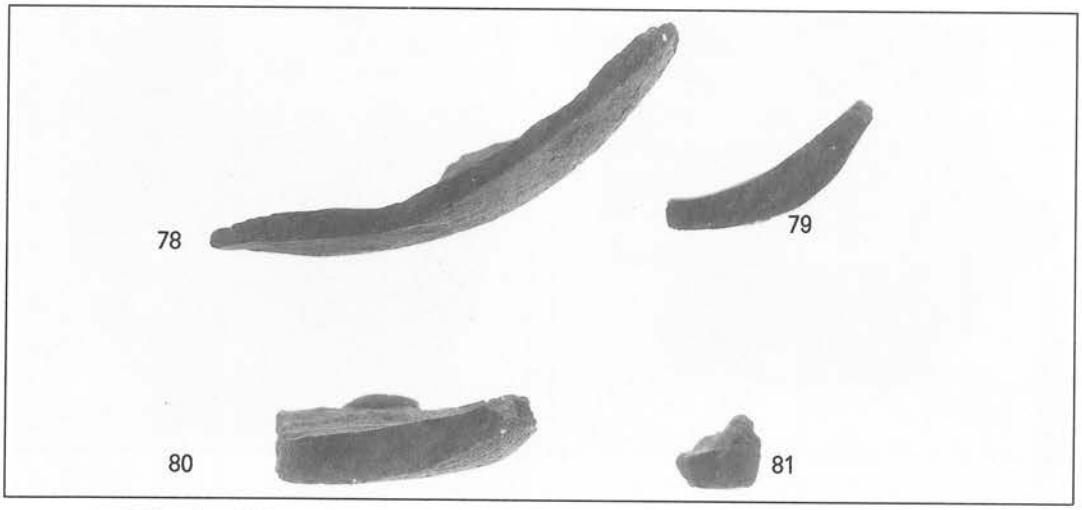




PL. 29　土器　壺形Ⅰ類:65、Ⅱ類:66～69、Ⅲ類:70～72

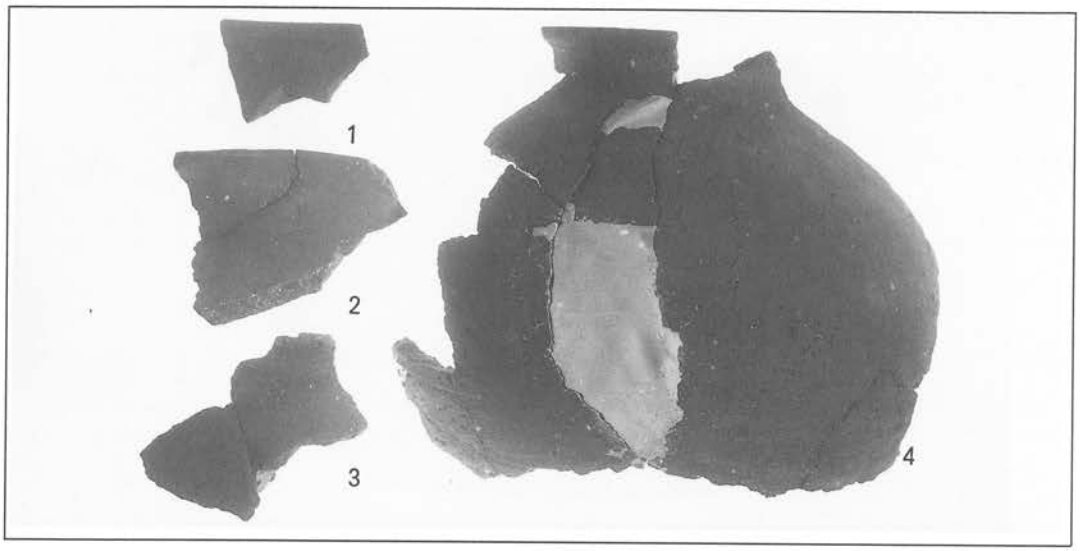


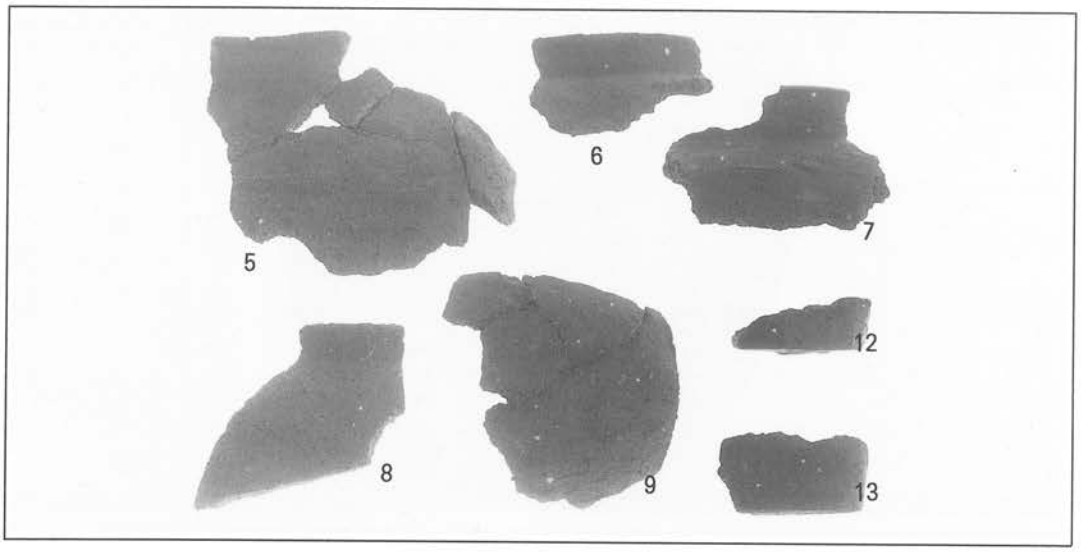




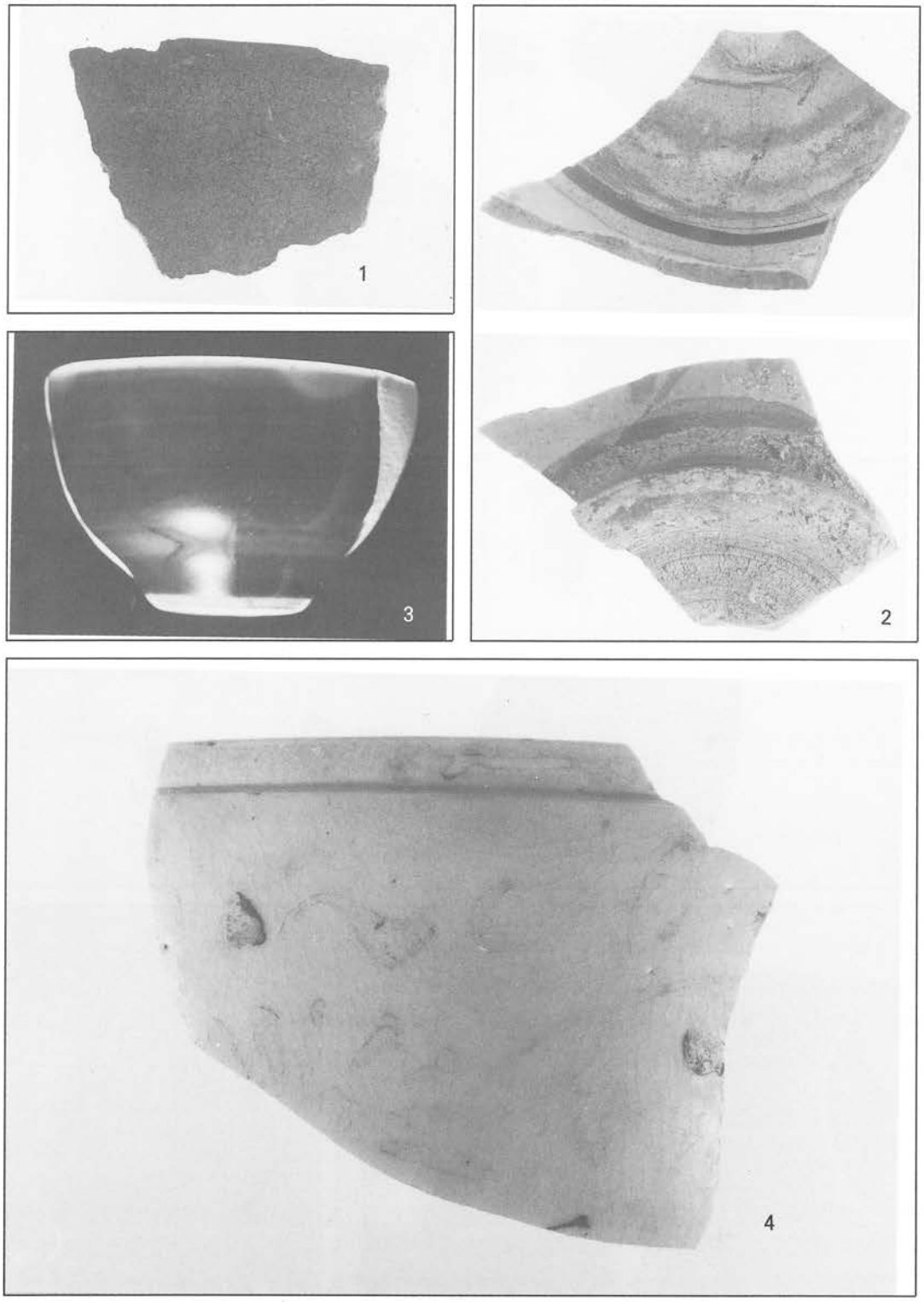
PL. 30　土器　壺ａ種:73、壺ｂ:74〜76、壺ｃ種:77、器種不明底部イ種:78〜80、ロ種:81

PL. 31　土器　鍋形Ⅰ類ａ:82、Ⅰ類ｂ:83、Ⅲ類ｂ:84

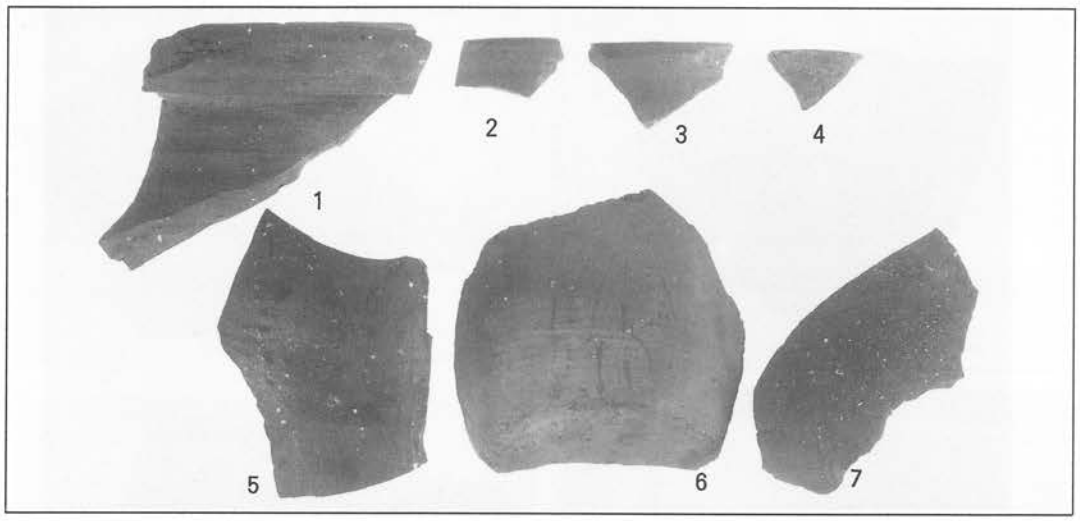


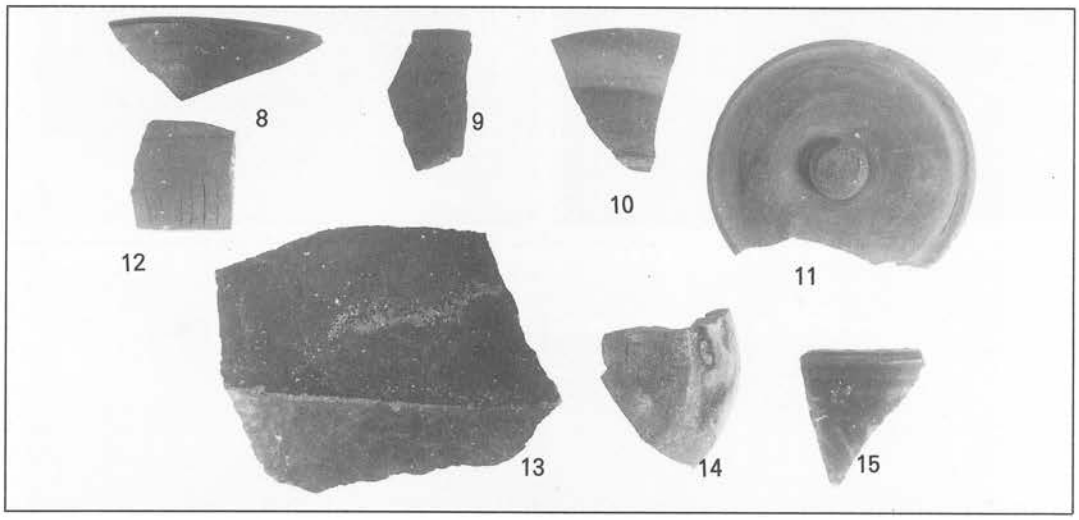


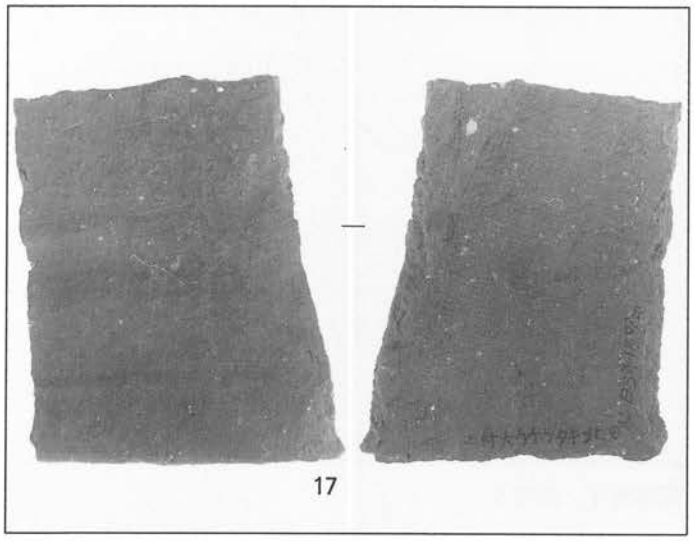
PL. 32　パナリ焼　壺a種: 1、壺b種: 2～4、壺c種: 5～7、壺d種: 8・9
小鉢10、火舎11～13



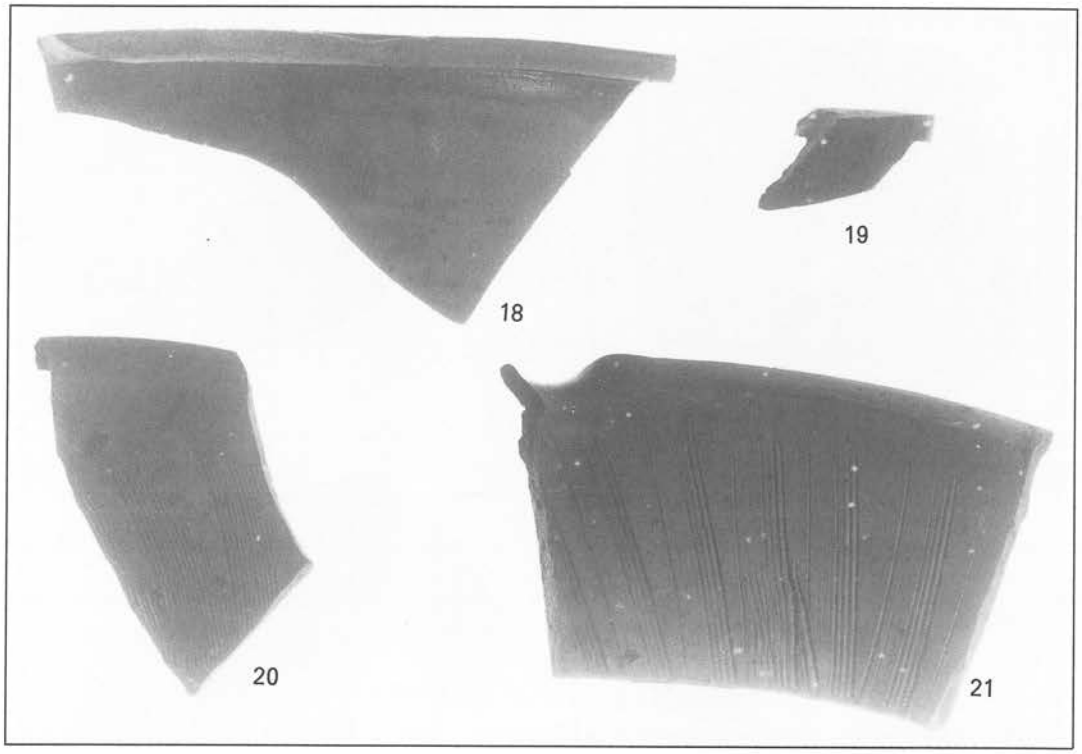
PL. 33　天目茶碗１、タイ陶器２、瑠璃釉３、赤絵４

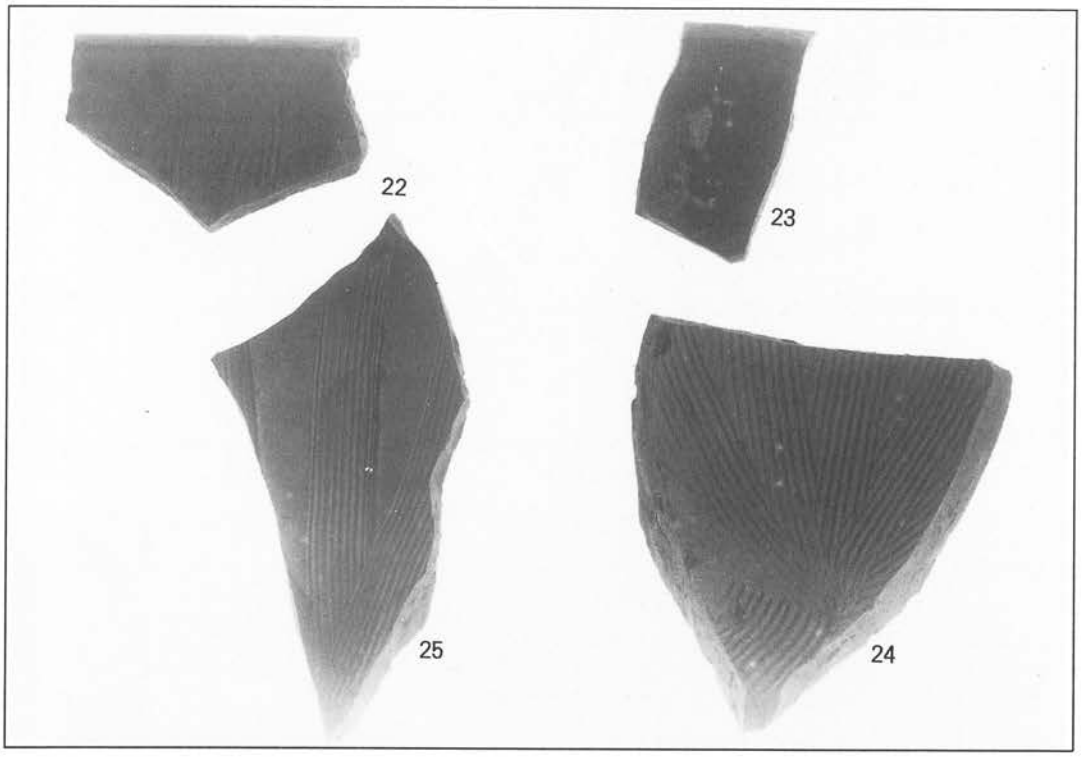




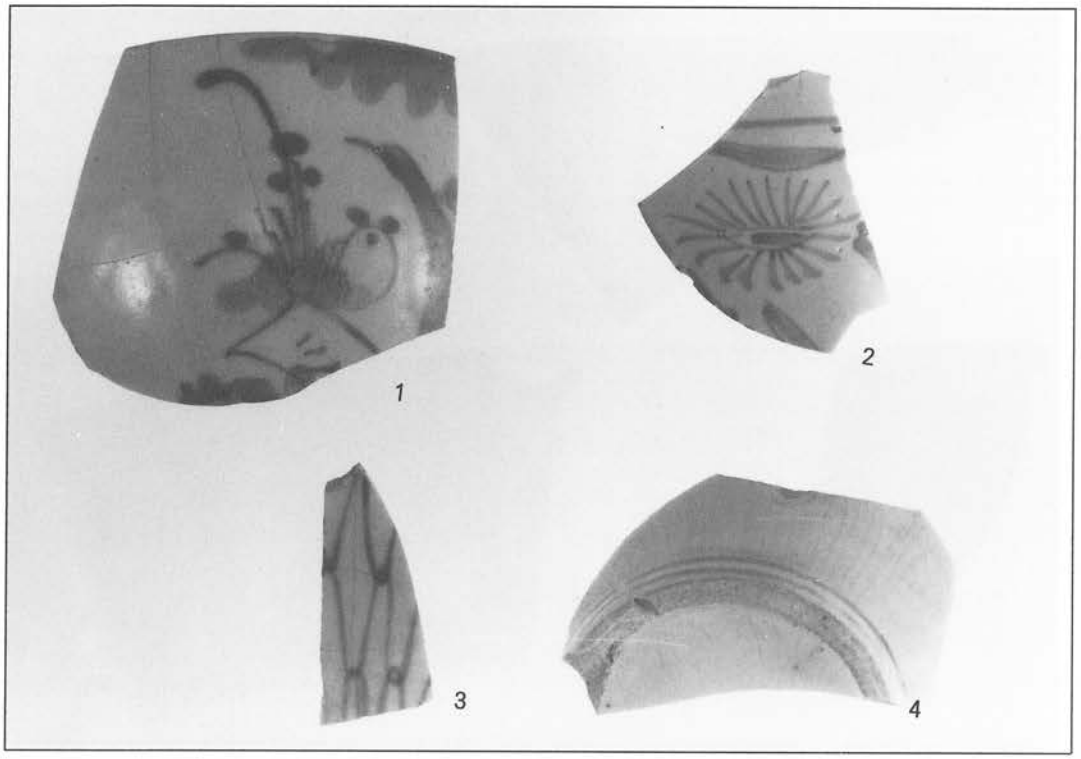


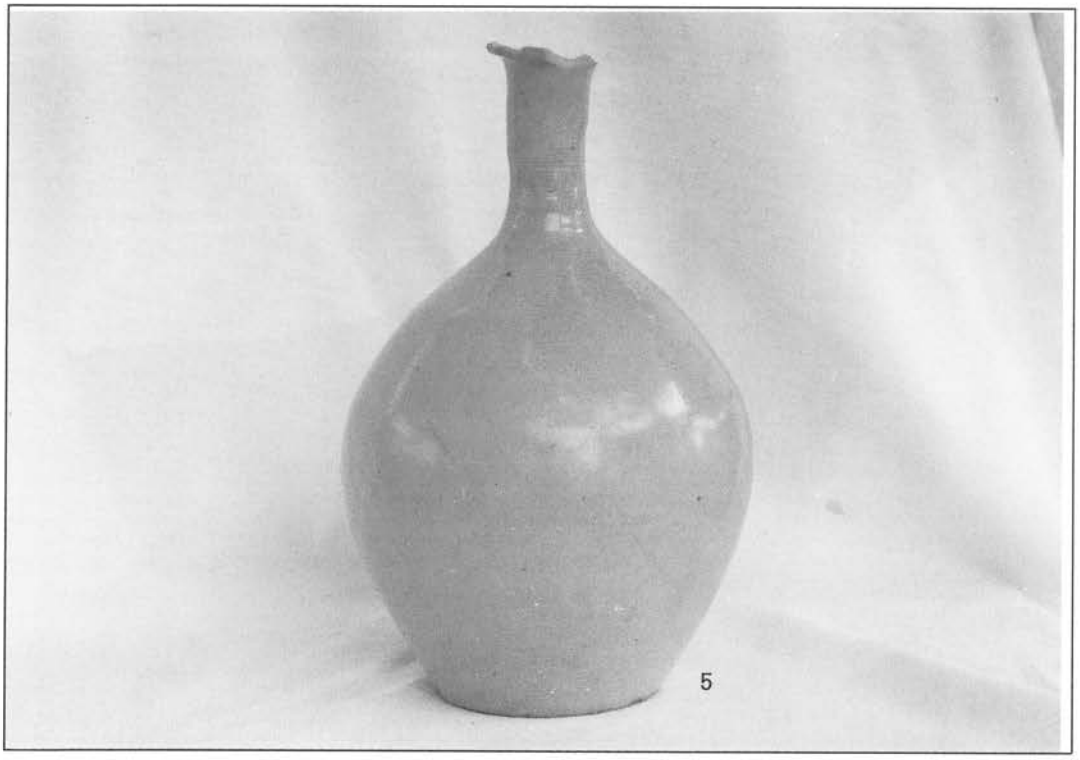
PL. 34　沖縄製陶器　荒焼壺１～７、瓶８・９、皿10、急須11、有文および特殊胴部12・13
上焼壺14、香炉15、瓶16、瓦17



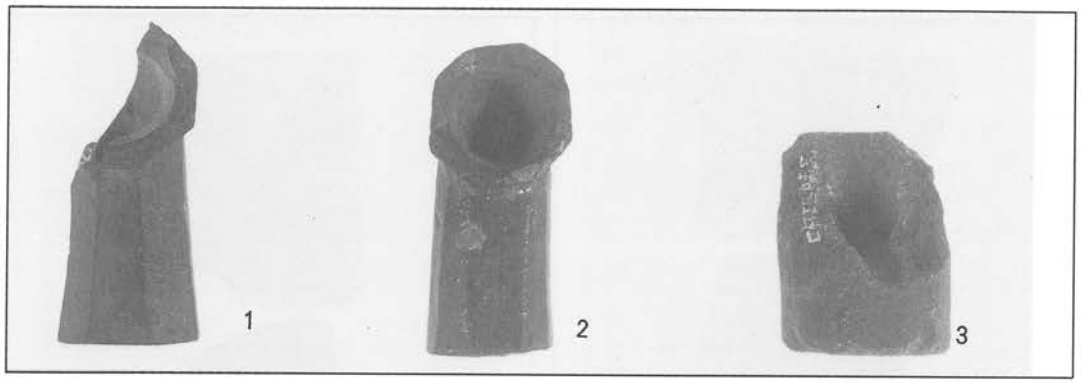


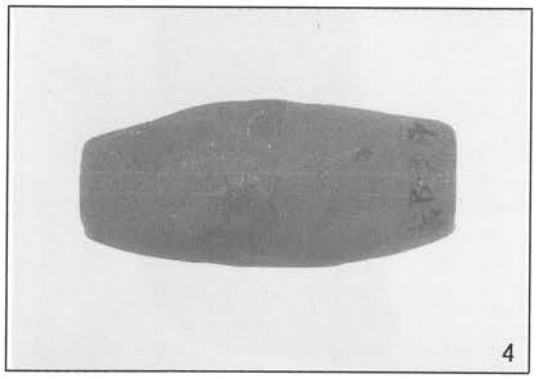
PL. 35　沖縄製陶器　荒焼水鉢18、摺鉢イ類:19、ロ類:20、ハ類:21～24 摺鉢底部25

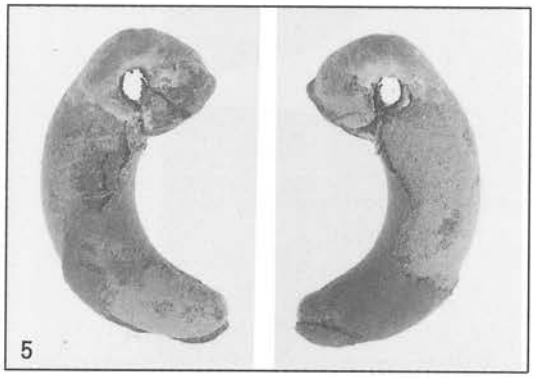


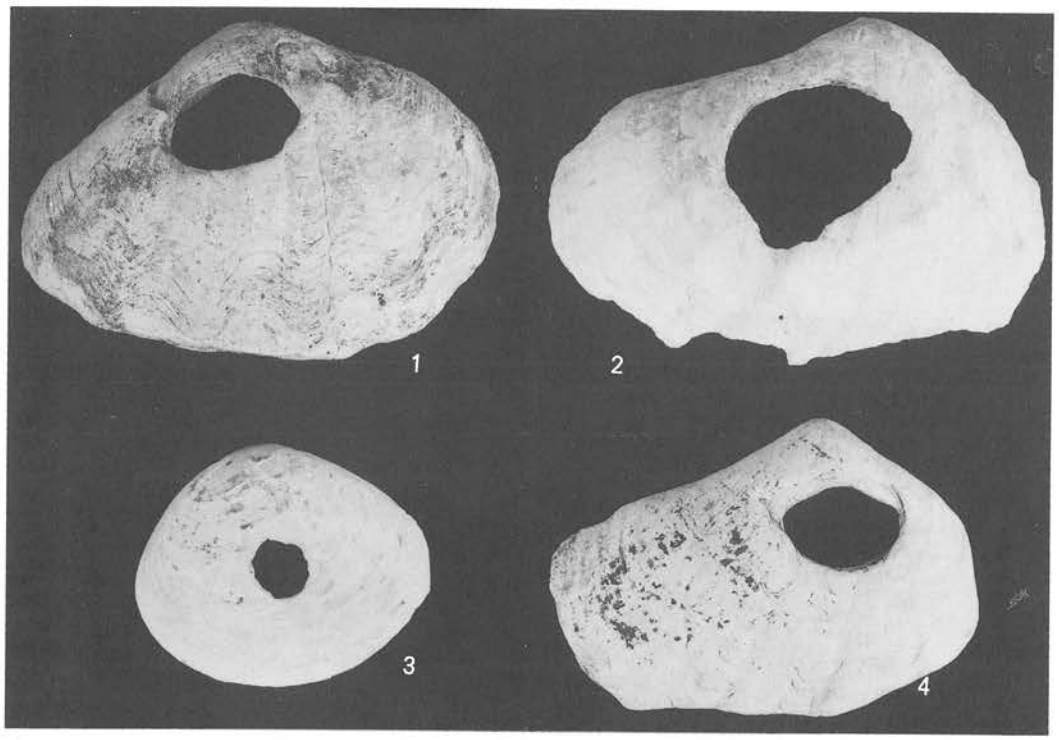


PL. 36　伊万里　染付碗１、瓶２～４、白磁瓶５

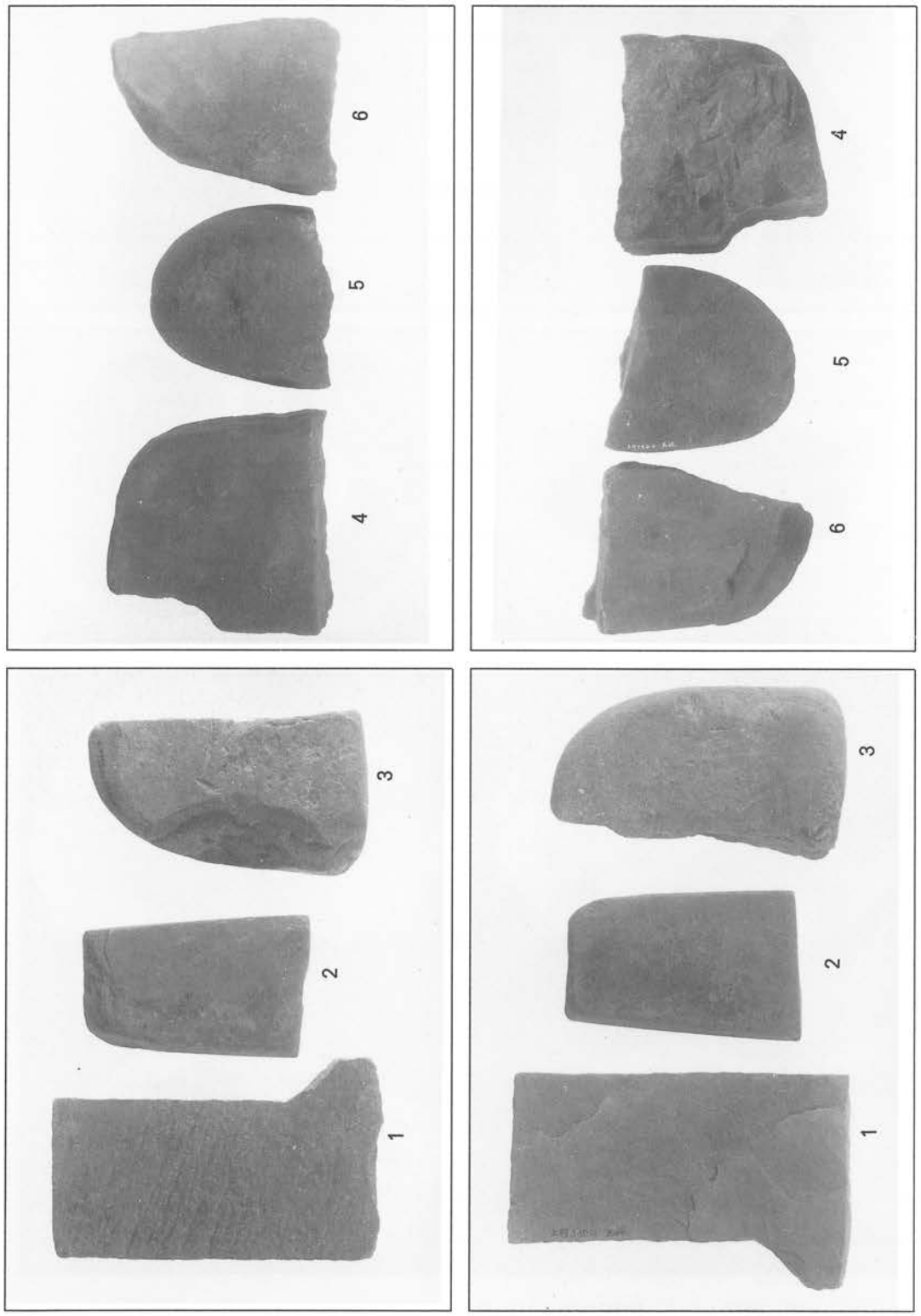




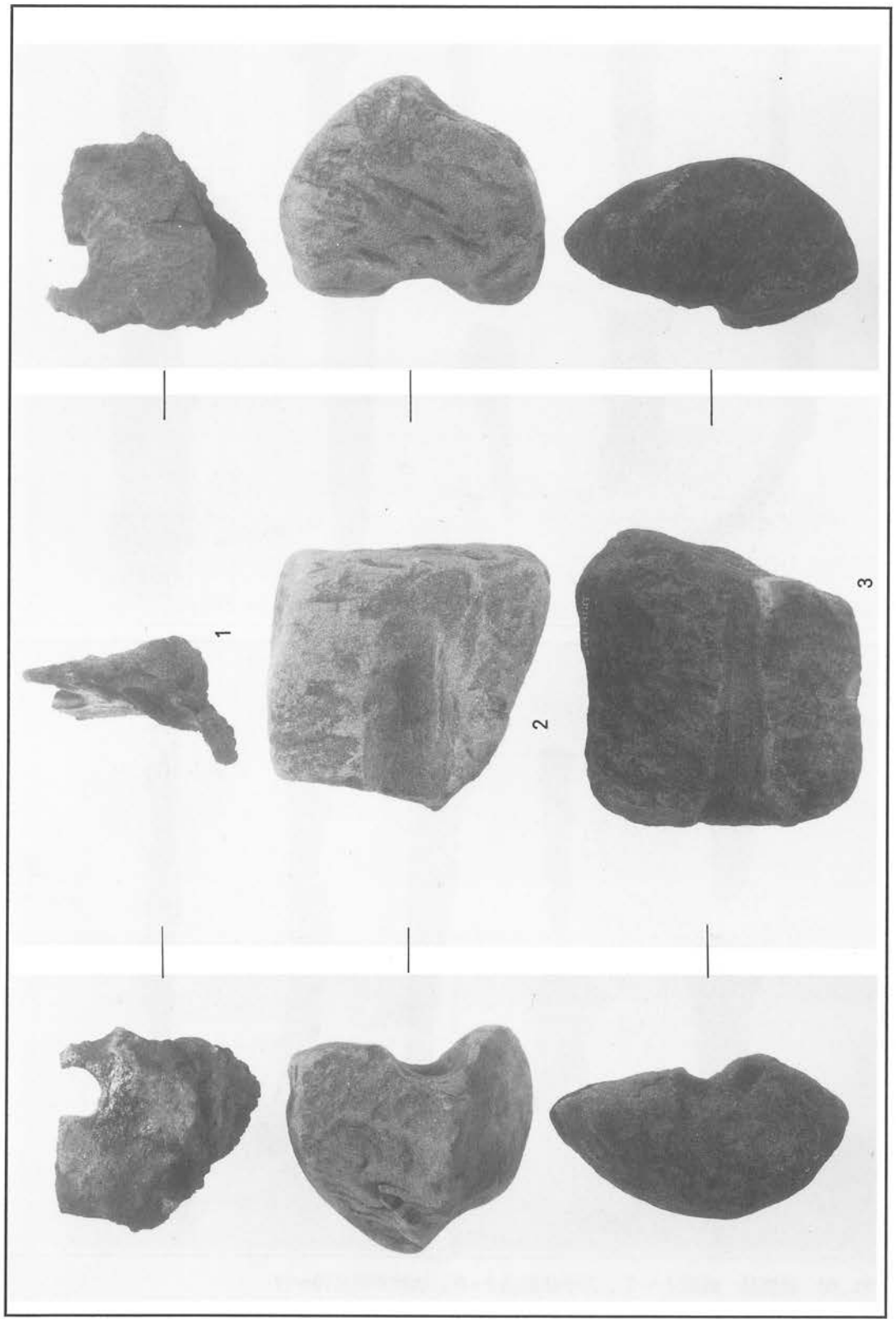




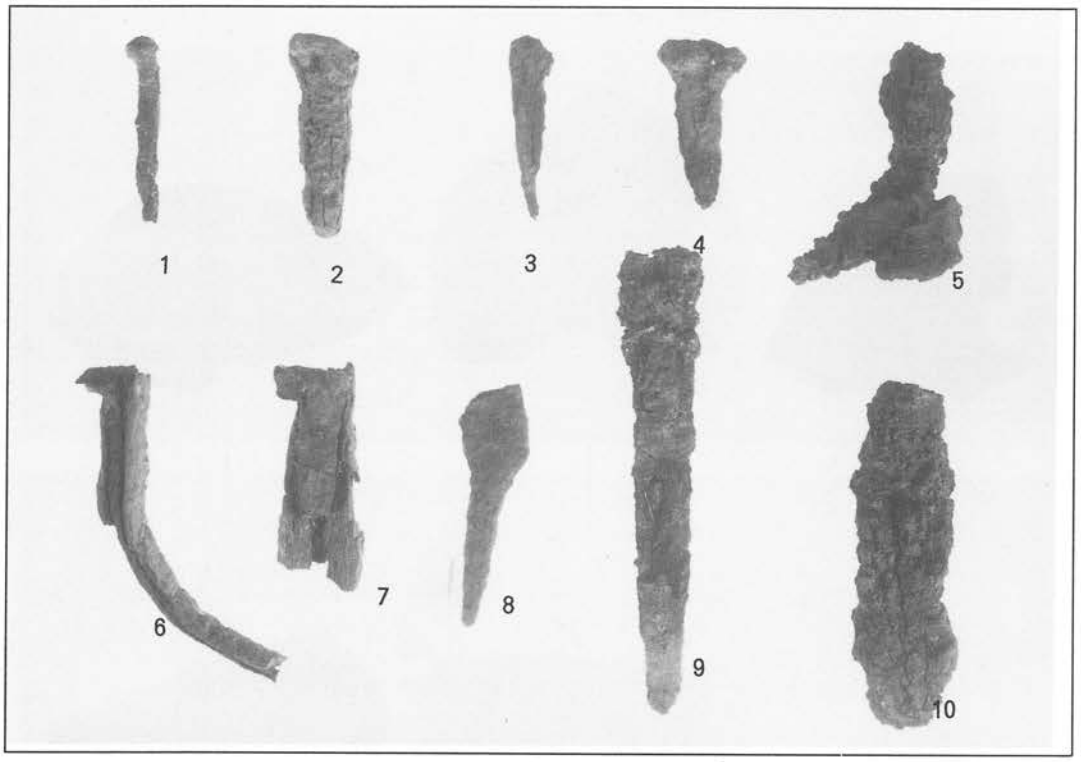
PL. 37　上段　煙管１～３、陶製の錘４、勾玉５
　　下段　貝製品１～３　Ⅰ地区、４　Ⅱ地区

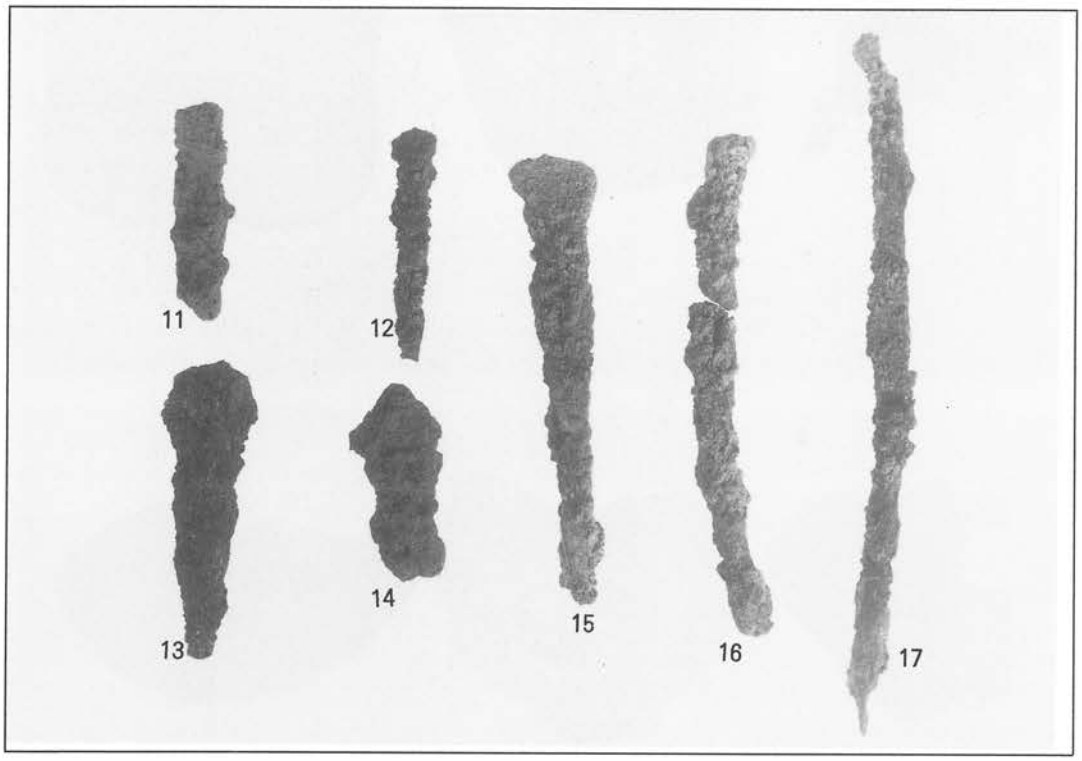


PL.38　石器（上段表面、下段裏面）砥石１～４、凹石５、石皿６

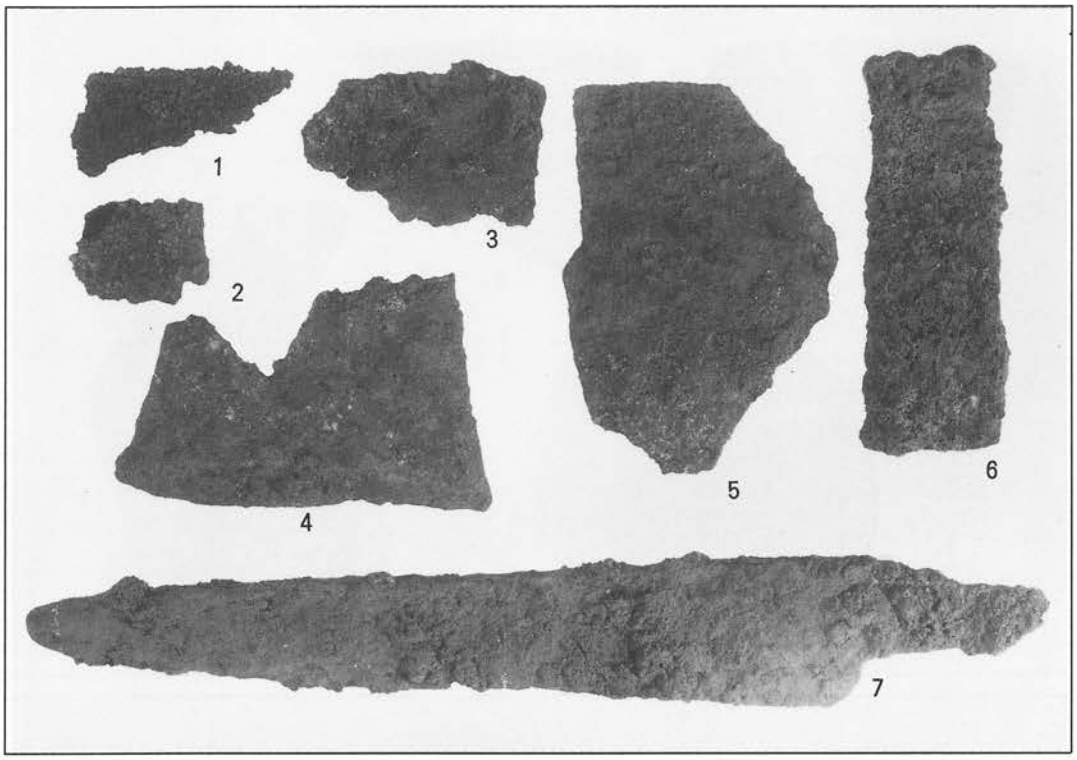


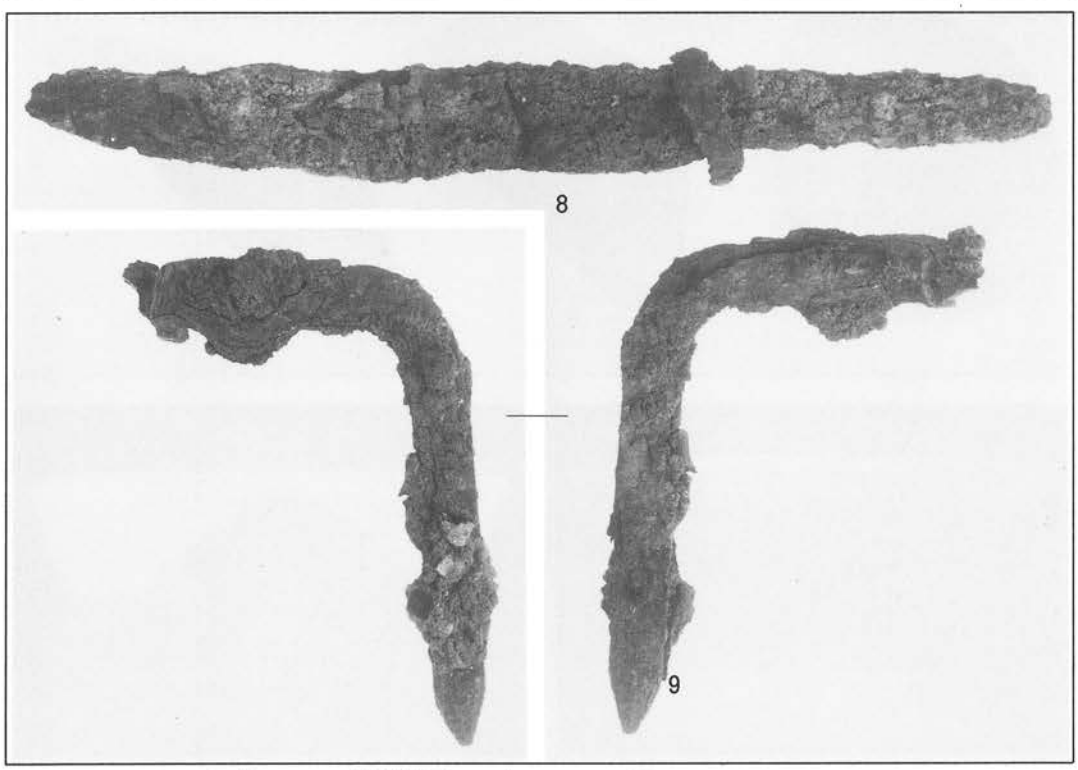
PL.39 羽口 1～3



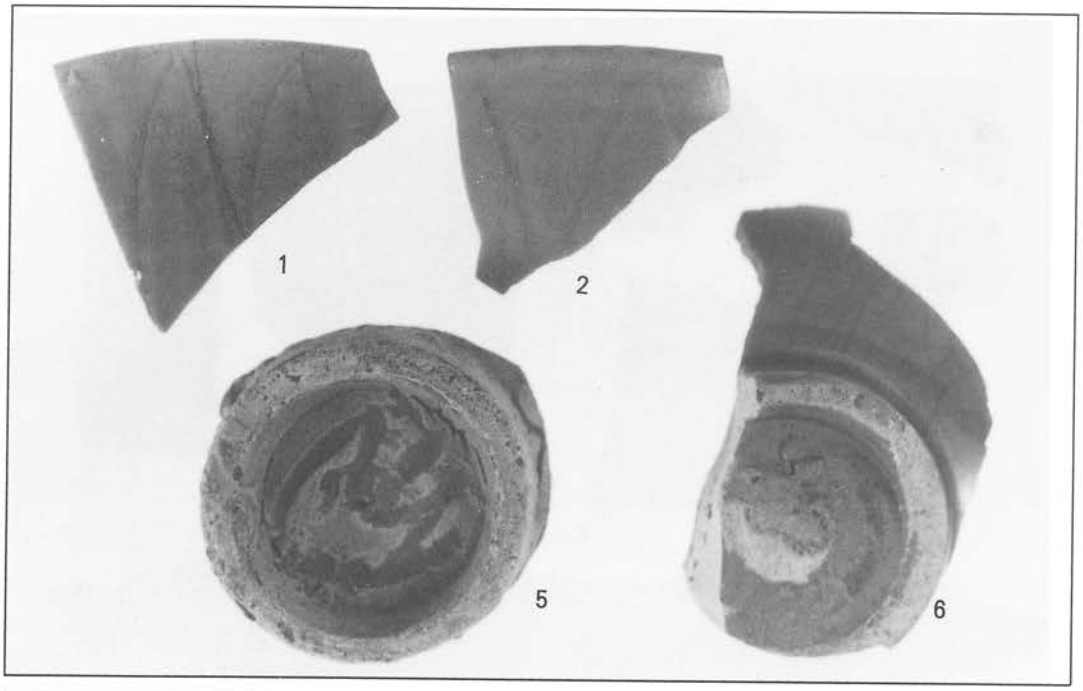


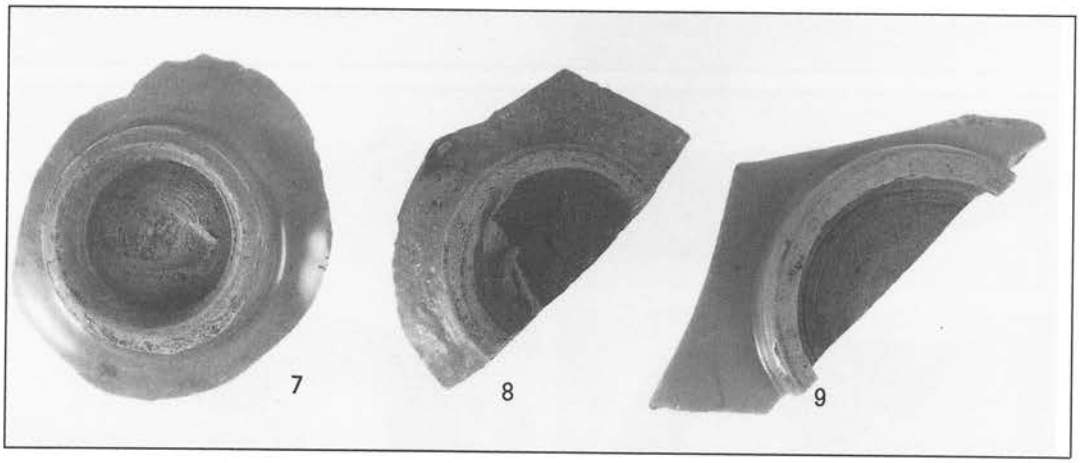
PL. 40　鉄製品　鉄釘１～７、刀子状製品８・９、形状不明品10～17

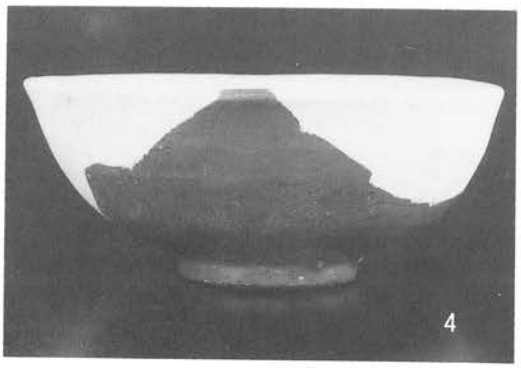




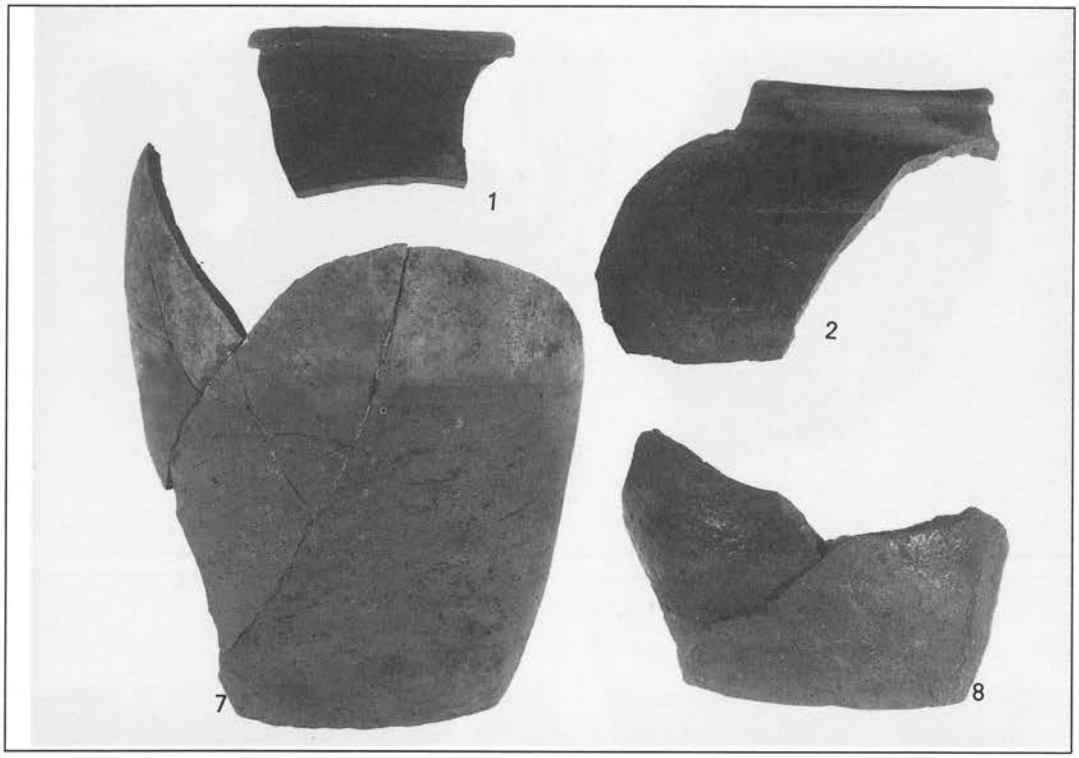
PL. 41　鉄製品　鉄鍋1～5、板状製品6、山刀7・8、鍬9

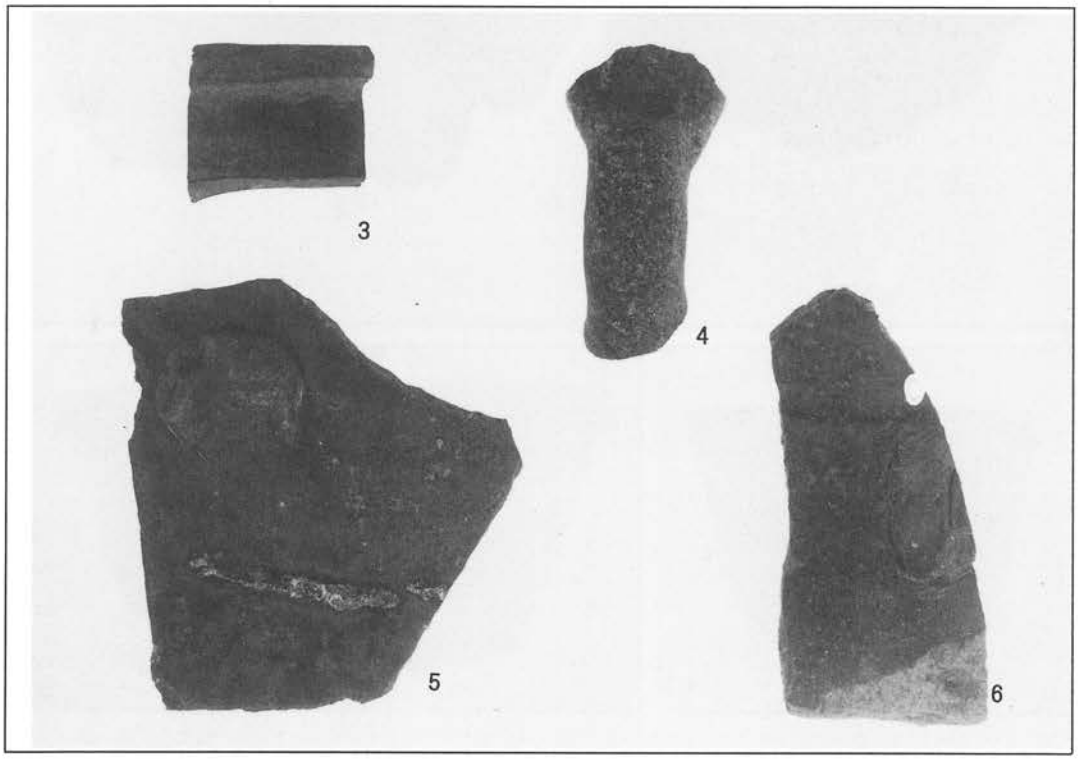




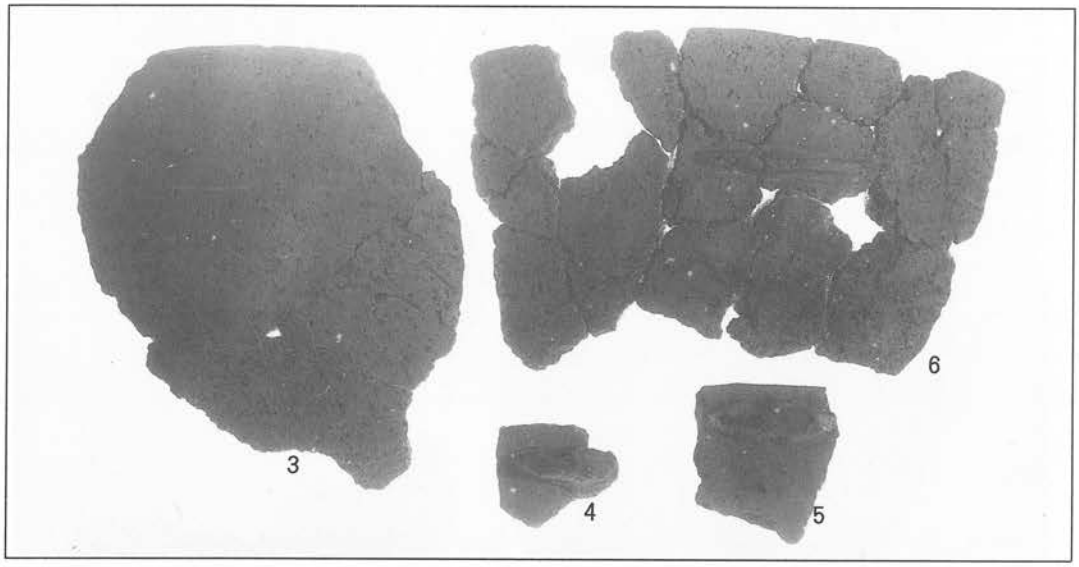


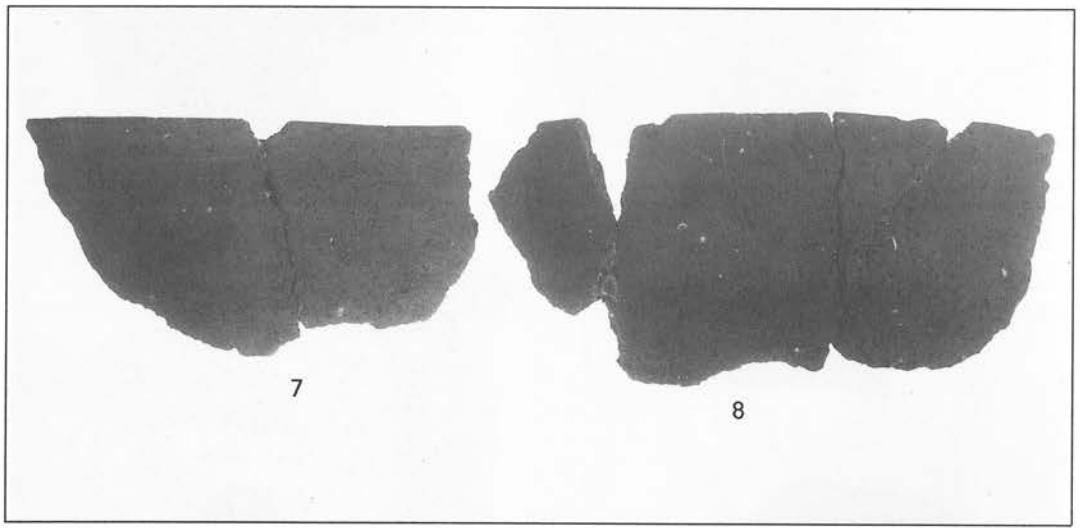
PL. 42　青磁　碗Ⅰ類a：1、Ⅰ類b：2、Ⅴ類b：3、Ⅴ類d：4、
碗底部a種：5、b種：6、c種：7・8、d種：9



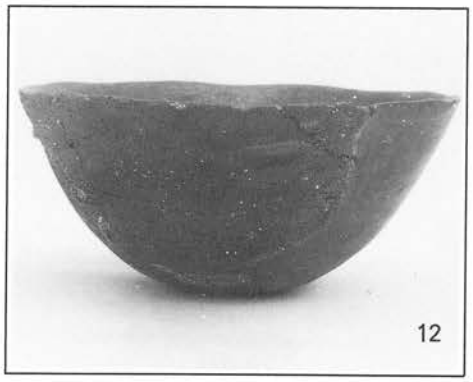


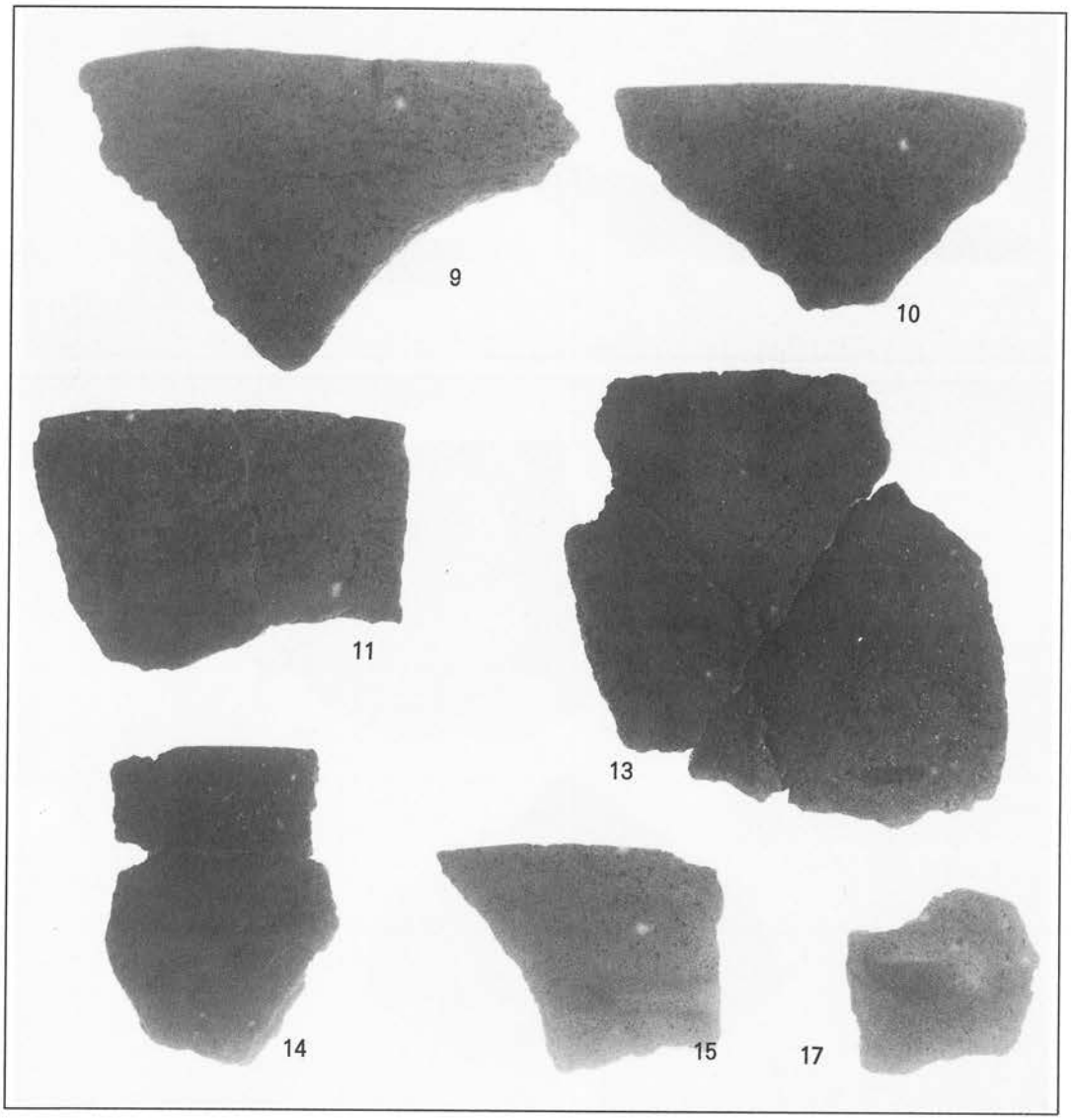
PL. 43　褐釉陶器　壺Ⅲ類: 1、壺Ⅴ類b: 2、茶入れ壺: 3、壺把手イ類: 4、胴部ロ類: 5・6
胴・底部Ⅰ類: 7・8



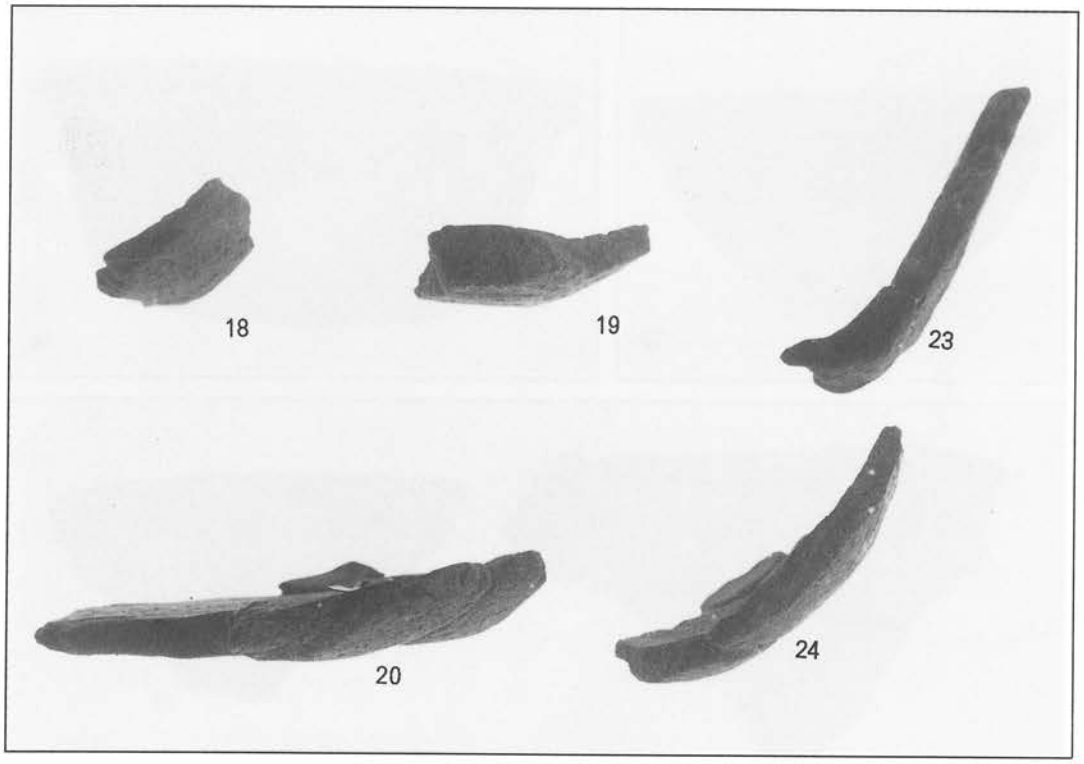


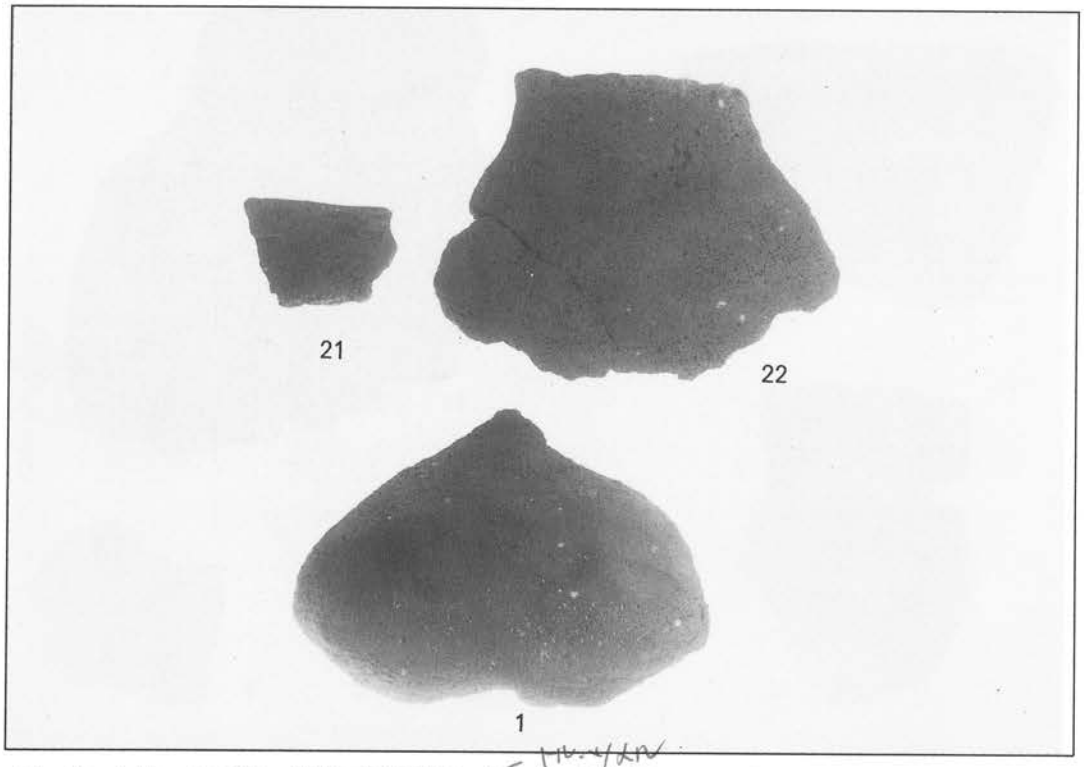
PL. 44 土器　鍋形Ⅰ類a：1・2、Ⅰ類b：3、Ⅰ類：4・5、Ⅱ類c：6～8



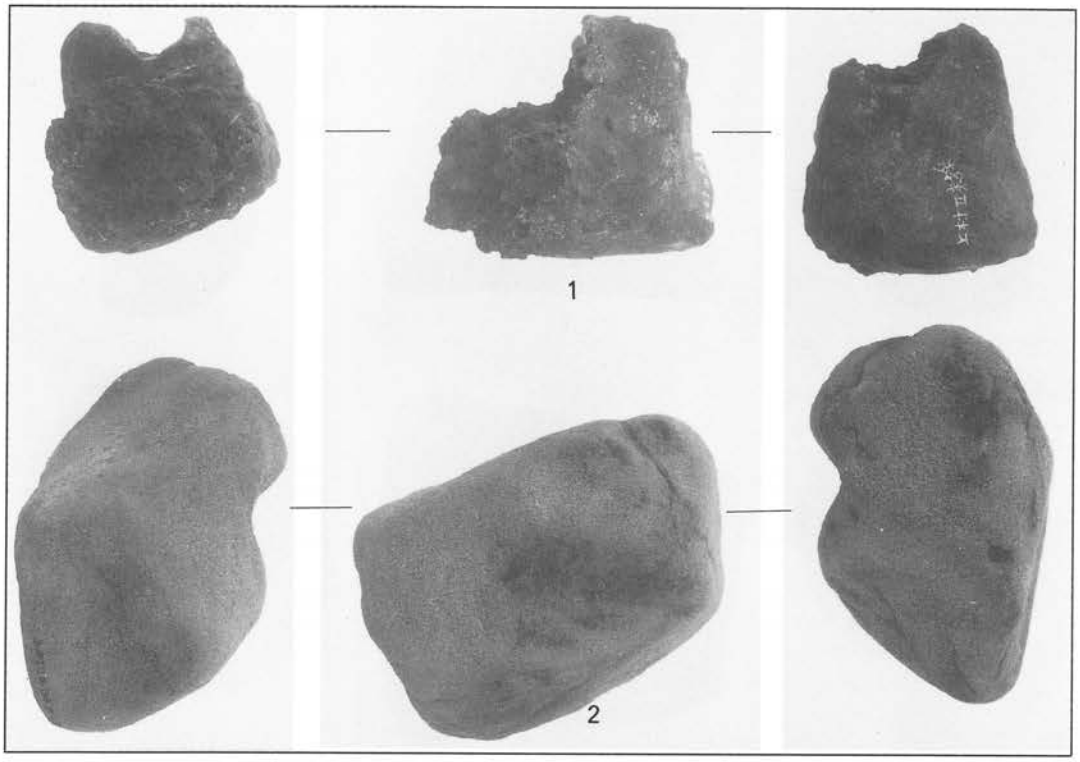


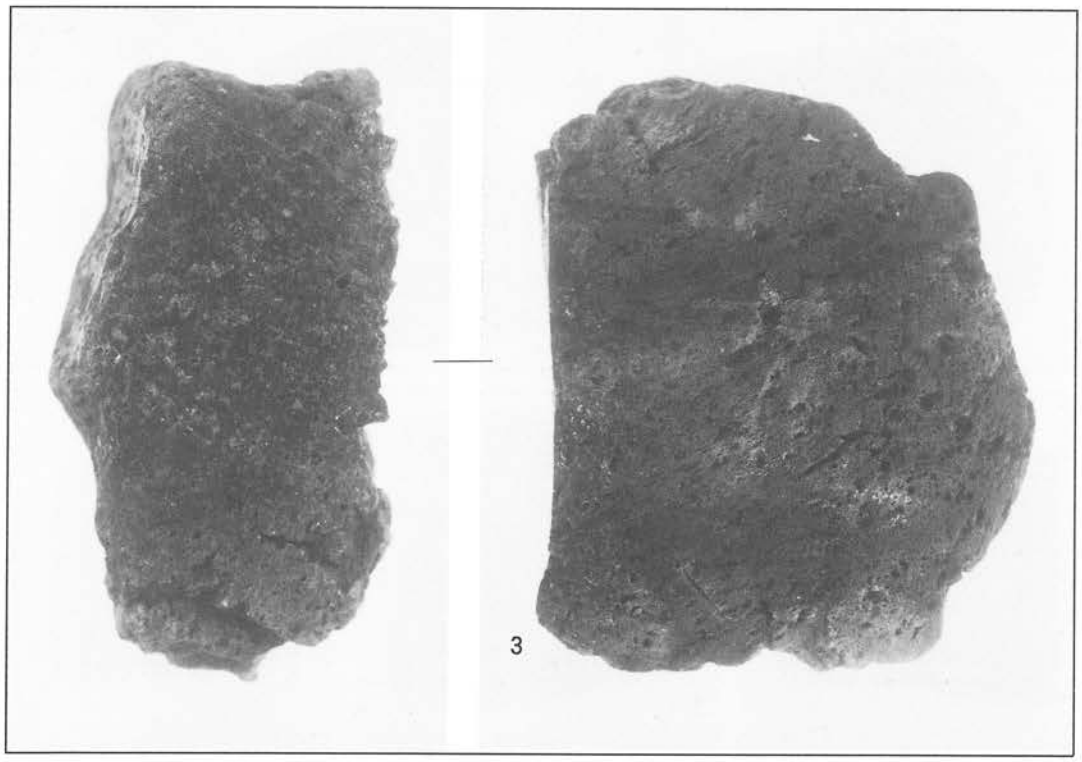
PL. 45　土器　鍋形Ⅲ類ａ：9・10、Ⅲ類ｂ：11～13、Ⅱ・Ⅲ類：14・15、Ⅳ類ａ：16・17



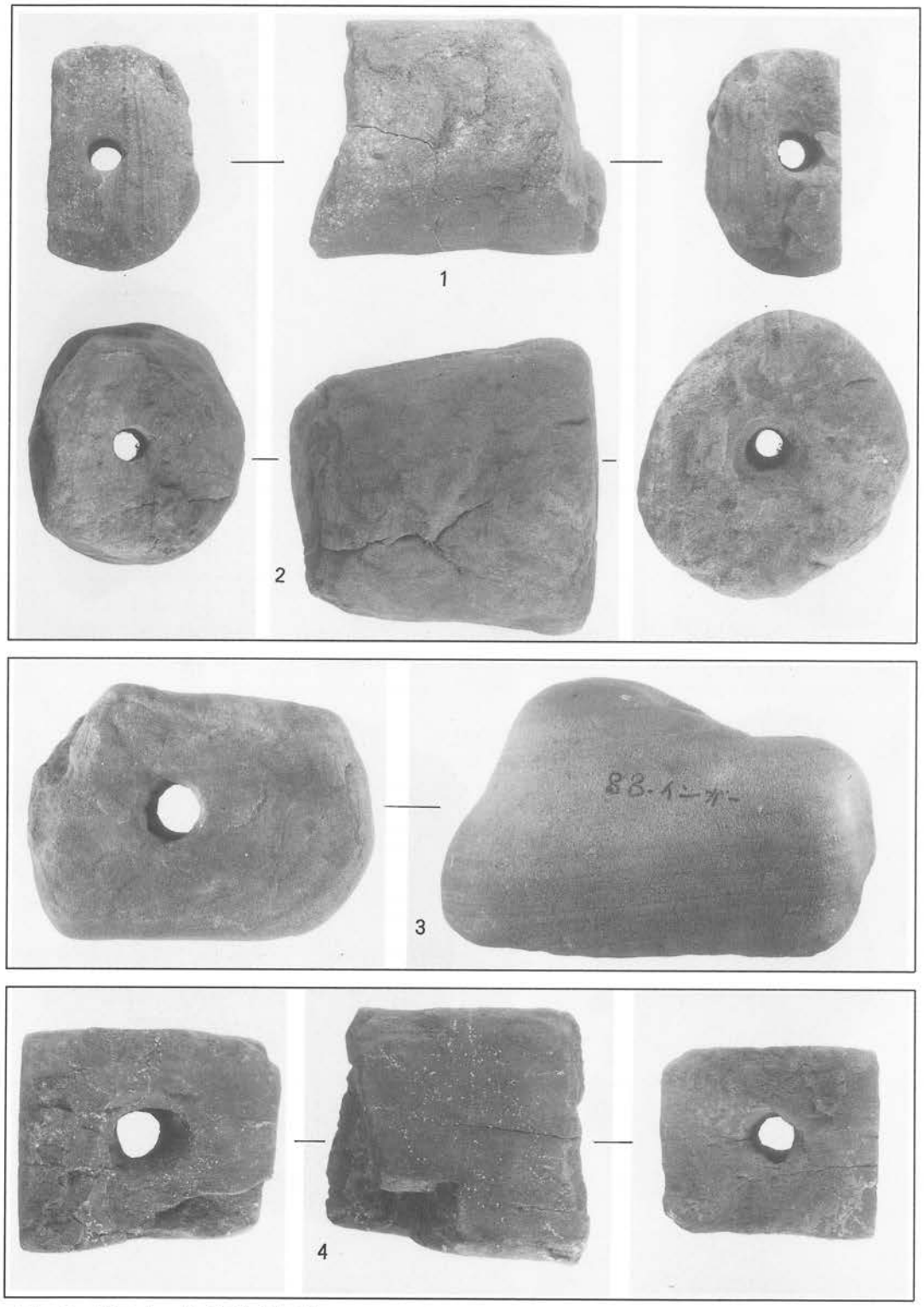


PL. 46　土器・パナリ焼　鍋形Ⅰ類底部18、同Ⅱ～Ⅳ類底部19・20、壺形Ⅱ類:21、壺形Ⅲ類:22、壺形底部ａ種：23、器種不明底部24、パナリ焼壺胴部１、

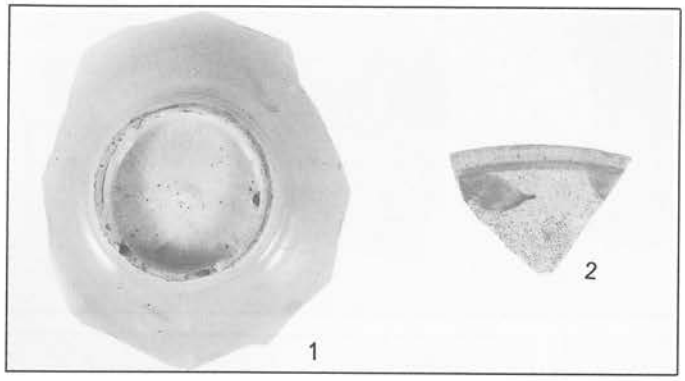


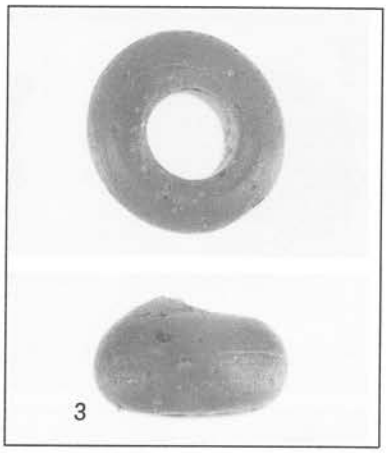


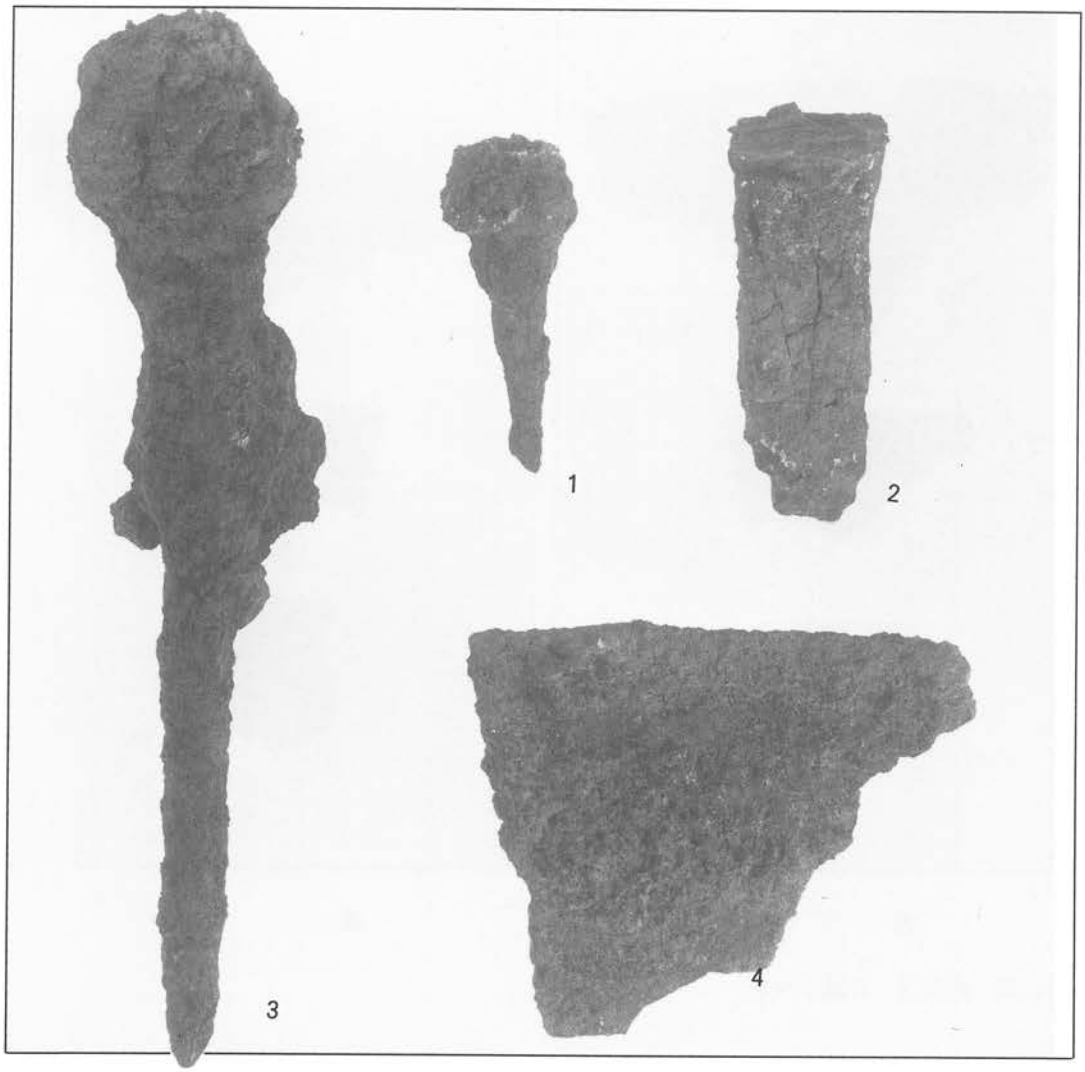
PL. 47　羽口 1・2、炉壁 3



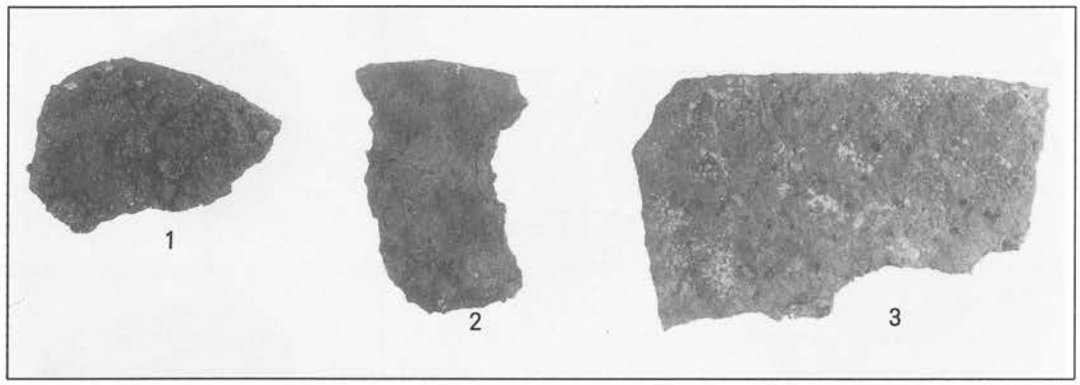
PL. 48　羽口１～４（西表島採集の羽口　石垣金星氏の資料）

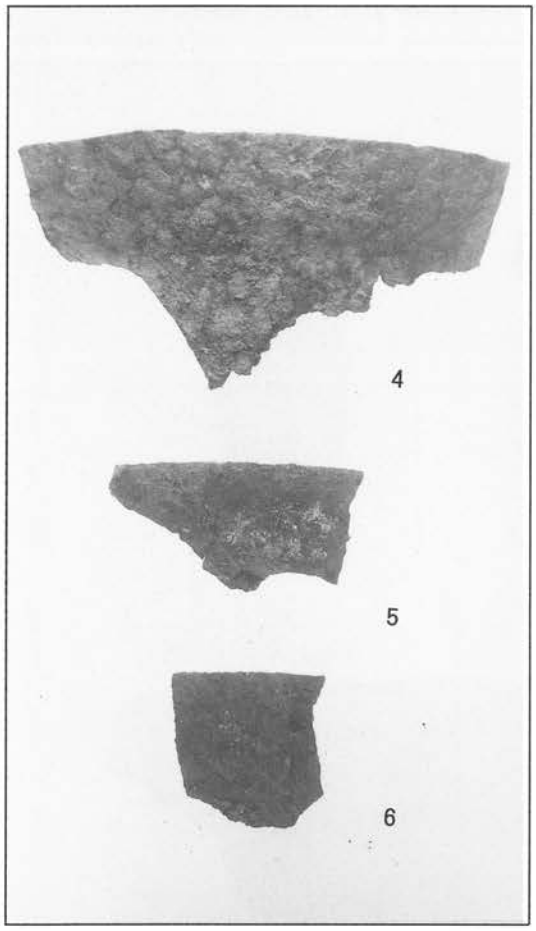






PL. 49　上段　染付碗Ⅰ類: 1、Ⅶ類a : 2、玉 3
　　下段　鉄製品　鉄釘 1・2、鉄銛 3、鉄鍋 4





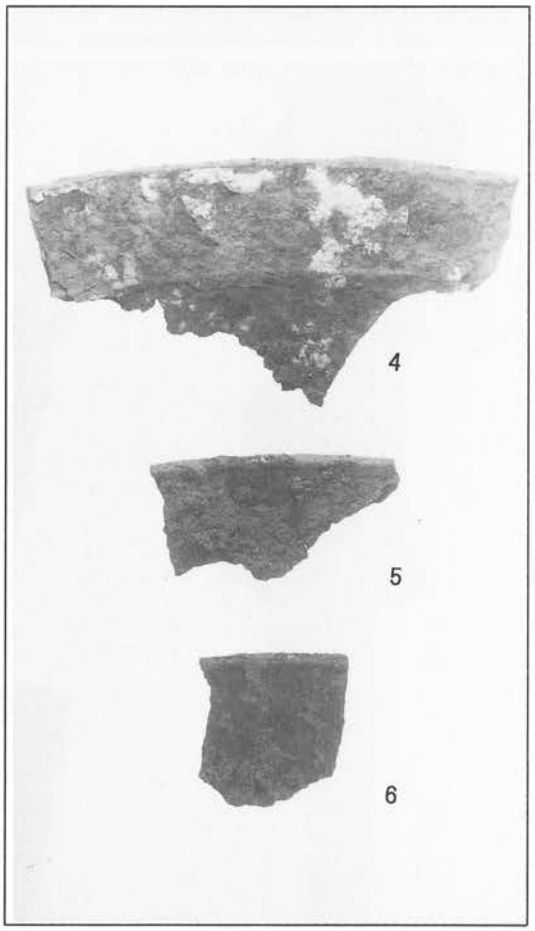


表　　面　　裏　　面

PL. 50　鉄製品　鉄鍋 1～6

PL. 51　上村遺跡資料整理状況（上段:復元作業、下段:遺物の実測）

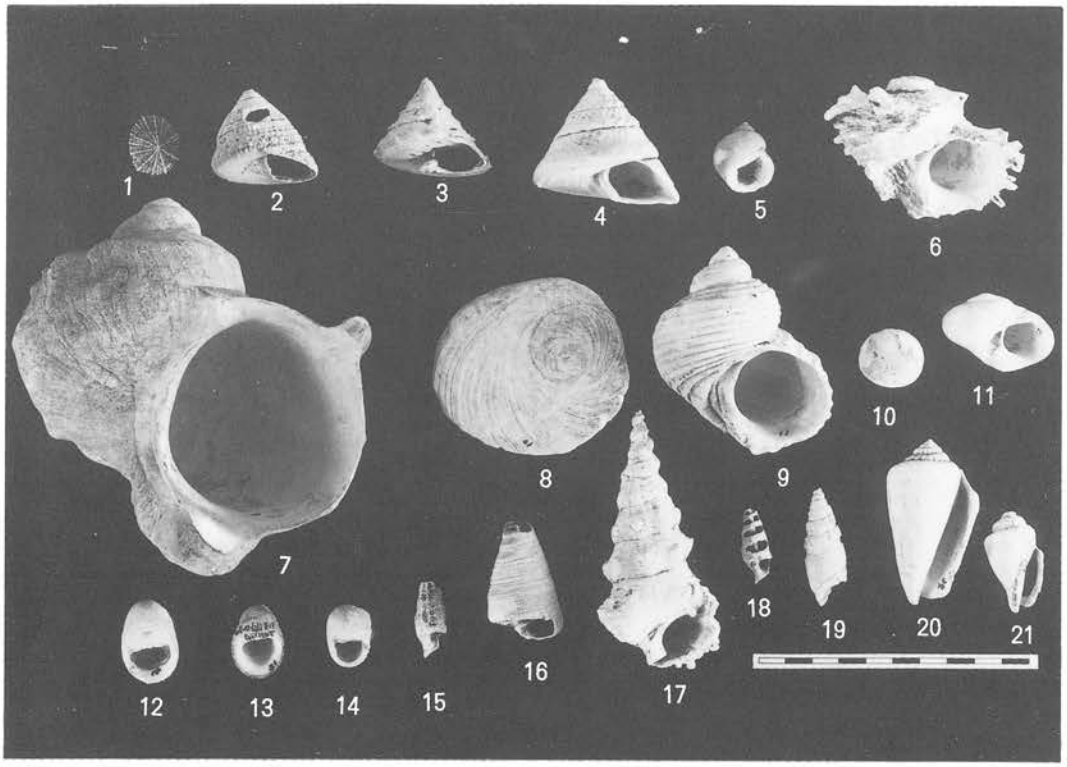
PL. 52　貝類

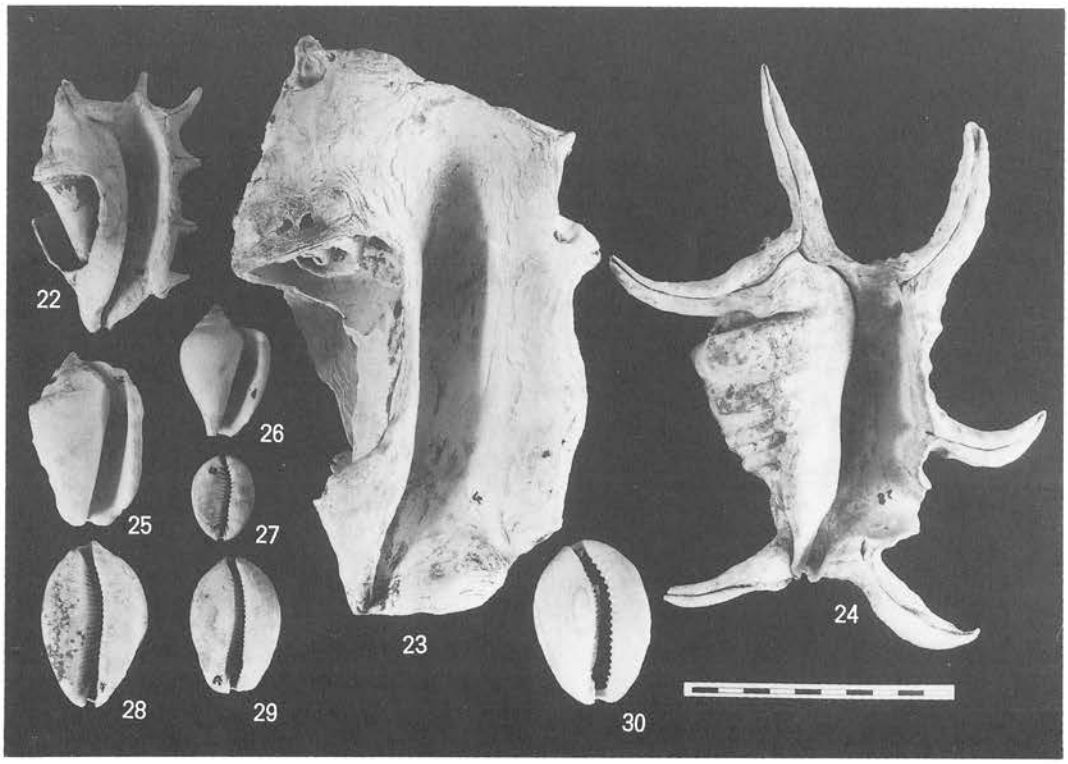
上

1　コウダカカラマツ	2　ニシキウズ	3　ギンタカハマ
4　サラサバティ	5　ハナダタミ	6　リュウキュウカタベ
7　ヤコウガイ	8　ヤコウガイのフタ	9　チョウセンサザエ
10　チョウセンサザエのフタ	11　オオベソスガイ	12　ニシキアマオブネ
13　アマオブネ	14　キバアマガイ	15　イボウミニナ
16　センニンガイ	17　オニノツノガイ	18　トウガタカニモリ
19　タケノコカニモリ	20　マガキガイ	21　ネジマガキ

下

22　クモガイ	23　ラクダガイ	24　スイジガイ
25　イボソデ	26　スイショウガイ	27　ハナマルユキ
28　ホシキヌタ	29　ヤクジマダカラ	30　ハチジョウダカラ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21


22
23
24
25
26
27
28
29
30

PL. 52 貝 類

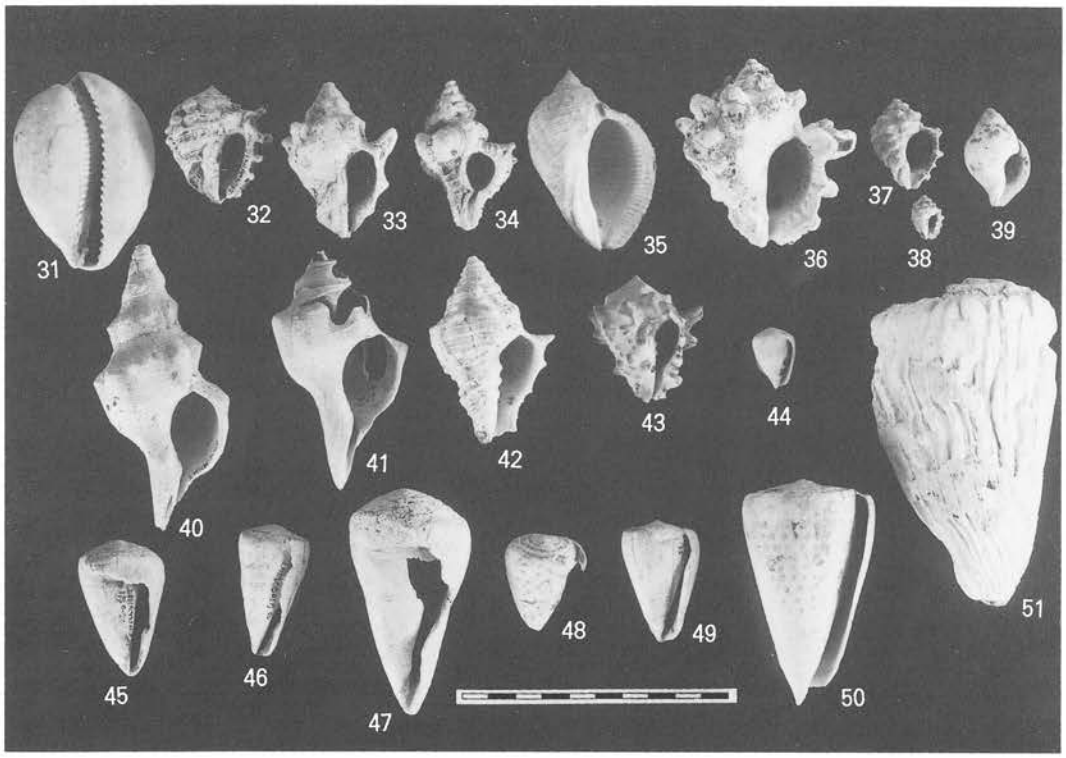
PL. 53　貝類

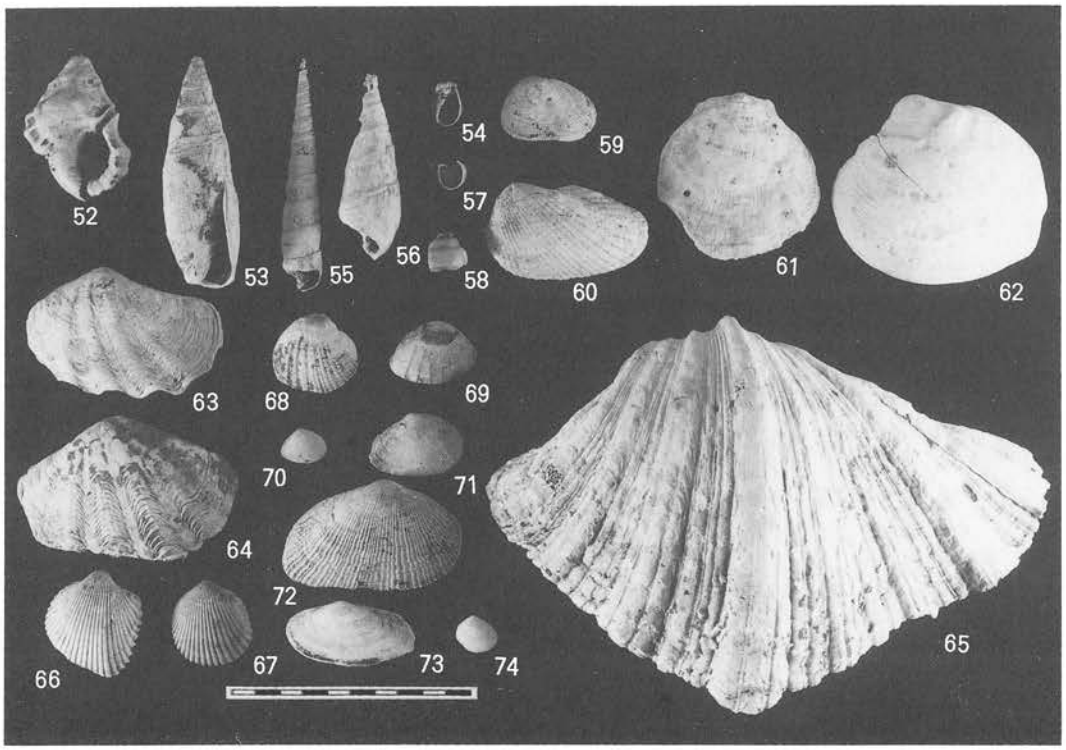
上

31　ホシダカラ
32　アカイガレイシ
33　シラクモガイ
34　ガンゼキボラ
35　ホソスジテツボラ
36　ツノレイシ
37　ツノテツレイシ
38　レイシガイダマシ
39　マルニシ
40　ナガイトマキボラ
41　イトマキボラ
42　オニコブシ
43　コオニコブシ
44　サヤガタイモ
45　ゴマフイモ
46　キヌカツギ
47　オトメイモ
48　ヤナギシボリイモ
49　クロザメモドキ
50　アンボンクロザメ
51　クロフモドキ

下

52　オキニシ
53　チョウセンフデ
54　リスガイ
55　タケノコガイ
56　リュウキュウタケ
57　オキナワヤマタニシ
58　マルタニシ
59　エガイ
60　リュウキュウサルボウ
61　メンガイ
62　シレナシジミ
63　シラナミ
64　ヒメジャコ
65　シャゴウ
66　カワラガイ
67　リュウキュウザルガイ
68　アラスジケマンガイ
69　ホソスジイナミガイ
70　イソハマグリ
71　リュウキュウシラトリ
72　リュウキュウマスオ
73　マスオガイ
74　ナミノコマスオ


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51


52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74

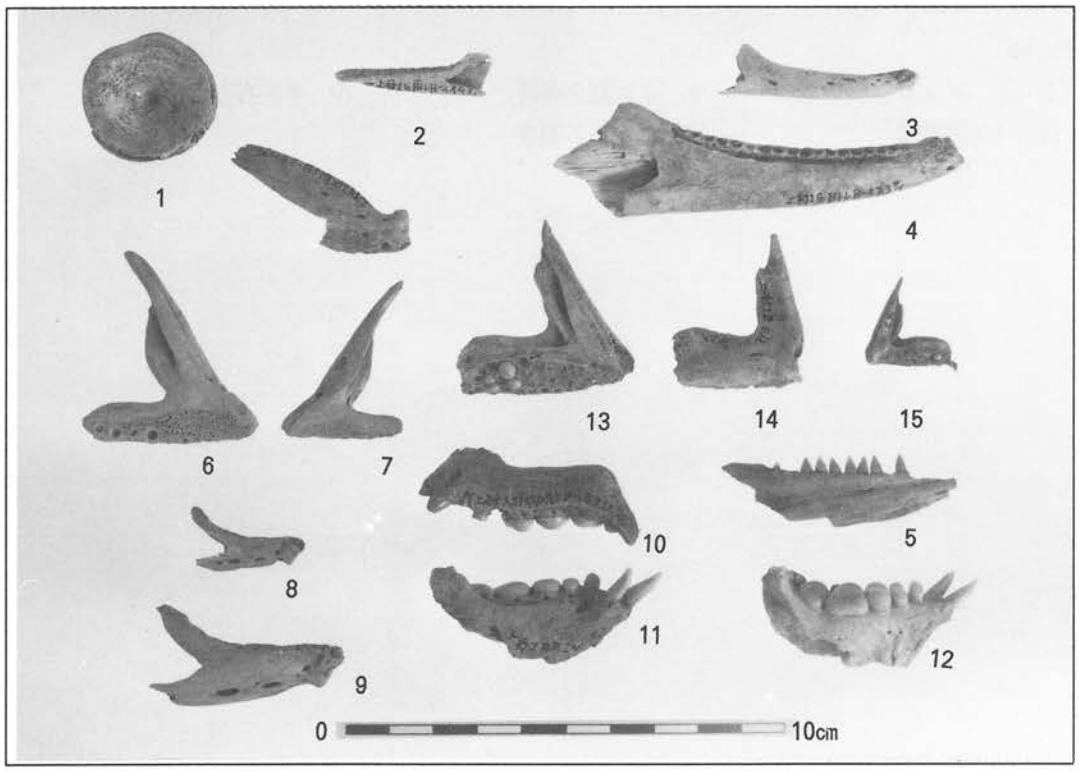
PL. 53 貝 類

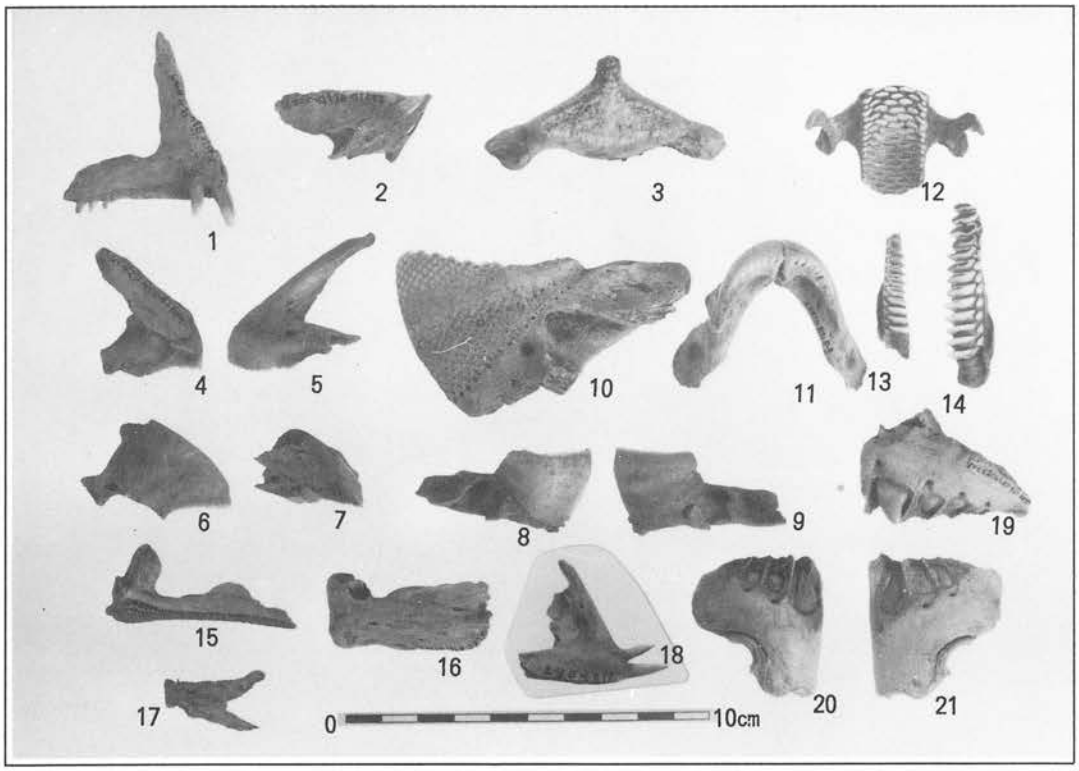
PL. 54の上段

1．メジロザメ科脊椎骨　2．アナゴ類右歯骨　3．ウツボ科右歯骨
4．ウツボ科左歯骨　5．サワラ右歯骨　6．フエダイ左歯骨
7．ハマフエフキ右前上顎骨　8・9．ハマフエフキ右歯骨　10．ヨコシマクロダイ左前上顎骨
11．ヨコシマクロダイ右歯骨　12．ヨコシマクロダイ左歯骨　13．クロダイ左前上顎骨
14．クロダイ右前上顎骨　15．クロダイ右前上顎骨

PL. 54の下段

1．ベラ科右前上顎骨　2．ベラ科右歯骨　3．コブダイ下咽頭骨
4．ブダイ左前上顎骨　5．ブダイ科左前上顎骨　6．ブダイ科右前上顎骨
7．ブダイ科左前上顎骨　8．ブダイ科右歯骨　9．ブダイ科左歯骨
10．イロブダイ左歯骨　11．ブダイ左右歯骨　12．ナガブダイ科下咽頭骨
13．ナンヨウブダイ左上咽頭骨　14．ナンヨウブダイ右上咽頭骨　15．ハタ科右前上顎骨
16．ハタ科左歯骨　17．科不明左歯骨　18．コチ前鰓蓋骨
19．モンガラカワハギ左前上顎骨　20．モンガラカワハギ右下顎骨歯骨　21．モンガラカワハギ左下顎骨歯骨


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10cm

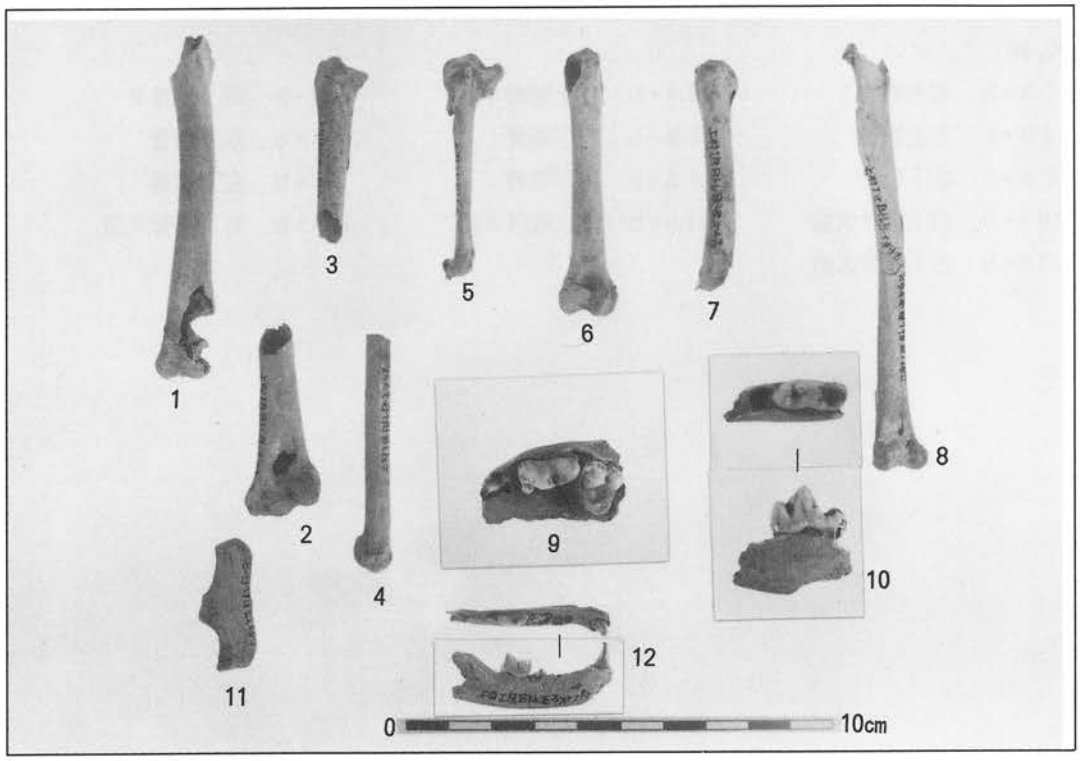

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
10cm

PL. 54 魚 骨

PL. 55

1～8．ノスリ　　9．イヌ左上顎骨　　10．イヌ右下顎骨

11．イヌ右踵骨　　12．ネコ右下顎骨



PL. 55　1～8、ノスリ　9～11、イヌ　12、ネコ

PL. 56　イノシシ

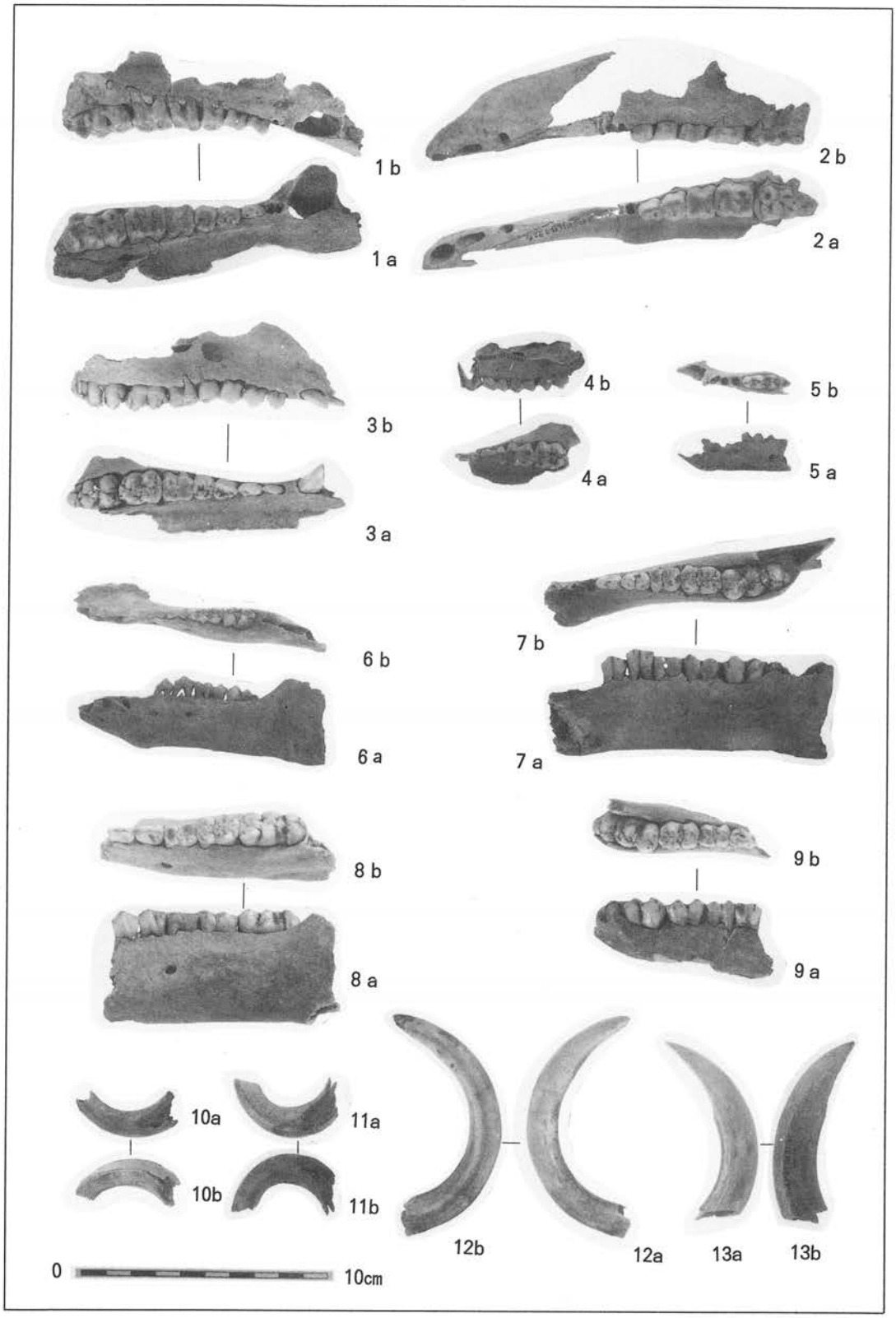
1 a・b　右上顎骨♂　　2 a・b　左上顎骨♀　　3 a・b　右上顎骨♀

4 a・b　左上顎骨　　5 a・b　左下顎骨　　6 a・b　左下顎骨

7 a・b　右下顎骨　　8 a・b　左下顎骨　　9 a・b　左下顎骨

10 a・b　右上顎骨犬歯　　11 a・b　左上顎骨犬歯　　12 a・b　右下顎骨犬歯

13 a・b　左下顎骨犬歯


1 b
1 a
2 b
2 a
3 b
3 a
4 b
4 a
5 b
5 a
6 b
6 a
7 b
7 a
8 b
8 a
9 b
9 a
10a
10b
11a
11b
12b
12a
13a
13b
0
10cm

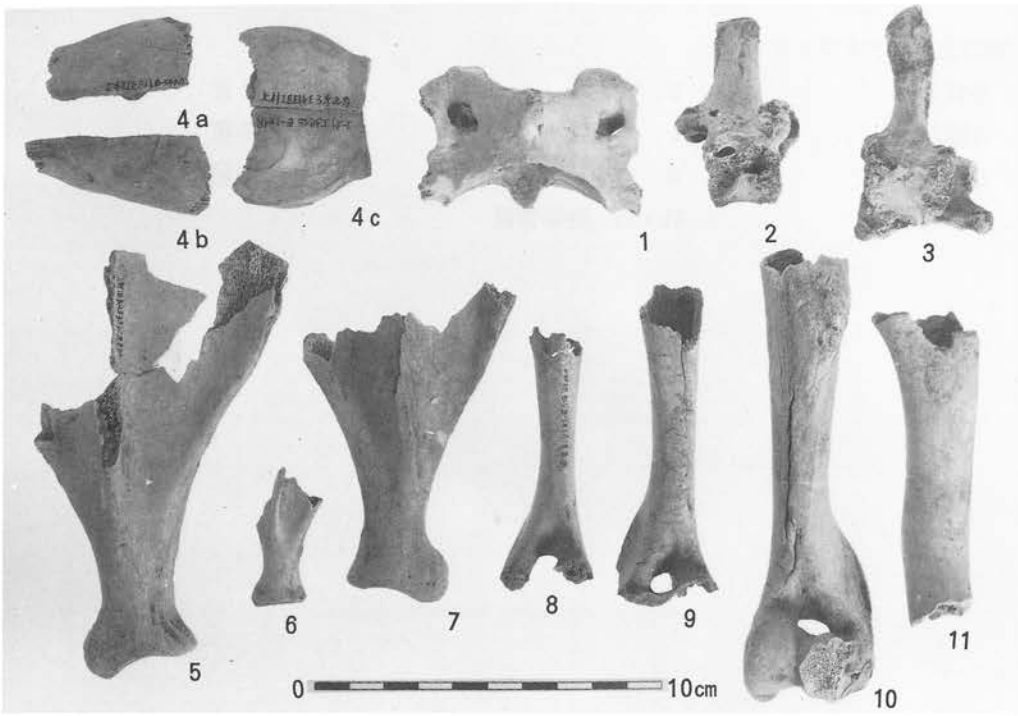
PL.56　イノシシ

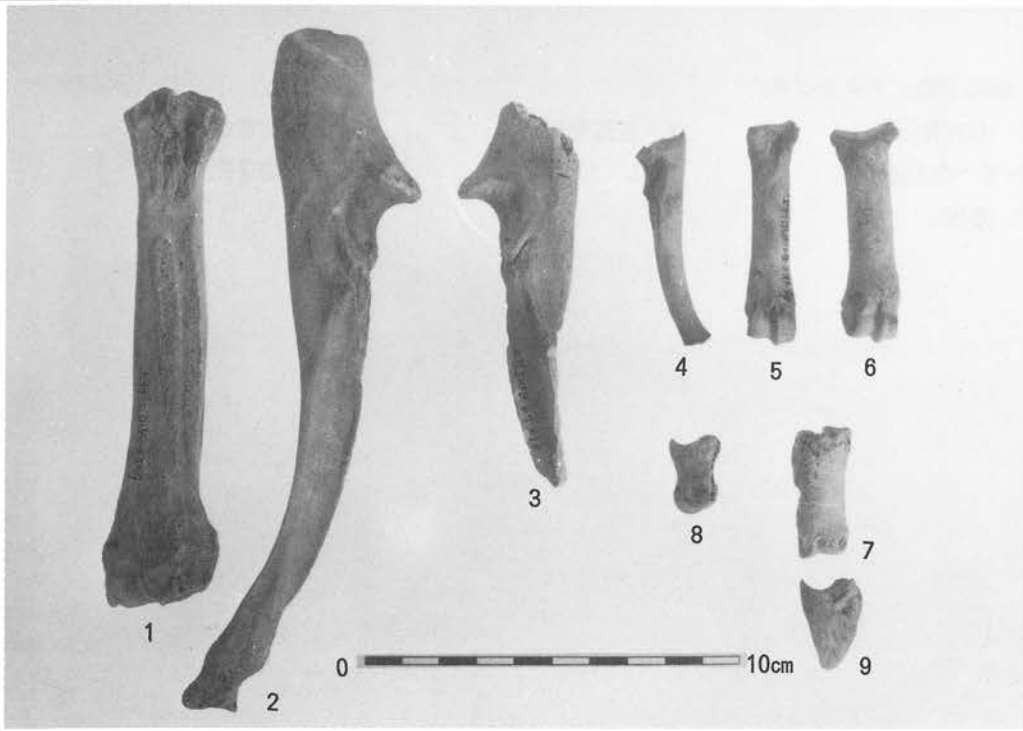
PL. 57の上段　イノシシ

1．寛骨　　2．胸骨　　3．腰椎
4 a．右前頭骨　　4 b．左前頭骨　　4 c．左•右頭頂骨
5．左肩甲骨　　6．左肩甲骨（幼獣）　　7．右肩甲骨
8．右上腕骨　　9．右上腕骨　　10．左上腕骨
11．左上腕骨

PL. 57の下段　イノシシ

1．右橈骨　　2．右尺骨　　3．左尺骨
4．左尺骨（幼獣）　　5．左中手骨　　6．左中手骨
7．基節骨　　8．中節骨　　9．末節骨





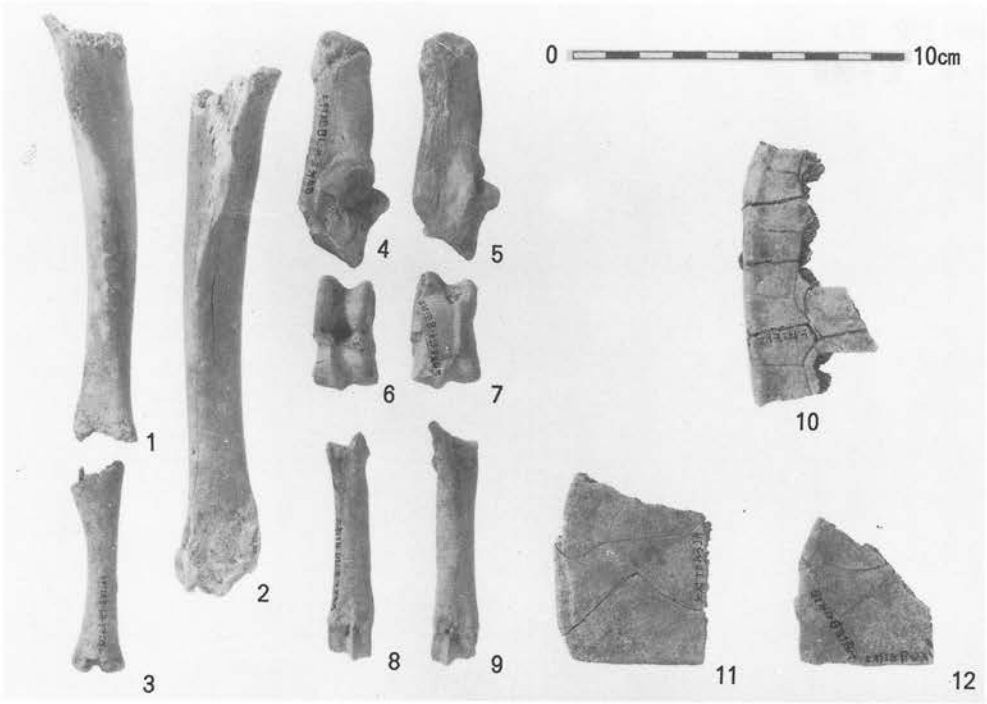
PL. 57　イノシシ

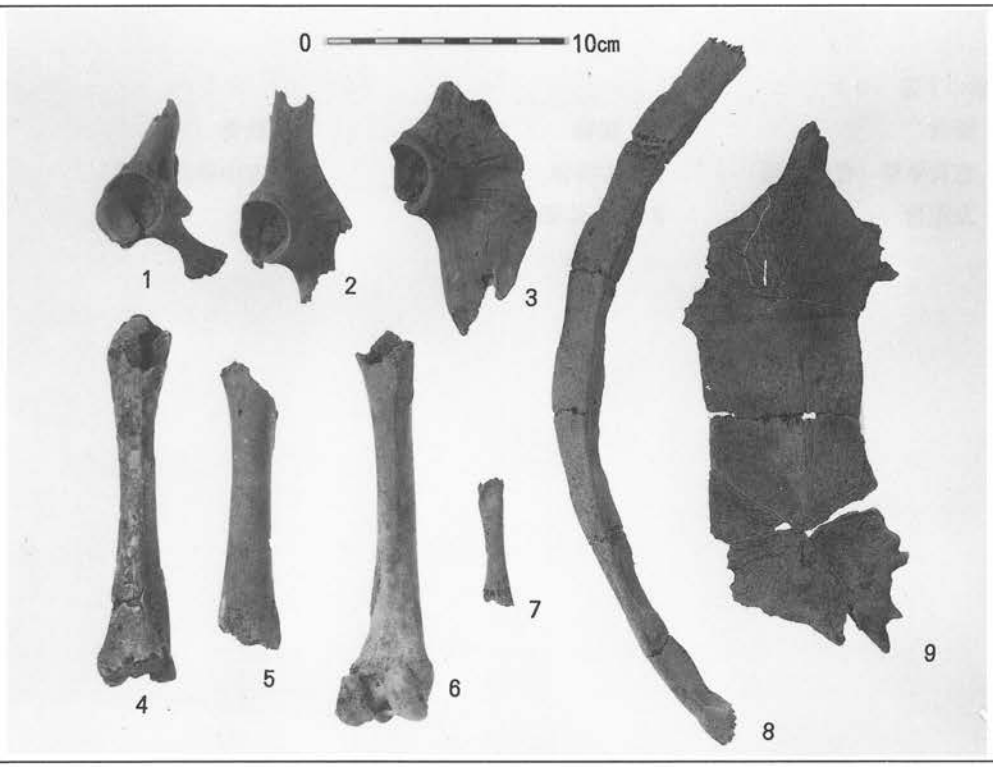
PL. 58の上段　アオウミガメ

1．右脛骨　2．左脛骨　3．右脛骨
4．左踵骨　5．右踵骨　6．右距骨
7．左距骨　8．左中足骨　9．右中足骨
10. 背甲骨板　11・12　腹甲骨板

PL. 58の下段　アオウミガメ

1．右寛骨臼部　2．左寛骨臼部　3．左寛骨
4・5　右大腿骨　6・7　左大腿骨　8．縁骨板
9．腹板





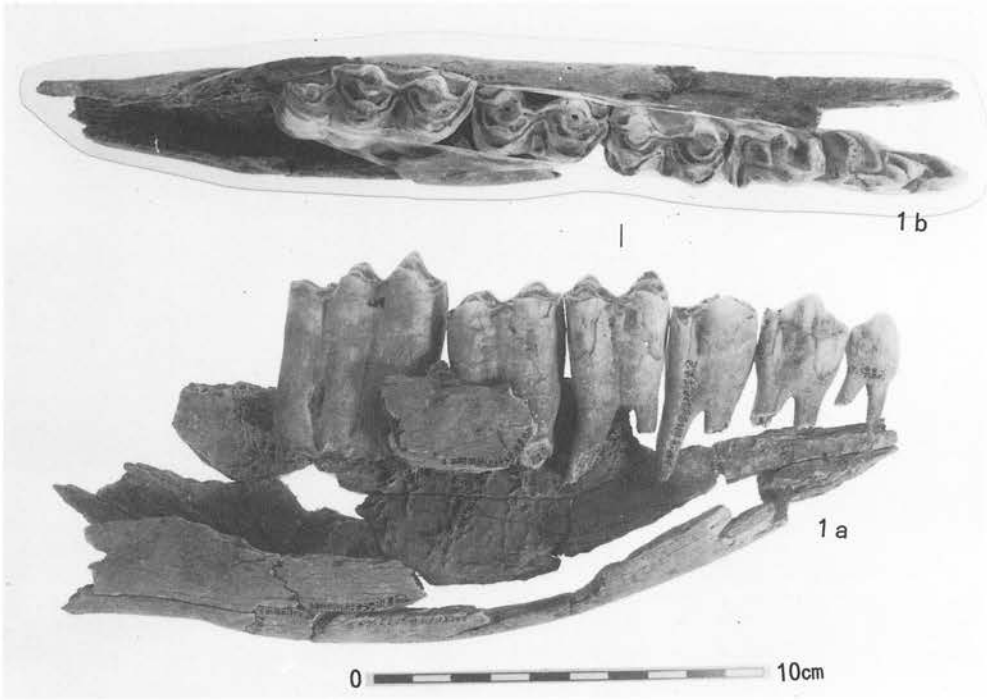
PL. 58　アオウミガメ

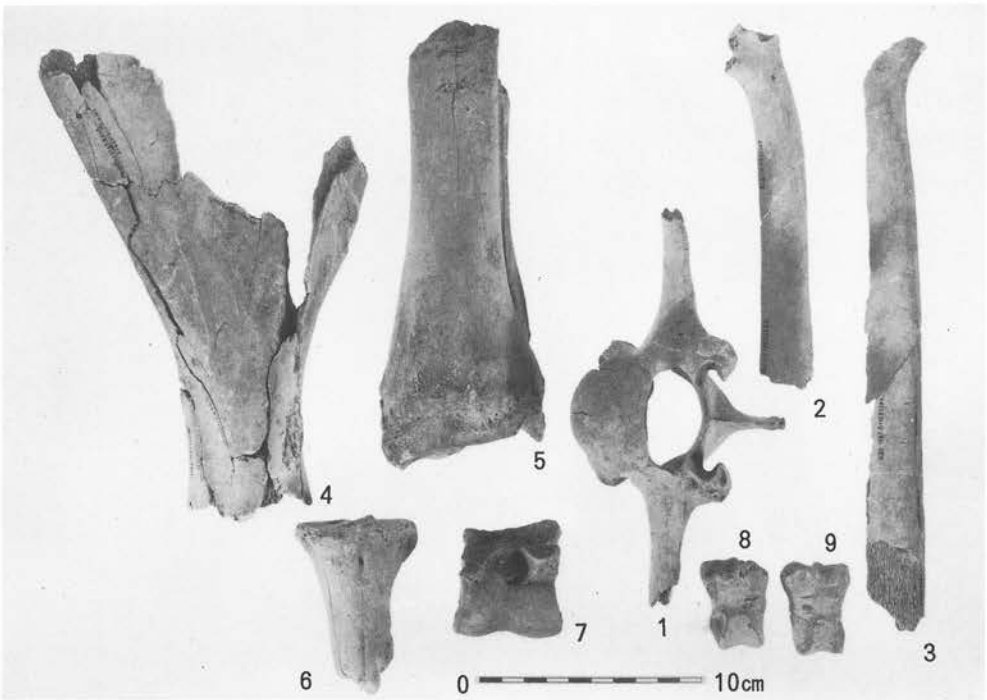
PL. 59の上段　ウシ

1 a・b．右下顎骨

PL. 59の下段　ウシ

1．腰骨
2．肋骨
3．肋骨
4．右肩甲骨（骨端欠損）
5．右橈骨
6．左中手骨近位部
7．左距骨
8・9．中節骨





PL. 59　ウ　シ

沖縄県文化財調査報告書　第98集

西表島
上村遺跡

ー重要遺跡確認調査報告ー

発行　沖縄県教育委員会
〒900 那覇市泉崎1丁目2－2
編集　沖縄県教育庁文化課
TEL098(866)2731～2733
印刷　光文堂印刷㈱
TEL098(889)1121㈹